

Title	マスメディアの中の帝室：戦前期「大衆天皇制」の形成過程にかんする歴史社会学的考察( Dissertation_全文 )
Author(s)	右田, 裕規
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2006-11-24
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k12641">http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k12641</a>
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	author

# マスメディアの中の帝室

戦前期「大衆天皇制」の形成過程にかんする歴史社会学的考察

右田 裕規

「マスメディアの中の帝室 ——戦前期『大衆天皇制』の形成過程にかんする歴史社会的考察——」 目次

序章	1
第一章 戦前期「大衆天皇制」の初期形成と展開（1890－1910年代）	12
1. 戦前期大衆天皇制の萌芽期（1890年代まで）	14
1.1 明治初期の皇室観	14
1.2. 皇室絵付録の流行	17
2. 戦前期大衆天皇制の展開期（1900－10年代）	24
2.1. 皇室写真の世俗化・消費財化	26
2.2. 皇室記事の世俗化・ゴシップ化	31
2.3. 皇室観の世俗化の進展	36
2.4. マスメディアの役割	43
第二章 戦前期「大衆天皇制」の開花（1920－30年代前半）	48
1. 1920年代の状況	53
1.1. 「平民主義」の流行	53
1.2. 「スター化」の進展	56

1.3. ゴシップ的傾向の強化	58
1.4. 開放政策の影響とその限界	60
1.5. 皇室観の世俗化の進展	63
1.6. 20 年代マスメディアの状況	71
2. 1930 年代中葉まで	75
2.1. マスメディア・民衆の動向	75
2.2. 政府の対応	82
第三章 近代「女性」の皇室観	90
1. 本章の目的	90
2. 皇室観のジェンダー差	91
3. 同性の皇族への憧憬・関心	96
4. 異性の皇族への擬似的恋愛感情と「節子姫ブーム」	101
5. 本章のまとめ	109
第四章 皇室という「家庭」への眼差し	111
1. 天皇の脱政治化現象	113

2. 戦前期皇室報道における「家庭」への眼差しの登場	119
2.1. 「幸福な家庭の実現」	119
2.2. 皇后・宮妃への視線の集中	121
2.3. 天皇家の「子ども」の誕生	124
3. 「家庭中心主義」との連関	127
4. 皇室の猥談	131
5. 皇室の家庭人化と近代天皇制のイデオロギー的再生産	136
第五章 戦時期の「大衆天皇制」(1930年代後半－40年代前半)	140
1. 各種調査から見た戦時期民衆の皇室観	142
2. 戦時期「大衆天皇制」の様相	146
2.1. 新聞雑誌の皇室報道	146
2.2. 民衆の皇室観	153
終章	158
注、引用文献	166
参考資料	

## 序章

本論の目的は、近代天皇制下の民衆の皇室観・マスメディアの皇室報道が、戦後天皇制下のそれと漸次近似してゆく過程の概観をとおり、近代化という社会変動から天皇制の蒙った変質のありようを、民衆の経験世界に根ざしながら再考することにある。

明治維新を契機として、日本社会には、(近代) 天皇制と後年名づけられる体制が成立・展開されてゆく。数多の研究蓄積が存在し、一般にも、よく知られている事実である。薩長藩士が、倒幕のシンボルとして明治天皇を戴き、中央集権政府を樹立して以来、天皇制は、政治制度にとどまらない、無制限な拡大・浸透を日本社会に見せてゆく。戦前の統治機構の内的構造をさす言葉として限定的に捉えるにせよ、経済体制から宗教、文化、民衆の心的傾向をも含んだ、日本型国民国家の総称として捉えるにせよ、この近代天皇制なるものが、19 世紀後半以降の日本社会の進んだ道程を、最もよく特徴づける要素の一つであるという点にかんしては、一定の了解が得られるものと思われる。

この小論もまた、近代天皇制について語ってゆく。そうすることで、19 世紀末から 20 世紀前半の日本社会のたどった近代化過程の一端を、解明したいと考える。わけでも本論では、近代天皇制のイデオロギー的側面にしばって、話を進めてゆく。さしあたりそれは、次のような問いの形で言い直される。被治者側の視点から捉えてみた場合、天皇制の維持・再生産とは、近代の日本社会の中で、いかなる形で達成されていたか。あるいは、近代化の異例とも言える急速な達成にもかかわらず、天皇を神聖不可侵の政治君主と戴く、一見アナクロな体制に、戦前の大多数の民衆が一貫して賛意を示し続け、少なくとも反対しなかったのはなぜか、というものだ。

16－18 世紀イギリス・フランス王権の展開したイデオロギー政策は、キリスト教観念を転用した、「神聖なる王」という観念のもとに、民衆側の体制支持の調達を図っていったという点において、一つの特徴をもっている。たとえば王の政治権力の正統性・永続性を、神の意志に由来させる王権神授説の登場。もしくは王が、ふつうの肉体と神聖不死の政治的身体とをあわせもつと説く、「王の二つの身体」という法的擬制の構築。主権概念の登場と連動しながら、聖書「詩篇」などを典拠に御用学者の編み出した、王をめぐるこのような観念が、英国・仏国民衆の生活世界の内に氾濫してゆくのは 17 世紀のこと

(Bloch1961=1998:392-4)。種々の媒体——小冊子、演説者、肖像画、コイン、結婚証書、宮廷建築の意匠等——をとおり、王の聖性にたいする被治者側の信仰を涵養する試みが、支配層側によって本格展開されるのだ。たとえばフランスでは、「ルイ十四世いらい、〔敬意と尊崇の対象として王の身体を見いだす〕臣民の『想像力』を直接的に刺激するのに適した王の肖像が、あらゆるジャンルのテキストや画像にくみこまれる。君主を称揚することとは一見もっとも無関係なものにおいてさえも、そうであった」(Chartier 1991=1994:202)。

王みずからが一般民衆とともに行なった、「療瘥さわり」という祭日儀礼も、王の聖性にたいする民衆側の信仰を再生産した、重要な施策の一部である。聖別をうけた神聖なる王には、触れるだけでその人の「療瘥」を治癒する能力が、天からさずけられている。かかる信仰にもとづく王室儀礼が、イギリス・フランスで最もさかんとなったのは、やはり絶対王政の頃だった。Bloch によるならば、「父祖伝来の奇跡能力は…〔王権の〕正統性のためには最も顕著な証拠」であって、英国国民の大多数は、17 世紀にはいっても、『治癒の祝福』の恩寵のない王など真の王とは思わなかった」(Bloch1961=1998:377)。同時代、ルイ 14 世の治下のフランスでも、「療瘥さわりは君主の栄光を取り巻く押しも押されもしない荘厳な式典の一つ」となっていて、祭日には、王の超自然的能力を信じるきわめて多数の民衆が、この儀礼に殺到したという (Bloch1961=1998:403-5)。

宗教的教義・勢力と結びながら、王の表象や儀礼空間を活用することで、その神聖性を民衆に広く教化し、君主（とかれの身体が体現する国家）への忠誠と崇敬を調達する。そうして他面、王の聖性や絶対性を冒瀆する人々・出版物にたいしては、厳格な警察取締をもってたいしてゆく (Chartier1991=1994; Darnton1982[2000]; 松浦 2002)。これから本論中で適宜見てゆくように、近代日本の支配層による、天皇をシンボルとしたイデオロギー政策とは、(種々のモダンさを含みながらも) かかる絶対王政のやりかたに、ひじょうに近い部分をもっている。

そこで注視されるのが、イギリス・フランスの王権の場合、上記のイデオロギー政策が、18 世紀後半に破綻を迎えていたという事実である。王の超自然的能力にたいする信仰が民衆の内から後退し、あるいは王の聖性を傷つける言説が、都市部で大量にながれてゆく。神聖なる王（の身体）という観念はここに至り、多数の被治者から懐疑の眼差しで捉えられてゆくのである。

かかる事態の生じた背景には、歴史偶然的要素のみならず、近代化の進展という、巨視

的・普遍的な動向も、大きくきいていたという。フランスの事例でいうならば、「世界の秩序から超自然と恣意を排除しようとする」啓蒙主義者・唯物論者たちの「精神的努力」(Bloch1961=1998:433)。「あらゆる問題について独自の判断をくだす公衆」が形成され、「それまでタブーであった国家や宗教の問題が論議の対象と」なったこと(松浦2002:186-206)。「世俗化」にともなう非エリート層での「宗教的無関心」の進行(Chartier1991=1994:205)。こうした諸力の作用から、「アンシャン・レジームの王権の正当性」をささえる「王の聖なる身体とそれを承認する信仰システム」には、18世紀後半において大きく亀裂がはいってゆく(松浦2002:182)。この点にかんしては、後に再び触れるとしても、絶対王政の懷いた、王の聖性や被治者側の宗教的伝統を基軸とした体制支持の調達という企図が、近代化の初期段階から既に、社会状況や民衆側の心性と齟齬をきたし、破綻を迎えていたことは確かである。

そうして Bloch によるならば、王の聖性にたいする信仰の衰退という事態の、最も端的な表現形態は、革命の発生に求められる。「革命という事件が有効に作動したのは」、「王権の超自然的性格にたいする信仰が〔イギリス・フランス〕両国民の、少なくともその一部の精神において、深く掘りくずされていたからにほかならない」(Bloch1961=1998:428)。では他方、革命という事象から無縁であった近代天皇制は、「王政の非神聖視」(Chartier1991=1994)——支配層のイデオロギー政策と民心の乖離という事態を、20世紀にはいってもまぬかれた、異端な王権であったのか。それとも、この乖離から天皇制を救った、何らかの機制がそこにあったのか。

天皇制のイデオロギー的再生産の機制という、この論点にかんしても、近代天皇制論は多くの優れた蓄積を持っている。たとえば政治史の領域では、行幸啓や皇室にまつわる各種の儀式、徴兵・軍隊等をとおした諸教化プログラム。あるいは国体に批判的な個人・思想集団・宗教団体をみまった厳格な警察取締が。宗教史においては、明治初期の神道国教化運動、明治後半期以降の国家神道体制の確立プロセスが。教育史の領野では、学校をとおして実施された、臣民教育の実態とその通時的変遷の様相が。丸山真男とその学派では、政府の諸教化政策をつらぬいた基幹的イデオロギー(国体論)の論理構造と、それが有したファシズムとの親和性が、それぞれ詳しく論じられてきた。

しかるにそこで語られてきたのは多くの場合、近代天皇制下において、政府が「めざした」民衆統治のありよう、もしくは政府が「被治者にうえつけようと図った」天皇制支持



の論理のありようである。民衆の経験的世界の中で発現していた天皇制のイデオロギー的再生産の実態と、それはイコールで結び得ないものだ。その実態を解明する上では、被治者の日常の位相で醸成されていた、天皇制支持の論理がいかなるものであったかという問いが、不可欠のものとなる。神島二郎の言うごとく、「いかなる政治権力といえども、なんらかの意味において被支配者による下からの支持なしには、成立するものでもなければ、維持されるものでもない」（神島 1961:19）のだから。

そして明治以来のかれら民衆の経験的世界とは周知のごとく、近代化という巨視的社会変動のもと、めまぐるしいほどの変転を蒙ってゆく。資本主義体制の確立、産業構造の工業化、ナショナリズムの擡頭、徴兵制・学制の整備、マスメディアの発達、都市消費文化の登場、近代的知・技術の大量流入等々。これら諸近代的要素が、家族観や国民意識、時間の感覚や身体の振る舞いに至るまで、民衆の心性・態度を大きく規定していったことも、よく知られる部分である。近代化というこの巨視的な社会変動の影響から、戦前の民衆の懐いた天皇制支持の論理のみは、無関係のままにありつづけたとおくのは、ひじょうな困難をとまなう推論といってよい。この点もまた、戦前期政府の展開した、天皇をシンボルとした「アナクロ」なイデオロギー政策と、被支配者側の天皇制支持の論理とを、いっそう結び難くするものだ。わけでも 20 世紀前半の都市世界に現出した、種々の客観的状況は、「王政の非神聖視」という事態から天皇制が一人まぬかれ続けていたという推測を、多くの場合拒否している。

無論、先行研究の語ってきたごとく、このイデオロギー政策とは他面、すぐれて近代的な性格を、その当初から含んでいた。天皇のもとでの水平的な国民（臣民）創出・統合というモチーフじたいを筆頭に、20 年代の「開放政策」、近代複製技術の活用、教化装置としての学制・徴兵制等々、さまざまの「近代」が、そこには確かに見いだされる。だから上記に提示したいのは、かかる近代の発明品が、「前世紀の遺物」と《同時代人から》見なされるほど、20 世紀前半の日本社会と、そこに住まう民衆の経験世界とは、尋常ならざる速さでモダンな変容にさらされていたのではなかったか、という論点のほうにある。そうしてこの点を前提としておいたとき、天皇制が、20 世紀にはいっても、革命や崩壊を経験せず、強固に存続し続けたという事実が意味するのは、次の可能性となるだろう。被治者の側が、支配層の用意したそれとは違った、近代社会の民衆にヨリ似つかわしい論理のもとに、天皇制を主体的・能動的に支持してゆく契機が、近代天皇制のイデオロギー的再生産の内には、多く含まれていたという蓋然性である。

そこで本論では、民衆の経験世界の位相での、近代天皇制のイデオロギー的再生産の発現形態、わけてもその近代的な発現形態に、考察をくわえてみたいと考える。種々の近代的社会条件と連動しながら、政府の強制するのとは違う、独自の天皇制支持の論理を、近代の民衆が構築していった過程である。これによって、天皇制のイデオロギー的再生産が、支配層の施策・政治企図に還元し得ない、複層的な形において達成されてゆくようになるプロセスを、近代化という巨視的変動の連関において示しだす。これが、本論の主題に据えられる<sup>1</sup>。

そのための具体的なアプローチとして、戦後の「大衆天皇制」の起原と成長のプロセスを、近代天皇制の内に見いだしてゆくという形を、本論では採ってゆく。すなわち松下圭一（1959）と、その後の諸論考の解明した、戦後天皇制のイデオロギー的再生産のありように、近代天皇制が漸次近似していったプロセスを捉えてゆくという分析手法が、本論では採用される。

大衆天皇制とは何か。

松下圭一が「大衆天皇制論」を『中央公論』に発表したのは、1959年のことである。周知のように同年には、正田美智子と皇太子明仁との婚姻をめぐって、民衆・マスメディアのあいだに一大ブームが生じている<sup>2</sup>。「大衆天皇制」という概念は、日本中を席捲したこの騒動を、松下がリアルタイムに見つめながら構築した、同時代の天皇制のための、すぐれて新しい概念だった。

同時代の類似する戦後天皇制論——南（1952）、鶴見（1958）、井上（1959）、石田（1961）など——と、松下（1959）を区別させる特徴は、次の二点にある。戦後民衆による天皇制支持の論理を、（マスメディアの皇室報道を媒介に再生産される）天皇家にたいする世俗的な関心・憧憬という部分に求めた点。第二にこの新しい天皇制支持の論理の拡大を、戦後支配層による政策転換にのみ還元してゆくのではなく、大衆社会状況の出現という、巨視的な社会変動との関連において、洞察をくわえていった点である。近年、吉見（1996）がその意義をさいど確認したごとく、「大衆天皇制論」は、今日に至る象徴天皇制関連の研究の中でも、戦後天皇制のイデオロギー構造の特徴を、近代的諸社会条件との連関において最もよく捉えた社会学的論考の一つとといっていい。同時にこの「大衆天皇制論」は、冒頭においた本論の主題をめぐっての、最も参照すべき先行研究としても、位置づけられるべきものである。

具体的に、その議論の中身を確認してゆこう。

松下（1959）によると、「美智子妃ブーム」の中に典型的に現れた、大衆天皇制のイデオロギー的再生産のありようは、戦前の「絶対天皇制」とは決定的に断絶するものであるという。その違いは第一に、大衆社会状況の出現にともない民衆が、天皇家を「スター」のごとき存在として捉えてゆくという点に求められる。天皇や皇族を、憧憬の念や近しい感情のもとに捉え、かれらにまつわる種々の世俗的な情報を、積極的に求め消費する。天皇を「現御神」として崇拝した、かつての「絶対天皇制」下の民衆のそれとはまったく対照的な皇室への態度が、大衆天皇制下の民衆にあっては、一般的なものとなるのである。

「今度の皇太子妃決定によって、客観的にみちびきだされる帰結は、新憲法下の天皇制——いわば『大衆天皇制』の成熟である。…現在よみがえりつつある天皇制は、絶対君主制でないことはもちろん、一九世紀ヨーロッパに展開され、日本でも大正デモクラシー時代に指向された制限君主制でもない。いまや天皇制は、大衆君主制へと転進しながら、『大衆』の歓呼のなかから、あたらしいエネルギーを吸収しつつあるということを、現在、はっきりと戦中派の実感を超えて認識しなければならない」（松下 1959:31）。

「戦前は行幸道路にムシロをひいて土下座をしたものだ。天皇がやってくると、最敬礼を号令され、頭をあげたときには天皇の車ははるか遠くにすぎ去っていった。今日このような事態は想像もつかない。大衆自身、今日では皇太子のパレードを『オガミ』に行こうとはおもわない。大衆は現在『ミ』に行こうというのである」。たとえばそれは、皇太子の婚約成立にさいし、「聖心女子大にゆけばよかった」「まだ義宮〔正仁。皇太子の弟宮〕がいらっしゃるから望みはあるワ」などと反応した、若年女性層の皇室観の内に、最も端的に示されるべきものだ。「皇室はもはや畏怖されるのではなく、敬愛され」る。「かつて大衆は『雲上』を仰ぎみたが、現在では『スター』を憧憬する」のである（松下 1959:31-4）。

第二に大衆天皇制は、新聞雑誌の発する「世俗的」な皇室写真・記事が、人々の皇室観のありようを決定するという点でも、「絶対天皇制」と大きな断絶をもつ。すなわち、大衆天皇制下のマスコミは、コマーシャリズムの論理のもと、天皇家の親しみやすい姿や趣味性格、日常などをつたえる記事・写真を、大量かつ日常的にながしてゆく（わけでも皇室報道のゴシップ化は、その象徴である）。マスコミのながすこの世俗的な皇室報道は、天皇家を「スター」として親しむ読者の心性に呼応した結果であると同時に、天皇家のスターとしての性格、そして天皇家にたいする民衆の憧憬・関心を再生産してゆく、最大の媒体として機能する。たとえば 1959 年前後のマスコミが、「平民」と「恋愛」を中心的なキ

ワードにしながらか皇太子妃報道を展開していったことの虚偽性を暴露した後、松下はこう続ける。

「しかし大衆は、皇太子妃を『平民』と『恋愛』の偶像として受けとらされた。舞台裏と、はなばなしいマス・コミの舞台効果とは、かくも異なっている。この場合、舞台裏で誰がプロットを書いたかは重要ではない。ただ、マス・コミにとっては、皇太子妃ニュースは、『平民』と『恋愛』でなければならなかったことが重要なのである。なぜなら、こうしてマス・コミによって皇室自体が大衆社会状況に適合せしめられてしまったからである。いわばこのようなメカニズムにおいてのみ、はじめて、皇太子妃ブームは爆発しえたのだ。現代的な大衆君主制として、天皇制を売りださうかどうかについて自信のなかった支配層の人は、マス・コミにたいして感謝してしかるべきであろう」(松下 1959:38)。大衆天皇制下の皇室観を決定するのは、支配層の政治企図ではもはやなく、マスメディアのコマーシャルリズムの手にゆだねられてゆく。

そして大衆天皇制を近代天皇制と区別させる第三のポイントは、そのイデオロギー的基盤の性格にある。すなわち戦前の「絶対天皇制」においては、学校や軍隊等、政府の直轄機関での教化政策をつうじて涵養された、「現御神」「大元帥」たる天皇への「畏怖」の念にもとづいて、民衆の統合・動員が達成されていた。これにたいし大衆天皇制下では、マスメディアの流す世俗的な皇室報道の受容をとおして育まれた、天皇家への大衆の憧憬や親愛の念にもとづいて、皇室が社会・政治体制の中心(象徴)に位置することの正統性がささえられることとなる。

「[皇太子と正田美智子の婚姻にさいした]大衆的興奮は、新憲法下の日本の大衆社会状況においては、むしろ必然的な正常反応であったのだ。いわば、ここで天皇の正統性の基礎が、『皇祖皇宗』から『大衆的同意』へと変化したわけである。かつて明治憲法は、人民にたいしてではなく『皇祖皇宗』にたいして『告文』をなし、『万世一系ノ天皇コレヲ統治ス』(第一条)とのべていた。新憲法では、天皇は世襲であるにもかかわらず、その正統性を国民からひきださなければならない。『天皇は日本国民の象徴であって、この地位は主権の存する日本国民の総意に基く』(第一条)。しかしこの総意とは、大衆デモクラシー化した状況のもとにおいては、実質的にスターへの大衆的賛美であったわけである」(松下 1959:35)。

以上三点が、「大衆天皇制論」の議論(とくにその前半部)の基本的テーゼをなしている。かく松下圭一は、戦後天皇制のイデオロギー的再生産のありように生じた、モダンかつラ

ディカルな変容を、社会総体の近代化・大衆化という巨視的背景との連関のもと、民衆側の経験世界にそくしながら見事に解明してみせた。天皇家を「スター」と捉え憧憬する民衆の皇室観の誕生・拡大と、これを涵養する媒体——マスコミによる世俗的な皇室報道の大量流布。大衆社会状況の出現という、巨視的背景から織りなされる、かかる民衆・マスメディアの自律的な相互作用のもと、天皇制のイデオロギー的再生産が、統治者側の企図を媒介しない形で達成されてゆく機制。冒頭においた本論の主題とはじつのところ、松下（1959）によってその半ばは解き明かされているといってもよい。

但しここで注意すべきは、松下（1959）が、大衆天皇制の始まりを、戦後日本社会の内に求めるスタンスをとっているという点だ。既に繰り返し見たごとく、近代天皇制と戦後天皇制とは、松下において明確に区分され、対置されるべきものである。松下が近代天皇制に向け、「絶対天皇制」という呼称を用いたのは、その象徴的な現れであった。

しかるに松下自身の言うごとく、大衆天皇制という機制が、日本社会の近代化・大衆化という巨視的趨勢にともない出現したものであるならば、当然にそれは、1945（昭和 20）年で断絶する性格のものではない。マスメディアの発達を筆頭に、松下の着目する諸要素は、憲法や政治制度等とは違って、1945 年前後を大きな区切りとしていない。鶴見（[1963]1991）、南他（1965）を始めとする大正文化・社会論、あるいは赤澤・北河編（1993）や吉見編（2002）の 1930 年代論。それらは、大衆天皇制の成立の巨視的背景となるべき諸社会条件が、明治後半以降から（ファシズムとの両価的な関係を結びつつ）漸進的に発達していった様相を、詳細かつ網羅的に明らかとしてきた。かかる先行研究の知見をふまえるならば、戦後大衆天皇制の起原もまた、1945 年 8 月 15 日以降ではなく、戦前期日本社会の内にこそ求められるべきものだろう。すなわち大衆天皇制とは、近代天皇制・戦後天皇制という区分を越えて、長期的なスパンのもとに進展してきた、天皇制のモダンな再編とおかれる必要があるはずだ。

事実、松下が、大衆天皇制の指標に挙げた、殆どあらゆる事象とは、戦前期において既に用意されていたものだった。皇室をスターとして捉え憧憬し、かれらの世俗的な情報を求めてゆく傾向の起原は、明治期民衆の内に、見いだすことが可能である。新聞雑誌に、天皇家の世俗的な部分を伝える写真・記事が大量に掲載される事態の生じたのも、殆どこれと時を一致させている。「平民」と「恋愛」をキーワードとした、皇室結婚のメディアイベント化も、美智子妃ブームに先立つこと 30 年前、1920 年代にその嚆矢をもっていた。

そして、かかる大衆天皇制の「起原」を、戦前期の日本社会にたずねてゆくことは、た

だに松下圭一の揚げ足をとり、あるいは好事家的な事実を積み重ねるという試みにとどまらない。当然ながらこの試みとは、「大衆天皇制論」の上記諸テーゼが、近代天皇制にもあてはまることを、経験的に立証してゆく試行となるべきものである。マスメディアやその他の近代的諸条件と連動しながら、被治者の側が、モダンな皇室観を自身の内に育み、自律的に天皇制を支持してゆく。大衆天皇制の起原とその成長のプロセスを、明治期から説き起こしてゆくことは、戦前期民衆の生活世界の内に、かかる契機の広く存在していた蓋然性を問うてゆくことと等価である。これこそは、冒頭においた本論の主題を経験的に解き明かしてゆく試みにほかならぬ。《戦前期》大衆天皇制の形成過程を通時的に概観し、「大衆天皇制論」の議論を修正・補完してゆくことが、本論の主題解明に、最も適切なアプローチとなるべきゆえんである。

以上のような問題意識と分析視角のもと、本論では、戦前期大衆天皇制の形成過程に、歴史社会的な考察を施してゆく。あらかじめ記しておく本論では、1900年代から10年代にかけての時期を、大衆天皇制形成の重要な契機と見なしている。対外的にいうならば、日露戦争（1904－5年）、日韓併合（1910年）、第一次世界大戦参入（1914－18年）等の諸事件をもち、国内的には、明治天皇から大正天皇への代替り（1912年）、日比谷焼打事件（1905年）に始まる大衆デモクラシー運動を迎えた時期にあたっている。日本社会総体が、急激な近代化・大衆化を遂げたことでも知られるこの大きな変動期において、本論の議論の中心的対象となる皇室観・皇室報道もまた、ラディカルな変質をなしている。この1900－10年代に生じた「切れ目」にとくに注目しながら、戦前期大衆天皇制の形成過程に考察をくわえることで、次の二点の解明を図るというのが、本論の具体的な目論見となる。

第一に本論では、1900－10年代以降の民衆の皇室観／マスメディアの皇室報道が、相互に関連しながら、モダンな変容を漸次遂げてゆく過程が、近代化過程との関連において考察される。詳しく言えば、20世紀前半の民衆のあいだに、天皇家にたいし卑俗な憧憬・関心を向け、世俗的な皇室報道を積極的に「消費」してゆく心性・態度が、拡大してゆく過程、あるいは新聞雑誌界が、かかる民衆側のニーズに応え、世俗的な内容の皇室報道を、大量に配布してゆく過程が、本論では着目される。これによって、近代日本の民衆・マスコミが、消費者－企業として強く結びながら、官製の国体イデオロギーへの自律性・対抗性をともに鮮明としていった事実を、日本社会の「世俗化」過程、あるいは新聞雑誌界の

商業主義化・拡大化過程との関連において明示する<sup>3</sup>。

第二に本論では、1900—10年代以降の天皇制が、皇室報道をとおして被治者の内に涵養・再生産される、天皇家への世俗的な憧憬・親近感をその支持基盤としていった過程が示される。あらかじめ強調しておくとは、支配層の側が、民衆のモダンな心性や、マスメディアという近代装置を、自身のイデオロギー政策に反映・活用していった過程などとは、質的に異なるものである。むしろ本論で示されるのは、戦前期政府が、アナクロなイデオロギー政策に拘泥し続けた結果、近代天皇制のイデオロギー的再生産の場面から、その地歩を次第に失ってゆく過程である。戦前の民衆・マスメディアが、天皇制のイデオロギー的再生産の場面に能動的・自律的に参画し、さらには自身らの都合にかなうよう、その質的変容を迫ってゆく。あるいは、近代天皇制のイデオロギー的再生産が、被治者やマスメディア、両者を取り巻く種々の近代的な社会条件による、自律的・複層的なはたらきかけのもとにはじめて達成されてゆく——特定の政治主体の企図や施策に還元し得ない形で達成されてゆく。本論がめざすのは、20世紀前半の民衆の生活世界の中で、天皇制がかかる形態のもとに発現していた事実を明らかにすることにはかならない。

最後に、本論の構成を簡潔に説明しておく、まず第一章・二章では、1890年代から1930年代までの大衆天皇制の通時的発展の様相を、段階的に概観する。そのさいの指標にするのは、コマーシャリズムにもとづく皇室報道の大量流布、それから皇室観・皇室報道の世俗化という契機である。その進展の過程を、日本社会の近代化わけでもマスメディア界の商業主義化・大衆化との連関において考察し、近代天皇制と戦後大衆天皇制のイデオロギー構造上の相同性を明らかにすることが、一・二章ではめざされる。続いて第三・四章では、一・二章とは別の指標にもとづき戦前期大衆天皇制の形成過程を捉え直し、近代天皇制と戦後天皇制の相同性・連続性というのを、より詳しく明らかにすることがめざされる。これに続く第五章で、戦前期大衆天皇制と戦後大衆天皇制のつなぎ目の部分、すなわち戦時期の大衆天皇制のありようを詳しく論じた後、終章で本論ゼンタイの議論がまとめられる<sup>4</sup>。

そうして本論では、①1900—10年代②1920年代③30年代前半④日中戦争勃発から太平洋戦争終結（「玉音放送」実施）まで、という時期区分が用いられることとなる。それは、皇室観・皇室報道の質的変容という事象を、段階的に記述してゆく上で、あるていど妥当と思われる区分であるのと同時に、政府による皇室報道統制の質的変遷に、ほぼ対応する

区分となっている。すなわち①は、種々の皇室報道統制が、政府側によって整備され始めた時期。②は、皇室報道にたいする大幅な規制緩和の実施期。③は皇室報道の「操作」を政府が本格的に図り始めた時期。④は、政府側が皇室報道の強権的支配を達成した時期に、それぞれあたっている。すなわち戦前期大衆天皇制の進展過程と支配層側のかかわり（結論的に言うならばそれは負の連関性として把握される）を、通時的・経験的に検討してゆく上でも、上記の区分は一定の有効性を持つと考える。



## 第一章 戦前期「大衆天皇制」の初期形成と展開（1890－1910 年代）

本章では、1890 年代から 1910 年代までの状況、すなわち戦前期大衆天皇制の萌芽が、都市部を中心にその姿を現し、なおかつそれが一定の成長を遂げてゆくまでの期間をとりあつかう。

本題のまえに、同時代政府の実施した、天皇をシンボルとした民衆統治政策のありようを、先行諸研究を参照しながらおさえておく。「御一新」から 1910 年代に至る期間の支配層が、民衆による天皇制支持の論理を、どのような形態において定着させようと図ったかについての確認である。

明治来、とくに 1890 年代の前後を契機に支配層は、「現御神」「絶対君主」としての天皇をシンボルとした「臣民」の創出・統合という形を選択し、その実現のための諸施策を開始する。近代の天皇が、実質的にはどのような性格の君主であったかという政治史上の論点は措くとして、明治政府が、天皇家の絶対性・神聖性の徹底教化をつうじ、能率的な民衆動員・統合を図ったことは、確かな事実である。各府県での「人民告諭」の布告から天皇の地方巡幸、神道の国教化運動、皇国史観教育を始めとして<sup>1</sup>、（その実効性は別としても）「天皇の神権的権威性を中心にすえて新しい国家統合」をめざす方向性は、明治初年から既にうちだされたものだった（安丸 1992）。

軍隊をとおした民衆教化の基本テキスト「陸海軍軍人ニ賜ハリタル勅諭」の渙発は 1882 年。1889 年には、神聖不可侵の存在たる天皇の永続的な主権保持を、「国家ノ〔精神的〕機軸」にすえた「大日本帝国憲法」の発布があり（丸山 1961:29）、翌 90 年には、後の臣民教育の基盤となる「教育ニ関スル勅語」が発せられる。全国の学校において、この勅語の謄本の奉読式が一律的に始まったのは、1891 年（籠谷 1973）。ほぼ同時期には、天皇家の官製肖像写真（＝「御真影」）の初等教育機関にたいする下賜も広く開始され、「教育勅語」「御真影」という二大媒体をつうじた臣民教育が本格化してゆく。

かかる教化政策の網の目からこぼれ落ちた民衆を取締る、不敬罪・大逆罪規程も、1880 年公布の刑法中で、既に定められていた。1910 年の「大逆事件」にさいしては、当該事件のみならず、周辺にたいしても不敬事件が「濫造」され、国体護持のためのこれらの法が、きわめて恣意的に発動されるさまを人々は実見する。のみならず、「天皇制国家の秩序を具体的に形成する警察的取締法制とその機構は、この事件処理を通じてその完成された形姿をととのえる」（渡辺 1979:163）。たとえば不敬罪の適用範囲が拡大し、個人の内的世界（具

体的には日記の文言)にまで波及してゆくようになるのは、大逆事件に付随して生じたある不敬事案の判決をとおしてのことだった。警視庁での特別高等課の設置を筆頭に(1911年)、天皇制をささえる暴力装置の機構的拡充の重要な契機を、この事件のフレームアップがなしていたことも、よく知られる部分である。

無論、天皇家への尊崇を、各種の直轄機関をとおして民衆側に強制し、それを拒む者には物理的暴力をくわえるという以外の、ヨリ柔軟な部分をも、同時代政府のイデオロギー政策は含んでいた。「象徴〔シンボル〕としての『天皇』は、或は、『神』として宗教的倫理の領域に高昇して価値の絶対的実態として超出し、或は又、温情に溢れた最大最高の『家父』として人間生活の情緒の世界に内在して、日常的親密をもって君臨する」(藤田[1966]1998:14)。支配層が「天皇」に後者の意味あいを付与したのは、1910年代の文部省を中心とした、家族国家観の教化運動にその本格的な契機をもっている。この家族国家観は、1911年から刊行された、第二期国定修身教科書の基調をなして以来、官製イデオロギーとして明確に位置づけられ、初等学校をとおして徹底教化されてゆく。石田雄に従えば、この新たな教化運動の目論見は、民衆の伝統的慣習たる「家族主義」を基盤としながら、「家族的敬虔の対象として国家乃至天皇」を臣民に観念させることに存在した。天皇家と民衆のあいだに「家族に対する感覚的情緒」をレトリックとして持ち込み、民衆側の能動的な服従を引き出してゆく。それが、1910年代の政府による家族国家観教化の中心的な企図の一つであったという(石田 1954:12-22)。論者によっていどの差はあるが、1910年代の政府がうちだした家族国家観の中に、被統治者側の主体性をくみ、なおかつ天皇家との距離を近いものとして民衆に観念させる部分が含まれていたことは確かだろう。

しかるに、この家族国家観の啓蒙運動が他方で、従前の神格化・絶対化路線をヨリ徹底化してゆく側面をはらんでいたことも、多くの研究の既に指摘するところである。すなわちこの官製イデオロギーの内には、「皇祖皇宗」と民衆の祖先とを擬制的に結びつけ、祖先崇拜という民俗・慣習を皇室崇拜へとつなげてゆく目論見も、同時に内包されていた(神島 1961;唐澤 1968;川島[1957]1983)。じっさい 1910年代は、神社参拝を始めとして、「敬神崇祖」観念を涵養する上での諸行事が、初等教育に導入された契機としても存在した。ここにおいて学校機関は、1900年代に本格始動した国家神道体制に、明瞭な形で参画するに至っている(山本・今野 1976:261-306)。

1910年代以前の政府のイデオロギー政策が、天皇の聖性・絶対性教化にもとづく体制支持の調達という、絶対主義的な性格を、その基調に強く示していたことは、ここにおいて

確かなものとなるだろう。天皇家の神聖性・絶対性を強調する言説・図像を、儀礼とくみあわせながら民衆に間断なく与えてゆく。あるいは、民衆の内的世界にまでたちいて、天皇家への信仰・服従の有無をたえず監視する。そのためのイデオロギー装置・暴力装置が一定の確立を見せた時代として、明治維新から 1910 年代までの時代はあらわされる。

しかるに以下に確認してゆくのは、かくのごとき政府のプログラムとは違う、別様の論理のもとに天皇制を支持する機制が、マスメディアと結びつきながら、都市民衆の日常の内に拡大してゆく過程である。明治初期から、段階的に追ってみたい。

## 1. 戦前期大衆天皇制の萌芽期（1890 年代まで）

### 1.1 明治初期の皇室観

明治初期の民衆の懷いた天皇観は、多種多様な解釈の濫立（あるいは天皇家にたいする無知・無関心の横行）として特徴づけられるという点で、先行研究は見解をおおよそ一致させている<sup>2</sup>。有名な「生き神」信仰との結びつきを始めとして、維新まもない頃の民衆は、伝統的慣習・思想、日常の生活感情にしたがい、皇室という存在に、さまざまの解釈を自在にくわえていった人々だった。管見でも、この雑然さこそが、1880 年代以前の民衆が懷いた皇室観の、最大の特徴をなしていた。たとえば旧体制へのシンパシーにもとづき、天皇家への徹底した無関心・反発をつらぬいた佐幕派の民衆。天皇は女性であるとか、後光がさしているとか、目には見えない存在だとか、思い思いの想像をめぐらした地方人士。「天子」「主上」等の語彙すら知らず、「太政官様」と天皇のことを呼び、それでも徳川の圧制から解放してくれた有難い御方、と感謝の念を懷く農民など<sup>3</sup>。1890 年代から本格的に開始された、教育勅語と「御真影」とを基軸とする臣民教育とは、天皇を国民国家のシンボルとして民衆に知らしめるのみならず、既存の多様な天皇観を、政府の公式見解（天照大神直系の現御神／万世一系の世襲的政治君主）のもとへと一義的に収斂させてゆく運動だったと捉えてよい。

「本月〔1874 年 2 月〕一日ヨリ当県庁〔静岡県〕ニ於テ管下土民エ主上御写真ノ拝見ヲ免サレ、市在共ニ日ヲ分チテ参拝ス 然ルニ群集下向ノ者ノ内、四五輩ニテ語り行ヲ聞ハ、我等今日ハ天子ヲ拝シ奉ルベキ由故、其御写真定メテ衣冠御束帶ノ事ト思イシニ、豈計ラン、外国風ノ戎服ナレバ、最早日本モ西洋ノ属国トナリタルト見エタリト、高声ニテ話シ

行タリ」(静岡県編 1989:1111-2)。

「御巡幸のお道筋で〔福島〕須賀川辺の老人で余ほど強情らしい者が当社〔『讀賣新聞』より出た探訪者にむかい 主上がお通りだ主上がお通りだというのが県庁様は虚を我々にいい触らした ナゼならば天子様ハ神様で入らせられるから御光がささなければ成らないまた馬車でお出になる訳がない牛が曳かなければならない筈だ 夫にはお車へ男の三ツ児が附て居るのに違いない 夫を唐人らしい形りの男が何人も馬車に乗て来て天子様だと云のハ虚だといひ張り本とうの主上ならお賽銭と御神酒を上ようと思つて五里の道をはるばる出て来たが牛の曳く車が無ければこの酒ハ私が飲むといひて玻璃壇の酒を飲はじめました…」(1876年7月31日付『讀賣新聞』「新聞」)。

「去る壬申歳(1872年)七月四日車駕香川県讃岐の国円亀の新宮へ行幸在らせ玉いし時市街の老弱恐多くも龍顔を拝しながら華族四條殿と心得居たる者有りし由其起りハ行幸の節主上〔しゅじょう〕の行幸と市街へ口達にて洵渡したる故主上と四條と音相近きにより誤まつて四條様と云お公家様がお勅使にでもお出になったとかと心得て居た者がいくらかも有つた様子…」(1876年2月28日付『朝野新聞』「海内新報」)。

生き神信仰と、文明開化のシンボルとしてのイメージが複合した事例。

「明治天皇の初度の奥羽御巡幸は明治九年の七月初旬で、水澤での行在所は大町の戸坂屋であつた。戸坂屋は味噌、醤油、紙等を主として商つていた富豪であつた。このとき水澤の町民は初めて夏の人造氷なるものを知つた。当時小娘だった母は、戸坂屋の家人から御一行の使い残しの氷の小片を、『天子様のお食べ残し』と称して与えられ、これは富士山のテッペンから取つてきたのだべ、などと同年輩の友達と感嘆しながら夏の日の冷たい感触を珍しがつたという」(森口 1944:55-6)。

天皇やその周辺の物質(上記の食べ残しや鹵簿の通過した道の砂利など)が世俗的恩恵をもたらすという、当時の生き神信仰のありようにかんし付言しておく、絶対王政下の臣民の懐いた王の奇跡にたいする信仰と、一定の近しさをもっている。事実、17世紀の英国民衆もまた、王のふれたものには、王の身体と同じく、聖性が宿るものと信じていた(Bloch 1961=1998:356)。そうして、王の超自然的な能力にたいする素朴な信仰が、英国でも仏国でも、王の聖性そのものにたいする信仰の、重要な基盤となつていたことは、序章に触れたとおりである。その意味では、19世紀後半の日本各地に見られた、この類の皇室観は、支配層側のイデオロギー政策と、一定の適合性を有していたとも捉えられる。無論、日本の場合には、政府の側が天皇の超自然的な能力を積極的に宣伝してゆくようなことは

なく、その点でいうと、明治政府のイデオロギー政策は、モダンな相貌を当初から示していたのではあるが。

もう少し、濫立・混乱する明治初期の皇室観につき論じてゆこう。その内には、戦後大衆天皇制下のその祖型というべきものも既に看取される。

明治初年から、天皇家の肖像写真、あるいは皇室の人々を描いた錦絵・石版画は、都市部で広く売買され、民衆からの人気を博していた。維新政府がその売買を厳禁していたこととあわせて、よく知られている事実である（佐々木 1984;新田 1997;増野 2000）。天皇家の表象を民衆がつよく求め、民間業者がこれに対応するという、その形式に限って見るならば、戦後大衆天皇制との連続性において捉えることも、可能な事態ではあった。事実、当時の市販の皇室写真・皇室画は、スターのプロマイドとしての性格を、一つ有していたようだ。水谷不倒による、1879 年に行なわれた観兵式の回想から引こう。

「私が入営すると間もなく、十一月三日天長節で観兵式が行われた。…尤も私共は新生徒で、まだ観兵式に出る資格がないから…伍長に引率され、所定の地位で、拝観に出たが、それだけ観兵式の模様がよくわかる。南の入口から、…馬上に、黒い髭に包まれた顔が見えた。誰かが知っていて、あれは乃木中佐だという。皆がそちらを見る。まだ西南戦争で、熊本城を突出した花々しい英名が、われわれを魅するのである。暫く過ぎると、天皇陛下が御出になる。写真で見たばかりの貴顕の方々、有栖川宮殿下・三條太政大臣…が綺羅星の如く集った。…度々盛儀を見るにつけ、見聞が広くなり、田舎におつては、こんな事も知らずに済んで了う。今更ながら東京へ出るのが、遅かったと思った」（水谷 1977:180-1）。

当時の「ヤミ御真影」の、プロマイドとしての性格は、芸妓や役者、あるいはいかがわしい写真と混ぜこぜに売られてゆくという、その売買の形態にも示されよう。事実、当時の政府が「御写真」の販売を禁じたのにも、この点が一つ起因したようだ。

「埼玉県下加須町辺の写真屋には芸妓や娼妓の写真のうちに主上〔天皇〕と皇后様の御写真が売ものに出て有りまたその近所の礼羽村の本屋にも御写真が出て有ったと藤城輝三といふ人から申して来ましたが本とうなら済ますまいぞ」（1876 年 4 月 26 日付『讀賣新聞』「新聞」）。

「南神保町の澤田に泊って居たお浅ハ諸方の分署へ写真を売って歩行き夫を見せろ是をも見せろといわれてだんだんと出すと男女の見苦い写真や主上の御写真をも沢山持って居たので写真ハ残らず取り上げられた上に罰金を申し付られたと」（1978 年 2 月 21 日付『讀賣

新聞』『新聞』)。

「貴社の新聞…に日光山の麓鉢石町翁なる人が主上の御写真の売買を願たきよし実に切なる真の心より出たる事ながら…神に在す一天万乗の君の御影を下々の俳優または芸妓娼妓などの写真の様に市中にひさぎもて遊び同様に致さん事は実に恐多き限りなりさればこそ売買を御差留に成りたるなり」(1875年3月15日付『讀賣新聞』『寄書』)。

しかし、木下宗一によれば、明治初期の一連の「ヤミ御真影」は、神棚に祭られることも多かったという。「男の子に天皇を拝ませておくと出世する」と言われていたためだそう(木下 1965:165)。じっさい、木下のいう迷信は、山川均(1880年生・岡山)の少年時代の回想にも、報告されているものである(山川・向坂編 1961:96)。

錦絵にかんしても、同様の呪術的・宗教的傾向は確かに確認される。たとえば1885年発行の皇室錦絵「岡山県御行幸略図」が、「避邪の幅」として販売されていたように(浅井 1936:第六巻:30-1)。当時の市販の皇室写真・皇室画は、民衆のかかえた天皇にたいする「生き神」信仰とあいまって、崇拜の対象にもなっていたということだ。明治初期の「ヤミ御真影」への需要は、ブロマイド的な側面と、マジカルな側面と、その両面をもっていたというのが、その実情であったのだろう。

また、当時の「ヤミ御写真」関係の新聞記事を見ると、それらはだいたい、50銭から60銭くらいの値で売られている。当時の貨幣価値から言えば、これはかなりの高額だから、その購買層は、比較的裕福な階層にかぎられていたと思われる。無論、他方の錦絵は、ひじょうに廉価な娯楽品ではあったものの(小木 1979:434-42)、これも都市部での対面販売を中心的な流通経路としていたから、その流布範囲はおのずと限られたはずである。「御一新」当時の日本人の多くにとって、民間で売買される皇室の表象とは、まったく身近な媒体でなかったと見るのが、やはり妥当だろう。少なくとも、大衆天皇制の起原をこの頃に求めることが、きわめて困難な仕業であることは確かである。

## 1.2. 皇室絵付録の流行

続いて、1890年代前後の様子を見てゆきたい。

1888年というのは、天皇家の表象の歴史を語る上で、二つの点において興味ぶかい時期となっている。その一つは、E.キョソーネの手になるコンテ画をもとに、明治天皇の最も有名な「御真影」がつくられたことである。2年後にはこの「御真影」が全国各地の教育機

関に下付され始め、祝祭日に「御真影」を「奉拝」する学校行事が、この頃より日本全国で本格的に展開されてゆくことになる。多くの「御真影」研究が、この年に着目してきたゆえんである。すなわち 1888 年というのは、近代日本の支配層が、写真という近代複製技術と、学校というモダンなイデオロギー装置を用いながら、天皇家の神格化・絶対化を推進し始める重要な契機として、従前の研究では語られてきた。

だが、1888 年は同時に、皇室の肖像が、マスメディアをかいして、何万もの人々の手元にとどけられ始めた年としても、記憶されるべきである。1870 年代の頃より、新聞社は部数拡大の手段としてさまざまな付録を新聞につけ始めるのだが（大阪商業大学編 1991）、この年より、そうした新聞付録の一種として、天皇・皇族の肖像画が、しばしば各家庭に配布されるようになるのである。

それらは、数万部という単位で発行され、同時代の民衆から多大な人気を得るとともに、部数拡大と広告主獲得を目論む各新聞社にとっての、重要な販売戦略の一部を担ってゆく。民衆のニーズを媒介に、皇室の表象とマスコミ界の商業主義とが本格的に結びついた、最初の契機ではあった。大衆天皇制の要件の一つは、この皇室絵付録の流行をもって、満たされ始めると捉えていい。1888 年から 1890 年代にかけての時期が、戦前期大衆天皇制の萌芽期として、語られるべきゆえんである。

具体的に見てゆこう。新聞社が皇室の絵付録を発行した先駆的事例は、1888 年 7 月 10 日に刊行された『東京朝日新聞』創刊号の付録、「貴顕之肖像」に求められる。1873 年撮影の「御真影」を模写した、明治天皇の軍服姿の木版画付録である。同時代の皇室錦絵や石版画と違い、宮内省からの特別な許可を得た上で発行されたものだと、『村山龍平傳』はいう（朝日新聞 1953:202）。興味ぶかいことに、同日の『東京朝日新聞』第一面冒頭に掲載された「社告」では、創刊の挨拶よりも、この絵付録の説明に多くのスペースが割かれてある。創刊時の『東京朝日新聞』編集部が「貴顕之肖像」にかけた、期待のほどがうかがえよう。

事実、『東京朝日新聞』が今後の社運をかけて発行した同付録は、期待どおりのはたらきをはたしたようだ。朝日新聞社の社史によると、当時の民衆のあいだに「この絵付録は異常な反響を呼び、追加注文が殺到、ついに木版が摩滅して用をなさなくなり、十月には原版を彫り直して再版を発行する有り様で、市中には石版刷りの粗末なにせものまで出回るほどであった」（朝日新聞社 1990-95:明治編:190）という。

かくして『東京朝日新聞』が大成功を収めると、他の新聞社もすぐに追随し、正月や皇

室の佳節には、新聞付録の「目玉」として、しばしば天皇家の人々の肖像画がつけられるようになる。また、帝国議会議事堂へと向かう明治天皇を描いたもの（1890年11月29日付『大阪朝日新聞』付録）、雨の中を進軍する馬上の天皇の姿をモチーフにしたもの（1892年1月3日付『大阪朝日新聞』付録）など、錦絵や石版画のように、時事性や物語性をもった皇室絵付録も、多く発行されていた。1900年代にはいと、写真版印刷技術の普及とあいまって、皇室を描いた写真画や肖像画だけでなく、皇室写真そのものも、新聞の付録（写真版付録）としてつけられるようになる。管見のかぎりでは、1900年5月10日、皇太子嘉仁の結婚にさいして、『大阪朝日新聞』が記念付録につけた、天皇・皇后そして皇太子夫妻の肖像写真を一同に集めた写真版付録、また、『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』が翌年の天長節（11月3日）に発行した迪宮裕仁（昭和天皇）の写真版付録などが、その最も早い部類に属しているようだ。

1890年前後を契機とした、この皇室絵付録流行の背景には、政府による皇室画・写真の売買解禁が一つ要因にはたらいた。すなわち1891年には宮内大臣によって皇室画の販売許可が、1898年には皇室写真の販売許可が内務大臣によって出されている<sup>4</sup>。タテマエ上、政府がその売買を許可したのは、皇室の尊厳を冒さない肖像、官製の肖像写真に準拠したモチーフのものに限られていたとはいえ、マスメディアが皇室の肖像を大量に流布させてゆく事態を、政府は事実上、追認してゆくのである。

しかるにそれはあくまでも、学校での「御真影」儀礼の開始と明瞭にリンクした施策、天皇家の神格化政策の一環として、理解されるべきものだった。このことは、上記二つの解禁令が、「御肖像」の取扱をめぐる厳格な監視とセットで実施されている点に立証される（内務省[1929]1986:1-2）。たとえば1892年、内務大臣の発した、天皇家の肖像売買をめぐる訓令から引くと、「聖上、皇太后宮、皇后宮御肖像販売ノ儀黙許ニ付セラレ候ニ付テハ販売者ニ於テ取扱上自然不敬ニ渉ル等ノ所為無之様別紙取締心得書ニ準拠シ其ノ向営業者ニ厚ク注意セラルベシ 一 御肖像ハ不敬ニ渉ルベキ場所ニカカゲ又ハ陳列セシムベカラズ 一 御肖像ハ露店ニ於テ販売セシムベカラズ…」（内務省[1929]1986:2）。

多木浩二によるならば、1890年代、すなわち皇室絵付録が流行し始めるのとはほぼ同時期に全国の学校で開始された「御真影」儀礼において、天皇の写真の聖性を生み出していたのは、何よりそれを天皇自身のごとく丁重に扱わせた点にあった（多木1988）。天皇その人にたいするがごとく、最大級の畏敬の念をもって扱い、うやまうことによってはじめて、「御真影」はたんなる写真からアイコンへと変貌を遂げ、被写体である天皇の聖性が、儀礼の参



加者たちの心に植えつけられていったと、多木は主張するのである。

この多木の指摘をふまえたとき、「御肖像」の売買解禁が、その取扱をめぐる警察取締とセットで実施された事由は、明白となるだろう。うたがいなくその裏面には、「御真影」儀礼と同じ政治技術がはたらいている。「御肖像」売買にさいした取扱を厳格に監視することで、学校での「御真影」儀礼と類似した政治空間を、民間ルートをつうじ広範に形成する。渡辺（1979）の既に指摘したとおり、1890年代を契機とした「御肖像」の売買解禁の背景には、支配層側のかかる目論見の浮上が関与した。

しかるに強調しておく、1880年代末以降の皇室絵付録の流行とは、この政府の目論見に、新聞社側がおもねっていった結果などでは決してない。あくまでもそれは、収益を拡大する上での魅力的な「商品」として、皇室の表象が新聞社側に位置づけられた結果としてあった。このことは、皇室の肖像を付録につけた日の新聞が、平生の部数をはるかに上回る数で発行されていたという点にまず示されよう。たとえば1889年11月3日、明宮嘉仁（大正天皇）の立太子式が行なわれたさいに、明宮の肖像絵付録を発行した『讀賣新聞』は、その数日前に、「〔立太子式〕当日は平常の刷高の外に数万枚を増刷する積なれば広告依頼者の便利殊に多かるべきに就き至急御申し込みあるべし」（1889年10月28日付『讀賣新聞』「社告」）という社告を出している。

1880年代末に始まった、皇室絵付録の流行という新事象が、新聞社のまったき商業主義的目論見に根ざしていたことは、明治天皇夫妻の銀婚式（1894年3月9日）翌日の『萬朝報』が掲載した、次のマスコミ批評にも明瞭である。

「〔銀婚式〕当日の〔東京〕府下の諸新聞多くは祝意を表して思い思いの付録を發せしが…〔東京〕日々新聞の〔天皇・皇后を描いた〕アートタイプは先〔ず〕当日の第一〔の出来〕にて殊に皇后陛下の御顔は真に迫るを覚ゆれど十錢ならでは〔定期購読料とは別に10錢を払わなければ〕売らずと云うは祝意よりもむしろ商法氣、尊像を利用して金儲けを営まんとするは法禁を犯すもの、〔政府系たる〕彼社の日頃に似合しからず、金に云ては咽喉から手の出ると評さるる時事新報も石版の尊像に八錢の値を付したるが是は拝金宗の著者〔福沢諭吉〕を出す社として見れば怪しむに足らねど〔同紙付録は〕凝た割に引き立たず、…兎に角八錢に売れさえすれば夫で彼の社は満足にやあらん、…〔他紙よりも〕ズッと氣の利きて出色の想い有るは〔萬〕朝報の尊像なり…」（1894年3月10日付『萬朝報』「大典当日の諸新聞付録」）。

新聞社がコマーシャルイズムの論理にしたがって、皇室の肖像を大量に読者へと配布する。

そして読者の側は、別途料金の支払いを惜しまないほどに、それを強く求めてゆく。この点において皇室絵付録の流行は、まさに大衆天皇制の先駆というべき事象として、位置づけることが可能だろう。天皇家の人々のグラビアが、民衆によって日々読み捨てられ、消費されてゆくという状況は、ここからさほど遠くない。次のような投書が、大正中期の右翼雑誌に掲載されたゆえんである。

「新年の新聞に絵付録をつけるのを一概に時代遅れの旧習と排斥するのではないが、昔からどうかと危ぶまれることで、それが別に問題にもならず踏襲されているのは、至尊の御尊像や、皇太子または皇族方の御尊影を添付することだ。…先ず第一に、それがどれほど貴重なものであっても、新聞の絵付録、即ち平生読み捨てにする新聞の一枚の絵付録、という読者の感じに、さまで改まった別な感じを與えるものでないということを考えなければならぬ。読みすてられた新聞は、包み紙にも鼻ふき紙にも、時には使用にも供するものだ。新聞が民衆に勢力のあるのは、それを難有く拝見する所にあるのではなくて、手軽く読み捨てられる所にあるのだ。…だから其の新聞の絵付録というのも、平生の新聞に対する感じと特別に取り扱いようはない。やはり手軽く読み捨てられる性質を持っているものだ。そこに重々しい別な感じを持っていなければならない至尊の御尊影が現われているとする、それを拝見するものが、何の衝突も矛盾も感ぜずに、それを享け入れることができるだろうか」<sup>5</sup>。

もっとも、その内容・構図にかんし見るならば、大衆天皇制下の皇室写真の理念型と、1890年代の皇室絵付録とは、大きくその性格を違えている。確認し得た範囲では、官製の肖像写真を模写したものや、ニュース・時事問題を伝える図柄の中に皇族を配置したものが、当時の皇室絵付録の主流であって、天皇家の親しみぶかい姿や日常を描いた構図の絵付録は、いまだ現れてはいない。また、政府への配慮だろう、当時の新聞社は、皇室絵付録を発行したさいに、これを粗雑に扱わないようにと、読者への注意書きを紙面に入れることさえあった。

このことからすれば、1880－90年代の新聞社には、当時の政府が本格的に始めた「御真影」のアイコン化計画に、加担する向きすらあったと言える。事実、1894年3月9日の明治天皇夫妻の銀婚式にさいし、「両陛下最新の尊像」を付録につけた『萬朝報』は、その日の「社告」で、この絵付録は「読者諸君が…朝夕《敬拝する》に適す」るものだと、謳っていた。新聞社の側でも、皇室の肖像を「スターのグラビア」としてあからさまに位置づけ、読者に「消費」させることにたいしては、躊躇するところがあったということだろう。

雑誌のほうはどうだったか。皇室の肖像を販売戦略に活用する試みは、雑誌界でも 1890 年代にその嚆矢を迎えている。管見によると、皇室写真の集客力に目をつけた雑誌としては、1895 年 1 月に創刊された『太陽』（博文館）が最も早い。知られるごとく『太陽』は、発刊直後から 1900 年代に至るまで、ひじょうな人気を誇った——創刊初年から 1899 年までの 1 号平均発行部数は、7 万から 9 万部に達していたといわれる——総合雑誌。写真版口絵という新しいスタイルを、創刊当初から他誌にさきがけ採用し、読者の購買欲を惹こうとしたことでも知られている（永嶺 1997:106）。

そうしてこの目新しいビジュアルページの中心に、創刊当初から据えられたのが、ほかならぬ天皇家の写真であった。すなわち第 1 巻第 2 号（1895 年）の巻頭口絵に、伏見宮貞愛と小松宮彰仁の肖像写真を採用したのを手始めとして、『太陽』編集部は、皇室写真を写真版口絵の巻頭に、次から次へと載せてゆく。創刊 1 年目から既に、2 号に 1 号というハイペースで、天皇家の人々が、同ページに登場しているのである。明らかにそれは、新聞の皇室絵附録と同じく、皇室の肖像にたいする読者側の高いニーズを捉えようとした策であったといつてよい<sup>6</sup>。但し、1890 年代掲載分に限っていうと、その大半が官製の肖像写真で占められたことは注意される。このモダンな雑誌にあってもまた、（大衆天皇制下の皇室写真の典型たる）天皇家のプライベートな写真やスナップの登場は、20 世紀にまたねばならなかったということだ<sup>7</sup>。

次に、皇室記事のほうへと話を向けてみよう。

確認すると、大衆天皇制のもう一つの重要な指標は、天皇・皇族の趣味嗜好や内情などを報じた、「世俗的」な皇室記事の登場にある。しかし、日本のイエロージャーナリズムの先駆紙たる『萬朝報』を含め、1890 年代以前の新聞雑誌には、かかる記事を殆ど見ることができない。そこで大半を占めたのは、天皇・皇族の政治的動向を簡潔に記したものや、その「御盛徳」を縷々述べ立てた記事のほうである。

それは、年端の行かない皇子なども例外でなく、英明な政治的存在として、かれらも表象されてゆく。以下は、明宮嘉仁の立太子のとき（当年 10 歳）の報道。

「殿下の御孝心深く御仁徳厚く且つ御勇壯にして御謹肅におハします事ハ往々新聞等にも現ハれて世人の知り奉る所なるべしと雖ども茲に御言行の一二を記し奉らん 嘗て儲君御治定の御内宴として宮中に於て皇族を始め大臣等に御陪宴を賜はりたる御事ありき此時殿下の御容儀を拝み奉るに終始御謹肅に見えさせ…御威風自然と備わらせたりと聞こゆ 御年七歳許の時華族女学校に成らせられ生徒の唱歌を聞召されたる事あり其時間殆んど二時

以上の長きに及びしかども終始御倦怠の御気色なく泰然として御動座あらせられざりしと云えり…右ハ殿下の御言行の僅に世に洩れたるを掲げ奉るのみ此の他にも御美事御善行ハ数え難き程に多かるべし殿下には御年僅に十歳と申す御幼齡にましますに斯くもいみじく絶れておハしますこと全く常人の種ならぬ天上の仙種なるが故とハ申せ実に畏入たる御事にて此の皇太子を今日に得たること皇室の為に国家の為に蒼生の為に欣然としてこれを祝せざるを得ざるなり」(1889年11月3日付『東京日日新聞』「皇太子の御性行」)。

「兼て噂ありし如く、愈々十一月三日の天長節にハ、明宮嘉仁親王殿下の立皇太子の式を挙行あらせらるると云う、漏れ聞く所に拠れば、殿下は英武活発にして頗る交際に長け能く臣民に親み、人を御するの量を備え給うとの事なり、皇太子に御冊立の上は、益々学を励み、徳を磨き、他日我日本帝国の英主として、国民の胆仰する所となり、国光を海外に輝かし給うの準備あらまほしくぞ祈る」(「立皇太子の式」『国民之友』、民友社、第67号、1889年、40頁)。

かれを公的存在と表象する向きは、0歳児の頃から既に現れている。

「昨日は土用の入に付き皇子明宮より両皇后宮へ御機嫌伺いとして御肴一代を献上せられたれば両皇后宮よりも暑中お見舞として女官を差遣わされました」(1880年7月20日付『讀賣新聞』「新聞」)。

天皇家の日常や家庭生活、趣味嗜好などを報じることは、むしろ当時のマスメディアの強く嫌悪したところであった。たとえば1892年の天長節にあたって『讀賣新聞』が掲載した、明治天皇の「聖徳」を伝える記事では、「莊重に渡らせ給う」われらが「陛下」に趣味嗜好などというものは存在しない、とまで書かれてある(1892年11月3日付『讀賣新聞』「聖徳の一斑」)。また1896年、雑誌『世界之日本』が明治天皇の日常や趣味を詳しく記事にしたさいには『東京朝日新聞』が、これを不敬きわまる行為だとして、批判を連日展開したことで知られている(小股1998:90-4)。その独占化過程の中で、皇室報道の世俗化・商品化を、毎日系列と競って推進してゆく、朝日新聞社のその後の動きを捉えたとき、この事実は象徴的な意味をもとう。

以上概観したごとく、1890年代以前の皇室報道の内容は、図像・記事両者とも、大衆天皇制下のそれからは程遠いものだった。むしろそれらは、帝国憲法の発布、「教育勅語」の渙発そして「御真影」儀礼の開始など、皇室の神格化政策を本格的に展開し始めた同時代政府の意向に、忠実にそう性格を示していた。かつ、読者層もアッパークラスに限られていた当時であって、マスコミの皇室報道が民心に与えた影響は、学校をつうじた臣民教育

のそれなどと比べれば、圧倒的に小さかったことだろう。たとえば鶴飼新一による、明治の新聞雑誌の発行部数調査を参照すると、1890年現在で、一日に発行される新聞と雑誌の平均総発行部数は、51万部ていど（無論、明治初期の錦絵の流通量との比較でいうと、これは相当に大部数であるのだが<sup>8)</sup>）。世帯ごとの平均でいうと、100世帯の内、僅かに7世帯のみが新聞雑誌を購読している、というのがその実情ではあった（鶴飼1985）。皇室写真を早くもその販売戦略の中に組み入れていたとはいえ、当時の日本の新聞雑誌界は、大衆天皇制を組織する商業ジャーナリズムとしては、あらゆる面において未熟であった。

## 2. 戦前期大衆天皇制の展開期（1900—10年代）

前節で見た大衆天皇制の萌芽とはしかし、さほど時をおかずして、大きく成長を遂げることとなる。大衆天皇制形成の本格的契機となった1900—10年代の状況を、次に概観してみよう。

日露戦争前後の時期は、日本社会の近代化の、大きな契機をなしてある。大正文化・社会論において、指摘されてきた部分である。1900—10年代とは、今日に至る大衆社会状況の原型、大衆天皇制形成の前提となる諸社会条件が、不十分ながらも出揃っていった時代であった。南他（1965）を中心とした諸研究にしたがいながら、当時の社会状況に、具体的な輪郭を与えてみよう。

まず、社会的基盤をなす経済・産業の面では、藩閥政府と結びついた財閥・独占資本の本格的形成、それと並行した軽・重工業の飛躍的発展の時代として、1900—10年代は特徴づけられる。この資本主義の発達とは、その裏返しとして、小商工業者の没落と労働者階級の誕生という現象が、都市で広範に進展してゆくことを同時に意味していた。都市／農村という形で捉えなおしたとき、上記の経済基盤・階級構造の変動は、都市流入人口の急増と農村疲弊という形でも把握されるものである。日露戦後の都市騒擾の頻発と、それをスタートラインに引いたデモクラシー運動の展開は、かかる都市人口の増大と、階級としての都市下層労働者の登場を前提の一つとした（松尾1974; 藤野2004）。

1900—10年代における、この資本主義の急激な進展は、生産手段を持たず、しかし肉体労働にも携わらない、俸給生活者という人々が多数登場するきっかけともなった。新中間層あるいは新中産階級と呼ばれたかれらこそは、日露戦後の都市部に開花した、「大正文化」の中心的担い手となった階層だった。この一群の人々は、個人としての生活を楽しむとい

う享樂的傾向を強くした点、俗流個人主義を、その大きな思想的特徴としてもっていた。私化的傾向としてもしばしば約されるように、都市の新中間層は、家庭生活を重んじ、ここに資本を集中する態度においても、新しいライフスタイルを日本社会に示してゆく。国家的目標を第一にし、国家に与するかぎりにおいて個人的欲求が満たされるべき、という明治人のエトス（丸山[1946]1995:22-3）は、とくにかれら新中間層において、いち早く時代遅れのものとなってゆく。

映画館、劇場、遊園地等、都市民衆の余暇・消費生活をささえる近代的装置が続々と登場したのも、1900-10年代のことである。日本の映画館の嚆矢は、1903年の浅草電気館と言われ、1911年には、遊園地の先駆が宝塚に開園する。1910年代の関西圏において、小林一三が、この遊園地を含めた一大アミューズメント地域を阪急沿線に創出していった事実も周知だろう。

百貨店が消費文化の拠点となったのは、近代の日本社会においても例外でない（初田1993）。三越呉服店によるデパートメントストア宣言が1907年に行われると、以来、次々と各都市においてこの消費文化のシンボル装置が企業により設置されてゆく。三越百貨店と帝国劇場を結びつけた有名な広告コピーが発表されたのは、同劇場が開場した1911年のこと。流行やライフスタイルの理想形を、企業の側が積極的に消費者へと提示してゆく戦略も、この頃の百貨店によって始められる。

そして1900-10年代を契機とした、大衆文化の成立を最もよく示すのが、マスメディア界の興隆と資本主義化にある。最大の商業媒体となった新聞界では、朝日系・毎日系が、幕未来の新聞社の濫立状況を淘汰し、独占化を進めてゆく。雑誌界では、博文館、実業之日本社、少し遅れて大日本雄弁会講談社が、種々の近代的営業努力のもと、抜きんでた巨大資本となる。ソフト面では大衆小説というカテゴリーの隆盛が、当時の新聞雑誌界の大衆化・娯楽化傾向の象徴として挙げられよう。講談社が大衆文学の本山となった『講談倶楽部』を創刊したのは1911年。子ども向けの大衆小説では、立川文明堂による「立川文庫」（1914年一）が、児童のあいだに爆発的な人気を博してゆく。

新しいメディアである活動写真やレコード（蓄音機）が、資本主義企業による大量生産のラインに乗り、重要な娯楽媒体に確立したのも、この時代に求められる。たとえば映画業界が、1912年の日活の設立以来、民衆娯楽産業の中心の一つを占めてゆくことはよく知られる。レコードという媒体をつうじた流行歌が続々と生まれ、添田唾蟬坊や中山晋平ら、流行作曲家・作詞家が輩出していったのも、1910年代をその始まりとした。

かくのごとく、1900-10年代以降のマスメディアは、それじたい大衆文化の代表であったと同時に、大衆文化全般の普及とそのモダン化にきわめて大きな役割をはたしたという点でも、別格として付されるべき文化である（津金澤編 1996）。なかでも当時の新聞界は、各社間で激的な販売競争を繰り広げる中、集客力があると見込んだ娯楽・カルチュアを次々とメディアイベント化、つまりは商品化し、文化の大量生産・大量消費時代の牽引役となってゆく。とくに 1910 年代以来の各新聞社が力をいれた領域がスポーツ、わけでも野球であったことはよく知られる。1914 年の朝日新聞社による中学野球の全国大会の開催とその独占報道は、新聞社の部数拡大戦略が、戦前の代表的な民衆娯楽のカテゴリーを誕生させた、シンボリックな事例として位置づけられる。

日露戦争後の大衆文化の確立においてマスメディアのはたした役割は、「消費される人々」、大衆の「スター」を数多く登場させていった点にも求められる。1910 年代の大衆スターとしては、レコードの大ヒットを契機に憧憬の的となった舞台女優・松井須磨子。立川文庫の主人公を活動写真の中で繰り返し演じ、子どもから大人に至るまでの人気者となった尾上松之助がその代表格をなす。もっとも、1900-10 年代のマスコミが創出したスターとは、舞台役者や映画俳優に限られない。日露戦争の英雄を代表に、政治家や軍人からも、マスコミのスターは数多く輩出していった。というよりも、集客力をもつ魅力ある人物を、「商品」として徹底的に活用しようとする企業手法が、20 世紀初頭のマスメディア界において一般化していった、というのが、この事態を捉える上では適切な表現だろう。したがって文壇・学术界からも、スポーツ界からも、およそあらゆる領域から、日露戦後のマスコミのスターは次々と誕生していった。日本全国の民衆にたいし知名度を持ち、憧憬される特定の人々をマスメディアが創出し、かれらをめぐる情報を、民衆が日常的に「消費」する。大衆天皇制の形成と、最も直截的に連関する、この近代的社会条件が確立した点も、同時期の大きな特徴をなしていた。

かくして大衆社会状況の原型は、1900-10 年代の日本において急速にその姿を現し始める。大衆天皇制をささえる諸近代条件が、不十分ながら出揃ったこのとき、1890 年代の大衆天皇制の萌芽は、どのような成長と変貌を遂げていたか。

## 2.1. 皇室写真の世俗化・消費財化

まず、皇室報道上に生じた変化から、この点を捉えてゆこう。

20 世紀にはいつてから、日本のマスコミ界には、写真版印刷という技術が急速に普及する。報道写真や有名人の顔写真等の、紙上（誌上）掲載を可能にする技術である。新聞界でいうと、1904 年の元日に、『報知新聞』が紙面に写真を掲載した写真版を発行したのを先駆として、各紙ともこの写真版へと切り替わってゆく。雑誌界でも、『太陽』に倣う形で、有力な雑誌にはのきなみ写真ページが巻頭に付されてゆく。日本の新聞雑誌がモダンな体裁を整えた、重要な契機として知られている（春原 1987）。

興味ぶかいのは、1900－10 年代の新聞雑誌社が、この新技術の活用先を、何より皇室に求めていったという点にある。新聞各紙では、写真版の皇室絵付録が添付されるのみならず、その紙面にも、天皇・皇族の写真が、かれらのその日の活動を伝える記事などとともに、日常的に掲載されるようになる。くわえて祝日祭日の各紙上には、天皇家の日用品や邸宅、「御宸筆」の写真などもしばしば載ってゆく。

雑誌界でも、成年者雑誌から少年者雑誌に至るまで、皇室写真の流行が生じていた。当時の代表的な雑誌を事例にとると、『太陽』の 1900 年代発行分では全 154 冊中 65 冊の巻頭を、『婦人世界』（1906 年創刊、実業之日本社）の 1910 年代発行分では、140 冊中 100 冊の巻頭を、皇室写真が飾っていた。

かかるマスコミの動向の背景には、上記印刷技術の向上だけでなく、皇室写真への需要のさらなる増大が存在した。以前にもまして、天皇家の人々の写真は、民衆の心を惹きつける、人気の商品となっていた。たとえば、『婦人画報』の発行元、東京社の編集者だった窪田空穂の回想によると、同社は 1908 年、倒産の危機に陥ったさい、「最後には天子様に縋るより外はない」ということで、各宮家に大金をつかませて皇室写真をかきあつめ、史上初の皇室写真集『皇族画報』を発行する。起死回生をねらって出されたこの『皇族画報』は、予想どおり売れに売れ、東京社を経営難からすくい、さらには同社のその後における隆盛の礎となったという（窪田[1934]1965:161-9）。かくのごとく、一雑誌社の命運を左右するほどに、当時の皇室写真の商品価値というのは高まっていたということだ。博文館、実業之日本社を代表とした当時の有力雑誌社が、自社雑誌に皇室写真を挙って掲載したのも、この高い集客力に何より由来したと捉えていい。

いっそう重視されるのは、20 世紀はじめのマスコミが、かく皇室写真を大量流布させてゆく中で、それらを「消費の対象」として明瞭におき始めていたという点だ。新聞各紙では、皇室写真が芸人や役者らのそれと同一紙面にしばしば掲載されるようになり、雑誌口絵でも、風景写真やニュース写真などと一緒にならべられてゆく。新聞に、天皇家の人々



の「顔写真」が頻繁に掲載されている事実なども、その現れの一つではあった。たとえば1910年1月1日付『国民新聞』は、戊年にちなんで、戊年生まれの有名人の顔写真を集合させた企画ページをつけている。そこでは、戊年生まれの芸人や力士、役者らの顔写真とともに、皇后を始めとする戊年の皇族の顔写真が、しかも芸人たちのそれとほぼ同じ大きさで掲載されていた（皇后のそれは若干大きい）。かれらの写真は、芸人らの写真よりも上位に掲載されてはいるものの、皇族の高貴さや聖性を演出しようとする編集意図は薄く、ただたんに「戊年生まれの有名人の写真」という感じだけが、読む者に与えられるような紙面構成となっていた。

そして当時の新聞雑誌社が、皇室写真を好んで「消費の対象」と据え始めていたことの最も端的な現れは、スナップショットの公開に求められる。たとえば行幸啓・御成先での天皇・皇族の姿を撮影した写真。遠足や相撲見物などかれらの余暇の様子をの隠し撮り。かかる類の皇室写真を、当時の新聞雑誌は頻繁に掲載し始めるのだ。写真ざらいで知られる明治天皇も、その例外でない。遠方から記者・カメラマンが隠し撮りした天皇のスナップは、明治終期の新聞紙面でも、既に公開されていた（その容姿を明瞭に捉えたものは稀少だが）。

吉見俊哉は、「戦後」マスコミの皇室写真の特徴として、スナップ写真の多用を挙げ、「かつての御真影では、写真のなかの天皇が、その前に整列した無数の国民をまなざしていた。ところがスナップショットの場合には、たとえ相手が天皇家であったとしても、被写体はあくまでまなざされる対象でしかない」。戦後の皇室写真は「消費可能の対象とな」ったのだと、書いた（吉見 1996:475）。「御真影」儀礼をめぐる、従前の研究の知見のみにとづくならば、それは正しい表現であるだろう。しかるに、上記のごとき民間マスメディアの動向をその視野に含めたとき、吉見の指摘は、二つの点でその妥当性を失ってゆく。第一に、20世紀初頭から既にマスメディアは、コマーシャリズムの論理のもと、官製のそれを圧倒する規模で、皇室写真を日常的に流し始めていたという点。第二に、1900-10年代から既に、マスコミの皇室写真は、学校の「御真影」とまったく違った性格を、強く示しつつあったという点だ。儀礼のあいだじゅう、頭を下げることを強制され、見つめることを許されなかった「御真影」とは反対に、民衆から見つめられるべき「消費の対象」として、20世紀はじめのマスコミは、皇室写真を演出し始めていた。換言すると、1900-10年代新聞雑誌による、皇室写真の大量掲載とそのスナップ化・消費財化とは、当時のマスメディアが、自律的・対抗的な形で、天皇制のイデオロギー的再生産に関与し始めたことの、端

的な現れにほかならなかった。

事実、興味ぶかいことに、当時の支配層もまた、この皇室のスナップショットの内に、自身の教化政策と齟齬する性格を明瞭に見抜き、その公開阻止を図っていた。たとえば 1912（明治 45）年のある記者は、皇室取材をめぐる裏話の中でいう。「従来何時も問題になったのは皇族の撮影のことであつた。新聞社の写真部では、行幸啓の時窃に撮影した写真の原板を差押えられたり、又は警察へ引ばって行かれたりして、常に警察官との間に紛糾が絶えなかった」（蛭原 1912:86）。

1900—10 年代に開始された、マスコミによる皇族のスナップ撮影・掲載は、同時代支配層の目にも、天皇家の神格を侵す実践として、明らかに捉えられていた。事実、ある老記者も、当時のマスコミによる皇室のスナップの無断撮影・掲載にかんし、次のごとく回想する。

「〔1910 年代の新聞社は〕とかく至尊〔大正天皇〕の尊厳を傷ける様な御写真を掲げ甚だしきに至っては、陛下の御乗り物を召す瞬間御乗馬なさる瞬間など特殊的なポーズを謹写申上げ、レンズを通して見ていかにも御動作の乱れを思わせる様なものを掲載したので、宮内省では各新聞通信社の謹写団に、〔皇室〕謹写に関する注意心得書き様のものを送り各社亦之れを納得して遵守する事になっていた。この中に、玉歩を運ばせ給う御動作を謹写申上げる事は明瞭に禁じてあるにも拘わらず、各社が往々之を違約して来た」<sup>9</sup>。

もっとも 1911 年 12 月には、行幸啓・御成時のスナップ撮影を、一部許可する旨の通達がマスコミに下りたとも、先の蛭原記者は証言する（蛭原 1912:86）。じっさい、1910 年代前半において、皇室のスナップ撮影が一部解禁されていたことは、1915 年の内務省警保局長が各庁府県長官へと発した通牒にも、確認できるものである（内務省[1929]1986:4）。

だがそれも、ひじょうに限定的な解禁にとどまった。渡辺（1979）、坂本（1998）らの既に指摘するごとく、1916 年の時点でも、皇室のスナップ撮影をめぐる、宮内省と内務省の共通了解は、次のごときものだったからだ。

「天皇・皇后両陛下行幸啓ノ節ハ御馬車ノ場合又皇太子行啓ノ節ハ御馬車若ハ御人力車ノ場合ニ限り輕便写真機ニ依リ不敬ニ渉ラザル様且ツ出来得ル限り目立タザル方法ニテ撮影申上候ハ差止ムベキ限ニ在ラザルモ御徒歩及御乗馬ノ場合ハ……絶対ニ撮影不相成」（小橋 1921）。

1910 年代の政府がマスコミに認めたのは、行幸啓・御成のさいの行列風景の撮影にすぎなかった。天皇・皇族の徒歩の様子や馬上の容姿は、厳禁されたままの状態だった。とく

に、搭乗する馬車の撮影のみ許された天皇・皇后の場合には、そのスナップショットの撮影・公開を、まったく許していないのに等しい。

しかし、マスコミ界の商業主義化・大衆化が急速に進む中、1910年代の新聞雑誌には、天皇の行幸時の立姿や皇太子の歩く様子を撮影した写真もまた、「往々ニシテ」掲載されてゆく。そのたびに、かかる「御写真」の掲載を自粛するよう、各マスコミの社主や重役に注意を促してきたと、ある内務高官はいう（小橋 1921）。

天皇家のスナップ撮影禁止というこの措置を、反転したときに見えてくるのは、官製の肖像写真——天皇家の「威厳ある姿」を演出した写真——のモチーフに準拠する皇室写真のみを、民間に流布させようとする政治企図である。そうしてそれは、この頃の文部省による「御真影」儀礼の全国展開と、パラレルな関係にあっただろう。すなわち「御真影」下賜の対象校の範囲は 1890 年代以降、拡大の一途をたどり、1918 年に至るとタテマエ上、「すべての学校・幼稚園が『御真影』下賜の対象に組み入れ」られることとなる（現実の普及率はまた別であるが）。マスメディアをとおして皇室写真が大量流布し始めたこの時代は、天皇家の「威厳ある」肖像をとおし、「私学を含むこの国の学校教育を全体として『一視同仁』的に天皇制教化網に仕立てあげる政策」が確立した時代でもあったのだ（佐藤 2004:160）。

だから皇族のプライベートな写真などもまた、政府は管理の対象においていた。たとえば 1900 年、東宮嘉仁と九條節子の婚姻決定時の事例。府内に住む節子の里親は、彼女の「お写真も御幼少の時分にお写しになった物が沢山有りましたけれども」、皇太子との結婚が決まると「悉く御取上げ」になったと語っている（1900 年 5 月 10 日付『大阪毎日新聞』「東宮妃殿下の里親」）。マスメディアへの流出をきらったの措置であったことはうたがいない。しかるに 20 世紀はじめのマスコミは、かかる私的な皇室写真もまた、種々の策を講じ（民間の写真師からネガを入手する、あるいは各宮家と直接交渉するなどして）、数多く流してゆく。また、当時の一部婦人雑誌では既に、皇族の私的領域での様子を撮影した写真も出回っていたのだが、これらの写真撮影にあたっては、宮家関係者をだまして皇族を隠し撮りしたケースも多かった。『婦人画報』の関係者はそう回顧する<sup>10</sup>。20 世紀はじめの新聞雑誌社による世俗的なモチーフの皇室写真の大量流布が、政府の意向にまったく反したものであったこと、それらが新聞雑誌社側の相当のコストのもとに実現されていたものであったことを、ここでは確認しておきたい。

## 2.2. 皇室記事の世俗化・ゴシップ化

同様の事態は、皇室記事のほうでも明らかに見いだされる。天皇家の内情を報じること、マスコミ側が躊躇していた以前の状況は一変し、世俗的な皇室記事が、大量に登場し始めているのである。正月や皇室の佳節にさいし、天皇・皇族の趣味嗜好や日常の様子、幼少時のエピソード、ユーモラスな逸話など、その「人間性」や親しみやすい姿を伝える記事を掲載するのが、1900年代中盤以降の新聞界で慣例化しているのは、その重要な証拠となる。まず、明治天皇の例を見よう。

「今上陛下〔明治天皇〕には御政務の御暇をもて時折さまざまなる御手細工など遊ばさることなるが去る年の事なりザボンの大きなるを御園より採りて献上したるに陛下には見事なるものなりとて御手づから小刀を執り其三分の一ばかりなる所を横に截たせ給い実を抜きて空虚となし…乾し干かせ其上にいと巧なる蒔絵などし給いて煙草入にせよとて田中〔光顕〕宮相に賜りたるが陛下は…この手細工を興あることに思召し今一度ザボンよりも大きなるものを煙草入にせば面白からん南瓜の大きく熟せるを奉れとありければ近侍のものは畏まりて稀に大きやかなる南瓜を奉れば陛下はこれよけんと仰せあり直にザボンの時の如く細工し給いて…御居間の前なる御椽側に麻もて釣らせられけるが折柄霖雨の時季とて雨降りつづき南瓜は乾かんようになって徒に腐れ出でたるが陛下は斯くとも気付かせ給わず長雨のつれづれに御椽近く出で給い雨の脚を御覧せられける折しも腐れに腐れる南瓜は御膝下近く落ち砕けて御衣のあたりなど汚しまいらせしを…陛下には大きなる声してカラカラと打ち笑わせ給う」（1907年11月3日付『東京朝日新聞』「稀有の御笑声」）。

「陛下〔明治天皇〕は御幼少の時から至極御活発の方にて沢山の玩具の中にも殊に木馬を好ませ給い、近侍の者にそれを曳かせ御自身に打跨ってハイハイドウドウと御廊下を走り廻って御戯れあそばしたとの事である…尚御幼少の頃の御活発なことを承るに、お側にある玩具を時としては片端より御簾の外に投げ出し投げ棄てて面白がらせ給う、お附きのものが密とこれを取り下げて新しい玩具をお目に掛けると又同じく投げ出し給う御無邪気さにお附きの者も思わず密と笑を含む事もあったという」（1911年1月1日付『大阪朝日新聞』「御幼稚遊び」）。

「陛下の御趣味は頗る広く刀剣、書画、文学其他の御造詣の深き驚くべき程にて殊に刀剣の御蒐集御熱心にて…時折御刀掛を召し親しく御手入れ等相成るが何よりの御楽み…、敷島の道には今もなお御製一日優に二三十首にも達する事あるも高崎正風御歌所長の御注意

により別に御製の時間等の御定めなく毎に御手帳と鉛筆を御携帯相成り何事にでも御感に入れば直ちに優雅なる三十一文字に御綴りあり…」(1912年1月1日付『大阪毎日新聞』「聖徳広大」)。

続いて、地久節(皇后誕生日)にさいした、美子皇后の記事。

「▲雲上的一天 皇后陛下日常の御起居を、さる近侍の人より承りたるままに謹記せむ…朝の御膳は大抵は牛乳、スープにパンを例とせさせ給えど、其の後にて多くは焦米の煮汁とも申すべき湯——即ち薄き粥——を一寸したるお漬物にて召さるるが常にして…御昼餐は和洋折衷が本則にて、必ず数品の御洋食交りたり、されど陛下は非常に四季折々の野菜物を好ませられて、…松茸や、千枚漬、スグキ、奈良漬等は最も御口に合わせらるるなりと、洋食よりもかかるものを好みて召させらるるは、矢張り御故郷なる京都の御習慣に因らせ給うが故なるべしと承わる…五六時の間に御夕食あり夕食は必ず皇上〔明治天皇〕と御一緒なり、御料理は汁物二三品…、かくて此の俣に一日の御物語より御歌語りなどあらせられて、九時より十時の間に御寝あらせたまうとか…▽皇后陛下と皇孫殿下 沼津御滞在中の御事とかや皇后陛下は…皇孫殿下がたの御出でになるを何よりの御楽み御慰みとしてあらせられけりされば殿下がたも非常に御なづき遊ばされて『おばあ様おばあ様』と仰せられ寸時も御傍をを離れさせ給わず或日の如きは殿下がたが御庭を彼方此方と『おばあ様こちらです』『おばあ様あちらへ……』などと無理に御引廻しになりしかば陛下も其の時はさも思わざりしが夜に入って痛く疲れさせ給いし事ありきと 又同じ折の事なり一日〔ある日〕皇孫殿下が御自分で見事なる御菓子を紙に包み陛下の御傍に成らせられて『これはおいしい御菓子でございますからおばあ様に献上致しますよ』と紅葉なす両手にて御差上げになりしかば陛下は『それは御親切どうもありがとう』と仰せられて御座下に置かせられぬ殿下はさも御本懐の有様にて嬉しげに立って御殿や御庭などを遊びめぐり時刻経っていざ御還りとなれば再び陛下の御前に成らせられて御挨拶ありその時先に奉られたる御菓子のあるを御覧じて御腹の空きたる為めにもあらむ『おばあ様、此れは私が頂いて帰ります』とサッサと御持ち帰りになりし時には 陛下におかせられても覚えず声を出していたく笑い興ぜさせ給いしとぞ…」(1911年5月28日付『東京朝日新聞』「地久節御祝宴」)。

マスコミが皇族のファッションに注視し始めたのも、この頃のことだ。見出しのみ引いておくと、「運動衣の迪宮殿下」(1908年10月5日付『讀賣新聞』)。「背広服の東宮殿下」(1911年11月18日付『東京朝日新聞』)。「総裁宮は純白、妃殿下は水色〔の服装〕」(1915年6月16日付『大阪朝日新聞』)。「〔允子〕内親王殿下の御平生 お召物は地味な縞物をお

好み」(1915年11月11日付『讀賣新聞』婦人付録)。「青磁色の御洋装麗しく皇后陛下文  
展行啓」(1917年10月30日付『讀賣新聞』婦人付録)。「皇后の宮 青磁色の御装にて躑  
躑の花燃ゆる日比谷に」(1918年5月5日付『讀賣新聞』婦人付録)。

1900-10年代には、ゴシップめいた皇室記事や、官製の国体イデオロギーを茶化した記  
事も、新聞雑誌にしばしば登場する。皇族の婚姻や妊娠をめぐる憶測記事、天皇の身近に  
仕える女官にかんする報道、みずからを天皇に擬し巢鴨の精神病院から「勅語」を濫発し  
た、あの「芦原帝」の訪問記などがそうである。内務省から掲載差止命令や発禁処分をう  
けるほど、極端に卑俗な皇室記事も、既にこの頃から現れていた(齋藤[1932]1980:179;内  
務省[1916]1996:56-69)。いくつか例示しておきたい。

「[1916年11月3日、内務省警保局長から地方長官宛電報案] 近来新聞紙ニ一条朝子姫ハ  
東宮妃ニ立チ給フベキ姫君ナリトノ趣旨ノ記事ヲ掲載スルモノアリ右ハ全ク根拠ナキ風説  
ニシテ妄リニカカル記事ヲ掲載スルハ不謹慎甚ダシキモノニ付貴管下新聞紙及雑誌ニ対シ  
斯ノ該記事ヲ掲載セザル様懇諭相成度依命」(内務省[1916]1996:56)。

「昨紙の本欄に掲載した『自然に備わった品位』に於いて、皇太子妃に立ち給うべき御方  
として、公爵は一条実輝氏三女朝子姫の為人と平生とを報道いたしました、該記事は事  
実全く無根の由に承り及びました。特に其の筋の御注意もありましたので謹んで該記事の  
全部を取消します」(1916年11月4日付『讀賣新聞』婦人付録「一条朝子姫の事」)。

「名も『初花の内侍』と謡われて宮中三千の佳嬪中に特異った名花の誉を高らしめた…花  
子嬢は去年の秋永のお暇を賜りて麴町区元園町の自邸に引籠った、それに就ては種々の噂  
が伝播った、去る止み難き事情あつて世を捨小舟の寄辺なく既に或る尼寺に身を寄せたと  
も…然るに巷評は突如として花子嬢は旧臘免官になった石山前侍従とは歌の友垣なりし関  
係から屢々玉章の往復に人目を忍ぶ仲となり、やがてそれが為めの御暇と伝うるに至った、  
…その初花の一株に纏綿わる恋の綾糸、この物語は数奇の彼女の生立より始まって恋に燃  
え恋に醒めたる彼女今日の境涯に終る…」(1918年1月28日付『国民新聞』「恋より覚め  
し初花内侍(一)」)

「東京諸新聞の司法記者十三名は廿四日午後打連れて同院〔巢鴨病院〕を問い…院内を隈  
なく視察したり…有名たる芦原〔金次郎〕將軍は今や新聞記者の大襲来を探知し手ぐすね  
引て待構うる 折しも一向は来れり 將軍は古代武人の服装にて月琴を抱え『新聞記者待  
て』と叫びざま仁王立して新聞記者が姦通記事ばかり書いているを叱付けて北条時宗の英  
仏条約を知っているか馬鹿メと云う…將軍は一記者に向い露国皇帝への使者を命じたり

奉書紙に記せる宸翰には『巢鴨病院へ金五十億萬円を相納むべき事 芦原金帝より露国皇帝へ』と記されぬ」（1907年11月26日付『国民新聞』「新聞記者一行巢鴨病院視察」）。

この時代に進展した、皇室記事の世俗化のもう一つの局面として注目されるのが、「口語体の登場」である。当時の報知新聞記者、鈴木茂三郎の回想から引くと、「〔新聞界で〕宮廷記事を、文語体から口語体に始めて書いたのは〔報知〕社会部の座間勝平であったが、不敬だというのでずいぶん攻撃の投書があった」（鈴木[1958]1970:75）。大正初期のことだという。じっさい、本論の調査対象8紙でも、1910年代初頭から、口語体で書かれた皇室記事が多数現れ始めている。いうまでもなく、皇室記事における口語調の普及というこの事態は、マスコミの創出する皇室関連の言説が、その形式的側面でも、国体論との隔絶をふかめてゆくことを何より意味していた。まただからこそ、報知新聞社のこの改革は、当時の一部の人々から、「不敬」な行ないとして非難されたのではあった。

それでは同時代政府の目に、かかる皇室記事の世俗化の急速な進展は、いかに映っていたか。

皇室記事にたいする取締規定が、《マスメディア関連法の中》に、はじめて明記されたのは、1897年の新聞紙条例改定をもつてのことである。「皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆」する論説を掲載した媒体の発行人・編集人・印刷人は禁固刑・罰金刑に処する旨が、このとき同条例に追記されるのだ。この罰則規定とはそして、1909年制定の新聞紙法第42条にも、ほぼそのまま引き継がれると、爾来、皇室記事を拘束する大きな足枷として、昭和の終戦まで機能し続けてゆく。すなわち、1900-10年代とは、皇室記事が民心にもつ影響力を、政府の側が明瞭に認知し、かつ天皇家の神格を侵犯する記事を許容しないという態度を鮮明としたという点でも、重要な契機をなしていたということだ（内務省[1925]1991:25;内川1989:32）。

それゆえ1900-10年代の政府は、現今拡大しつつある皇室記事の世俗化傾向にたいし、ひじょうに強い警戒と懸念を懐いていた。このことは、1900-10年代の宮内省が、宮廷内部の情報流出にたいし厳格な統制をしいていた事実にも明確だ。「秘密主義」とあだ名された、当時の同省による皇室情報統制の徹底振りは、後に見る昭和初期の状況に比しても、格段に厳しいものだった。たとえばあるベテランの社会部記者は、「この時代〔1900年代〕の宮内官といえ、新聞記者を蛇蝎の如く嫌った」（小野[1929]1993:36）と、1929年に発表した文章中で回想する。事実、皇室の重要なイベント時においてすら、この秘密主義が貫徹されていたという点で、この頃と20年代の宮内省のマスコミ応対とは、性格をまったく異

にする。別の記者によるならば、1901 年、「青山御所で今上天皇〔昭和天皇〕御誕生の時は、各社の記者が御所の門を入ると追い出されて、門外で幾日も発表を待たねばならなかった。現在の皇后陛下第一回の御出産の時〔1925 年 12 月〕はそれでも門内供待までははいれることとなって、大分進歩したと言われたものである」（御手洗 1952:109）。

わけでも 1900－10 年代の宮内省が統制の中心に据えていたのが、天皇・皇族の趣味や日常生活の模様など、皇室の世俗的な情報だった。この点については、先の蛭原記者による皇室取材の裏話（1912 年）に詳しい。

「最近の新聞紙に於ては、その宮廷記事位月並を極めたものはあるまい。米国風の新聞製造法が滔々として我が新聞界を風靡せる今日、何んの記事でも皆面白く人目を牽くようにと努めているものの、宮廷記事のみは何うにも慙うにも目先を変えようがないのに困っている。…先ず材料の取り方について苦心する、…雲上の消息、皇族方の御平生、御趣味というような材料になると、皆な〔宮内省の〕係りの人から聞くより外に道はない。その聞く事が容易でない。顔を憶えぬ中は何れも先づ面談を避ける。少し馴染みになって話を聞くことになっても、誰れでも既に承知しているていどの事しか話さぬ。若し偶にこれと思うものを聞き得て早速新聞に載せようとする、談話者の名前を出しては不可ぬとか、記事は十二分に敬語を挿んで書けとか、六ヶ敷い注文が出る…。記事の新聞に現われた後その人に逢うと、屹度『御』の字をもっと入れねば不可ぬという。…今の所で宮廷記事が殆ど総てこの〔宮内官からの〕『聞書き』である。他の記事の場合のように実際にその事柄を『見て書く』ことは甚だ少いのである」（蛭原 1912:84-85）。

発禁等、目だった形では現れていないものの、天皇・皇族の「御平生」や「御趣味」など、世俗的な皇室情報の掲載にあたっては、取材の時点で相当の制約がマスコミにくわえられていた。しかもそうした記事の執筆にあたっては、敬語表現の過剰な要求など、皇室の尊厳を決して冒さぬよう、宮内官がしつこく迫ってくると、蛭原は証言する。天皇家の神格化というイデオロギー政策が、宮内省の「秘密主義」の背景にもはたらいていたことは、ここに明瞭であるだろう。天皇家の日常や趣味を伝える報道は、それが肯定的な内容である限り、新聞紙条例・新聞紙法に抵触するとは言いがたく、当時の内務省にも処分しづらいものだった。したがって、皇室報道の情報源たる宮内省が、宮廷の情報統制を徹底することで、天皇・皇族の世俗的な部分が、容易に報道され難い状況を創出していたのである。

但し、宮内省の秘密主義の「被害者」としてのみ自身を定義する、当時のマスコミ関係



者の言説は、多少割り引いて捉える必要がある。既に見たごとく、1900-10年代のマスメディアは、以上のような厳格な統制にもかかわらず、皇室記事の世俗化を急激に進め、支配層を大きく動揺させた存在でもあったからだ。先の蛭原記者はいう。「外国の皇室、皇族は可なりに新聞の種となる。そは高貴の御方自身頗る自由な行動を取らるるからである。…皇族方の訴訟から艶話、駆け落ちまで、屢々新聞紙上の材料となる。…こは勿論冗談ではあるが、我が高貴の方々の御出先で少し御馬鹿げたことでも遊ばして呉ればなどと記者仲間では話し合うこともある」（蛭原 1912:86）。だから宮内省側の厳格な情報統制とは、同時代政府の神格化政策の反映であると同時に、世俗的な皇室記事を強く欲し始めた、マスコミ側の動向にたいする支配層側の警戒心の現れとしても、解釈されるべきものだった。

### 2.3. 皇室観の世俗化の進展

以上概観したように、1900-10年代のマスコミによる皇室報道は、量的増大を遂げると同時に、消費財化・世俗化傾向を色こくし、皇室の神格化をめざす政府のイデオロギー政策との対立をふかめてゆく。大衆天皇制下のありようへと、それは急速に近づき始めていたといつてよい。

多大な労力のもと、政府の意向に反してまで、天皇家の世俗的な部分を好んで表象し、あるいは「消費の対象」としてかれらを積極的に位置づけてゆく、マスメディアのかかる新機軸とはそして、読者たる民衆側に生じた皇室観の変容と、明瞭に連動した事象であった。すなわち同時代の都市民衆のあいだには、天皇家の人々を、崇拜の対象でなく親しみの対象として捉えてゆく眼差し、もしくはスターとして憧憬・「消費」してゆく対抗的な実践が、確かな拡大を見せていた。結論的に言うならば、1900-10年代の皇室報道上に生じた世俗化現象とは、かかる消費者側の新しい皇室観に、マスメディアが商業主義の論理にしたがい敏感に呼応した結果としてあった。

この頃の都市民衆の皇室観に生じた変容を、具体的に確認してゆこう。はじめに、一同時代人による王権論から参照したい。留学先のイギリスで、王室と民衆のモダンで近い関係性——18世紀後半、ジョージ三世の治世から同国で結ばれ続けてきたそれ（Cannadine 1983=1992; Colley 1992=2000）——を実見した経験を持つ、稀少な日本人のそれである。帰国後のかれは、20世紀はじめの天皇制をとり巻く状況を、いかに把握していたか。

「皇室は神の集合にあらず。近づき易く親しみ易くして我等の同情に訴えて敬愛の念を得るべし。夫が一番堅固なる方法也。夫が一番長持のする方法也。政府及び宮内官吏の遣口もし当を失すれば皇室は愈重かるべし而して同時に愈臣民のハートより離れ去るべし」(夏目 1966:698)。

明治が終る一カ月ほど前の 1912 年 6 月 10 日に、夏目漱石の書いた日記である。この短い王権論が書かれた経緯を少しく説明しておきたい。この日の午前には、皇后や皇太子を始めとした天皇家の人々の出席のもと、靖国神社で春季能楽が開催されている(天皇は欠席)。漱石はこの行啓能への陪席を許された、多くの臣民の内の一人であった。東京朝日新聞社の取材員として、出席したものと推定される。このときかれは、参加者らの「不敬」な所作を数多く目撃し、憤るとともに驚いて、日記にその模様を列挙する。それが、先の引用の前半部をなしている。「陛下殿下の態度謹慎にして最も敬愛に価す。之に反して陪覧の臣民共は誠に無識無礼なり。(一) 着席後恰も見世物のごとく陛下殿下の顔をじろじろ見る。(二) 演奏中若くは演能後妄に席を離れて雑沓を醸す。而して皇族方は静粛に椅子に倚る。…(三) 陛下殿下皆静粛に見能あるに臣民共しかも殿下陛下の席を去る咫尺の所にて高声に談笑す」(夏目 1966:697)。

この事態を目撃した漱石は、皇室を「神の集合」としておしつける、同時代政府のイデオロギー政策の実効性に、大きな疑いを表明する。それは既に、天皇家から「臣民のハート」を遠ざける施策となりつつある。「恰も見世物のごとく陛下殿下の顔をじろじろ見る」ような態度が、臣民側の皇室観の現状をなしているのだから。むしろ、民衆と皇室の関係性を、「近づき易く親しみ易」い、英国型のそれへと構築し直すことこそ、今後の天皇制が「一番長持」する政策であるとかれはいう。漱石自身は天皇家への敬意をふかくもっていたものの、自分のような天皇家への態度が、一般の人々においては希薄化しつつあるという実感を、かれは同時に懷いていた(松尾 1974;伊豆 1989)。

はたして政府は、「当を失」し続けてゆく。すなわち政府による天皇家の神格化・絶対化推進策は、この 1900-10 年代当時において、さらなる展開を見せてゆく<sup>11</sup>。冒頭にもおいた事実である。家族国家観という比較的柔らかなバリエーションを含みながらも、総体的に見るならば、1890 年代来の、天皇家の神格化・絶対化推進という路線が、そこではヨリ徹底されていたといってよい。皇室報道の世俗化抑制に向けての応対にも、その一端は看取されることだろう。漱石にしたがえば、それは皇室を「愈重」くする施策——皇室からの民心の乖離をいっそう拡大し、天皇制の崩壊を招きかねない、無謀な所行ではあった。

無論、この 1900-10 年代にも、その以降にも、天皇制は存続し続ける。民心と政府の絶対主義的なイデオロギー政策が、現今乖離しつつあるという、漱石の見立てははずれていたかのごとくである。しかるに漱石の見いだした、「臣民のハート」と政府のイデオロギー政策の乖離という事象は、モダン化する都市世界を中心に、確かなる拡大を見せていた。たとえば当時、慶応義塾の学生だった獅子文六が、「明治末期の科学精神は、今〔1968 年〕の人が考えるより、ずっと高く」、「多少知識のある人」は、「天皇が現人神」であるとは信じていなかったと証言するように（獅子〔1968〕1969:471）。じっさいインテリ・亜インテリ層のあいだで、《アンチ皇国史観》という意味あいのもと、生物進化論関連の啓蒙書が流行を見せるのも、1900-10 年代をその契機にもっていた（右田 2003）。

とはいえ強調しておく、当時の都市世界に生じた、民心と神格化政策との乖離とは、知識人層にかぎられない、ヨリ広範な事象としてあった。そうしてこの点を最も端的に示すのはやはり、天皇・皇族をめぐる下世話なゴシップが、この頃の都市部で頻繁に流布している事実であるだろう。三田村鳶魚の日記から、東京の事例を引いてみる。

「〔1916 年 7 月 21 日〕陛下傳粉〔白粉のつくこと〕の噂とりどりにて、行幸の度毎に、市街の人口忙し。○夜井上薫村氏ニ往ク、〔李氏への女王の〕降嫁ニツキ各宮家ニ同等競争ノ姿ナリ、李氏家産ハ頗ル夥ナリトカ」（三田村 1977:248）。

管見では、天皇家をめぐる猥談の流行の嚆矢もまた、20 世紀はじめ、明治後期の都市部市民の内に求められる（松島 1956;金子 1966）。鳶魚の言う「傳粉の噂」も、おそらくはこの類に属したものであろう。ここで着目されるのが、王室のゴシップや猥談の流布という同じ事象が、革命直前のフランスにも広く見られたという事実である。すなわち 18 世紀後半のパリを中心とする大都市では、世俗化という巨視的趨勢を背景の一つとしながら、ブルボン家にまつわる「悪しき言説」が、検閲や警察取締をかいくぐって、大量に氾濫し始める。「王に敵対的な、王の権威とともにその人格を非難することば」（Chartier1991=1994:173）。あるいは王室にまつわる「ポルノ的なパンフレットやシャンソンや版画」などである（松浦 2002:191）。わけても王室のポルノグラフィの流行にかんしては、王の聖性にたいする信仰が、被治者の側で崩壊を遂げつつあったこと、「エリートよりかなり下のレベルで、〔王のイメージの〕『世俗化』（＝『脱神聖化』*désacralisation*）<sup>ママ</sup>が起こっていた」ことの、ひじょうに重要な徴候をなしていた（Darnton1982=2000:263-5; 松浦 2002）。

近代日本の場合にも、皇室をめぐる猥談とは多くの場合、天皇崇拝を強権的におしつけ

られた民衆が、天皇家の「人間性」を暴露しあい、確認しあう、きわめて対抗的な実践として存在した。そのような対抗的性格はそして、昭和の終戦に至るまで、巷間流れる天皇家の猥談の内に、一貫して継承され続けてゆく<sup>12</sup>。その意味で、1900-10年代に生じた天皇家の猥談の流行現象は、フランスと同じく、政府の神格化政策にたいする反発が、近代化の進展——世俗化という普遍的動向にもとづいて、(非インテリ層を含む)当時の都市民衆の中に強まりつつあったことの、重要な証左に据えてよい。

しかるに、20世紀はじめの日本社会に生じた皇室観の世俗化は、アンシャンレジーム下のそれとは、きわめて大きな相違点をもっている。それが、天皇家・天皇制そのものにたいする反発拡大の徴候ではなくて、被治者の側が、天皇家を親しみの対象、「スター」と捉える独自の皇室観のもと、王権を能動的に支持し始めたことを意味した点である。この事実にかんしては、金子光晴の回想がよく立証してくれる。明治末の東京市民の皇室観にまつわるそれである。

「K男爵の夫人は…不敬になるような天皇の日常の生活の噂を、出入りの者にまできかせた。しもじもの連中は、からだを耳にしてそれをきき、鬼の首でもとったようにそれを知人、友人に吹聴した。だいたい、しもがかった噂であるが、大衆は、そういうものをたいへん好んだ。そしてそれによって天皇族をうとんずるところか、いよいよ親しみを増すのであった。あまりにへだたった、神ごとのような天皇一家の生活が、じぶんたちとおなじ人間のレベルにあるものだということで、ほっとするのであった」(金子 1966:20-1)。

かくのごとく、明治後半期における天皇家をめぐる猥談の流行とは、官製のイデオロギーにたいする反発の現れという以上に、皇室にたいする親近感・シンパシーの拡大の徴候としての意味あいを、ヨリ強くもっていた。じじつ、1900-10年代に流布した、天皇や皇后をめぐる猥談が、多分にそうした意味あいを有していたことは、金子(1966)のみならず、松島(1956)、徳富(1985-86)などの資料・論考にも示される。

だから20世紀前半日本の場合、王権をめぐる「悪しき言説」のバリエーションの内には、「天ちゃん」という愛称の普及なども、含まれてゆくこととなる。天皇にたいし親しみをこめてこのように呼ぶしかたが、東京の民衆のあいだで流行し始めたのも、明治の終りのことだった(獅子[1968]1969:475;鶴見[1963]1991:413-4)。さらにいうと、この「天ちゃん」の類似種も既に、1910年代前後から出回り始めていたようだ。たとえば当時の内田百閒が、迪宮(みちのみや)裕仁を「みっちゃん」、淳宮(あつのみや)雍仁を「あっちゃん」と、仲間内でひそかに呼び習わしていたように(内田[1950]1972: 158-159)。

20 世紀はじめの都市民衆の皇室観に生じた質的変容を捉える上では、「悪しき言説」の普及にくわえ、次の事実も興味ぶかい。「宮内省御用達」のごとき、皇室にまつわる諸記号が、新聞雑誌の広告中に好んで用いられている事実である（山本 1990）。1901 年、皇室記号を用いたマスコミ広告にたいする「嚴重取締」指示（「商品其ノ他ニ『帝室御用』等ノ文字使用ノ件」）を、内務大臣が訓令として出している事実は、皇室を民衆の模倣の対象として提示する手法が、この頃の企業間に相当なる流行を見せ始めていたことを、よく物語っているだろう（内務省[1929]1986:165）。

「宮内省御用 恵比寿ビール 例年之通御年玉用として多数の御用被仰付度」（1901 年 1 月 2 日付『讀賣新聞』広告）。

「閑院宮若宮殿下御用品 特許鞍形衛生便器 出産祝の進物等に最も適當」（1908 年 3 月 5 日付『讀賣新聞』広告）。

「夏季衛生飲料は宮内省御用品たるの光栄を担える 三ツ矢サイダー 三ツ矢平野水 三ツ矢ヲレンジ に限ります」（1909 年 8 月 2 日付『萬朝報』広告）。

「ライオン歯磨 東宮殿下賜御買上の光栄」（1910 年 5 月 25 日付『萬朝報』広告）。

わけでも着目されるのが、次のごとき化粧品メーカーによる皇后・宮妃の「濫用」である。

「於東京勸業展覧会 クラブ白粉 畏くも皇后陛下御買上の光栄を賜わる クラブ化粧品製造本舗」（1911 年 4 月 29 日付『萬朝報』広告）。

「光栄謹告 レート化粧料一切はこの度皇后宮職御用命の光栄に浴し弊店一代の面目を辱うせり」（1914 年 11 月 15 日付『讀賣新聞』広告）。

「やんごとなき竹の園生の御方々までクレームレートは年が年中お召し遊ばす レート化粧料本舗」（1915 年 4 月 23 日付『讀賣新聞』広告）。

「閑院宮妃殿下 クラブ美の素白粉を御嘉納在らせらる」（1915 年 12 月 9 日付『大阪毎日新聞』広告）。

こういう化粧品広告への皇后たちの起用にかんしては、1914 年 9 月、個別に取締令（「化粧品ノ広告ニ関スル件」）が出されている。それだけ、企業側の濫用が目立っていたということだ。「近時化粧品等ノ広告文ニシテ皇后陛下侍女ヲ諭サセ給ウ云々等陛下ノ御言葉ヲ利用シ又ハ宮中女官長局ノ図等ヲ掲載セルモノ有之候所右ハ…不穩当ノモノト被認候ニ付貴管下新聞雑誌發行人広告取次業者及広告依頼人等ニ対シ右ノ如キ広告ヲ掲載セシメザル様

御注意相成度」(内務省[1929]1986:165)。

天皇家(とくに皇后や宮妃たち)が、臣民にとっての、憧憬・模倣の対象として確立し始めていたこと。かかる可能性を、上記の事実は強く示唆している。そうしてこの可能性を裏づけるのが次の点——化粧品広告にあっては、帝国劇場の女優たちもまた、広告塔としてしばしば登用されていたという点だ(南他 1965:164)。「レート化粧品の平尾賛平商店は、1914年…秋ごろから帝劇女優・河村菊枝や松井須磨子などの談話を写真入りで掲載し、その威光効果を利用した広告を出すなど、新機軸を打ち出している」(内川編 1976:211)。

あるいは、1900年代中頃に、「妃殿下巻」という髪形が流行している事実<sup>13</sup>。これなども、20世紀初頭の皇后・妃たちが、(企業の戦略とあいまって)一般女性の憧れ・模倣の対象に据えられ始めていたことの、証左の一つには挙げられよう。換言すると、大衆社会状況の初期的形成にともなって、Morinのいう「スター」——「大衆文化の抱く深い憧憬を体現」する「私生活レベルの英雄」(Morin1984=1990:544)としても、天皇家が社会的に位置づけられ始めていたことを、上記の諸事実は示している。

そうして、近代化・大衆社会化の進展と連動しながら登場したこの類の眼差し——皇室を親しみの対象・スターと捉える世俗的な眼差しとは無論、天皇その人にも向けられた。さいど獅子文六の言葉を引いてみる。

「今の世の中では、想像もつかぬことだが、[明治末の頃には]すべての日本人が、天皇——明治天皇に対して、忠誠と愛情を、ささげてたのである。無論、明治政府は、天皇をアイドルとして、祭り上げてきたが、《その感化ばかりでなく、明治天皇を好きという感情も、国民の中にあつた》。天皇だから有難いというよりも、明治天皇その人に、すっかり推服してたのである。やはり、明治という苦難の時代を、共に生き、共に成功したという意識が、私の母あたりの年齢の日本人には、特に強かったのだろう」(獅子[1968]1969:471)。

「明治天皇を好きという感情」は、明治後半を生きた多くの人々にたいし、確かにあてはまるものだ。「明治生れは、大雑把に言うと、天皇が好きだった」というのは、先の金子光晴の文章の、書き出しの部分である(金子 1966:20)。そうして明治人の懐くこの天皇への愛情は、(1927年の『明治大帝』人気、あるいは1957年の新東宝映画『明治天皇と日露大戦争』の「老人」人気のように<sup>14</sup>)明治という元号を越えて持続して、天皇制を下からささえる、大きな柱となり続けてゆく。1915(大正4)年、東京市内の高等女学校で実施された、「すきな人」にかんするアンケート調査の中で、全回答者(636名)中、30人の女学

生が「明治天皇」を挙げているのも、その端的な証左の一つとなるだろう（松濤 1915）。

1885（明治 18）年生の野上彌生子の日記なども、明治人の懷いた、「大帝」への愛情のふかさと持続性をよく物語る。「〔1929 年 11 月 3 日〕明治天皇の時代の天長節をおもい出させるような美しい秋晴である」（野上 1986-91:第二巻:479）。「〔1943 年 11 月 3 日〕今日は明治節、明治時代に生れたものは、この日には特別な思い出がある。明治節というよりつい天長節とってしまう」（野上 1986-91:第八巻:157）。「〔1944 年 11 月 3 日〕明治節というより天長節といった方が親しみのあるこの日に、雨がふるのは珍しい」（野上 1986-91:第八巻:442）。

付言すると、11 月 3 日（明治天皇の誕生日）に雨が降らないというのは、明治天皇伝説を構成する、有名な迷信の一つである（福富 1992:115）。11 月のもつ天候上の実質的傾向はあるにせよ、天照大神が太陽神と見られていたことと連関し、あるいは明治初期のマジカルな皇室観の流れをも、一部くんだものだろう。かくのごとく、明治天皇の民衆人気というのは、世俗的な性格のものとして、一義的におかれぬ部分を、他方で含んでいたことも確かである。

とはいえ繰り返し強調しておく、猥談の対象にしばしばおかれるごとき、きわめて俗な、近しい心情によっても、明治後期の天皇人気は多く担保されていた。威厳あるカリスマにたいする「敬慕」の念のみならず、かかる世俗的部分によっても、民衆の「明治天皇を好きという感情」が構成されていた——そもそも《好き》という表現からして世俗的である——ことは注意される。だからあの「晴天伝説」とは、明治人が天皇にたいし懷いたイメージが、文字どおり「陽性」のものであったことを、示唆しているとさえ言えるのだ。下って 1930 年代、右翼テロが頻発していた「暗い時代の」昭和天皇が、「雨男」と一部で噂されていた事実を考慮したとき、この見かたはそう穿ったものではなくなるはずだろう（内務省[1928-44]1981-82:第 85 号:144）。

さらに大正期に至ると、天皇にたいする人々の心性、もしくはマスメディアの扱いは、いっそう軽く、「明るく」なってゆく。たとえば大正初期において、天皇のスナップが、明治後期のそれをはるかに上回る規模で新聞雑誌に出回ってゆくことは（原 2000）、天皇もまた「消費の対象」として明瞭におかれ始めた、何よりの証左としてあった。第四章にも論じるごとく、明治天皇と比較したとき、大正天皇の社会的イメージとは、軽さ・明るさという部分でも、政治性の希薄さという部分でも、大衆天皇制下の天皇の理想形にヨリ近しく、換言すると、近代社会にヨリ適合的な性格をもっていた。

「明治天皇は、国民に、にらみのきいた天皇だった。それだけ、たよられすぎていたともいえる。大正天皇は、皇太子のときから、とにかく健康もすぐれず、若い天皇の生まれたときは、だれしもみな、日本の前途に心細いおもいをしたものだ。しかし、明治の歯車はまだうごいているので、遺業を手堅くまもっていれば、それでいいとわかってみると、重圧のない天皇のもとで、大正人は、明治になかった、ある明かるさをとりもどしたということにもなる」(金子[1965]1975:53)。

しかるに、南他(1965)や原(2000)なども指摘する、明治天皇と大正天皇のかかる社会的イメージの違いとはあくまでも、程度問題と見るべきだ。それは、1912年の代替わりをはさんで民衆側の天皇観に《質的断絶》が生じたことを、意味するものでは決してない。明治後期から既に、世俗的な愛情・関心のもとに天皇を捉える眼差しが、都市民衆のあいだに拡大していたという先の事実は、両者の連続性をこそ示している(だから質的断絶が求められるとすれば、それは明治前半期と後期の天皇観のあいだにおいてである)。詳しくは第四章に譲るとしても、大正期民衆の懷いた天皇観の軽さ・明るさとは、明治後期に構成された天皇観が、(近代化の進展というマクロな趨勢と連動しながら)発展的に継承されたという側面を多分に含んでいた点を、あらかじめ強調しておきたい。

#### 2.4. マスメディアの役割

以上、20世紀はじめの都市民衆の内に、天皇家を「スター」のごとき存在と捉える眼差しにもとづいて、天皇制を能動的に支持してゆく態度——大衆天皇制下のそれに近似した皇室観が、拡大を見せていた事実を確認した。20世紀はじめのマスコミ界に生じた、皇室報道の世俗化傾向が、読者側の皇室観の変化に呼応した結果であるという先の主張も、ここにあるていど確かなものとなっただろう。

そうして両者の連関性というのは、都市民衆による皇室報道の読解形態の内に、最もよく見いだされることになる。かれらのあいだでは、新聞雑誌の皇室写真・記事の「不敬」な読解を楽しみ、「消費」してゆく態度もまた、ふかく浸潤しつつあったからだ。

はじめに、皇室写真の読解例。1912年、手塚富雄の少年時代の回想から見てみよう。

「新しくとどいた雑誌の口絵に新大元帥〔大正天皇〕の肖像がのっていた。私が家の門口で、ちょうどそこをあけてながめていると、近所の同年の友だちがやってきて、『これはダメなんだ、今度のはとってもダメなんだぞ』と言って、拳でトントンその写真をたたいて



た。突飛や不敬というより、少年らしい率直な関心のあらわれで、…それに皇室への一種の心やすさということもあったかもしれない」(手塚[1951]1981:12)。

続いて徳富蘆花の日記から。

「[1916年10月29日] 新聞の皇后さんの顔が好い。桜井〔同家女中〕に聞くと、去年奈良行啓の折は眼が少し恐かったと云う」(徳富 1985・86:第三巻:419)。

「[1918年1月19日] 久邇宮さんの長女良子ナガコさんが、皇太子のおよめさんにきまった。笑った無邪気な顔が新聞に出て居る。皇室の慶事は我等にも嬉しい」(徳富 1985・86:第四巻:229)。

19世紀後半に見られた、皇室写真へのマジカルな信仰などは、かれらにおいて明らかに後景に退いている。1900-10年代新聞雑誌界での皇室写真の広範な流行をささえた、民衆側の需要のありようとは、皇室写真を娯楽の対象として読み捨ててゆく、大衆天皇制的な性格を、多く含んでいたということだ。20世紀はじめのマスメディアが、政府の意向に反してまで、皇室写真を「消費の対象」として明瞭に位置づけ始めたゆえんも、うたがいなくここにあるだろう。事実、かくのごとき皇室写真の「不敬」な受容形態が、被治者のあいだに拡大しつつあることは、同時代の支配層も明瞭に感知し、対策を講じている。1914年、内務省警保局長による、地方長官会議(=全国知事・警察関係者らによる会議)での指示事項を見ると、

「近来新聞紙其ノ他ノ出版物ニ依リ〔皇室写真が〕世上ニ頒布セラルルノ数漸ク増加セルノ結果不知ノ間往々之ガ取扱ヲ粗略ニシ時ニ或ハ路上ニ散在スルヲ見ルガ如キコトアリ…以テ小学校、小学校々友会、地方青年会、衛生講和会其ノ他多衆会同ノ機会ヲ利用シ市町村長、小学校教員及警察官吏等ヲシテ懇切鄭重ニ一般ノ注意ヲ促サシメ御肖像ヲ掲載シタル新聞紙出版物類ノ取扱ヲ鄭重ニスルノ良風ヲ馴致セラレンコトヲ望ム」(内務省[1936]1996:402)。

天皇家の親しみやすい姿や日常、ゴシップ等を伝える、世俗的な皇室記事もまた、都市民衆の新しい皇室観と、きわめて適合的な性格をもっていた。徳富蘆花の日記から、さいど例示してみよう。

「[1916年11月2日] …新聞〔を読む〕。蛇を手づかみにしたり、数学が出来る裕仁〔昭和天皇〕が少し妬ましくなる」(徳富 1985・86:三巻:430)

「[1917年12月30日] 初花の内侍が宮中を出た、と新聞にある。〔大正天皇の〕お妾さんの一人なんめり。…お節さん〔貞明皇后〕のいびり出しだ」(徳富 1985・86:六巻:170)。

次に、内田百閒による回想。

「〔秩父宮〕殿下はご幼少の御頃、誠におかわゆらしくあらせられさせ給うた。御兄君の今上陛下〔昭和天皇〕とお二人で、青山御所の瑞垣の、奥深くお育ちになったが、御所の表は往来である。朝まだき寒家の子が納豆を売りに来て、…『なっと、なっとう』と貧しき売り声を響かせて通りすぎるのを、金枝玉葉の坊や二人が聞き覚えて、真似をなさった。…御殿の中をお二人が、『なっと、なっとう』と云って廻ってお遊びになる。…そのことが当時の新聞に一寸載ったのを読んで、かねがね両殿下をかわゆく存じ上げ奉った私は、ますますかわゆしくてたまらなかった」（内田[1950]1972: 158-159）。

以上に見いだされるのは、次のような相互作用が、1900-10年代の都市民衆とマスメディアのあいだで構築され始めていたという点である。すなわち新聞雑誌社は、皇室に世俗的な憧憬・関心を強く向け始めた民衆側のニーズに応え、皇室報道の世俗化・消費財化を推進する。そうしてマスコミが大量に流すその世俗的な皇室報道は、蘆花・百閒の事例のごとく、天皇家にたいする憧憬・関心を、読者の内にいっそう増幅させてゆく。まさに大衆天皇制的な機制が、当時の都市世界では既に発現しつつあったといつてよい。

1900-10年代の新聞雑誌社をとり巻いた状況もまた、以上の議論を補完する。

20世紀初頭の新聞の発行部数が、日露戦争をはさんで急激な伸びを示していることは、よく知られる。『大阪毎日新聞』の1日平均発行部数から例示すると、1902年時点で10.1万部だったのが、7年後の1909年には、倍の22.2万部に増えている（毎日2002）。山本武利によるならば、日露戦争最中の1904年の時点で、一日に発行される主要全国紙の総部数は既に100万部を越え、都市部では車夫たちでさえ定期的に新聞を購読するようになっていた（山本1981）。

1910年代にはいっても、新聞界の拡大傾向は衰えを見せていない。たとえば1918年現在で、東京で発行される新聞の1日平均部数は、170万部超にまで達している（内川編1976）。具体的に、朝日系列・毎日系列の部数増大の数値を見ておくと、朝日系のほうは、1910年の27.7万部（二社合計）から1919年には56.4万部（同）。毎日系列では、1911年（同年に『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』は合併）の34.5万部（二社合計）から1919年には87万部（同）と、両社ともに10年で倍以上に部数を伸ばしていた（朝日1990-95:資料編:320;毎日2002:96）。

雑誌界も、事態は殆ど同様だった。1908年時点で、東京市内での発行雑誌の総数は既に400種を数え、「三号雑誌なる熟語も出来」、「月に二十種の…創刊廃刊」が繰り返されると

いう、激しい競争がそこでは展開されていた(1908年6月6-9日付『萬朝報』「雑誌の近状」)。おもだった雑誌の1号平均発行部数を、同記事から確認しておく(東京市内での発行分)、『婦人世界』10万、『実業之日本』7万、『文芸倶楽部』5万、『太陽』3万、『中央公論』1万、『婦人画報』5千超、等々。5千部を超える雑誌はこのほかにも、各分野に続出していて、林立状態となっている。しかもこの数値は東京市内発行分だから、実質の発行数は数倍と見ていいと『萬朝報』記事はいう。わけでも注目されるのは、『婦人世界』であるだろう。別の資料にもとづくならば、この婦人雑誌は、(創刊数年目の)1910年前後で既に、25万部という大部数に達していたと言われている(増田 1967:25;田中 1975:132)。1880年代の代表雑誌である『国民之友』『日本人』の部数が、80年代当時でともに1-2万部でいどであったことからするならば(永嶺 1997:102)、雑誌界の市場拡大は、一目瞭然ではあった。

以上の事実は、民衆の皇室観が構成される上でのきわめて重要な媒体として、マスコミの皇室報道が機能し始めていたという点を、まず意味している。とくにそれは、学校での臣民教育から離れ、なおかつ軍隊教育からも無縁であった、成年女性層において顕著な事象であったことだろう。20世紀はじめの都市世界に生じた、世俗的な皇室観の拡大の裏面には、上記のごときマスメディアの急速な膨張(イデオロギー的影響力の増大)も、はたらいっていたと捉えていい。

同時に重視されるのは、かかる市場拡大と商業主義の擡頭が、各紙(誌)間での激しい競争と、紙面の娯楽化・大衆迎合化を、必然としてともなうものだったという点だ。すなわちこの頃の各新聞雑誌社は、コマーシャリズムにもとづいて、それまでの啓蒙主義的な姿勢から、消費者である民衆本位の姿勢へと、そのスタンスをあらため始めてゆく。社会面の充実・重視、スポーツ欄、家庭婦人欄の登場などに象徴されるごとく、新聞の紙面は漸次、大衆向けの「やわらかく読みやすい」ものへと変貌し、雑誌誌面の内容もまた、「生活に役立ち、親しみやすく、楽しいといったことを武器とし」始めていたように(南他 1965:128; 内川編 1976:195-6)。いうまでもなくそれは、読者側のニーズにたいし俊敏な形で応えてゆく、マスコミ側の大衆迎合的な姿勢が用意されたことを示している。皇室報道の世俗化が、何より読者側の心性変化に求められることは、この点にも傍証されるはずだろう。

雑誌界での皇室写真の流行現象の内に見たごとく、皇室報道の量的増大も、マスメディアが、コマーシャリズムの論理のもと、巨大な需要をもつこのトピックを、積極的に商品

化していった結果にほかならぬ。事実、大手新聞通信社によって、宮内省詰記者のクラブ（千代田倶楽部。後に坂下倶楽部）が結成されたのも、日露戦役の数年後のことだったようだ<sup>15</sup>。この点もまた、当時のマスコミ界がいかに皇室報道を重視し始めていたかを、如実に物語る事実の一つであるだろう。皇室をめぐる情報は既に、大企業による「カルテル」が結ばれるほどの貴重な商品に確立しつつあったのだ。1900-10年代のマスコミが、厳しい情報統制がしかれ文字どおり「聖域」だった当時の宮中の世俗的な情報を、多大な労力を使って報じ始めた（蛭原 1912;ピー・キュー1924）という事実は、ぎゃくにいえば、この時期の日本のマスコミ界にコマーシャリズムがいかに浸透しつつあったかを示す、格好の事例として捉えることも可能である。

マスメディアに力点をおいた場合、1900-10年代の都市世界に生じた、大衆天皇制的な機制の拡大という以上の事態とは、次のようにも換言しうる。それは、新聞雑誌社がコマーシャリズムの論理のもと、消費者の望む皇室像に俊敏な形で対応したことで、政府の絶対主義的な教化政策にたいする民衆側の反感が、天皇家そのものに向うのを回避させていった過程である、と。1911（明治 44）年、大逆事件への政府の対応に憤慨し、一高で「謀叛論」をぶった徳富蘆花が、当時の皇室写真・記事を、最も好んで読んだ知識人の一人であったことは、既に見た。この事実に端的に示されるように、1900-10年代に起こった皇室報道の世俗化・消費財化は、支配層側の神格化プログラムに反発しながらも、「天皇陛下が大好き」<sup>16</sup>だった民衆の心情に、マスコミが明敏に応えた結果として、捉えられるべきものだった。夏目漱石が明治の終りに示した、王権のモダンな再編プログラムとは、「政府及び宮内官吏」の手によってでなく、（漱石自身も属した）同時代の新聞雑誌界によって、《既に》推進され始めていたのである。そうして繰り返し強調するならば、皇室報道をめぐるの、かかるマスメディア側の「対抗的・自律的姿勢」の形成とは、新聞雑誌人の「反体制意識」や「反骨精神」などにもとづくものでは決してなく、消費者側の要請にそうよう、天皇家の商品化を進めてゆくという、商業主義的な動向の帰結として、あくまでも捉えられるべきものだった。以上の諸点を、ここでは確認しておきたい。

## 第二章 戦前期「大衆天皇制」の開花（1920－30年代前半）

本章では、1920年代初頭から30年代前半にかけての時期を概観する。すなわち本章では、大衆天皇制的なイデオロギー的再生産のありようが、都市部でいっそうの拡大を遂げるとともに、地方でも一定ていど広がってゆくプロセスを、巨視的な背景も含めて詳しく考察する予定である。

その前に、20－30年代日本の具体的な社会状況、それから支配層のイデオロギー政策のありようというのを、南他（1965・1987）等にもとづきながら、大つかみにおさえておく。

経済情勢の面から言うと、日本の20－30年代とは、第一次世界大戦後の戦後恐慌（1920年－）と震災恐慌（1923年－）に始まる、ながい不況の時代としてあらわされる。わけでも世界恐慌と連動した昭和恐慌（1930年－）が、日本社会にあたえた衝撃の大きさはよく知られる。都市では失業難が顕在化し、生糸価格・米価の暴落にともなう農村疲弊も著しい。特に農民層にたいしては、東北地方を中心に、悲惨な窮乏状態がみまってしまう。かかる状況の打開策として、政府わけでも陸軍が、大陸と戦争を見いだしたことも周知である。

上記不況の長期持続と労働者階級・農民層の困窮は、労働運動・左翼運動の活発化、他方では超国家主義の胎動の呼び水となってゆく。たとえば1926年の小作争議の発生数は2751件、1935年のそれは6824件。小作農と地主の対立は、ここにピークを迎えている。日本社会主義同盟結成、第1回メーデーは1920年。日本共産党は1922年、労働農民党は1926年にそれぞれ結党されている。1928年の第一回「普選」では、8人の衆議院議員が無産政党から選出されるに至るものの、同年の三・一五事件を契機として、治安維持法（1925年）にもとづく弾圧が本格的に展開。33年には佐野・鍋山声明があり、大量転向の時代を迎えてゆく。民間右翼運動、超国家主義運動にかんしていうと、猷存社は1919年。同年には、「超国家主義の聖典」（久野・鶴見 1956:176）たる北一輝の「日本改造法案大綱」も書かれている。赤化防止団は1922年。国本社は1924年。31年には血盟団、愛郷塾、大日本生産党がつくられる。これら20－30年代の民間右翼運動は、政財界要人にたいするテロ、あるいは軍人と結託したクーデタ計画を濫造し、左翼団体と同様、アノミ的な雰囲気、社会に蔓延させてゆく。

1920－30年代前半の日本社会の状況とは、短期的あるいは事件史的に捉えたとき、かくのごとき停滞的雰囲気と不安定さをその基調とした。しかし、巨視的・文化史的な視点から捉えた場合、20－30年代とは疑いなく、日本が大衆社会・近代社会としての成熟を示し

た時代と位置づけられる。

まず、経済・産業面から見てゆこう。慢性的な不況とあいまって、産業資本・金融資本の整理・合併は、この時期において加速度的に促進されている。わけでも紡績業、製粉業、鉄鋼、電力業、金融業等の重要産業界では、財閥・大企業による寡占化が急速に進められていた。しかも長期的な経済不安と労働者運動の過熱は、金融業界・産業界・政界相互の結びつきを、ヨリ強固なものとする推進力としてもはたらいた。一連の恐慌をつうじ日本の資本主義体制は、さらなる段階へと歩を進めていたといつてよい。産業構造もまた、着実なる近代化を見せている。綿糸・鉄鋼等を中心とした軽重工業が飛躍的に進展し、産業界の中心を占めたのは、この 20－30 年代のことである。かかる産業構造の工業重点化は、工場労働者・サービス業従事者の数が、農林漁業従事者のそれを上回るという、当時の就業構造の変化においても如実ではあった。1930 年の時点で、全作業従事者の 6 割は、前者によって占められるに至っている。そしてこの近代的な就業構造の確立は無論、都市への人口集中の加速を同時に意味するものだった。事実、1920 年から 30 年に至る期間において、日本の都市人口は 500 万人増大し、その増加率は 53%超に上っていた。

その都市部にくらす民衆の暮らしには、階層を問わずモダニズムが浸透してゆく。すなわち 20 年代以降になると、私化的傾向・家庭中心主義にもとづく都市消費文化の担い手には、労働者階級をも含めた広範な層が参画するに至っていた。そこでは、近代的住宅、電化製品、自動車、享乐的消費など、「機能的、大衆的、技術的、多樣的、戸外的な特徴」をもつ米国型の生活様式が、都市民衆の憧憬をその一身に集めてゆく。しかも上記産業・経済構造の近代化は、かれら都市民衆に、この憧れのライフスタイルの部分的な享受を可能とする。すなわちそれは、「大量生産・大量消費の時代」を都市世界にもたらし、「高価だった注文服が安価な既製服になり、ラジオ、蓄音機、カメラ、アイロンなどの耐久消費財も買い易い値段になり、円本や円タクも気軽に利用できる」（南他 1987:68）という状況を市民に用意した。モダンライフをいっとき味わうことは、都市労働者にとってもあるていどまでは可能となっていた。前章冒頭で論及したごとき、大衆のモダンライフを支える諸装置（デパートメントストア、娯楽施設、新聞雑誌等）が、20－30 年代に至り、顧客層の大衆化を一気に図ってゆくのもまた、その重要な現れの一つである。

この都市消費文化の成熟とリンクした私化的傾向の拡大は、その中心的担い手たる「主婦」層の増加という形態をとっても現れる。1900－10 年代の新中間層に登場した、専業主婦という女性の労働形態は、ここに至っていっそうの広まりを見せていた。すなわち「職

業婦人」の激増期として知られる 1920-30 年代は同時に、労働者階級の世帯にも、専業主婦が広く登場した時代としてあった（千本[1990]2003）。『主婦之友』を筆頭とする婦人・家庭雑誌が、広範な女性層をターゲットに据え始めたという事実も、この点を裏書きするものだ。女性を「家／家庭」の内へとかこいこんでゆく社会的圧力は、彼女らの安価・無償労働を要請する産業構造の確立、あるいは、「家庭」を軸とした消費行動にささえられる市場の成長とあいまって、いっそうの高揚を見せていたといつてよい。

モダンなライフスタイルを希求する生活思想は、この頃になると、地方農村にまでも少なからず波及する（板垣 1992;奥井 2004）。無論、農村部の人々にとってそれは、都市労働者以上に実践するにはあまりにも困難な思想としてあった。とはいえ、映画やスポーツ、ラジオなど、都市的な娯楽・文化を望む傾向は、若年層を中心として、農村でも確かな広がりを見せていた。かくして農村部で顕在化した、ライフスタイル上の理念と実態との乖離は、農村出身者の内に、都市への流出志向、あるいは都市にたいする反発・嫉妬をうながしたことで知られている。「夫に対する妻、姑に対する嫁の地位の低い農村の家庭に入り、過重な労働に従事しなければならないことをきらい」、都市へと流出する傾向も、農村女性のあいだには生じていた（板垣 1992:124）。

マスメディア界の拡大化・商業主義化も、著しい。1925 年、ラジオという新メディアの登場とその急激な普及振りも、その一端ではあった。本論に直截的に連関する、新聞雑誌界に限定してその状況をおさえておくと、新聞界では、高速輪転機や輸送用飛行機、電送写真器の導入をはじめ、大量生産の前提となる機械化をいっそう進めてゆく。地方都市・農村での市場獲得も進み、1923 年時点で既に、「東京の新聞は発行部数の約七割を東京以外の地方に出すように」になっていた（南他 1965:121）。

紙面の大衆迎合的色彩も、いっそう強くなってゆく。すなわち新聞各社は、「大量の読者を獲得するために、オピニオン・ジャーナリズムから『社会面』重視の報道と、さらに娯楽性とを中心にしていく」（南他 1965:231）。連載漫画の登場も、その大きな一端ではあった。たとえば 20 年代には、朝日系列での岡本一平による一連の風刺漫画、報知新聞の麻生豊「ノンキナトウサン」（1923 年一）が。30 年代でいうならば、『東京朝日新聞』の横山隆一「養子のフクちゃん」（1936 年一）が、その代表例に挙げられよう。

新聞社によるメディアイベントも、大量の資本投下のもと、以前以上に頻繁かつ賑々しく展開されてゆく。そのカテゴリを列举すると、野球大会を筆頭に、博覧会、自動車競走、体育大会、オリンピック等々（津金澤 1990）。わけでも昭和大礼を筆頭とする、皇室関連の

イベントには、各紙が総力を挙げてとりくんでゆくところとなる。後述に見たい。

雑誌界では、『キング』『講談倶楽部』『婦人倶楽部』『少年倶楽部』等を抱えた講談社が、大衆主義を旗印に、その覇権を握ってゆく。20－30年代雑誌界のマス化の証左として、よく知られる事実である。1935年、農村向けモダン月刊雑誌『家の光』（1925年創刊）が、100万部発行を達成していることもまた、きわめて象徴的な意味を持っている。かかる読者層のさらなる大衆化の進展と並行して、誌上の扇情的な傾向も、いっそう進む。「エロ・グロ・ナンセンス」という時代思潮に呼応したアングラ雑誌が林立し、内務省に「納本せしものに内容を付加し、或は抹消部分を充填して刊行するが如き」確信犯的な違法商法が横行したのも、20－30年代雑誌界の一大特徴ではあった（内務省[1928-44]1981-82;[1931]1988:319）。

以上のごとき、都市大衆消費文化の成熟・拡大は、同時代の支配層の目にとって、都市の病理的側面、退廃的傾向と強く映ってゆく。「癸亥詔書」（1923年）の中で、「浮華放縦ヲ斥ケテ質実剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メ」よと、天皇みずから国体の現時脅かされていることを認め、たしなめたことは、その最たる事例ではあった（橋川 1984）。国体論的世界観と相容れない思想・文化が、民衆の内を席卷しつつあることは、思想運動の昂揚とあいまって、政府の側も強く認識をもっていたといっている。それゆえに、20年代前半の政府は、大胆な形で皇室と民衆の関係性を近いものに構築し直すことを企図してゆく。東宮裕仁の欧州巡遊（1921年3－9月）前後に始まった、「開放政策」がそれである（鈴木 1986;坂本 1998;波多野 1998）。皇太子嘉仁の皇位継承にともなう天皇のカリスマ性の失墜。デモクラシー運動の高揚。第一次世界大戦後における各国王室の崩壊。鈴木（1986）の指摘に従えば、かかる時代状況のもと、「古い国体イデオロギーが危機に瀕していたこと、したがって新たな体制側の国体イデオロギーが形成されなければ天皇統治の正当性は保障され難くなってきたこと」は、20年代前半の多くの支配層の、共通了解となりつつあった。かくて皇室をシンボルとした民衆統治のありようの、モダンで大衆迎合的な再編が、英国王室に範をとりながら、一部支配層によって企図されてゆく（鈴木 1986;近代日本研究会編 1998）。開放政策とは、一次大戦後の政府内に浸潤した、このモダンな改革思想が、対民衆のイデオロギー政策となって結実した部分をさしている。1923年12月の「虎の門事件」を契機として、僅か数年で終焉したものの、確かにそれは、政府みずからの手によって、天皇制のイデオロギー的再生産のありようが、ラディカルな変容へと向う可能性を秘めた運動としてあった。



しかるに、この開放政策期において、従前のイデオロギー政策が放棄されていたわけではまったくない。この点は、強調されてしかるべき点である。すなわち、一次大戦後の国体の動揺という危機意識は、他方で、天皇家の神聖性・絶対性の民衆教化をヨリ徹底して進めてゆく、という方策を、支配層をして同時並行的に選ばしめてゆく。たとえば開放政策の4年前、1917年の「臨時教育会議」の答申中で、中等・高等教育を含めた国体観念の啓蒙推進が謳われ、以降の文部行政の基調の一つをなしてゆくのは、その重要な現れである（山本・今野 1976:456-62;森川 1987:22-3）。

義務教育課程をとおした国体観念の徹底した涵養という施策も、そのまま続けられてゆく。自由教育・近代主義的性格で知られるこの時代の初等教育も、国体イデオロギーの教化装置としての性格を、まったく失してはいなかった。唐澤（1956）によるならば、1918年から尋常小学校で使用が開始された第三期国定教科書の内容の総体的傾向は、1900年代に刊行された第一期国定教科書のそれと比較した場合、「遙かに国家主義的色彩を内に含んでいて」、「近代的内容と同時に、次期ファシズムの教科書の萌芽的なものが並存しているという二重性」をなしていた。1930年代に刊行された「四期〔国定〕教科書の特色である神国観念も特にこの〔第三期〕教科書から明らかに教えられて来る」と唐澤富太郎はいう（唐澤 1956:12）。たとえば歴史教科書における、「天の岩戸」「大国主命の国土献上」「八岐の大蛇」「金色の鵄」等の教材の登場など。儀礼と神話、一連の国体論的語彙にもとづいて、天皇家を崇敬する心性の涵養をはかるという部分では、従前の路線が、ヨリ徹底された形で踏襲されていたといっている。

司法省と内務省による取締活動にも、従前の絶対主義的な路線の継承は、ひじょうに強く看取される。たとえば天皇・皇祖皇宗以外の神を祭る宗教団体の活動規制に、不敬罪が発動されたのは、1921年の第一次大本教事件をもってその嚆矢とする。爾来、明治憲法の謳う「信教の自由」の意味あいとは、「不敬」の名のもとに著しく狭められ、他面国家神道は、その実質において、唯一の公認宗教としての色彩を強めてゆく（渡辺 1979;村上 1986）。国家神道体制に、警察・司法機構が本格参入する上での重要な契機をなしたこの事件が、開放政策開始と同じ年に生じていたことは、記憶しておいていい。

開放政策が頓挫した直後の1924年に、半官教化団体・国本社が、司法省・内務省の保守系官僚らによって建てられ、国体観念にもとづく思想善導運動を展開している点、あるいは翌25年に治安維持法が公布されるという周知の事実も着目される（渡辺 1979;橋川 1984）。開放政策頓挫後のこれら一連の動向は、大戦後の国体の危機的状況を、むしろ1890年代以

来の絶対主義的な路線の徹底をつうじて打開しようとする向きが、開放政策期の政府内部にいかに根づよく存在したかを明白に物語る。開放政策の実態を詳細に論じた坂本（1998）も指摘する、この支配層間の思想的分裂ゆえに、20年代前半期政府の実施したイデオロギー政策もまた、二元論的な形をとらざるを得なかった。この時期の、天皇をシンボルとした教化政策の二元的なありようは、開放政策の「目玉」であった皇室報道にたいする諸規制緩和の内にも、明瞭に捉えることが可能なものである。

この開放政策の終焉後、天皇家をシンボルとするイデオロギー統治政策は、従前の神格化路線の推進派によって、もっぱら覇権が握られてゆく。民間右翼思想の活発化、統帥権もしくは軍部大臣武官制を盾とした軍部の「国家改造運動」の展開、恐慌の長期持続ともなう民心動揺、それから満州事変の勃発。かかる時代状況の中、保守派指導者と内務・司法官僚、軍部・在野右翼とが、それぞれの利害関心のもと、天皇家の神格化・絶対化の推進という一点において結ぶことで、天皇をシンボルとする民衆統治政策のありようもまた、20年代後半にその転向時代を迎えていった（渡辺 1979; 鈴木 1986; 荻野 1993）。爾来、民衆への迎合的姿勢は次第に霧消し、天皇家の神聖性・絶対性教化という 1890 年代以来の路線をこそ、政府は徹底化してゆく。

まとめるならば、20－30 年代日本社会には、国体論的世界観と相容れない、モダンな文化・思想が、都市農村の区分を超えて民衆の内に浸潤する。この事態にたいし、政府は、王権の世俗的再編の動きを見せてはゆくものの、結局は十全な対応を施すまでには至らず、最終的には 1890 年代以来のイデオロギー政策へと再びすがってゆく。このような状況のもと、民衆の生活世界の中で天皇制は、どのように発現していたか。ここでも段階的に概観する。

## 1. 1920 年代の状況

20 年代の日本社会わけでも都市世界では、戦後大衆天皇制と、きわめて近似した状況が広がっていた。一部研究によって、既に論及されてきた部分である。ある面でいうと 20 年代の天皇制は、戦後以上に、大衆天皇制の理念型に近しかったとさえ言ってよい。以下で、当時の皇室報道の総体的傾向を、項目ごとにおさえておく。

### 1.1. 「平民主義」の流行

1920年代の新聞雑誌には、昭和天皇そしてかれの弟宮を中心に、皇室の人々が余暇活動（登山・スキー・潮干狩り…）に興じる姿を撮影した写真、家族間の睦まじい風景、動物と戯れる写真など、かれらの親しみやすい姿やその日常を捉えた「平民的」な皇室写真が、戦後と同等かあるいはそれ以上に、掲載されるようになる。その代表的なモチーフを列挙すると、ゴルフ、生物研究、野球など、各種の余暇・趣味活動に興じる様子、夫妻・親子・きょうだいの睦まじい風景、動物と戯れている姿、幼少の皇子たちによる「御遊戯」の模様、「臣民」たちとの親しい交流、私邸内での団欒振り等々。かかる類の皇室写真が、20年代の新聞雑誌には、多数掲載されてゆくのである。

読者の側にも、この平民的なモチーフの皇室写真は、ひじょうに好評だったようだ。川端康成の日記からまず引こう。

「〔1921年6月16日〕終日室居。新聞詳しく読む。…〔久邇宮〕良子女王の潮干狩の写真よし」（川端 1984:544）。

つづいて、1926年の『讀賣新聞』投書記事。

「学習院初等科の帽子取りの遊戯に澄宮〔崇仁〕様が水野錬太郎氏の令息と掴み合って居られる御写真を新聞紙上に見たことがある。我等は其無邪気なる御様子を拝して敬愛に堪えない感激を新たにした」（1926年3月19日付『讀賣新聞』「斬馬劍」）。付記しておく、澄宮の学習院初等科入学は、1922年4月のことである。

そして、20年代の皇室写真の平民主義的な傾向を、何より端的にあらわしているのは、皇族の「笑顔」の写真で、新聞雑誌社が頻繁に公開し始めている事実だろう。1910年代以前において、皇族の微笑む写真が新聞雑誌に公開された事例は、傍系の皇族のそれが散見できるていどのものだった。たいしてこの20年代には、新聞雑誌社のカメラマンの撮影した、（昭和天皇や秩父宮ら）皇室の中心メンバーによる笑顔の「御写真」が、大量に日本社会に流布するところとなる。また、背広や洋服姿の天皇・（男性の）皇族がさかんに写し出されたことも、当時の皇室写真の平民主義的傾向を語る上では、欠くことのできない事実である。とくに20年代の前半においてこの傾向は顕著で、たとえば1921年度の『大阪朝日新聞』では、背広・洋服姿をした男性の皇族の写真が、41枚も掲載されていた（その多くは皇太子裕仁の写真）。

一方、皇室記事においても、平民主義的な傾向は、ひじょうに強く見てとれる。すなわち当時の新聞雑誌は、天皇家の親しみぶかい姿を、まさに「平民」という言葉を濫用しな

がら頻繁に報じてゆく。新聞見出しから例示すると、「平民的でチャーミングな御方〔昭和天皇〕」（1921年9月3日付『東京日日新聞』）、「〔昭和天皇の〕平民的で御勤勉な御生活振り」（1921年11月25日付『大阪朝日新聞』）、「聞くも床しい殿下〔昭和天皇〕の御平民振り」（1922年9月20日付『讀賣新聞』）。

皇族と「臣民」との交流の様子が好んであらわされていったこと、皇族のインタビュー記事が掲載され始めたこと、かれらの「気さくなジョーク」あるいは「ウィットに富んだ発言」がしばしば紹介されていったことなども、この頃の皇室報道の平民主義的傾向をあらわす端的な事象として記される。かくて20年代マスメディアは、一般の民衆（平民）と「等価」な位置に、皇族を好んで引きずり落とすまでに至ってゆく。皇族が「平民的」であるという、この矛盾したレトリックのもつ意味あいには、後に再び触れるとしても、表層的に捉えるならば、天皇家を親しみの対象とおく民衆にとって、最も望ましい報道の出現を、それは意味していたといつてよい。

「殿下〔昭和天皇〕には雨の〔河口〕湖上をモーターボートで鵜島御上陸、湖上を渡る冷氣身にしむ中に昼餐を召させられ珍田〔捨己東宮〕大夫以下随員等の昼食中にツカツカとならせられた、すると…珍田伯はおどろいて『もうお出でになるのでございますか』とお伺いすると『余り早くては君達がこまるからね』と仰せられた 珍田伯は『イヤ差し支えありません』と答え予定より廿分早く…再びモーターボートで対岸長浜へ向かわせられた、…ぬれねづみとなって…〔対岸に〕御上陸、ここから一里廿余町の青木ヶ原の密林を洋傘片手にレインコートを召し先頭に立たせられ精進湖へ向かわせられた、殿下は御予定より早く出発あそばされたので新聞記者団一行は遙に遅れたので『皆はさぞこまっている事であらう』と仰せられたとの事である、また一番足弱の珍田伯を顧みさせられて『ドウダ駕籠にのつては』珍田伯『イヤ大丈夫でございます』殿下『ナカナカ強いね』とお笑いあそばされた 本多侍従は皮のまきゲートルを西園寺式部長から借用して来ていたが殿下にはそれを御覧になり『随分恰好がわるいね』と仰せられる、本多侍従は恐縮して『コレは西園寺八郎から借りて来たのです』と申し上げると殿下『イヤ君が先程から話しているのを聞くと西園寺から借りたのはズボンだったじゃないか』本多侍従『イエ、ゲートルです殿下』『そうだったか 西園寺のズボンでは君にはみちかい筈だからね』一同は思わず殿下の御諧謔にふき出した 漫談の間に道は早く運んで午後四時五分精進湖畔の御宿所精進ホテルに入らせられた」（1922年10月4日付『東京日日新聞』『無恰好だね 本多侍従が借ものの巻ゲートルに摂政宮の御諧謔』）。

「報知新聞が〔1927 年〕九月十一日朝刊第七面に掲載した久邇大宮〔邦彦。香淳皇后の父〕殿下の皇后陛下御慶事に関する談話は我が新聞界に於て皇族方に対してのインタビューの嚆矢として新聞界から注目されたが<sup>1</sup>、これは本文筆者松本米次郎君が御手洗〔辰雄〕社会部長の命に依り、当日赤倉御別邸から急遽御帰京になった久邇大宮殿下をお迎え申し、車中で殿下の御慶事御感想を拝聴し且つ写真をも頂いたものである。

〔以下が松本による本文〕『御慶事の直後に、久邇宮殿下が赤倉からご帰京になる、途中までお迎えして宮様のインタビューだ、新しいレコードを作ってくれ給え』御手洗部長から示されていたプランはこれだった。…久邇宮殿下御帰京時刻は田口駅発午前八時四十三分とわかった、これはあらかじめ長野支局に依頼してあったのが午前六時半に入電を得た、信越本線上野駅初発七時五分までには丁度三十五分間の差がある、スタートは非常に先よかった、この列車は午後零時五分軽井沢駅着、〔久邇宮の乗車する〕上り御召列車は同駅零時十五分発だから軽井沢駅での上下十分間の余裕こそ恵まれた絶好の機会だ。この十分間を逸してはその日の夕刊に間に合わぬ。…車中での五時間を考え抜いたが、その場に望んでみなければどうしようにも仕方がない…。軽井沢駅に入構すると、上りホームには早や御召車がいた、警衛線も張られている、…お祝詞に奉伺した旨を述べると、〔久邇宮家附〕属官は『殿下にはただ今お食事中ですから後刻御都合を伺うから、それまで待たれたい』と、…属官の控所に案内された。…刻々夕刊締切時間が迫る。御心せわしき汽車中に、果して殿下が御引見下さるかどうかがまた心配の種だ。…うるさいと叱られるかもしれぬと思いながらも属官に〔再び〕頼んでみた、…横川駅に近づいた頃、御食事を終えさせられた殿下に拝謁を許され塩賀瀬属官に導かれた、さすがに扉の影にためらわずには居られなかった。…大宮殿下には…まったく御慶事のおよろこびにお寛ぎ遊されさすがしく拝された。写真班の乞うままにいろいろ姿勢をとられ、御質問に対しても直接お言葉を賜う、…恐懼のほかはなかった」<sup>2</sup>。

## 1.2. 「スター化」の進展

20 年代のマスコミはまた、前時代以上に、民衆から「見られる」存在、消費される「スター」として、皇室の人々を演出し始めてもいた。皇室写真においては、スナップショットが既にその主流となっていたし（たとえば、1921 年度『大阪朝日新聞』に掲載された、全 186 枚の皇室写真のうち、実に 170 枚がスナップ写真である）、先に示した「平民的」な

皇室写真・記事の内容というのは、「スター」のそれともひじょうに近いものである。

くわえて興味ぶかいのが、かれらの「容貌」「ファッション」そして「恋愛」に、マスコミがいつその配慮を行なうようになった点だろう。たとえば既述した背広・洋服姿の他に、ゴルフウェアや登山服、さらには水着姿など、さまざまな恰好をした皇族の写真が、20年代の新聞雑誌では、数多く掲載されてゆく。そのキャプションや見出しでも、服装や容貌にかんする記述・賛辞は数多である。記事中でも、昭和天皇が髪型を変えたり口髭を生やしたりしただけでそれが大きく報じられるなど、天皇家の人々の「外見」が、重要なトピックの一つとして扱われた。また、皇族夫妻の「ツーショット」写真が頻繁に公開されたり（川村 2002）、その新婚生活の模様や仲睦まじい様子がしばしば伝えられたりと、皇室内での「恋愛」の風景も、この時期より皇室報道の中心にくわわってゆくのである。

「東宮殿下が欧州御巡遊の時、あのいが栗頭の髪をお伸ばしになるか、どうかはかなり国民の興味をひいたものだ、ナニも殿下のお頭まで、どうのこうのといわなくても良さそうなものだが、我が殿下の一举一動、お姿にしても寸分の隙なくお立派であらせられるようとは、全国民の希望だから仕方がない、ところで殿下は御帰朝になると立派に髪を分けさせられ一層大人び遊ばしたのはみんなの喜びだった さて、ここに新たに国民に報告したいことは、まさか御成婚記念という訳ではあるまいが、今度殿下は口髭を蓄えられることである、…奉仕する芝桜田本郷町の大庭理髪師はにこにこしていう『たいへんな発見をしましたネ、実は二月の二十五日東宮仮御所に参殿しましたところ、殿下は口髭を残して呉れと仰しゃったので、その通りに致しました、…アノお頭は英国型で、お口髭もやはり英国型にお仕立て致すつもりです…いったいお毛深い方でいらっしゃるから四五年の内にはお美事にならせられるでありますよ』（1924年3月4日付『讀賣新聞』「摂政宮口ひげを」）。

「午後二時から三時までが、両殿下〔東宮夫妻〕の御運動時間と定められてあります。お二方ともスポーツには、御技量も御趣味も豊にいらせられ、殊に妃殿下のテニスは、最もお得意であらせられますので、のどかな春光を浴びた御苑内のコートに、お姿を見あげることがございます。…ある日、御苑内の緑のかげにうらうらとかげろうのたつ午後のことでございます。霜降の御乗馬服に中折帽と申す御軽装を遊ばされた東宮様には、…樹々の間を廻って、芝生の小道を御所裏の御馬場へと成らせられようとなりました。その小道の傍のテニスコートには、お帽子からお靴まで純白な中に、真紅のスエーターを召させられた、気高い花の精のような妃の宮様が、三名の女官をお相手に、春の陽をあびて、テニスの御

運動に打興ぜられているのを、御馬上から御覧になって振りむかれると、ラケットを手に遊ばした妃殿下が御微笑のなかに、軽く御挨拶を遊ばされたのを遠くから拝したことがございますが、両殿下でミックス・ダブルの御競技を遊ばされることも、おありになるそうでございます。…御晩餐後和装に改めさせられることもおありになる妃の宮さまは、午後の九時までを、お談話や御読書に、東宮様のお傍でお過しになりますが、…お人も遠ざけられたお二方には、唯お二方だけの、お睦じい世界が現われます。そのときこそ妃の宮様が、御自らお茶のお給仕をまいらせられれば、東宮様からお菓子も進ぜられて、淑ましい妃の宮様のお笑い声も伺えます、時には妃の宮様の妙なるピアノの音ももれて、そのお睦じさをもれ承ったお内儀の老女官などは、…余りにも美しい、人としての両殿下の御愛情に感泣するそうでございます」（「東宮妃殿下の御主婦振り」『主婦之友』第8巻第4号、1924年、93-4頁）。

### 1.3. ゴシップ的傾向の強化

1920年代には、皇室記事のゴシップ的傾向も、さらに強化されている。久邇宮良子の「宮中某重大事件」（1921-22年）、久邇宮朝融の婚約破棄事件（1924年）など、今日のマスコミでも二の足を踏みそうな皇室のゴシップを、当時のマスコミは、オブラートに注意ぶかく包みつつ、好んで報じてゆくのである<sup>3</sup>。宮中某重大事件を特報し続けた『讀賣新聞』の見出しをいくつか例示すると、

「杉浦翁憤慨して辞表を提出す 宮相と道德上の意見衝突 良子女王御学問所をも去る」（1921年1月26日付）。

「昨日の本紙又も発売禁止 汎く世に〔事件を〕慙えて」（1921年2月13日付）。

「喜怒を現わし給わぬ久邇中将の宮 重大事に関した悲しみは良子女王のお耳に入れぬ」（1921年2月13日付）。

「重大事件を発表 適當の機会を見て発表するかも知れぬと宮相の車中談」（1921年5月19日付）。

「痺れの切れる御婚儀問題」（1922年4月4日付）。

「昨日牧野宮相伏見宮を訪う 愈よ実行に移って来た摂政宮の御婚儀問題」（1922年5月30日付）。

皇族の私的な日記や書簡、文章が、新聞雑誌に公開されることもままあった。当時の『東

京日日新聞』宮廷記者・藤樫準二が、秩父宮の文章を無断転載したときの事例を見よう。

「昭和三年四月のこと、全皇族が親睦をはかるために『近き御垣』と題する機関雑誌を創刊された。その中に、前年槍ヶ岳御登破の秩父宮が『山の旅』と題しての紀行文をお載せになっていることを聞き、ひそかに同僚の協力で入手した。そして、秩父宮の『山の旅』を上中下の三回に分け、まず第一回の『上』をはなばなしく掲載した。1928年4月11日付『東京日日新聞』に掲載された、「秩父宮殿下鎗ヶ嶽御征服の記」と題する記事がそうである。しかるにこの直後、「宮内省から電話で編集局の責任者に出頭を求めてきた」。藤樫らは、秩父宮家の事務官にさんざんしぼられたが、秩父宮自身のはからいで、そのまま連載を続けることができたという（藤樫 1958）。

皇族の結婚・出産をめぐっても、以前にまして激しい報道合戦が展開されている。1925年、マスコミ業界誌に掲載された、「誤報頻々 特ダネ競争の弊」という記事から引こう。「昨年五月頃であったと思う、時事新報の夕刊に摂政宮妃殿下御懐妊の特ダネが載った。久邇宮家職のお慶びの言葉まで紹介されて居たが、此の記事の誤であった事は、〔十ヶ月を経た〕本年三月に於て立派に証明されたのである。然るに時事新報は、此の誤報に就いて未だに取消もしなければ正誤も出さぬ。読者、世間を迷わして知らん顔は同紙の為に取らない。此の新聞はついで本年三月にもこんどは秩父宮殿下の御妃が定ったと云う特ダネを出した。これは宮内省からの取消が出たが、其後も此の記事が事実であるような書きかたをして、諦めかねて居るようだ。一方東朝〔東京朝日新聞〕では其後、妃殿下の候補者であらせられた姫宮殿下は、他へ御降嫁の事にきまったと報じて居る。…時事が報じた秩父宮妃の候補者に就いて、四月、今度は報知〔新聞〕が別の人を特報して居る。如何にも確信あるような書振りであるし、殊に報知の事だから、前二紙と同じく誤報を伝えるわけもあるまい、さあそうになって来ると、益迷わされることになるのだが、事件迷宮に入るではすむまいと思う。東朝はまた四月になって東宮妃殿下御慶事の御模様を報じて居る。昨年時事が報じたと同じような書き方である。今度こそは、一般の臣民はそう思って、此記事の内容を精読した事であろう。他の新聞はこれに就て、未だ何等報道する所もなく、東朝だけはそれを裏書するような記事が続けて居る。今度こそは事実であらんことを希望する。それでないと新聞の記事——殊に大新聞——がいよいよ信用がなくなるからである」<sup>4</sup>。

妃に決定した女性たちの、こと細かな情報（その趣味性格や日常の様子、ファッション、生い立ち、「御学友」の談話など）が、マスコミによって長期間かつ大量に流されてゆく事態の嚆矢も、20年代に求められるものだ。次章に詳述するようにそれは、女性読者のニー



ズにたいし、きわめてかなった報道ではあった。1924 年、摂政宮と良子女王の結婚式にあたって『婦人世界』の組んだ、良子の特集記事から引用する。

「学習院小学科御在学当時の良子女王殿下は、如何にも天真爛漫で、ことにどの姫たちともお友達であらせられ、特別に御学友を選ぶ必要もない位だった。『何と云うすなおな姫宮様でしょう』 先生たちは皆そう云って、小さい姫宮様をおいつくしみ申上げていた。…その頃の御日記などを拝すると、尚更当時の姫宮が如何に天真で、爛漫であったかが伺われる。ある暑中休暇千葉県銚子海岸へ御遊行遊ばした時の御日記には『私たちが町に入ると、沢山の人が。あの暑さの中に長い間立って出迎えていた。…出迎えはうれしいけれどあの夏日の照る中に長い間立って迎えてくれる人たちの事を思うと、気の毒で堪えられない。』と云う意味のおやさしい御感想を、御するしになっている。…またある夏の事箱根へ御成りになったお日誌には、面白い自然の写生をなされたのがある。…姫宮の精緻な御観察には、当時の教授中島女史もひどく敬服されたそうである」（「良子女王殿下の御生立」『婦人世界』第 19 巻第 2 号、1924 年、9 頁）。

「ピアニストとしての殿下 音楽御教育係 神戸絢子

殿下は恐多けれど立派なピアニストでいらされます。御手先きの御発育が大変に宜しく、従って御弹奏が非常に御自由でいらっしゃいます。ショパンやヴェトウヴェンやメンデルゾン等のソナタを、美事にお弾き遊ばしますが、最近には重にヴェトウヴェンのものを遊ばしました。お声も御声量の豊富な美しいソプラノで、私が御伴奏申上げて。お妹宮や御学友と二重唱を遊ばす事も度々ございました」（「御教育係の見奉った良子女王殿下」『婦人世界』第 19 巻第 2 号、1924 年、13 頁）。

#### 1.4. 開放政策の影響とその限界

以上、1920 年代のマスコミの皇室報道が、大衆天皇制下のそれに、ひじょうに近似した性格をもつに至った事実を、簡潔な形で確認した。続いて、その巨視的背景につき、考察を進めてゆこう。

20 年代初頭、皇太子裕仁によるヨーロッパ巡遊、それから摂政就任前後の時期に、従前のイデオロギー政策の限界を見てとった一部支配層は、その近代的再編を試みてゆく<sup>5</sup>。行幸啓・御成時の警備の緩和、皇族と「臣民」の直接的接触の機会の増大など、英国式の「開かれた皇室」をめざす動きが、政府内部で一時的に活発化するのである。鈴木（1986）や

波多野（1998）、坂本（1998）等をとおり、よく知られる部分となっている。その一環として、皇室報道にたいする大幅な規制緩和が実施されていたことも、活動写真による皇族の撮影解禁（1921 年）を筆頭に、既に注目されてきた。

開放政策期の支配層が、皇室報道という媒体の政治的有用性を認知し、民衆教化への本格的活用を試み始めていたことは、確かにうたがい得ない部分である。たとえば宮内省の変貌振り。20 年代前半の同省は、以前の秘密主義から転向し、マスコミの皇室取材への積極的な協力を施すようになっている。たとえばある記者は、皇族への密着取材の許可や平民的な皇室写真の貸与など、当時の宮内官がさまざまな便宜を新聞社に図った様子を回想する（小野[1928]1993:310-343）。皇族の地方行啓・御成にさいしても、この宮内省の指示のもと、取材記者への種々の協力的対応が、地元の各官庁によってなされていたようだ<sup>6</sup>。じっさい、かかる宮内省の変貌振りは、同時代のマスコミ関係者にも、ひじょうな驚きと好感をもってしばしば語られた。たとえば 21 年のマスコミ業界誌に掲載された「大正十年日本新聞界に於ける記録的事件」と題する記事<sup>7</sup>。当時のマスコミ関係者らにたいし、1921 年度新聞界の「記録的事件」を尋ねたこのアンケート記事では、多くの記者が宮内省の開放的転向をその一つに挙げている。かれらが以前には想像し得なかったほどの、積極的な皇室報道への協力を、20 年代前半の宮内省は見せていたわけだ。

あるいは、皇太子裕仁の欧州巡遊中に特別認可された、皇族の徒歩・立姿のスナップ撮影が、彼の帰朝直前（1921 年 8 月）、宮内省と内務省の協議の上、正式な形で解禁されている事実（内務省[1929]1986:159-60;坂本 1998:23）。これによってマスコミは、行幸啓・御成先での皇族のスナップ撮影を、以前よりもはるかに自由に行ない得るようになったし、かつ以前よりもはるかに近くから皇族の写真を撮ることも可能になった（但し事前に関係部局の許可を得ることが必要だったが）。換言すると 20 年代前半の政府は、皇室のさまざまな姿がマスコミをつうじて流布してゆく事態を、公認するに至るのだ。20 年代において、皇族の「笑顔」と「背広」の写真に象徴される、平民的なモチーフの皇室写真が、連日のごとく各新聞雑誌に掲載されていった背景には、確かにこの解禁令が大きな要因の一つとして存在した。

以上のごとき政府の動向を捉えたとき、20 年代皇室報道の世俗化の進展は、当時の支配層側の思惑にも、あるていどそったものであったと一見、思われる。じっさい、この諸規制緩和が「結果として」、その進展に大きく寄与していたことも、うたがいえないところだろう。しかしここで注意すべきは、皇室報道にたいする上記一連の規制緩和策があくまで

も、1890年代来の絶対主義的な教化政策の枠内で、これに抵触しない範囲で実施されたものだったという点だ。

21年の皇族のスナップ撮影解禁を、例にとって説明しよう。それは確かに、親しみやすい皇族の写真がマスコミに多数掲載されてゆく一大要因としてはたらいのものの、政府はこの解禁をもって、あらゆる皇族の姿の公開を認可したわけでは決してない。この時期も、1898年の内相諭告「御肖像ハ総テ粗造ニ流レ不敬ニ渉ルベカラズ」の項に反しない限りにおいて、皇族のスナップの掲載は認められていた。皇室のスナップ解禁を全国の警察に指示した内務省の通牒中で、病中の大正天皇はその例外とする旨が強調されているのも、その現れの一つである（内務省[1929]1986:159）。

当時の政府が、民衆による皇室写真の受容をめぐる監視体制を強化しているという事実も、興味ぶかい。開放政策中に実施された、マスコミの皇室写真への諸規制緩和が、神格化政策の枠内で実施されていたことは、この点にも如実に見てとられる。たとえば1920年の内務省が、新聞雑誌に掲載された皇室写真の「不敬」な読み扱いの取締徹底を、全国の警察に指示しているように（内務省 [1936]1993:266）。20年代前半は、警察機構が皇室報道の受容形態の管理に本格的に参画し、場合によっては読者を検挙する構えを明確とした時代でもあったのだ。事実、開放政策期には、新聞雑誌の皇室写真の「不逞」な読解をなしたかどで逮捕された人間、あるいは新聞雑誌の皇室写真に落書きをしたという事由で捕まった人も、数多い（司法省[1928]1980）。皇族のスナップ撮影を許可し、平民的なモチーフの皇室写真が流布するのを促進しておきながら、民衆がそれらを他の写真と同じ仕方で見扱うことは、当時の政府もまったく許容してはいなかった。

他方、宮内省を中心とした皇室取材への種々の協力的対応も、従前の神格化路線の枠内で実施されたものと捉えるのが妥当である。無論、かかる協力体制が、マスコミをつうじて天皇家の親しみやすさをアピールし、皇室と民衆の関係をより近いものとする企図を内に含んだのもうたがいないが、その限度を政府は明確にもうけていた。たとえば天皇家の神格を明らかに侵犯するゴシップ記事の流布にたいしては、当時の支配層もかわらず強い警戒を示している。それは、開放政策推進派の支柱たる（坂本 1998）、首相・原敬や宮内大臣・牧野伸顕などにもあてはまる指摘ではあった。皇太子裕仁と久邇宮良子の婚姻をめぐって生じた、戦前期最大の皇室スキャンダル、「宮中某重大事件」（1921-22年）をここでは例にとろう。この事件を、一部マスコミが連日大々的に報じていた頃（1921年2月14日）の、原の日記から引くと、「宮中並皇族方の御内情余りに世間に漏洩し、甚だ喜ばしか

らざる事に付、嚴重取締ありたき旨警保局長を以て宮内省に申込み警戒を促したり」（原 1965:351）。じっさいこの事件報道をめぐっては、内務省が記事差止命令や発禁処分を濫発する事態も生じている（内務省 [1929]1996:3-7; 齋藤[1932]1980:263-4）。

続いて牧野の日記から。皇太子と良子女王の婚姻がようやく決定に至った翌 22 年 6 月 21 日、良子に謁した牧野伸顕は、「新聞杯には時に記事写真の掲載出来るだけ御避け被遊るる様御心懸けの程可然申上」げている（伊藤・広瀬編 1990:57）。皇太子と彼女（そして皇室ぜんたい）がこれ以上、ゴシップ報道にさらされることのないよう、この重臣もひじょうな配慮を見せていた。ぎゃくにいえば、20 年代前半のマスコミによる皇室報道の世俗化傾向というのは、開放政策を推進する一部支配層の企図をさえ、はるかに超え出たものだった。開放政策期における皇室報道の世俗化・消費財化のラディカルな進展と、それにとまなう大衆天皇制の開花が、政府の思惑にそった現象として、捉え難いゆえんの一つである。

そして決定的に重要なのは、この開放政策が 23 年 12 月 27 日の虎の門事件を契機に、実質的に頓挫している事実だろう（坂本 1998; 波多野 1998）。この点は、開放政策にかんする論考の、一致した見解となっている。親しみやすい皇室を模索する試みとは、この事件以降、漸進的にトーンダウンし、世俗的な皇室報道にたいする姿勢もそれゆえに、さいど冷淡なものとなり次第になってゆく（この点は後述する）。しかるに現実に流布した皇室報道の世俗的傾向というのは、20 年代をとおして殆ど衰えを見せていない。この点は、上記に見たとおりであり、また次章以降にも、（1928 年の「節子姫ブーム」などをとおし）さいど確認することになる。20 年代皇室報道における、あの世俗化の進展が、支配層側の一時的な方針転換にのみ還元することの不可能なことは、ここに明瞭であるだろう<sup>8</sup>。

### 1.5. 皇室観の世俗化の進展

20 年代にはいって、従前以上に世俗的でモダンな皇室報道が、大量流布していった背景には、支配層の政策転換でなく、消費者たる同時代民衆の皇室観の変化をこそ、何より読みとる必要がある。とくに都市部では、天皇家の人々を「崇拜」の対象におく傾向というのは、ひじょうに希薄なものとなりつつあったといつてよい。たとえば 1920 年、東京市社会局が、左翼的傾向のない「相当常識ある」労働者 1000 人を対象に行なったアンケート調査。「あなたが尊敬し又は崇拜する人物は誰ですか」という問いにおいて、「皇室」を挙げた人の総数は、72 人のみだった（1920 年 12 月 29 日付『讀賣新聞』『労働者の思想』）。

皇室観の世俗化傾向は、地方都市においても如実である。1926 年、広島市社会課の実施したアンケートを見てみよう。同市内在住の、「夜間通学青少年労務者」（平均 17 歳・総計 579 人）を対象にした生活実態調査である。その調査結果によるならば、「平素自分の崇拝している人物は」という問いに、「皇室に関するもの」を記した回答者の割合は、ここでも僅か 4%という結果となっている（広島市 1926:83）。

皇室報道のゴシップ化の進展に裏書きされるごとく、皇室の内情にたいする卑俗な興味も、かれらのあいだではいっそうの拡大・増幅を見せていた。地方の民衆の内に、天皇家をめぐる猥談趣味が普及していることは、その一例になるだろう（司法省[1928]1980・[1929]1979）。さらに注目されるのは、巷間流れてゆく猥談に、典型のパターンが現れ始めている点である。それは、かかる一連のゴシップが、フィクションとしての側面を多分に含み始めていたこと、換言すると、皇族が現実「事を起こしたかどうか」という要素とは殆ど関係なく、もっぱら民衆側の卑俗な想像力・好奇心のもとに流布し始めていたことをあらわしているからだ。たとえば、行幸啓・御成先での「お手つき」という、後の猥談の代表的モチーフの一つが仕上がったのも、管見ではこの頃に求められる。その最初期の事例を、三田村鳶魚の日記録から引いてみよう。

「[1920 年 4 月 24 日] ○閑院宮殿下松江へ御成により、第一等の旅店へ県庁より申達し、御宿の事ははからわんとするに〔その旅館が〕只管に拝辞しければ、無抛他に申付たり、其旅店には先年竹田宮御宿を承りし時、孫女御給仕にまいりたるを思寄りたまいける、其媚なる者受引ず、〔孫女に〕離縁を乞うて已まず、〔旅館の〕亭主持剰し、向後は貴賓の御宿すまじとて辛く宥めぬ、されば此度も亭主は御用勤めたく思えど、媚は聴かず、已むを得ざりしという、県庁もさる内情は知らざりし也」（三田村 1977:348）。

この頃の各地方官庁の生活実態調査が記している、宗教的信仰・実践の衰退という事態もまた、かかる都市部の状況を捉える上では、一定ていど参照される。

たとえば 1922 年に、東京市社会局の実施した「自由労働者に関する調査」。同市内の低賃金肉体労働者（「定傭人夫」「日雇人夫」「部屋人夫」）を対象（1300 人）とした調査である。同調査中、かれらの「信仰対象」を聞いた項目では、「全数の五五、二パーセントは全然無信仰」で、しかもその「多くは殆ど〔信仰というものを〕意識したことがないと言う」結果となっている（東京市[1923]1995:23-176）。付けくわえておくと、同調査結果において「天皇崇拝」というカテゴリに分類された回答者も、6 人ほどしかいなかった。

続いて、ホワイトカラーの事例。1924 年実施の京都市の「電気局現業員」の生活調査か

ら（1199人）。上記自由労働者に比して、かれらは宗教との近しさをヨリ保っていた。「あなた自身の信仰は何んですか」という問いへの回答中、「信仰なきもの一割二分、不明一割を除き他は何等かの信仰を有する者である」。だが、宗教にたいする依存度は、かれらにおいても希薄であるといつてよい。自宅に「神棚、仏壇を共に有するもの約二割、何れか一つを有するもの三割四分」に過ぎないし、「神社、寺院、教会にゆくもの約四割」で、「寺院、教会に説教聴聞のためにゆくものは三分の一にも及ばない」からだ。それは、寄席や芝居、活動写真を見に行くことを趣味活動とする者が7割に達しているのと、好対照をなしていた（京都市[1925]1994）。

女性はどうか。職業婦人の例をここでは確認しておこう。1927年実施の、京都市内に勤める「事務員　タイピスト　店員　保母　看護婦　産婆　交換手　舎母・工女監督　派出婦」の生活調査である（3666名）。同調査中、信仰の対象を問うた項目の回答結果はというと、「記入せるもの全体の四割九分、他は殆んど無信仰」となっている。かく彼女らにおいて、宗教や信仰という対象・実践が縁遠いものとなっていたことは、読書傾向の内にも明瞭に看取される。「常に雑誌を読む」被調査者の内、「婦人雑誌」をその対象雑誌に挙げた者62%にたいし、「宗教雑誌」を記した回答者は1%。書籍のそれにかんしても、同様である。「書籍を読む」と回答した被調査者の内、「研究書」を読む者52%、「文芸書」を読む者39%にたいし、「宗教書」を読書の対象に挙げたのは、8%にすぎなかった（京都市 1927:63-4）。

数年後の1931年に、東京市社会局の実施した、市内職業婦人にたいする信仰調査でも、同様の結果が現れている。すなわち、全回答から「記入をしなかったものや、信仰の不明なものを除いた総数一万四千七百六十九人の中で『信仰無し』と明かに回答をなしたものは全体の半分以上を超える。その割合は五割三分である」。以下、「仏教」33.14%、「神教」7.71%、「基督教」5.7%と続く（東京[1931]1995:84-6）。

あるいは大阪市社会部調査課による、余暇生活研究。権田保之助のそれである。1921年度の「中央公会堂及天王寺公会堂における文化的会合」の、種別平均動員数を見ると、最も多くの市民を動員した「芸術的及娯楽的会合」の平均会衆人員1165人にたいし、「宗教的会合」（宗教講演会、宗教ニ関スル談話会、信仰ニ関スル談話会）の平均会衆人員は、287人という状況となっている（大阪市[1923]1970:167-8）。

無論、上記「信仰」調査の結果とは、天皇家の神格を補完すべき（「非宗教」たる）国家神道の衰退を、直截的に立証しているものではない（神棚の設置率の低さなどは別としても）。しかし少なくとも、宗教的な対象でなく、世俗内の（なおかつモダンな）対象に、都市

民衆の価値観・生活の中心が既におかれていたことは、十分看取できるはずだろう。換言すると、「崇拜」や「信仰」という宗教的語彙そのものが、20年代都市民衆の生活・意識を捉える上での有効性を失しつつあったこと、「好きな人」や「趣味娯楽」という言い回しのほうがかれらの生活実態を把握する上ではより有効となりつつあったことを、上記調査は示している。宗教的価値から世俗内価値への「聖性の移行」の進展が、王権のイデオロギー政策の前提となるべき態度・心性を、都市民衆の内から漸次希薄化させたという、18世紀後半のフランスをめぐる Chartier (1991=1994) の見解は、20世紀前半日本の都市市民にも、おそらく一定の妥当性をもっているのである。

しかるに以上の事実とは、都市民衆のあいだで天皇制への反感が拡大していたことをまったく意味しない。一方で、皇室家の「スター」としての世俗的な人気は、民衆のあいだでさらなる高騰を見せていたからだ。ここではとくに、昭和天皇と秩父宮雍仁に限定して、この事実を確認しておく。

まず、昭和天皇の人気振り。20年代前半、東宮時代のかれこそは、50年代の皇太子明仁に先駆けて、「大衆のアイドル」となった皇室の男性としてあった。幸田文による回想から引いてみる。

「天皇陛下のお若かったころのことを思いだすのだが、陛下はなかなか人気のおありだった。悪口を言うようになるが、陛下はお若いときから少し猫背だった。それが少し女の子たちにとって残念だったが、眉が太くて、たしか縁なしだったとおもうが、その眼鏡が小粋で、頬がしまって、美男子でいらした。お通りのとき送迎に学校の門前などへ並ばせられる女学生のうちには先頭の警護のおまわりさんが来ると、もうすぐ気持ちがたかぶると見えて、やたらと赤くなって恥かしがる人がいた。おもかげが陛下に似ているというので、親たちの反対も押し切って〔その男性と〕いっしょになると言い張り、もちろん学校もよしてしまったという、当時おもしろがられた話題もあるし、なかなかの人気のおありだった」(幸田[1959]1995:169)。

20年代の昭和天皇の人気のほどは、民間企業がかれの関連商品を競って濫造し、しかもそれらがのきなみ好調なセールスを示している事実にも明瞭だ。すなわち20年代前半において皇太子関連のグッズは、「活動写真より玩具類に至るまで新たな一大流行を作」ってゆく。しかもこれら東宮関連グッズはいずれも、「殿下とさえ云えば何品に関わらず羽が生えて飛ぶような売行き」を見せていたと、当時の新聞記事はいう(1921年11月20日付『国民新聞』「東宮双六が五十種も出来て素晴らしい御人気」。

ブロマイドなども無論、その内の一種である。中村哲の回想。

「小学の四年生だった私は当時摂政宮といわれていた今日の天皇の外遊された写真を美しいと思った。民族がどうの国家がどうのというのでなく、文房具屋には〔欧州巡遊〕映画のフィルムを一枚一枚切りとったものを紙の袋に入れて売っていたが、そのモノ・カラーの写真が華やかだったのである」（中村 1971:256）。

あるいは中野重治の「その身につきまとう」。1953 年の皇太子明仁の英国旅行にさいし書かれたこの自伝小説には、次のような記述部分がある。

「二十六、七年も昔、いまの天皇〔昭和天皇〕がまだ皇太子で、やはりイギリスへ行って、帰ってきてまだ独身でいたときのことだった。…どういうわけか、この皇太子摂政に一種人気があった。…皇太子の写真は絵ハガキになって、…絵ハガキ屋にならべられた。女学生たちがしきりにそれを買った。…〔主人公が仲間と〕集まっておしゃべりをしたある日…見知らぬ夫婦ものが…こんな話をして聞かせた。『さかんに皇太子の絵ハガキが売れる。女学生が次ぎから次ぎと買って行く。それが映画俳優の写真を扱うようなふうに見えてきて、教育界で問題になってきた。…そこで学校でしらべることになった。目をつけられた女学生の下宿へ、校長が行って抜打ち点検をやった。出るわ、出るわ。皇太子の絵ハガキが山のように出てきた。…校長が、一枚残らずひとまず没収することになった。…そしたらその女学生が、「あら、殺生な…」っていったんですって』（中野[1953]1996:200-1）。

創作の中の記述であるが、女学生が摂政宮の絵ハガキを買いあさりそれが問題化した、というくだりは、20 年代前半のじっさいのエピソードを記したものと推察される。同じく 1953 年、ある鼎談の中で服部之総が、これを裏づける証言を行なっているからだ。

「高木〔健夫〕　しかし〔皇太子明仁が〕この女学生にモテるのは、どういう現象かね。

大宅〔壮一〕　これは前の秩父宮のときでもそれに近いものがあったね。

服部〔之総〕　いまの天皇が皇太子で洋行したときは、さかんにブロマイドが売れたんだね」（服部他 1953:10）。

皇位継承後も、その集客力は衰えを見せていない。1927 年、小笠原諸島でのかれの生物採集の模様を、大阪朝日新聞社が活動写真にして一般公開したさいの例。

「天皇陛下の小笠原島から奄美大島へ行幸の御途すがらの御英姿や、緑ふかき南の島々のエキゾチックな風物のくさぐさ…など、ことも細かに謹写した本社活動写真班の第一報はさながら薫る南方のおとずれのごとく五日本社に到着したので、同夜八時から大阪天王寺公園市民博物館前の涼風そよぐ広場で公開された——何という素晴らしい人手！…市民



たちはたそがれのころから引きも切らず来場して忽ちに広場を埋め終り、およそ三万に上ると見られたが、蒸すような人いきれにもひるまず…スクリーンの動きに見入っていた」(1927年8月6日付『大阪朝日新聞』「聖上行幸の御英姿」)。

そうして眼鏡姿を露出し<sup>9</sup>、かつ自然科学にも親しむかれは、新しい天皇像——誠実なインテリというイメージをも、民衆の内に結んでゆく。

「[1928年12月13日]今日は東京市の奉祝会で、陛下が上野に行幸啓。父さん〔野上豊一郎〕にも参会章が来たので朝七時から出掛けた。お昼前帰りての土産話に、四五万の参会者が非常に秩序よく立派に集散したよし。天皇陛下の評判な勅語は實際噂の通り大きな凛々しい声であったそうな。明治天皇に見たような重々しい威厳はまだないが若い、真面目な青年らしいよさで人々を引きつけるらしい」(野上 1986・91:第二巻:318)。付言しておくと、この数日前には、観兵式中の天皇の「玉音」が、ラジオをとおり偶発的に実況中継される事件が起こっている(1928年12月4日付『東京日日新聞』「勅語の放送を御遠慮する宮内省」;竹山 1989)。「評判な勅語」とは、そのことであるだろう。

続いて摂政宮時代にかんする、奈良本辰也の回想。奈良本はこの頃、山口の一中学生だった。

「修身の時間に、校長から、あの殿下は大変学究肌のお方で、生物学に関しては深い御造詣があるとの講話を聞いた。やがて天皇となられる方が、学究肌であられるということは、まことに歓迎すべきことに思われた。…その頃の講義で、校長は、この殿下が皇位につかれたら、明治大帝の再来を思わせるような聖天子になられるだろうと言っていたので、私達もそれを信じた」(奈良本辰也「時代の目」1989年1月17日付『毎日新聞』)。

他の同時代人によるならば、かれの眼鏡姿とは、その「世俗の王」たることのあかしとしても機能した(大岡[1975]1983:341;朝日 1989:414)。「小粹」と評した先の幸田([1959]1995)などもその例ではあるが、ここでは吉田光邦の証言を引いておく。

「大正十年生まれのわたしは…御真影と教育勅語というセットとなった教育儀礼を通過した世代であるけれども、むしろ印象的だったのは、眼鏡をかけた若々しい天皇であった。眼鏡は俗的なイメージとして、こども心に焼きつくもののひとつであった。天皇もまわりの人と同じように近視らしいということである。昭和三年の大典の時の華麗な馬車行列(鹵簿といった)ママまたは毎年の観兵式で白馬にまたがった天皇は、劇的空間の主役のような華々しさを持ち、それはむしろ俗性のものとみえたのである」(吉田光邦「情報社会の象徴天皇」1989年1月11日付『京都新聞』)。

「明治大帝の再来」とはいうものの、昭和天皇の人気の性格は、明治天皇のそれ以上に世俗でモダンなものだった。この差異は無論、眼鏡の有無という「些事」のみがもたらしたのではなく、両者の治世そのものが含んだモダンさの多寡にも、多く由来するはずだ。「大元帥」の眼鏡姿、あるいは「現人神」による生物学研究を、民衆側がなんなく許してゆく。もしくは眼鏡をかけて顕微鏡に向う「世俗の王」であるからこそ、民衆はかれに熱狂し、積極的に支持してゆく。20年代の都市世界とは、そのような近代空間であったということだ。確かに表面的に見るならば、20年代民衆の昭和天皇観に現れた、眼鏡と生物学研究の焦点化は、理知的・英明な君主（の再来）の希求——大正期の「軽く明るい」天皇のありようを否定してゆく逆行的実践の拡大として、一見把握されるべきものではある（大岡[1975]1983）。しかるに、深層において捉えた場合、それはうたがいがなく、大正期民衆の天皇観と、連続する部分をこそ多くもっている。上記の世俗性という部分でも、それから別の部分でも。後者の別部分にかんしては、第四章に詳しく論じてみる。

昭和天皇の皇位継承後、20年代後半になると、秩父宮雍仁の人气が突出する。そうしてそのイメージの世俗性というのもまた、きわだったものとなる。たとえば安岡章太郎（1920年生）がその自伝中で、日中戦争以前の「平和な時代」とモダンな都市文化を想起させるシンボルと位置づけたのが、この秩父宮である（安岡 1984）。安岡によると、秩父宮の人気の事由はこうだった。「それは今上天皇にくらべて、秩父宮には自由で闊達な印象があったことだ。…例えば、英国のエドワード八世はアメリカ庶民のシンプソンと恋愛して、王位を弟のジョージ六世にゆずったが、このエドワード八世のような性格を、当時の日本国民は何となく秩父宮に期待していたのではなかろうか。そういえば秩父宮は、皇族ではなく大名華族のなかでもそれほど格式の高くない家から王妃を迎えられたはずだ」（安岡 1984:45-6）。

次章に見る、松平節子（後に勢津子）のことである。大宅壮一によるならば、「彼女と秩父宮の間は、皇族としては型破りの恋愛結婚に近いものだったので、宮内省を驚かせたものだ。それだけに国民の間には大変な人気を呼んだ」（大宅[1952]1982:336）。付言しておく、両者の「身分を越えた恋愛結婚」は、ウィンザー公の退位騒動に、8年さきだつものである。この結婚のもつ意味あいにかんしては、次章に詳述するとしても、安岡の言うごとき、「自由で闊達」という秩父宮観は、確かに同時代人に共有されたものだった。1925年の『讀賣新聞』投書から例を引こう。

「秩父宮様には殊のほかご闊達な気性と承る。されば昨年、明治神宮競技会の折なども

…『何々君はちかごろどうですか』という御調子で、至ごくひらたく、傍らの者に選手の近状など御質問遊ばされるので、何にも知らぬ宮内官などは、時々まごつくことがあるそうだ…」(1925年1月12日付『讀賣新聞』「斬馬劍」)。

1928年1月19日、節子との婚約成立時に『東京朝日新聞』の掲載した社説もまた、安岡の回想を裏づけよう。「秩父宮殿下に対する日本国民の感情は、高貴に対する単なる尊敬以外に、イギリス国民のプリンス・オブ・ウェールズに対するあこがれ愛着の念に通ずるところがあるのである」。さらにこう続く。「皇室典範によれば、皇族の配偶たるべき人は皇族又は華族のうちより選ばるる事になっているが、この法規の形式にとらわれず…一庶民たる使臣の家よりこの光栄ある妃を選ばれし事は、殿下御自身はじめ、畏きあたりの御英断によるものと拝せざるを得ない」。

かかる秩父宮の社会的イメージとは——再び安岡章太郎によるならば——北原白秋作詞・山田耕筰作曲の童謡「秩父の宮さま」(1928年、ニッポノホン発売<sup>10)</sup>)に結晶されている。その1番の歌詞を引いておくと、

「日本アルプス槍ヶ岳、槍ヶ岳  
雪のお山に、お山に、お山に、  
たららる、らっら、おのぼりなるよ。  
リュックサックしょって、ステッキついて、  
登山の宮様、秩父の宮さま、  
みんなの宮さま、たららる、らっ」(北原[1928]1987:277)。

民衆側の懐いた秩父宮のイメージが、大衆社会に適合的な「軽さ」＝消費可能性を、昭和天皇のそれ以上にもっていたこと、それがかれの人気の源泉をなしていたことは、確かである。白秋の詞に集約されたそのイメージは、官製の国体イデオロギーからは無論、明治人の懐いた明治天皇の像からも、あまりに遠いことだろう。大宅壮一によるならば、秩父宮のイメージの含むこの軽さとは、彼を担ごうとした「陸軍部内の急進分子」にも、共有されたものだった(大宅[1952]1982:337)。この点で、原(2000)の明らかとした大正天皇の社会的イメージを、忠実な形で継承したのは秩父宮のほうである。そうして後述のごとく、30年代以降の昭和天皇報道が、漸進的にその世俗性と軽さを失ってゆく一方、秩父宮関連の報道は、一貫してこのような性格を強くたもち続けてゆく。この事態を、二人の幼少時の養育記録に現れているとき(原敬文書研究会編 1989)、両者の性格の相違にもとづく事象と見ることも、確かに可能であるだろう。確かに可能であるにしても、それ以上

に、「軽い王権」を求めてゆく民衆側のニーズを、マスメディアが、相対的に報道統制が緩く、しかも皇位継承順位の高い秩父宮で賄ったという部分が、おそらくここにはより大きくはたらいっている。そうしてマスメディアの表象する秩父宮の軽さと平民振りは、伊藤之雄の指摘するように、(天皇その人の報道からは薄れ始めた) 親しみやすさという部分を補完する一方(伊藤 2005:495)、Billig の論じる次のような現代的形態でも、王権の正統性を賄っていったと思われる。

「現代の王族的性質が持っている力は、脱神秘化の主題によって脅かされるようなことはない。神聖な崇敬の念は脇に迫いやられ、その非合理性が暴露される。特別な役割の背後にふつうさが発見される時、あるいはふつうの人間のうちに特別さが発見されるとき、神秘は消し去られることはない。…神秘を脱神秘とするようなそれぞれの発言は、すべて王族の特別な地位を想定し、確認しているのである。…人々は…王と平民とが出会った時の、普通の人間として普通の人間と話をするような平等な時を求めている。地位の違いはそのような神話的時間の中では、一瞬消滅する。しかしそこには幻想、神秘化、そして忘却がある。その求められる平等な瞬間が魔術的であるためには、不平等な関係が維持されなければならないからだ」(Billig1992=1994:98)。

#### 1.6. 20 年代マスメディアの状況

以上、昭和天皇と秩父宮を事例に確認したごとく、20 年代の都市民衆において皇室のスター人気というのは、いっそうの昂揚を見せていた。同時期皇室報道の世俗化のさらなる進展が、読者側のニーズの反映であったこと——皇室のスター人気の高さを、商業主義の席捲していた新聞雑誌界が、その販売戦略に最大限に活用した結果であったことは、ここにほぼ確かであるだろう。本節では、今少し詳しく、20 年代新聞雑誌界の動向をおさえることで、この点をあらためて論証しておきたい。

はじめに、市場拡大と経営体質の近代化を続ける、新聞界の状況から見てゆくと、『大阪毎日新聞』の 1 日平均発行部数が、他紙に先駆け 100 万部を突破したのは、1924 年。『大阪朝日新聞』も、1929 年の頃には、96.6 万部にまで発行部数を伸ばしている(朝日 1990-95:資料編:320;毎日 2002:96)。内務省警保局の作成した資料によるならば、1927 年度において、一日に発行される新聞の総部数は、東京・大阪のみで、既に 500 万部に到達(内務省[1927]1979)。そうして「全国主要新聞社…の経営状態の推移を見ると、株式組織は 1914

年〔大正 3〕マには 14 社にすぎなかったのが、8 年後の 1922 年〔大正 11〕マには一躍 35 社にふえている」し、各社の「資本金も増加して 100 万円以上のもの 6 社を数えるに至っ」ていた（内川編 1976:199-200）。

雑誌界も、確かな拡大化傾向を見せていた。先の警保局記録では、ひと月に東京・大阪で発行される雑誌の総部数は、200 万部以上となっている。戦前期最大の大衆娯楽雑誌『キング』が創刊され、やがて 100 万部を達成したのも（ちなみに同誌 20 年代刊行分ではきわめて多くの皇室写真が口絵に掲載されている）、『週刊朝日』『サンデー毎日』など週刊誌文化が一応の根づきを見せたのも、20 年代のことである。1927 年現在での、おもだった雑誌の 1 号平均部数を示しておく、『キング』30 万部、『サンデー毎日』24.9 万、『週刊朝日』17.3 万部、『主婦之友』20 万、『婦女界』15.5 万、『婦人倶楽部』12 万、『講談倶楽部』9 万、『婦人世界』8 万、『実業之日本』6 万、『婦人画報』3 万、『婦人公論』2.5 万部、となっている（内務省[1927]1979）。資本金の伸びについては、皇室報道を他の婦人雑誌社と同様得意とした、主婦之友社の例を見ておこう（主婦の友社 1967）。主力商品（『主婦之友』）の 1 号平均発行部数が、創刊時（1917 年。1 万部）から 10 年ほどで 20 倍に伸びた雑誌社である。1924 年に株式会社化した当初、100 万円だったその資本金は、僅か 4 年後には倍額の 200 万円に増資している（さらにその 8 年後の 1936 年には 300 万円に増資）。

いっそう注目すべきは、かく資本主義企業として膨張してゆくのと連動して、20 年代の大手マスコミが、天皇家を有力な「商品」として扱う態度を、従前以上にあからさまとしている点であろう。新聞市場の独占を図る朝日と毎日系列を中心に<sup>11</sup>、皇室をめぐる取材・報道競争が、新聞界で熾烈化しているのは、その最も顕著な例だった。なかでも即位式、皇室結婚、皇子・皇女の誕生などの「御慶事」にさいし、地方紙を含め新聞各社による激しい報道戦・販売戦が繰り広げられたことは、当時の多くの報道関係者が証言を行なうところである<sup>12</sup>。例として、1924 年 1 月 26 日、御成婚当日の、朝日・毎日所属の輸送飛行士の奮闘振りを見よう。

「皇太子殿下御成婚当日の新聞原稿及び写真原稿を大阪本社に送達すべく東朝〔東京朝日新聞〕四機東日〔東京日日新聞〕が二機の航空機を使用して猛烈な空中輸送戦を演じた事は新聞界未曾有の記録として残さるべきものであらう…朝日は御成婚当日早晩立川飛行上に格納中の東西定期航空用使用機…を操縦して代々木練兵場北隅に飛来し東朝の社旗翻える二張の天幕小屋の前に着陸し機首を南面して原稿の到着を待つ 是に対し東日社は同じ練兵場構内の南端海鼠山の西側に…川西式スパット第三号機…〔ともう〕一機を備えて対

抗し別に品川埋立地海岸に前日大阪より飛来せる…水上航空機を準備し水陸両方面より東西の空中を征服すべく対陣した…代々木原頭に東朝東日の写真原稿を載せた自動車が見えたのはまさに午前十時である。…機上の大蔵飛行士〔朝日〕は原稿を受取るや直ちにスタートを切った時正に二十六日午前十時〇三分…之と殆ど同時に東日の後藤機もスタートを切った…。斯くて大蔵機は手馴れたコースを一路西へ西へ箱根付近より漸く陰悪となりかかった気流と悪闘難航を続けつつ午後二時大和木津川原付近に差蒐った頃は密雲航途を鎖して到底前進すべくもない、既に夕刊メ切に間に合わぬ以上は是以上の冒険を続けて収拾すべからざる危険に陥って重要任務を果さざるよりは潔よく着陸して人事の限りを尽さんと決心し木津川に沿て下りつつ適當の積を認めて大胆なる着陸を試みた時に午後二時。氏は直ちに機体を河原に捨てたまま村民の応援を得て一台の自動車を仕立てて付近の大軌電車沿線に出で其所より電車便を籍りて上本町六丁目停車場に下車再び自動車を駆て渡辺橋本社編集局に原稿を提出した時正に二時五十分、大朝社〔大阪朝日新聞社〕は大蔵飛行士の大胆にして細心忠実なる輸送に依て午後四時には四頁大の写真号外を発行する事を得た東日の後藤機も同じく悪気流に悩まされつつ明野ヶ原航空場に着陸し汽車便で原稿輸送を行った…」<sup>13</sup>。

続いて1925年12月、成子内親王誕生のさいの取材競争。

「諸新聞社と通信社の最初の活動はすでにその前月二十日頃から開始されていた。…東京朝日は宮内省に担当記者以下助手、交通連絡班係等十一名を配置し何れも徹夜で交代勤務。東宮御所へは二人乃至三人その他の侍医、産婆、等々凡ゆる関係方面に一人乃至二人を配置した。東京日日の配備も殆んど右に勝るとも劣らぬものであったが此の二大新聞の対陣にならって二流三流所も各々陣容を整えた。朝日が赤坂見附の某洋食店に直通電話を引けば日日は直ぐその前の石屋に交渉して仕事場を買収して電話を設けると云う風だから当時赤坂見附から四谷見附一帯の電話は殆んど各新聞社に占領されていた。報知は最初、伝書鳩を〔本社への通信に〕利用する計画で一軒借りて毎日鳩に餌をやっていたが、鳩ポッポ一向緊張しないので心細くなって大慌てで電話を設置した。恰かもその翌日〔宮内省による照宮誕生の〕公表があったのは報知としては際どい事をしたものだ…」(長汀1931:48)。

先に指摘した、皇后・宮妃の妊娠や親王の婚約者候補をめぐる誤報の多さも、その一端にほかならない。かかる傾向を懸念した宮内省・内務省が、たびたびの抗議・指導を実施したにもかかわらず、マスコミ側の対応はまったくかわらなかった。内務大臣が、皇室関連の報道差止命令を発しても、その法的根拠の不在を理由に、これを反古にして該当トピ

ックを詳報してゆくほどに、当時のマスコミは自在に動いていた<sup>14</sup>。

当然ながら、20年代における皇室報道合戦のかくのごとき激化は、マスコミ各社による巨額投資をとまなうものでもあった。とくに当時の大手新聞社は、ローカル有力紙を含め、莫大な資金を皇室報道にたいし投じている。たとえば長期間かつ多数の記者の現地派遣、スナッフ写真の輸送用飛行機・電送器の手配、本社への通信用電話の確保など。大規模な皇室のイベントがあるごとに、多額の資本を当時のマスコミは惜しみなく費やしてゆくのである<sup>15</sup>。いうまでもなくそれは、「尊皇意識」や「国体観念」などにもとづきなされたものではない。あくまでも資本主義下の企業として、部数拡大・広告主獲得という目論見のもと、皇室報道にたいするこの巨額投資はなされていた。換言すれば、そうした膨大な労苦と投資に相当する商品価値を、皇室関連のトピックは、既に有していたのである。

「秩父宮殿下今回〔1927年〕日本アルプス御縦走について東日〔東京日日新聞〕対東朝〔東京朝日新聞〕即ち大毎〔大阪毎日新聞〕、大朝〔大阪朝日新聞〕の猛烈競争は吾が長野県下に於いて始めて観た所である。秩父宮殿下が十七日軽井沢駅に御成りになると両者は記者及写真班を派して先ずその火蓋を切った。…飛行機を以って誇る大朝東朝は…殿下の御登山写真を空中輸送に依って雪辱せんと計画し、…これを聞知した東日〔は〕松本の民間飛行士…に交渉し…〔本社との〕連絡飛行を行なわしむることにした。…殿下今回の御登山について両者の投じた費用は一万円を超過するであろう…」<sup>16</sup>。

「今回〔昭和大礼〕の本舞台たる京都に於ける各社の陣容を見るのに、大朝は東朝と共に烏丸丸太町交叉点角大丸社長邸を借り切って臨時出張所とし、三十余台の自動車を列べ…数百余名の東西社員が此所を本拠として活動し、大毎、東日もこれに対抗して三条御幸町角の三層楼支局新館を本部とし、自動車の数から活動人員の数は大体東朝とほぼ五角の備えを為した。時事は堺町御門筋向いに大時〔大阪時事新報〕と一緒に出張所を設け、其他皇居に近き便宜を求めて、萬朝〔報〕は中立売室町角、報知〔新聞〕は烏丸通り中立売、国民〔新聞〕は烏丸間町丸太町、讀賣〔新聞〕は樫町智恵光院に、また中外〔商業新報〕、毎夕〔東京毎夕新聞〕、やまと〔新聞〕などそれぞれ近くの民家を借入れ、地方紙で最も馬力をかけたのは、新愛知、名古屋〔新聞〕の二紙で、地元の京都日出〔新聞〕、京都日日〔新聞〕が激しい競争をやったのも蓋し当然であつたろう。…各社が今度使った費用は相当多額に上っているが、それがどれほどかという、何を云っても大朝、大毎両者の五十万円であろう。無論、大朝と東朝、大毎と東日とを合併しての話であるが、どちらの社かは知れないが、四十五万円の予算の所足りないでもう五万円増したという確かな話も聞してい

るから、五十万円は決して根拠のない話ではない…」<sup>17</sup>。

さらに、かかる莫大な投資のもとにマスメディアが大々的・日常的に流してゆく、世俗的な皇室報道は、皇室のスターとしての人気を、全国規模でいっそう高める効果を生む。たとえば、1928年1月に松平節子が秩父宮の妃に選ばれたさいには、彼女が平民出身でかつ端正な顔立ちをしていたこともあって、節子についてのさまざまな情報を、8カ月以上にわたってマスコミ各社が競って報じつづけた結果、民衆からの多大な人気を彼女は得るところとなる。次章に詳しく見るこのブームなどは、当時のマスコミによって皇族がスターに仕立てあげられた、典型例といえるだろう。

## 2. 1930年代中葉まで

### 2.1. マスメディア・民衆の動向

続いて、30年代の状況。新聞雑誌界の動向からおさえてみる。

30年代にも、新聞界の市場拡大は、かわらず続いてゆく。『大阪朝日新聞』は1932年に、『東京朝日新聞』は1936年に、それぞれ100万部に到達する。『東京日日新聞』が100万部を突破したのは1930年。31年にさいど桁を落とすものの、32年以降は一貫して100万部台をキープしている。そうしてこの二社に拮抗するほどの急成長を30年代に遂げたのが、娯楽・スポーツを得意とし、「東京を中心とする都市化社会の中・下層階級の間に読者を伸ばし」た『讀賣新聞』で、満州事変をはさんだ1930年と1936年の比較でいうならば、53万というひじょうな部数増を同紙は達成する（内川編 1976:292）。他面、『時事新報』が1936年に『東京日日新聞』に吸収され、あるいは『国民新聞』が33年に『新愛知』の経営下にはいるなど、整理・合併も進んでゆくのだが、総体的に見るならば、この頃の新聞市場も、順調に成長し続けていたと捉えてよい。1934年には、主要各紙の総計は1日平均約1080万部に到達し、「対人口普及率も6.16人に1部、世帯構成人数を仮に平均5人とすれば1世帯に1部弱の割合にまで高まっている」（内川編 1976:294）。

雑誌界はどうか。1927年と1936年の比較でいうと、この10年で、雑誌の年間売上総部数は1.71倍に伸び、36年のそれは6800万部となっている。「その主役はやはり婦人雑誌で、少なくとも1934年〔昭和9〕<sup>マア</sup>頃までは断然群を抜いている。この年の婦人雑誌の年間売上部数は2000万部に迫って」いたという。『キング』『日の出』を始めとした、「大衆



娯楽雑誌」の人氣も急上昇し、1935 年時点で、その類別年間売上部数は 2000 万部を突破する（内川編 1976:336-7）。ここでは、田中治男の示した、大手雑誌取次店・東京堂のデータから、代表的な雑誌の 1 号平均部数を確認しておこう。1935 年の新年号において、同社の取扱数が 10 万部を超えた雑誌のそれである。『キング』の 59 万部強を筆頭に、『主婦之友』55.6 万、『婦人倶楽部』40.6 万、『少年倶楽部』34.1 万、『幼年倶楽部』28.9 万、『少女倶楽部』21.8 万、『日の出』18.5 万、『講談倶楽部』18.2 万、『婦人公論』13.4 万、『富士』12.1 万部と続く。「出版社の印刷実数はおよそこの倍数強とみていい」というから、1927 年の警察記録のそれを、この 10 誌だけで軽く凌ぐ状況が、30 年代中葉には現れていたわけだ（田中 1975:281-3）。

その 30 年代に至ると、新聞雑誌界総体の順調な成長とは反比例して、皇室報道の世俗的な色彩は、少しく抑えられてゆく。わけでもこの指摘がよくあてはまるのは、昭和天皇関連の報道にたいしてである。すなわち満州事変（1931 年 9 月 18 日）周辺を契機として、以前の彼をめぐる報道のもっていた世俗的傾向というのは、大きく薄まってゆく。たとえば彼の余暇（生物学研究など）を撮影した写真や、リラックスした姿を捉えた写真——ヨリ具体的にいうとかれの笑顔・背広姿の写真、妻・子ども・弟宮らとともに収まった家族写真など——が、30 年代の新聞雑誌から急速に姿を消しているように（無論、完全になくなるわけではないが）。

記事のほうでも、一定の変化が看取される。たとえば 20 年代のマスコミは、昭和天皇の生物学研究の様子をしばしばとりあげたことで知られている。行幸先での生物採集の様子が、新聞各紙によって連日大々的に報じられてゆくケースも、20 年代後半には確認された（右田 2004）。たいして 30 年代にはいると、天皇がこの趣味に興じる姿を、マスコミが大きくとりあげる事態は、次第に霧消するところとなる。また、その摂政時代には、気軽な冗談や親しみやすいかれの発言が、マスメディアをつうじさかんに紹介されていたのにたいし、30 年代になるとこの類の報道というのは、稀少なものとなってゆく。

もっとも、このトーンダウンというのはあくまでも、20 年代と比較してのことである。総体的に見た場合、皇室報道の世俗的な基調とは、30 年代にはいっても、かわりなかったといつてよい。以下では時系列的に、日中戦争直前までの皇室及び皇室報道をめぐる状況を、軽くおさえることとする。

1930 年には高松宮宣仁と徳川喜久子の結婚。婚姻の内定した 1929 年から既に、喜久子が新聞・婦人誌の注目の的となっている。「この頃の喜久子姫 女中さんとお台所仕事まで

平民的な御日常」(1929年2月24日付『東京朝日新聞』)。「喜久子姫の日記の一節」(1929年4月13日付『大阪朝日新聞』)。「エプロン姿の喜久子姫 一色の別邸にゆかしい御修養」(1929年4月25日付『東京日日新聞』)。「高松宮妃殿下とならせられた徳川喜久子姫の御修養」(『主婦之友』、第14巻第3号、1930年)。

1929年には孝宮和子が、31年には順宮厚子がそれぞれ誕生。爾来、北原(2001)の指摘するごとく、正月には、照宮をくわえた三内親王の集合写真、あるいは天皇・皇后による愛育の様子や姉妹愛を伝える記事の掲載が、新聞界で恒例となってゆく。

「御両親両陛下の御慈愛ですくすくと御成育の照宮さまは〔数えで〕お九つ、孝宮さまはお五つ、順宮さまはお三つの嬉しいお正月をお健やかに迎えさせられた、…孝宮、順宮さまは宮城で童謡レコード、積木などで、お仲よく殊によちよちお歩きの順宮さまは御内庭の鳥、金魚に餌を与えられ〔皇居内呉竹寮に別居する〕照宮さま御参殿の際は『お姉さまお姉さま』とお慕い遊ばされお可愛い盛りであらせらる」(1933年1月1日付『東京日日新聞』「お可愛らしい内親王さま」)。

もっともかかる反面では、男の子の一向に生まれないことに、重臣層は無論、民衆・マスメディアも、次第にじれったさを感じてゆく。たとえば皇太子をもうけるために宮中で行者をやとっているとか、弟宮たちが産児制限しているとかの噂が、巷間にながれていたように(中野[1953]1996:205)。皇太子誕生の数日後、『東京朝日新聞』の投書欄に発表された、「畏くも御親ら一夫一婦の制をじゅん守し給うて今日の栄光を待ち望ませ給いし両陛下」という一節も(1933年12月27日付『東京朝日新聞』「鉄箒」)、語るに落ちたというもので、田中光顕による側室制度復活の進言が、民間にも洩れていたことを裏書きする。

民衆がかく面白半分に、この世継ぎ問題に関心を懐く一方、マスコミのほうは、皇男子が誕生するか否かが、自社の収益と直截的に連動したから、ヨリ切実に男子の誕生を願っていた。『東京日日新聞』宮内省詰記者の回想から。

「〔皇后の出産にさいしては〕いつも『こんどこそは——。』と皇太子御誕生を目標に、号外用、朝夕刊用の予定稿をととのえ、しかも皇太子用、内親王用といくつも用意して待機している関係上、『なんだ、また内親王か。』といった調子で、側近たちも張りあいぬけの体でもあった。第四回目の順宮御懷妊後にわが家には三回目ではじめて長男が生まれた。こんどは、いよいよ皇太子の御誕生と張りきり、長男には皇后さまの良子女王の『良』の字にあやかり…“良一”と名づけて、皇太子御誕生をひたすらお待ちしたが、それがまた内親王で内心がっかりしてしまった」(藤樫 1958:33)。

孝宮の誕生した 1929 年 10 月 1 日、東京放送局が「《親王》殿下御降誕」とラジオで報じてしまい、アナウンサーを含め多くの関係者が処分されたのも<sup>18</sup>、この頃のマスコミ関係者の懐いた苛立ちの発露でなかったか。

待望の皇太子の誕生は、天皇・皇后が結婚式を挙げてから殆ど 10 年を経過した、33 年 12 月 23 日のこと。待ちに待っていたマスメディアは、ここぞとばかりに騒いでゆく。満州事変から既に 2 年を経過、右翼テロも頻発する最中にありながら、きわめて大規模な「お祭」に、この慶事を仕立てあげてゆくのである。その始まりのもようを、先の藤樫記者の証言から見ておくと、

「〔1933 年 12 月〕二十三日のまだ暗い午前五時でもあったろうか、『〔皇后が〕ただ今御産殿に』の同報電話があった。社内で泊まり込みの連中はその非常ベルにバネ仕掛けのようにハネおき、私ども宮内省組は…早業で宮内省へ駆けつけ、〔同省がマスコミに用意した〕もっとも有利な電話を確保した。〔他の〕各社は十分以上も遅れてきたので、地下室の電話争奪戦に大騒ぎだった」。そして、親王が誕生したとの正式発表が宮内省によってなされると、「三十数名の記者が”皇太子”に歓声をあげてとびあがった。細い階段に殺到して転がる者、合言葉でどなっている者、階段ごとに口頭リレーなどたいへんな騒ぎである。各社は秘術をつくして一分一秒を争うものすごい号外戦であった」（藤樫 1958:34）。

続けて、朝日新聞社の社史から。

「〔宮内省による〕ご誕生発表と同時にまず第一号外を、ついで新聞二ページ大の第二号外を発行し、各地の販売店は道ゆく人に、それらの号外とともに、慶祝用の紙製の朝日新聞社旗をくばった。…東朝〔東京朝日新聞〕も大朝〔大阪朝日新聞〕も社屋を国旗でかざり、東朝は屋上に大きな鯉のぼりを押し立てて朝風に泳がせた。当日発行の夕刊は『萬歳、親王御誕生 萬々歳、皇太子御誕生』ではじまる『賀詞』を掲載し、同時にこの日に生まれた全国の男の赤ちゃんに奉祝記念銀メダルを贈るなどの社告を発表した。…東朝は東京市と共催でご命名式当日の十二月二十九日を中心に前後三日間にわたって、十五台の花電車と四十八台の乗用装飾電車を市内全域にわたって運行させた。花電車の装飾は、五台を高島屋、十台を松坂屋両百貨店が担当し…た。ご命名当日、〔東京朝日新聞社〕航空部は…民間機二十九機による奉祝編隊飛行を『帝都上空』でおこなった。参加機は『奉祝 東京朝日』のネット・サインや吹き流し、鯉のぼりをひいて羽田と芝浦の飛行場をとび立って上野上空で編隊を組み、銀座、麻布、新宿、上野の巡路で紅白の奉祝ビラを散布しながら約一時間にわたる奉祝絵巻をくりひろげた」（朝日 1990-95:大正・昭和戦前編:425-6）。

レコード会社や百貨店も便乗する。

「皇太子殿下御降誕奉祝 童謡 皇子さま（二十八日発売） 独唱 御誕生御誕生（近日発売） コロムビアレコード」（1933年12月24日付『東京朝日新聞』広告）。

「祝 皇太子殿下御降誕 お子様方の奉祝歌 北原白秋謹作詞 中山晋平謹作曲 皇太子様お生まれなった 西条八十謹詩作 中山晋平謹作曲 可愛い皇子さま （一月十五日全国臨時発売） ビクターレコード」（1934年1月28日付『讀賣新聞』広告）。

「二十三日より二十七日まで皇太子殿下の佳辰を寿ぎて高島屋奉祝デー 奉祝記念御婚礼衣装大特売会 御子様用品デー 期間中三階の御子様用品及び五階にて金一円以上御買上げの御方様に記念おみやげ菓子呈上 新学期用文房具類大奉仕（五階） 新入学生用服装品大奉仕（五階） 春の流行子ども帽子、スウェーター（五階） 雛人形は高島屋へ（八階） 奉祝の春にふさわしく一段と華やかに 特性の内裏雛、変り雛、その他お道具類一切を美しく陳列」（1934年2月23日付『讀賣新聞』広告）。

付言しておく、日本放送協会「謹選」の奉祝歌でもある上記「皇太子様お生まれなった」の白秋の詞は、前出「秩父の宮さま」と同様きわめて軽く、「莊重乃至は敬虔の情の微塵も含まれていない」と、右翼雑誌で糾弾されたほどだった<sup>19</sup>。

1935年には次男・義宮正仁が誕生。2年前ほどのもりあがりはなかったが、それでも皇室の安泰を、マスコミは挙げて祝福する。その翌年の2月26日には、陸軍皇道派によるクーデタが発生。天皇が声を上げて嘆き悲しんだという話（野上 1986-91:第五巻:51）以上にこのとき噂されたのは、秩父宮の皇位篡奪計画である（井上 1995）。「二・二六が終って、ある時期から秩父宮は、『みんなの宮さまタララッタッタッタ』という陽気なリズムでうたわれる存在ではなくなって、ひそかに不気味な噂とともにその名が囁かれることになった」（安岡 1984:46-7）。

同様の噂がその後も全国に流れ続けていたさまは、特高の不敬事件記録にも確認可能であるのだが<sup>20</sup>、秩父宮人気はしかし、安岡章太郎の回想と違い、事件後もそうは衰えを見せていない。少なくとも、マスコミ側にとって、その商品価値は下がっていなかった。翌1937年3-6月、英国国王戴冠式（先のエドワード8世の恋愛騒動にともなうそれ）へと秩父宮夫妻が向ったさい、きわめて大規模な報道活動が展開され、二人の睦まじい様子を捉えたスナップを筆頭に、世俗的なモチーフの記事・写真が、連日のごとく報道されていたことは、その何よりの証左となる。陰鬱な事件・時局などは無縁のごとく、マスメディアの位相では、「明るく調和した」天皇家の記事・写真——大衆天皇制的なそれが、日中戦争の直

前に至るまで、頻繁に掲載され続けていたということだ。

そうして、30年代中葉に至ってもマスコミが、短期的な時代思潮とは乖離した、明るく世俗的な皇室報道を大量に流し続けた背景とは、ここでも読者側のニーズに帰されるべきである。じじつ、天皇家にたいする親しみや憧憬にもとづいて、皇室報道の「不遜」な読解をなしてゆく事態とは、もはや都市／農村を問わず、全国的に見られる現象となっていた。

前章の中で、東京社の『皇族画報』の人気振りについて触れてみた。この日本最初の皇室写真集が発行された当時（1908年）、「地方の読者の中には、『皇族画報』を披く時には、先ず戴いてから開く者が少くな」かったと、窪田空穂は回想する（窪田[1934]1965:169）。都市部とちがい、地方では、明治初期に見られたような皇室写真にたいするマジカルな信仰が、かなり後まで生きていたのだろう。この窪田の回想は、明治後半の浅草の風景を描いた、金子光晴の次の文章とも一致する。

「花屋敷の家に面した側に、奥行きが浅い、小さな出店が四、五軒並んでいて、そこだけに、天皇や、天皇が皇后と並んだご真影、あるいは皇族一統がうちそろった掛軸や額を売っていたものだ。ご真影とは言っても、写真ではない。吸取紙などを巻いて筆のようにした擦筆で、写真めかしく書いたものに、あくどい彩色をして、石版擦りにしたものである。…浅草というところは、むかしから、赤毛布を巻いた、おのぼりさんのあつまってくる場所なので、その手あいも国のみやげに、敬いつつしんで買ってゆくため、ご真影はよく売れたものである」（金子[1965]1975:52）。

もう一つ、四国の郡部で育った上林暁の回想から。皇太子嘉仁による高知行啓（1908年）にまつわるそれである。このとき行啓を見物した「伯父の家には、皇太子殿下の軍服姿の肖像を〔お土産に〕買って来ていた。それを筒っぽに入れて、神棚に大切に祭ってあった。従兄と私は誰もいない留守に、こっそり下ろして来て拝んだものだった」（上林[1973]1978:321-2）。都市民衆のあいだに、新聞雑誌の皇室写真を読み捨て、消費する態度が一気に拡大した1900-10年代にあっても、地方の人々はいまだ、錦絵・石版画の時代を生きていた。

だが、窪田・金子・上林の回想から20年以上経過した1930年代の頃になると、地方農村でも多くの人々がそうした信仰を捨ててしまい、新聞雑誌の皇室写真をスターのそのように眺め、消費してゆく受容形態が、横行するようになっていた。1935年、海外の人類学者が熊本県須恵村で行なった有名なフィールドワークのノートには、この村の女性たち

が、皇室写真をどのような仕方で扱い、読んでいたかを示す興味ぶかい記述がある。

「私〔人類学者〕はその〔天皇・皇后の肖像写真が入った〕掛軸をもう少しの間誉めてから、…私は『なぜ、皇后はいつも着物でなくドレスを着ているの』と〔村のある女性に〕たずねた。〔その女性は〕『なるほど、たしかにドレスば着とる。なんででしょう。皇后の胸は突き出とってて、首は伸びている。なんて長か首でしょう。』私たちは、二人して笑った。…彼女は、『皇后の髪型と開いた襟ばごらんない。皇后ばあんたのような格好ばしとるじゃなかね』と叫んだ。…天皇崇拜とは、こんなものなのだ」(Smith and Wiswell 1982=1987:66)。

「雑誌のなかの変った物の写真…などは、女たちの興味をひく。…女たちは天皇の写真をいつもよく眺め、賞賛する。『なんて美しか馬にお乗りになっていらっしやるとでしょう』と彼女たちは声をあげる」(Smith and Wiswell 1982=1987: 70-1)。

次に、同じく九州の地方農村で少女時代をすごした河野信子による、同時代の回想から引こう。

「どの家にも天皇と皇后…の写真が、鴨居をかざっていた。ところがこれは、一括して村じゅうで購入した代物であって、特別に思いをこめて買いもとめたものではない。だから神棚や仏壇には手を合わせても、写真を拝みはしない。他人が見ているわけなし。…だから天皇の写真をかかげた新聞紙は、厠に切って重ねてある」(河野 1977:112)。

ここに至り、官製の国体イデオロギーは、その最も頼みとした農村部の人々にたいしても(久野・鶴見 1956:166;神島 1961)、実効性を次第に失しつつあった。事実、少し下った30年代後半から40年代前半の不敬事件記録は、中央から遠く離れた農村部の人々のあいだでも、世俗的な皇室観あるいは皇室をめぐるゴシップ趣味が拡大しつつあったことを、明白に物語ってくれている。

「〔1940年6月－1941年1月の間、北海道富良野村の教員である被疑者は〕受持児童に対し、皇太子殿下(今上陛下)ママが御幼少の折御用邸より御付の役人の気づかぬ間に密に御遊出なされた、御付の役人は大変驚いて御探し出された。すると殿下は街の果物屋から無断で『りんご』二箇を御持ち帰りになった。云々と不敬なる言辞を弄す」(内務省[1938-44]1973:昭和16年6月分:22)。

「〔1941年6月〕被疑者Sは…島根県能義郡安来町…製材工場に於て同町Tと対談中同人に対し…日本にも未だ赤があるだけな、大きい声では言われぬことだが、秩父の宮も赤の系統だけな、昔でも南朝と北朝とあった様なものだ…と不敬の言辞を弄す」(内務省

[1938-44]1973:昭和 16 年 11 月分:17)。

30 年代を「九州の片隅の農村」で過ごした古庄ゆき子は、家族や村の大人たちが、「教育勅語」の淫猥な言い換えや、「天皇にまつわる…卑猥な話をしてはふざけて」いたと証言するが（古庄 1977:95）、かかる猥談趣味もまた、当時の全国の郡部・農村部で展開されていたものだった（内務省[1938-44]1973）。

山本武利によるならば、1930 年代の大都市近郊の農村部世帯の新聞購読率は、既に 5 割でいどにまで及んでいる（山本 1981:239）。上記須恵村の場合には、新聞を購読する世帯は少数派を構成したものの、「多くの家が絵入りの雑誌を購読していた。もっとも多いのが『家の光』で、つづいて『婦人倶楽部』『主婦之友』『キング』『俳優』その他のいろいろな映画雑誌だった」。そうして「村人の窮屈な世界では、大衆雑誌は映画と同様、美人、美男子、有名人の世界に向かって開かれている、とても重要な窓」となっていたという（Smith and Wiswell 1982=1987: 64-7）。マスメディアの拡大化にともない、農村部民衆の日常にも、天皇家を特別視するには、あまりにも大量で世俗的にすぎる皇室写真・記事が、流入し始めていたということだ<sup>21</sup>。かかる状況下、農村部民衆のあいだに世俗的な皇室観、あるいは不敬な皇室報道の読解形態が一定ていど浸潤したのは、当然の帰結ではあった。読者のニーズに応じてマスメディアが流す世俗的な皇室記事・写真を媒介に、民衆が天皇家にたいする好奇心や憧憬をいっそう高めてゆく。かかる相互作用は、30 年代に至ると、都市に限られない事象となりつつあったといつてよい。

## 2.2. 政府の対応

続けて、20 年代後半から 30 年代の政府の対応をおさえておく。

20 年代前半に実施された皇室報道への諸規制緩和は、開放政策終息後も、一定ていど維持されてゆく。先にも触れた点である。天皇家のスナップ撮影は解禁のままにおかれていたし、宮内省によるマスコミへの種々の協力も、30 年代中盤まで定期的の実施されつづけた<sup>22</sup>。1927 年、宮内省にマスコミ対応部門（新聞班）が設置されているという事実も、これを象徴的に物語ろう<sup>23</sup>。

繰り返すと、20 年代後半以降、政府の民衆教化活動は、従前の絶対主義的な路線の徹底化へと、さいど針を向け始めていた。「国体ヲ変革」しようと図る個人・団体への恣意的な国家暴力を正当化した 1925 年の治安維持法制定とは、その最たる現れではあった。かかる

明瞭な方針転換が図られていたにもかかわらず、皇室報道への姿勢に限っては、開放政策期のそれが、20年代後半以降も一定で継承されてゆく。皇室報道のもつ政治的有用性を、開放政策後の支配層も引き続き認知していたということに、それはほかならぬ。たとえば「昭和大礼」<sup>24</sup>のさい（1928年11月）の政府のマスコミ対応。

「京都府庁内に事務所を設けた大礼新聞団〔大手各紙による合同報道組織〕…にたいする大礼使〔政府側のマスコミ対応係〕の態度は懇切を極め、これを前回の御大典〔1915年〕に比較すると、隔世の感があったという事である。時代の推移とともに、新聞が諒解され、新聞がヨリ良き地位を与えられて行くという事はお互に愉快的な事である。〔式に先立つ11月〕八日予め紫宸殿其他式場の参観を新聞団に許したのも大礼使の厚意の一つである。それに依って新聞団は十日御即位式の御儀を報道する為に非常の便益を得た」<sup>25</sup>。

皇后・皇太子妃の出産時にあっても、宮内省は、大手新聞通信社側と出産報道にかんする協定を定例的に結ぶようになっている<sup>26</sup>。もっとも、マスコミ側の過剰な報道活動を抑えるという意味合いも、ここには多くあったようではあるのだが。良子皇太子妃の最初の出産時のそれ（1925年）を、例示しておこう。

「皇孫殿下の御誕生に各社は非常な意気込で目下之が速報に関して各社夫々準備中であるが此の結果宮内省と新聞社との間には御誕生発表に関し左の如き協定が行われた。一、東宮妃殿下の御産氣と同時に東宮職より宮内省に電話で通告し宮内省書記官は直ちに記者団に其の旨を発表し、一方赤坂御所に於ても宮内省へ電話したる後記者団へ内報するが、是には絶対に各紙とも号外を以て発表すべからざる事、及び『宮内省発表』と明記すべからず。二、御誕生と同時に東宮職より宮内省に電話で通知し、宮内省書記官は同省高等官食堂に於て、御誕生の時間、親王内親王の別を口頭で発表し、一方赤坂御所に於ても宮内省へ電話したる後記者団へ発表するが、発表と同時に御所内の電話は使用を厳禁する。又自動車の御所内出入は午後四時迄とする事」<sup>27</sup>。

しかるに注意したいのは、この頃になると、開放政策期のごとき皇室報道への半無差別的な協力体制というのが、政府から霧消しているという点だ。これにかわって、皇室の神格化推進に適合的な内容の皇室報道を流すよう、マスコミ側を「操作」する試みを、当時の支配層は本格的に開始している。換言すると、当時の支配層が皇室報道に認めた政治的有用性とは、この媒体を、自身のイデオロギー政策貫徹のための媒体として活用するという、その一点にのみ存在した。

たとえば宮内省の対応。当時の同省による皇室報道への対応は、「選択的協力」として特



徴づけられるものである。その最も端的な事例は、昭和はじめの侍従次長・河井弥八の刊行日記（1926－32年）に見いだせる。河井は当時、皇室報道関連の業務にしばしばあたった宮廷高官で、この日記にも、同業務にかんする記述が数多く書きとめられている。その記述にもとづけば、当時の侍従次長とその周囲による皇室報道への対応振りは、次のごとく要約される。皇室の佳節や重大なイベント時には、上記のごとくマスコミとの密接な協力関係を築いてゆく他方（高橋他編 1993-94: 第一巻:173;第二巻:191-2）、天皇家の内情や私的な皇室写真のマスコミ流出にたいしては、強い警戒と不快感を示してゆくというものだ。後者の事例をいくつか引くと、

「〔1928年10月〕実業之日本社…増田義一氏の代理来訪し、聖上御日常の御模様を謹話せんことを依頼せらる。之を断る」（高橋他編 1993-94:第二巻:184）。

1929年4月15日、『東京朝日新聞』が、観桜会での天皇一家の睦まじい余暇の様子を報じた日の記述。「両陛下御花見の事、新聞紙上に登載あり。…宮内省の対新聞社綱紀、弛緩せるが如し」（高橋他編 1993-94: 第三巻:63）。

「〔1931年10月22日〕夕、朝日新聞岩田豊秋氏来訪す。照宮殿下御養育方針を問う。答えず」（高橋他編 1993-94: 第五巻:181）。

かかる宮内省の対応振りは、当時の宮廷記者によっても、適切に表現されている。

「昭和の初期、これは…一連のファシズム方程式が着々として、組み上げられはじめたころである。そのためには『天皇神格』化が行われなければならぬ。皇室のことは『おそれおおい』という言葉で、雲の上の彼方に押し上げる必要があった——とはいうものの、国民から、その目のとどかないところに、皇室をへだててしまったのでは効果がない。…つねにあがめ奉らせておくためには、〔宮内省は〕いわゆるマス・コミに、ときどき、ニュースの水滴を落とし、適当に、国民感情をしめらせておく必要があった」（高木 1962:143-9）。

続いて、皇室報道の検閲担当たる、内務省の対応から示そう。同省の基本姿勢とは、内部資料『出版警察報』第90号（1936年）所収の皇室報道取締マニュアルに、最も明瞭に語られている。以下では同資料を中心に、その統制を確認してゆく。

まず、皇室写真の取締状況から。繰り返すと30年代に至っても、天皇家のスナップ撮影・公開は、解禁のままにおかれている。但しじっさいには、1898年の内相諭告第二項「御肖像ハ総テ粗造ニ流レ不敬ニ渉ルベカラズ」の拡大解釈を検閲官が頻繁になすことで、大きな規制が皇室写真の掲載には課されてゆく（内務省[1928-44]1981-82:第90号:2-5）。中でも当時の内務省が厳格な規制をしいたのが、昭和天皇の写真であった。たとえば20年代前

半のマスコミが、かれの笑顔の写真を数多く公開し得たのにたいし、20年代後半以降には、「この種の御尊影は…陛下の尊厳を冒瀆」するとして、天皇の笑顔は発禁の対象に指定される。1935年、東京駅に愛新覚羅溥儀を迎えた瞬間の、かれの笑顔のスナップが、地方紙を中心に掲載されたさい、大規模な発禁処分が実施された（19紙が処分をうけた）ことは、よく知られているだろう（内務省[1928-44]1981-82:第80号:3-35）。また彼は猫背だったことで有名だが、その猫背姿の写真も発禁の対象になっていて、この頃の『東京朝日新聞』の写真修正係には、天皇の姿勢を直す名人がいたと、同紙記者は回想する（門田 1963:131）。30年代にはいつてから、昭和天皇関連の写真・記事の内容が、世俗性・娯楽性を次第に失っていった背後には、明らかにこの統制強化がきいていた。

しかもこの時期になると内務省は、マスコミによる皇室のスナップの「撮影」にも、ふたたび大きな負荷をくわえ始めている。たとえば1930年の段階で、天皇・皇族のスナップ撮影にあたっては、かれらから10米以上離れるよう、マスコミのカメラマンは義務づけられていた（内務省[1936]1993:57）。摂政時代とは違い、間近から昭和天皇の姿を撮影することが、至難の業となっていたことは、当時の報道カメラマンも証言しているところである（島田 1955）。

くわえて当時の同省は、皇室写真の掲載位置などにも、厳格なチェックを施し始めている。「御肖像に就いては…その位置形状等が不敬に渉る場合は之を取締ることがある」（内務省[1928-44]1981-82:第90号:5）。取締マニュアルはその具体的事例として、「御肖像の裏面」に卑俗な写真を掲載したもの、あるいは「御写真を雑然と一般の写真の中に」混ぜた構図のものを、処分の対象に挙げている。

かかる規制の強化は当然、マスコミの掲載する皇室写真への行政処分の頻発という形でも現れる。事実、1935年度では、実に207件もの皇室写真が内務省から処分を下された（内務省[1928-44]1981-82:第90号:3）。かれらのスナップ撮影・掲載はかわらず認めつつも、皇室写真にたいする政治的規制は、他方で強硬なものとなりつつあったといってい。

皇室記事にたいしても、20年代後半以降の同省は干渉を頻繁かつ神経質になし始める。その最大の現れが、皇室記事の字句上の間違いを、重大な過失として内務官僚が捉えるようになった点である。「〔皇室報道の検閲にさいしては〕皇室に関係ある文句の誤記誤植及用語の不適當なるを取締る必要がある。…事皇室に関係する文字の誤植は仮令、些細な事でも等閑に付する訳には行かない」（内務省[1928-44]1981-82:第90号:19）。「陛下」を「階下」と誤記する、そのていどのミスで、新聞紙法違反に問われる可能性が、当時のマスコ

ミには生じつつあった。事実、皇室報道中の誤字脱字を理由に出版警察が新聞雑誌社に処分を下した事案は、1935 年度だけで 173 件も起きている（内務省[1928-44]1981-82:第 90 号:16）。

そうして上記のごとき当時の内務省の執拗な監視・干渉の展開は、右翼の皇室報道糾弾運動とあいまって、マスコミ各社が、皇室報道の自主的なチェック体制を急速に確立する、大きなきっかけとなってゆく。たとえば朝日新聞社では、20 年代終盤から、「宮廷記事の扱いは特に慎重を期し、『宮廷注意』の判をおし、活字のこぼれを防止するために『天皇陛下』『皇太子殿下』などの連字を用意するようになった」という（朝日 1990-95: 資料編:156）。敬語表現も同様である。皇室記事の執筆にさいしては、「不敬にわたらぬように」と過剰な配慮をマスコミ側が払った結果、同じ記事中で「御」や「あそばされ」を濫用せざるを得なかったと、当時の『東京日日新聞』宮内省詰記者は証言する（藤樫 1958:41）。

30 年代において、都市消費文化の空間的弁別を超えた拡大にともない、皇室写真を読み捨ててゆく受容態度が、農村部でも普及しつつあったことは見た。しかるに 30 年代に至っても、政府はそうした態度を決して認めようとしていない。むしろ、文部省・内務省を中心としたその抑止政策は、さらに活発なものとなってゆく。1931 年の文部次官が、大学・高等学校から幼稚園に至る、同省のほぼすべての管轄施設にたいし、「天皇皇族ノ御影ノ奉掲セラレタル新聞雑誌等ノ…取扱方ニ付〔生徒に〕特ニ厚ク注意ヲ加ウル様」、指示を発している事実は、その端的な証左となるだろう（文部省[1931]1996:157）。この時代の政府はむしろ、マスコミの皇室写真（とその読者）にたいし、学校の「御真影」儀礼に倣うよう、いっそう厳格な形で強制してゆくのである<sup>28</sup>。

以上確認したように、1920 年代後半以降の政府はふたたび、皇室報道への規制的な態度を次第に強めてゆく。とくに内務省は、神格化コードにもとづく厳格なチェックを、天皇家関連の記事・写真にたいし課し始めていた。それは一見、1910 年代以前の取締中心主義が、いっそう強化された形で再来したかのごとき現象ではあった。だがここで着目すべきは、検閲の担当である内務省が、皇室報道をめぐるのは、「発売頒布禁止」処分の発動を、意図的に抑制していたという点だ。たとえば 1935 年度の事例で言うと、問題となった 207 件の皇室写真の内、186 件は、過失を犯したマスコミに、事後的な注意を行なうに措かれている。皇室記事の誤植でも、64 件中 62 件は同様の処分で済まされた（内務省[1928-44]1981-82:第 90 号:3-16）。すなわち内務省が問題視した当時の皇室報道の大半は、そのまま読者のもとへと届けられているのである。

先の出版警察用マニュアルでは、この点につきこう書いてある。皇室関連の写真・記事にかんしては、とくに悪質なものでなければ、発禁や削除処分に付さず、注意処分あるいは改訂の警告でいどにとどめることに決めている。それは、過誤を犯したマスコミへの事後的指導を徹底することで、関係者に皇室尊崇の念を涵養し、かかる事態の防止に、彼らをして自発的にあたらせるためである。したがって、「〔皇室報道〕取締の第一線に当る者も常にこの趣旨を体して単に始末書を徴するのみをもって満足せず、〔関係者に〕懇に訓告して将来に涉って再び過誤を繰り返さない様に指導しなければならない」と（内務省[1928-44]1981-82:第90号:19）。

皇室報道への同趣旨の認識は遡って1928年、内務省検閲担当官による警察講習所での講義録にも確認される。「此の種のもの〔皇室写真〕を出版物に掲載し若くは出版物として発行する事は、国民の皇室尊崇の念を弥増せしむるものであるが故に、美風助長の一端となるであろうが、同時に考慮せねばならぬ事は見苦しき粗製品や、取扱の不敬に涉ること…である。而して事態の性質上法や権力を以て強制すべきでなく、寧ろ国民〔マスコミ関係者〕の自覚に待つべきものであるから、警察上考慮を要する事少くないのである」（土屋1928:75-76）。

マスコミによる天皇家関連の報道は、「国民の皇室尊崇の念」を涵養する上での、ひじょうに有効な媒体である。したがって、問題のある皇室記事・写真の場合にも、なるべく発禁処分には付さず、事後的な指導・注意を、過誤を犯したマスコミ関係者に徹底するのが望ましい。これによって今後、かれらが自発的に神格化政策に与する皇室報道をなしてゆくよう導くことこそ、出版警察の任務である。当時の内務官僚は、かかる目論見を明快に語る。それは、不都合な皇室報道の取締・抑制を中心とした1910年代以前の政府の姿勢とも、皇室報道になかば見さかいなく協力することで皇族のメディア露出機会の増大を図った20年代前半の支配層の戦略とも、違った性質のものである。発禁処分の発動を極力控えることで皇室記事・写真の流通を一定量確保しながらも、皇室報道への指導・干渉は以前のどの時代よりも徹底することで、その内容を神格化政策に適合的なものへと「操作」する。かかる目論見を、当時の政府は懐くようになっていた。先に見た、宮内省による皇室報道への「選択的協力」もまた、同様の戦略にもとづいた対応にほかならない。この政治技術の誕生を考慮するとき、皇室報道をめぐる当時の内務省の執拗な干渉は、たんに国体観念に冒された検閲官の仕業としてでなく、かかるマスコミ操作を達成するために実施された政治プログラムとして、捉えることが可能だろう。

ここにおいてマスメディアの皇室報道は、神格化政策を達成する上での不可欠の政治媒体として、政府に認識されるに至る。換言すれば、1910年代以前のごとく、皇室報道の流布を唯に抑制することは、むしろ天皇家の神格化推進の妨げになる愚策として、20年代後半以降の支配層は思考し始めていた。だからこそ当時の皇室報道の大半は、多少の瑕疵があっても見のがされ、民衆のもとに届けられていったのだった。マスメディア界の巨大化を考慮するならば、ある意味それは当然の帰結ではあっただろう。

とはいえ、天皇家をシンボルとした民衆統合・動員を能率的に達成する上での不可欠の媒体として、皇室報道を捉えるこの政治認識の登場は他面で、政府の目論見と離反する、世俗的な皇室報道が大量に流されてゆく事態を、看過してしまう結果としてもはたらいた。当時の新聞雑誌社が、内務省の頻繁な干渉・指導の結果、皇室報道に一定の配慮を行ない始めていたことも確かであるが、その自主規制とは多くの場合、誤字脱字や敬語表現、掲載位置等、形式的な部分にかぎられた。事実、既に論じてみたように、この時期も、無数の世俗的な皇室報道が、巷間には流れ続けていたのだから。天皇家のメディア露出機会を保持するため、発禁処分の実施を成る丈抑えてゆく、当時の皇室報道統制のありようは、神格化政策と齟齬しかねない、世俗的な皇室報道の大量流布を許すという、矛盾した結果をも生じさせていたのである。

以上の点を捉える上では、当時の出版警察の有した発禁の遂行能力——当該記事・写真の流布を現実に阻止する執行能力が、じつのところ相当にかぎられたものだったという事実も注意される。1936年度の警視庁による、各月の発売頒布禁止の執行成績を参照してみると、同年12カ月の内で、「新聞」の差押率（差押部数／当該紙の警視庁管下での全発行数）が20%を超えたのはたったの5カ月。最高成績を収めた月間ですら、その割合は44%にすぎない。「新聞雑誌」（新聞紙法の対象となる一般雑誌）の取締も同様で、12カ月中9カ月において差押率が4割を下回るという、低調振りを示していた（内務省[1928-44]1981-82:第90-101号）。とくに日刊新聞の差押にかんしては、その執行が至難の業であること、それゆえに「其の成績必ずしも可良ではない」ことは、30年代当時の出版警察も認めている（内務省[1928-44]1981-82:第58号:110）。内務省が、発禁処分をとおしてでなく、事後の注意徹底をもって皇室報道の操作を図った背景には、そのほうがまだしも皇室報道の世俗化抑制に効果があるという、技術的な問題もあったと想定される。

だから、20年代後半以降の皇室報道統制の強化とは他面、皇室報道の世俗化・商品化の過熱振りにたいする、支配層側の動揺の証左としても解釈されるべきものだ。その最も象

徴的な事例を一つ示したい。東久邇宮が、パリ留学中に関係を結んだ婦人が、彼を追って来日したさい（1927年10月）のエピソード。この二人が「密会」をはたした直後、勤務先の雑誌社に、次のような記事差止通達が来たと中野重治は証言する。「あれは内務省関係だったかも知れぬが、直接には警視庁から届けてきたと思う。それにはこんなことが書いてあった。…『昨日、東久邇宮稔彦殿下が、横浜港へ行って或る外国婦人に会われた。このことを報道してはならぬ。報道してはならぬというこの禁止命令が出たことも報道してはならぬ。』戦旗社員一同声をあげて笑った」（中野[1978]1980:131）。

中野のこの回想は、時期的なズレを少しく含んでいるものの、内務省側の記録でも、同趣旨の差止通達は確かに確認できる。それは、当時の左翼系の雑誌社のみならず、全国の新聞雑誌社に向け通達されたものだった（内務省[1929]1996:73）。かくのごとき差止通達を、内務省がわざわざ実施した背景には、その前日の騒動が関係したようだ。すなわち東久邇宮と女性の再会場所選ばれた当日の横浜港では、警察による厳戒態勢がしかれる中、通信社のカメラマンが二人の再会場面を撮影しようと試み、警察に制止されるという事件が生じていた（門田 1963）。政府が執拗な指導・取締をマスコミにたいし実施しなければ（しても）、天皇家のかかるゴシップすら報道されかねない状況が、20年代後半の日本社会には現れていたということだ。

かくのごとく、20-30年代に至り、支配層は、天皇制のイデオロギー的再生産をめぐるその地歩を、大きく失し始めていた。20年代の官製の意識調査が如実に示していたように、とくに都市部においては、政府の絶対主義的なイデオロギー政策と民心との乖離は既に、決定的なところまで来ていた。あるいは農村部においてさえ、この乖離現象は、一定の広がりを見せていた。かわって、商業主義化と大衆化をいっそう進める民間のマスメディアが、天皇制のイデオロギー的再生産の達成において、ひじょうに大きな役割をはたしてゆくこととなる。1920-30年代の天皇制のイデオロギー的再生産のありようとは、世俗的な皇室報道によって形成された、「スターとしての皇室」にたいする民衆の憧憬・親近感をその支持基盤とする、大衆天皇制的な形態へと、ヨリ大きく舵をきりつつあったといってい

### 第三章 近代「女性」の皇室観

#### 1. 本章の目的

第一・二章では、1890年代から1930年代までの期間において、大衆天皇制的な機制が、日本社会に整備されてゆくあらしを、通時的・段階的に捉えてみた。「スター」として皇室を捉え憧憬し、彼らの情報を積極的に消費してゆく態度の民衆への拡大。コマーシャルイズムにもとづく皇室報道の大量流布（商品化）と、内容の世俗化。天皇制のイデオロギー的再生産の場面への、被治者・マスメディアの能動的参画（その反面としての政府の役割の縮小）。大衆天皇制を構成する、これら一連の基幹的な部分にかんして言えば、近代天皇制のイデオロギー的再生産のありようとは明らかに、戦後の大衆天皇制へと漸次近似する方向へと変容していったと捉えていい。

しかるに、大衆天皇制と近代天皇制がもつ、イデオロギー構造上の相同性とは、上記の基礎的な諸部分にかぎらない。ヨリ詳しく検討してみた場合にも、この両者のあいだには、いくつかの重要な連続性が見いだされる。本章と次章で論じるのは、この細部の連続性についてである。

具体的には、女性層における皇室への憧憬・関心の拡大、それから皇室の私的領域にたいする社会的眼差しの登場という局面に、本章と次章では着目する。松下（1959）とその後継の諸論考によるならば、この二つの局面もまた、大衆天皇制形成の、ひじょうに重要な契機をなしている。言い換えると、皇室観・皇室報道の世俗化とここまで表現してきた事態の、最も中核的な部分としてそれらはある。戦後大衆天皇制の特徴として常套的に挙げられる他の諸事象——皇室の生物学趣味や、「平民」からの妃選りなど——もまた、この二局面に包摂されるべき部分として存在する。その意味でも両者とは、近代天皇制と戦後天皇制のイデオロギー構造上の連続性を測るさいの、メルクマールとしての代表性をもっている。近代天皇制と戦後天皇制の連続性を、この両指標にもとづき捉え直すことで、近代天皇制のイデオロギー的再生産の達成の背景にはたらいっていた近代的諸要素を、一・二章とは別の角度から再考する。これが、第三・四章の目論見となる。そのさいには便宜上、共時的なスタイルのもと、終章で主題的に扱う日中・太平洋戦争期を含めて論じる予定である。

本章では、その内の一つ、女性層における天皇家への憧憬・関心の拡大という局面に、

アプローチを試みる。それは松下の議論を踏み台に、後継論文が展開してきた論点である（井上 1978;村松 1991;吉見 1996）。すなわち松下の明らかとした大衆天皇制には、明らかにジェンダーにもとづく偏りがあると、かれらはいう。大衆天皇制の担い手を、ジェンダーを軸として捉えたとき、天皇家を憧憬する傾向は、女性層の側に顕著に現れる。世俗的な皇室報道の流布という事象もそれゆえに、女性向けの媒体において顕著となる。松下が大衆天皇制の象徴としておいた美智子妃ブームが、まさに女性をその中心的な担い手としたように。戦後の世俗的な皇室報道の代表的な担い手が、週刊女性誌、テレビのワイドショーに求められるという点にかんしても、一定の了解の得られる部分だろう。かかる媒体上のジェンダー差が、1990年代に至るまで、皇室報道の内に明瞭に継続されてきたことも、村松（1991）によって実証的に明らかとされている。

そして井上（1978）・吉見（1996）によるならば、大衆天皇制の担い手に現れる、このジェンダー差は、歴史偶然的要素が生じさせたものではない。皇室にたいし女性層の懐く憧憬・関心は、大衆社会状況が生み出す巨視的社会条件が、彼女らの内に不可避免的に芽生えさせてゆく心性であるという。換言すると、大衆天皇制の担い手に現れるジェンダー差とは、「女性」をとり巻く近代的要素が、大衆天皇制をささえる重要な部分として機能してきたことを示している。

女性と女性向け媒体が、その中心的な担い手となるというこの特徴をめぐっても、戦前の大衆天皇制と戦後大衆天皇制の連続性は、鮮明にあらわれている。一・二章でも少しく示唆されていたごとく、近代の日本社会において、皇室の人々をスターとして憧憬し、かれらに関心を向けてゆく傾向は、男性でなく女性においてより強く出現し、それゆえに、世俗的な皇室報道へのニーズもまた、女性のほうにより大きく生じていた。しかもこの女性層の憧憬・関心の中心にすえられていたのは、天皇家の男性たちでなく、皇后・宮妃らのほうだった。

以下では、一・二章で概観した、戦前期大衆天皇制の形成過程の内に、戦後大衆天皇制と同様のジェンダー差が現れていた事実を確認するとともに、その巨視的背景にたいし考察をくわえてゆく。これによって、近代天皇制と戦後大衆天皇制の、イデオロギー構造上の連続性をあらためて検討するというのが、この章の課題となる。

## 2. 皇室観のジェンダー差



はじめに、近代日本の一般女性が、男性に比して、皇室にたいし憧憬と関心を懐く傾向のヨリ強かった事実を確認したい。

戦前の多数の女性が、皇室をスターのごとき存在と捉え、かれらに世俗的な興味と憧れを懐いたことにかんしては、多数の証言が存在する。管見では、1900-10年代よりこうした傾向は顕著となる。まずは金子光晴による、明治末期の回想から見よう。確認し得た範囲では、上記の女性の心性を示す資料の中で、これは最も初期の部類のものである。

「僕らの少年の頃から、月給取りの妻君連中の話題と言えば、皇族の戸籍しらべで、なんの宮の子供が何人あって、それが何の宮のいどこにあたるとか、異常な興味をもっていて、その話に上越す話がないようであった」（金子 1966: 20-1）。

同様の回想は、谷川徹三や林健太郎によっても行なわれる。谷川は金子と同時代を、林は 1920 年代をふり返り、当時の自分の母親が、皇室の情報にひじょうな関心を懐き、かつ詳しくあったと証言する（谷川 1957: 288; 林他 1989: 284）。

続いて田辺聖子による、1930 年代後半当時の回想。田辺のこの懐旧談は、金子たちの証言を、より具体的な形で示してくれている。

「ことに女たちは、竹の園生のおん栄えの系図についてくわしい。曾祖母、祖母、母、叔母、掛人の老女、女中衆さん、などが集まったりすると、『皇室謹影集』などという写真グラビア雑誌などを見つつ、いつやむともないおしゃべりが活況を呈する。『あの宮サンの妃殿下はナントカの宮から来やはって、このお姫サンはナントカの宮サンへお嫁にいかはりましたんや』『こうつと、明治サンの何番目のお姫サンやったいなあ、ナントカの宮サンへいかはったんは』『明治サンはお姫サン沢山いやはるよってわからしまへんな』『ホンでも、大正サンにぎりっぱな親王サンがぎょうさんお生まれやさかい、よろしおましたことわいな』などと老女達は満足気にうなずき合い、それより若い母や叔母たちは、『そら、別嬪さんでいうたらナントカの宮の妃殿下サンやわ、やっぱり』『いや、〇〇の妃殿下サンおきれいやしィ』などと夢中で語って倦まなんだものである。少女の私は、（ほんまに不逞不敬やな）と思いつつ、むろん興味があるから熱心に聞いている。かつ、オトナたちの熱気につか捲きこまれて、『身内の噂話』を聞くように、『天皇はん』に親昵していくのであった」（田辺 1989: 130）。

上記 4 人の回想はすべて、都市中産階級の女性にかんするものだが、同時代の農村女性、知識人女性、下層労働者階級の女性らにも、同様の心性はしばしば確認される<sup>1</sup>。皇室の人々にたいし、憧憬・関心をよせてゆく傾向は、1900-10 年代以降の女性層の内に、階層を

越えて見いだされるべきものだった。

20 世紀前半の多数の女性が、天皇家の人々をスターのごとき存在と捉え、かれらにふかい関心と憧れを懷いたことは、次の点にも明らかだ。同時期より、かれらの日常や趣味嗜好など、皇室をめぐる世俗的な情報が、新聞の婦人欄や女性誌で頻繁に報じられ始める事実である。その背景には当然、中心読者たる一般女性に、上記のような心性が広く現れたことへの配慮があったと推測される。『讀賣新聞』の婦人欄と『婦人世界』（1906 年創刊）を、例にとって見てみよう。

まずは『讀賣新聞』の「婦人付録」。この婦人欄は、1914 年 3 月－19 年 9 月まで同紙に連載、合計で 24011 件の記事・写真を収めている。その内、皇室関連のものは、1495 件にも上る。

次に『婦人世界』の例を示す。同誌が婦人雑誌界で最も人気を博した時代、1900－10 年代における総発行号数は 194 号。その内、皇室関連記事・写真が掲載されている号は、じつに 158 号だった<sup>2</sup>。

またその内容も、天皇家の神聖性・絶対性を謳った、国体論的な記事は、「婦人付録」『婦人世界』ともに少数である。むしろ、皇室の人々の趣味嗜好や日常等を伝える、世俗的な内容のものが、その多数を占めていた。1890 年代以前の婦人雑誌も、皇室の情報はそれなりに報じていたが、そこでは、天皇・皇族の「聖徳」や公務の様子を簡潔に記すというのが主流のスタイルとなっていた<sup>3</sup>。量のみならずこの世俗性という点において、1900－10 年代以降のマスコミによる「女性向け」の皇室報道は、以前のそれと決定的に断絶する。それは、崇拜すべき人物にかんする情報というよりむしろ、「スター」をめぐる報道としての性格を強く示すものだった<sup>4</sup>。じっさい、当時の多くの女性も、田辺家やあの須恵村の女性たちのごとく、消費や娯楽の対象として、これらの皇室報道を読み扱っていたようだ。たとえば 1922 年、東京のとある高等女学校が生徒に向け実施した、新聞の読解形態にかんするアンケート調査（回答者・170 名）。この調査にもうけられた質問項目の一つ、「興味本位で見る記事」の集計結果を見てみると、同校の女学生たちは、「漫画」（50 票）、「小説」（38 票）、「外国事情」（22 票）につづき、「皇室の御事情」（13 票）を、かかる記事に挙げている<sup>5</sup>。そして、1900－10 年代の新聞・婦人誌界に生まれたこの傾向は、1920 年代以降のマスメディアによって、さらに発展した形で継承されてゆく。この事実は後述の、「節子姫ブーム」において端的に示されることになるだろう。

では他方、当時の男性が懷いた皇室観は、いかなるものであったか。

あの「天ちゃん」という呼び名が、1910年代以降の一般男性のあいだで好んで使われたものだったように<sup>6</sup>、かれらも皇室にたいし、それなりの親近感を有したことは確かである。天皇家の世俗的な情報にも、近代の男性は強い興味を示していた。たとえば1920-40年代の不敬事件記録の中には、皇室をめぐる「不逞」な噂を流したかどで逮捕された男性を、数多く確認することが可能である（司法省[1928]1980・[1929]1979；内務省[1938-44]1973）。また、女性誌と比べれば相当見劣りするものの、『実業之日本』『雄弁』『現代』といった、1900-10年代以降の代表的な男性誌でも、皇室の情報は多く報道されていた。

しかし、同年代以降の男性においては、天皇家を「スター」として捉え、かれらに好意や興味をもつ傾向は、「女性と比較すると」相当に弱かったといっている。女性誌と比べた場合、男性誌の皇室報道の量がかなり見劣りすることは、これを裏づける重要な事実としてある。たとえば『婦人世界』と発行元が同じ男性誌『実業之日本』を、先の『婦人世界』の調査と同期間分（1906-19年）調べると、皇室写真・記事が掲載されているのは全364号中57号。『婦人世界』の調査結果とは、かなりの差が見られる。1900-10年代以降における皇室報道の量的増大とその内容の世俗化に、男性より女性のニーズのほうがはるかに大きく関与していたことは、まず間違いない。

女性と比して捉えた場合、近代日本の男性は、天皇家にたいし好意的であれ批判的であれ、抽象的な形で皇室という存在を把握する傾向が強かった。たとえば、男性「不敬犯」の皇室観においては、その学歴や階層を問わず、左翼主義的なそれが目立って見えている。「大ブルジョア」として、支配層の「カイライ」として、「制度」として天皇家を捉えてゆく形である（司法省[1928]1980・[1929]1979；内務省[1938-44]1973）。そうして司法省作成の記録によるならば、不敬事件の被疑者の多数は、非左翼主義者で占められた。21-28年の不敬犯中、左翼主義者の割合は38%。直接の犯行動機においても、思想的背景（左翼思想以外の思想も含む）を明確に有した事案は、ぜんたいの33%にすぎない（司法省[1929]1979: 17-20）。このことは、左翼思想に馴染みの薄い男性たちも、抽象的・左翼的な皇室観を、好んで選択・披瀝する傾向にあったことを意味しよう。

ここで、皇室観のジェンダー差を示す好例を、司法省の不敬事件記録から引いてみる。まずは、「芸妓」とその客である男性商人の、虎の門事件をめぐる対照的な感想。

「[1924年1月9日] 本名〔被疑者男性〕は明石市料亭に於て侍座の芸妓が、摂政宮殿下〔昭和天皇〕に対し拳銃を向けたるものありとの号外を見て、女王殿下〔久邇宮良子〕の

御心中を察し安眠する能わざりし旨を述べたるに対し、『これからは屢々日本にそんな事がある、またなければならぬ。そんな事がなければ向上せない。…吾々が生存する上において、陛下とか皇室とか云うものは必要はない。日本にも革命は起る…』との旨放言したるものなり」(司法省[1928]1980: 174-175)。

次に、「元職工」の被疑者男性と、その知人女性たちによる、新聞の皇室写真の読解形態の見事なコントラスト。

「犯罪事実概要第一…〔被疑者は、1927年〕十一月十二日堺市三宝村A方に於て、同女等が同日発行の大阪朝日新聞夕刊に掲載せられたる、皇后陛下の御写真を拝し美しき御方なりと談話せるを聞き、『人民の血を絞りたる金にて化粧するから美しいのだ云々。』

第二、同月十八日前同所に於て、同女等が同日発行の大阪朝日新聞に掲載せられたる陸軍大演習画報中の聖上の御写真を拝し毎日御忙しき事ならむと談話せるを聴き、『演習等は不必要なり。天皇陛下等は無くとも国家は治まるものなり。』

第三、同年十二月三日前同所に於て、同女等が同日発行の大阪朝日新聞夕刊に掲載せられたる秩父宮殿下の御写真を拝し、平民的にして御体格良き御方なりと談話せるを聴き、『色の黒き顔、丸き頭の短き奴は何処が良いか』と各放言して、天皇、皇后及び皇族に対し不敬の行為ありたるものなり」(司法省[1928]1980:334-5)。

司法省の記録は、両男性被疑者の思想的傾向を、「思想問題に付深き造詣なきが如し」「特に系統ある該思想〔左翼思想〕を抱懷せる人物とは認めがたし」と伝える。女性が、摂政宮との結婚を間近に控えた良子女王に強い同情をよせ、あるいは天皇家への世俗的な好意と関心を示すのにたいし、男性のほうは、非左翼主義者であるにもかかわらず、上記のごとき見解を披露するわけだ。

だからといって、男性たちのほうが、天皇制や皇室という存在につき、シリアスで深い思惟をめぐらせる傾向にあったというのでも無論ない。たとえば上記男性不敬犯の直接の犯行動機はというと、「酩酊の結果常軌を逸するに至りたるもの」「平素異論を為すの癖ある為、…悪戯的に皇室に対する不謹慎なる言を為したるものなり」である。しかも次章に見るごとく、男性の皇室観の表層に現れた、かかる左翼的・観念論的特徴とは、その深層において、女性のそれと表裏一体とも捉えられるべきものだった。この点は、次章に詳しく論じてゆく。ともかくも、男性側が、女性ほどに世俗的な関心・憧憬を表だって露出させなかったという事実を、ここでは強調しておきたい。

以上をふまえた上で論及しておくべきは、王室にたいする関心のジェンダー差というの

が、天皇制下に限られない、あるていどの一般性をもつ事象であるという点だ。すなわち Billig によるならば、現代イギリスにあってもまた、王室にたいする興味は女性の側に偏在するという知見が、いく人かの研究者もしくは世論調査によってもたらされてきたという (Billig1992=1994:201-2)。もっとも、そうした知見は同時に、19 世紀以来、英国社会の「女性」にまつわるステロタイプ的見解の一つでもあり続けてきたもので、Billig はこの点をこそ社会的に焦点化するものだ。じつのところこの後者の部分をめぐっても、イギリス社会と日本社会は、おそらく相似形をなしているのだが、本論ではこの点は捨象する。王室の構成員にたいする関心が女性層においてとくに顕著となるという《実質的》傾向が、近代社会において一応の確かさをもって存在し、それゆえに女性をとり巻く近代的な社会条件が、戦前期大衆天皇制形成の背景には機能している蓋然性が高いというまでに、ここでは議論をとどめておく。

では近代日本の女性層において、皇室にたいし世俗的な関心と憧憬を向ける態度・心性が男性以上に広く現れ、戦前期大衆天皇制の形成に大きく与していった背景には、いかなる巨視的要因が存在していたか。次節以降では、この点につき議論を進めてゆくことにしよう。

### 3. 同性の皇族への憧憬・関心

天皇家の人々の中でも、近代の一般女性がとくに関心を懷き、憧憬したのは同性の皇族である。そしてその関心や憧憬の向けかたは、「崇拜の対象」という以上に、「スター」にたいするそれに近いものだった。彼女らにとって、皇后をはじめとする天皇家の女性は、教科書や御用イデオログのあらわすごとき抽象的な存在でなく、きわめて具体的な像を結ぶとともに、ひじょうな憧憬をもって捉えられてゆく。1918 年、東京の女学校で実施された、「〔睡眠中に〕常によく見る夢」のアンケートに、「我家に皇后陛下行啓遊ばした夢」と記入した生徒などは、その過剰な事例に挙げられよう (石橋 1919:10)。

それゆえに、皇后・宮妃にたいしひじょうなるシンパシーを懷き、彼女らと自身とを重ね合わせてゆく傾向も、戦前の女性層には相当強く見うけられるものだった。虎の門事件の報道にさいし、当事者の摂政宮でなく「女王殿下の御心中を察し安眠」できなかった先の芸妓も、その典型的な一人である。とくに皇后・妃をみまった家庭生活上の悲話などは、一般女性たちの同情を誘ってゆく。徳富蘆花の妻・愛子の事例を引いてみる。

「〔1916 年 11 月 2 日〕〔貞明〕皇后さんが子供達を側に置かれないので、子供の像を象牙で刻ませた…そうだ。可哀想にと細君云う」（徳富 1985-86:第三巻:429）。

「〔1918 年 1 月 25 日〕…今日の新聞で…明治二十年の天覧劇に〔おいて〕、皇后さん〔昭憲皇太后〕が〔劇を観覧して〕泣いた〔という記事があった〕…。m〔愛子〕は皇后さんが泣いたと聞いて、自分も泣きそう」（徳富 1985-86:第六巻:245）。

次に、同じく 1910 年代、村山知義が母親と祖母から聞いた宮家の噂話。彼女らにあっては、皇室の猥談も、（人ごとではない）悲哀な物語として翻案されてゆく。「その宮様は六十を越していながら、十五から二十幾つにいたる十人近くの妾を持ち、舞妓のようななりをした彼女たちをおつぼねに置いている、新しい娘が来ると、お湯殿で手を付ける。そしてその間、奥方はおめおめと、そのお湯殿の番をさせられている」（村山 1970:318）。

そして戦前の女性層が、皇后・妃たちを、世俗的な憧憬・興味の対象に据えていたことは、当時の女性の関心が、田辺聖子の母親らのごとく、彼女たちの「容姿」へと、とくに向けられていた事実において、最もよく明示できる。田辺家以外の事例をいくつか引こう。まずは吉屋信子による、少女時代（1910 年代）の回想から。

「〔菊池〕幽芳の自伝的回想記を読んだ時は、幽芳先生をちょっと羨望した。…幽芳がかつて…渡仏の際、船に梨本宮〔伊都子〕妃殿下がいらっして、妃殿下の御愛読なさった小説…の作者〔幽芳〕が同船と聞かれて…御下問の榮に浴したという…一節に『まあすてき』と思ったからである。…その妃殿下がたいへん美貌の妃なのを、その頃の皇族画報のお写真で私は知っていたから、幽芳先生を運のいい作家だと羨んだのである」（吉屋 [1964]1976: 321）。

この少し後、吉屋の住む宇都宮市に、梨本宮夫妻が赴任する。同市の官吏の妻だった吉屋の母親は、ある機会に同妃との謁見をはたし、妃から「小扇を戴いて帰った母は、妃殿下のお美しさを讃えることしきりだった」という（吉屋 [1964]1976: 321）。

次に 1924 年 1 月 26 日、摂政裕仁と久邇宮良子の結婚パレードを見物した、東京のある「女中」による良子評。彼女の雇い主の日記から引用すると、「まるで何とも云えませんでしたよ。お人形のようにでしたよ。可愛い可愛い顔だって皆云いました。…あの位の顔を持って居れば結構です」（宮本 1979: 742）。

同様の光景は 5 カ月後、東京市主催の結婚奉祝会においても繰り返される。会翌日の『讀賣新聞』婦人欄の記事である。「東宮御所前で両殿下の御出門を拝した人々何れも美しい妃殿下を仰いで『何と美しいことでしょう譬えようがありませんね』と感激して居る側から

可愛らしい女の子が『お人形さんのようだわ』（「小話募集」1924年6月8日付『讀賣新聞』）。

当時の多くの一般女性が、同性の皇族の容姿にふかい関心を懷いたことは、1900－10年代以降の婦人誌の口絵に、皇后や妃、内親王の写真が多用された事実にも明らかだ。「婦人くらぶ〔当時の一女性誌〕は〔東京の女学生が〕読むべき雑誌の中にて、比較的多くの写真版を挿入せり、妃殿下を始め…お美しい所を〔口絵に〕列べて、貧しき女学生を羨ませ居れり」（松崎天民「現代の女学生」1911年4月19日付『東京朝日新聞』）。女性の皇族の写真を濫用する向きは、松崎天民の指摘する、このマイナーな女性誌にかぎられない。たとえば当時の代表的婦人雑誌、『婦人世界』の1906－1919年刊行分（全194号）でいうならば、じつに135号において、女性の皇族の写真が口絵に用いられている。

以上のごとく、同性の皇族にたいしふかい憧憬と関心を向けた一般女性の心性に、同時代のマスコミも、敏感に反応してゆく。このことは、上記の雑誌口絵の例にも明らかであるが、『讀賣新聞』「婦人付録」と『婦人世界』を、再び例にとって見てみよう。

既述のとおり、「婦人付録」に掲載された皇室関連の記事・写真は、全1495件。その内1059件が、女性の皇族関連のものである。次に、1900－10年代『婦人世界』の皇室報道のジェンダー比。この時期に同誌が掲載した、天皇・男性の皇族関係の記事・写真が101件なのに対し、皇后・女性の皇族にかんするそれは203件にも上る。

また、20世紀前半の新聞の皇室報道にかんして言うと、社会面等に掲載された皇后・妃の写真のキャプションでも、服装や容貌についての記述は頻繁にいれられている。彼女らにかんする記事の内容も、その結婚・出産、服装、家庭生活が中心的に扱われるなど、「女性向け」のものが主流であった。すなわち、当時のマスコミの流布させた皇后・女性の皇族関連の報道全般が、女性読者にたいし発信される傾向にあったのだ。無論、かかる傾向の背景に、送り手側のバイアスが関与していたのは確かである。だがそこに、同性の皇族にたいし当時の多くの女性が懷いた、上記のごとき心性への配慮が大きくはたらいていたことも、うたがい得ないところだろう。

では当時の女性層における、同性の皇族への強い憧憬・関心は、いかなる要因のもとに形成されていったのか。その一つは、彼女らの懷いた「上昇婚」願望に求められる。

知られるように、戦前期日本の一般女性とは、近代化過程という巨視的社会変動のもと、他の近代国家の女性と同じく、「家父長制」<sup>7</sup>という機制に、否応なく巻き込まれた存在だった。彼女らの大多数は、この近代的機制のもと、政治的・社会的進出を阻まれ、低賃金

労働に従事するか、あるいは「家／家庭」を主たる活動領域とすることを余儀なくされていた。この女性抑圧構造の形成に、ほかならぬ近代天皇制が与していたことも、近年のジェンダー論の明かしてきた部分である<sup>8</sup>。かかる状況下にあつて、彼女らに残された社会上昇の中心的な手段は、階層的上位にある男性との婚姻、つまり上昇婚にあったといっている。

くわえて、同性の皇族への強い憧憬・関心という心性が女性層に顕著となった最初期たる 1900-10 年代は、性別役割分業体制が、日本で一定の確立を見せた時期でもある。女性にかんしていえば、教育機関や婦人団体をつうじた「良妻賢母思想」の浸透が挙げられよう（深谷 1998:173-259）。すなわち結婚相手の「家／家庭」に入り、「よき妻・よき母」となることが、「女性」のめざすべきライフコースとして規範化するわけだ。このことは、同時期を契機に、この性役割を忠実に実践する「主婦」たちが、都市新中間層で数多く登場した事実にも裏づけられる（小山 1999:37-41）。

結果、階層的上位にある男性との結婚が、実質的にもイデオロギー的にも、当時の一般女性に認められた、社会上昇の主たる手段として成立する。換言すれば、家父長制的原理が日本社会に透徹しつつある中で、女性が「よりよく生きる」ための重要な戦略に、上昇婚が確立するのである。

事実、この上昇婚願望は、独立生計を立てることが可能な女性の内にも、あるていど共有されたものだった。1935 年に神戸市社会課の実施した「職業婦人」調査を参照しよう。調査対象となったのは、同市ではたらく 2761 人の女性である。親の階層は不明だが、彼女ら自身の平均給与は 42.23 円ほどだった。この調査中にある、「結婚の対象たる男子に対する希望」という項目の内、夫の「経済的地位」にたいする彼女らの希望を見ると、上昇婚願望に近いと思われる回答（「普通以上」、「余裕アル生活ノ出来得ル人」「〔月収〕七十円以上」「〔月収〕八十円以上」「〔月収〕壹百円以上」「相当財産ヲ有スル人」「上位ノ者ヲ望ム者」）は、ぜんたいの 24%を占めている（神戸市[1937]1994）。

続いて 1930 年、大原社会問題研究所所員の実施した、大阪市内の「女給」調査（対象は 1949 人）。調査によると、彼女らの 7 割は、月収 30 円以上を超え、同時代の工業労働者の中核たる紡績工場労働者のそれを凌ぐ稼ぎを持っていた。月収が 100 円を超える高収入者も、174 人を数えている。しかるに彼女らの「将来の希望」を問うた項目の回答では、「其の殆んど大多数が結婚生活」によって占められた。調査者によると、全有効回答数の 48%を占める、この結婚生活にまつわる希望には、「種々の条件や理想が付加されていて



あって例えば『良き夫を得たい』が五十名、『幸福な家庭を造りたい』が二十二名、『商人の妻となる』が十八名、『堅実な結婚生活が十二名』あったという（大林 1931ab）。20年代以降、都市部で急増した「職業婦人」の内、官製の良妻賢母思想から比較的離れた位置にいた彼女らも（その学歴は高等小学校卒以下が過半を占めた）、「幸せな結婚」を基軸に女性のライフコースを観念させてゆく社会的機制からは、まったく自由でいなかった。

以上諸点を確認した上で着目すべきは、戦前の皇后・妃が、天皇家の男性との政治的婚姻をつうじ、「天皇制社会」（藤田[1966]1998）の最上位の地位を獲得・再生産し得た女性としてあったという点だ。階層的な視点から見れば彼女らが、近代の日本社会の女性中、最高の「成功者」だったことは確かである。上記のごとき階層移動をめぐる女性差別構造の成立と、戦前期政府が女性の皇族に付与したこの特権的地位を考慮するならば、当時の一般女性が同性の皇族に、自身のライフコースの「理想形」を見いだしたことは想像するに難くない。言い換えれば、階層上昇を近代日本人の基軸的欲望の一つとして措定した場合、女性と皇后・妃のあいだには、憧憬する側／される側としての関係が、（一般男性と男性の皇族のあいだ以上に）成立しやすかったということだ。皇后・宮妃を一般女性の「亀鑑」として位置づける、当時の新聞・婦人雑誌の常套表現は、その意味において、たんにマスメディア側による押しつけでなかった。

無論、皇后・妃のライフコースを、一般の女性が「そのままそっくり」模倣してゆこうとめざしていたというわけでも、毛頭ない。彼女らの懐いた上昇婚願望とは、せいぜい月収100円でいどで満足しうるほどの、つつまじやかな望みにとどまった。彼女らのこのつつましい上昇（婚）願望を、天皇家の男性との結婚という、およそあり得ない極端な形で達成し得た稀な女性であったからこそ、皇后・宮妃らは、女性層の憧憬と模倣の対象——「スター」として成立し得たということだ。だから皇后たちとの断絶の感覚は、女性層において確かである。そうして天皇家の女性と自分たちの違いは何よりも、彼女らの特権的地位（ヨリ限定するとその経済的特権）に求められてゆく。たとえば1941年、大分県阿蘇郡の女性による、「情夫」への無心の手紙の一節はこうだ。「世の中は様々ねえ、金の苦などを知らぬ皇后様も三十九歳 やつれて苦す千恵子も三十九歳」（内務省[1938-44]1973: 昭和16年5月分:32）。

しかるに、そうでありながら彼女らは、「皇后陛下・妃殿下もわれわれと《同じ女性》である」という感覚を、他方で強く求めてゆく。婚姻・妊娠、主婦生活をめぐる報道、「背の君」の不倫の噂などは、そうした感覚を得る上での、恰好の機会であったことだろう。も

しくは、「今の皇后陛下も梨本宮様の奥様も既に操は破れて居ったげな」（1942年の熊本県の女性）というような形でも、皇后・宮妃との（ジェンダーを軸とした）同質性は、好んで確認されたはずだろう（内務省[1938-44]1973:昭和17年5月分:23）。皇后・宮妃を、一般女性の模倣の対象として提示する広告手法が、20世紀はじめの化粧品メーカーに濫用されたゆえんも、無論ここに求められる。彼女らのこうした欲望の一部は、皇后たちと同じ商品を購入するという実践をとおして、満たされていたということだ<sup>9</sup>。

そうして Billig の見解にしたがうならば、かく天皇家の女性と自身との同質性・近しさを求め確認してゆくことで、皇后たちが「特別な存在」であるという結論に、彼女らはさいど達することになる。「王族も『結局のところ』ありきたりの人なのだということは、『実際に』あの人たちは特別なのだということなのだ。…王女を特別な人と見なしているがゆえに、ごくありきたりのことが語られるに値するものになったのである」（Billig1992=1994:94）。「同じ女性でありながら」、特権的地位にあるから憧憬し、憧憬するから「彼女らも自分と同じ女性である」という同質性を、他方で求めてゆく。そうして断絶と同質性の根拠はともに、結婚を基軸としたライフコースという点に何より見いだされる。近代の女性層の懷いた、上昇婚願望を背景とした同性の皇族にたいする憧憬・関心とは、かかる循環運動として、把握することができるだろう。

#### 4. 異性の皇族への擬似的恋愛感情と「節子姫ブーム」

20世紀前半の女性層が皇室に向けた憧憬・関心の性質をさぐる上では、次の事実も興味ぶかい。当時の多数の若年女性が、男性の皇族に「異性」を見だし、かれらをしばしばその擬似恋愛の対象にした事実である。一例を、東京女子高等師範学校のある生徒が、1901年に故郷の両親へと送った手紙からまず見よう。この女性が、同年に参加した葉山への修学旅行の思い出を伝えるくだり。異性の皇族にたいする強い憧れが、素直に表現されている。

「折から皇太子殿下〔大正天皇〕が此葉山の御用邸にあらせらるる由を聞き、道にて会いまいらすような事があれば如何にうれしからんなど、〔学友らと〕各々…いろいろの空想のみして行きぬ。はや御用邸も二町あまりという所迄来たりしに…向うから洋服を着た二人連れの人が来る。…アーアー東宮殿下でした。…さっきからいろいろの空想はいだいて居ったものの、まさか実現されるとは思って居りませんでした…。〔御用邸を見物後〕…皆々

帰路につきましたのに…又御会い申ました殿下に。皆々うれしいやら勿たいないやら、…御礼をしました所が、皇太子殿下にも御礼を御返しになりました。此時の皆の心持というたら申ようがありません」（高橋編 1997: 179-80）。

第二章で論及したように、1920年代に至ると、かかる若年女性の傾向というのは、いっそう強いものとなってゆく。当時の多くの女性が昭和天皇を憧れの異性と捉え、擬似恋愛の対象としたことは、中野重治や服部之総、幸田文の証言などに既に見た。ここでは、1921年の大阪朝日新聞社による、かれの巡遊映画公開時の様子から、その女性人気のほどをあらためて確認しておこう。

「〔1921年9月〕八日正午から大阪中之島中央公会堂で特に『婦人と子供のため』に公開した本社〔大阪朝日新聞社〕東宮殿下御外遊活動写真映写は第二回〔目の映写〕が終る二時間前早くも場外東側と南側は一面に婦人と子供で埋められて了った、その数実に一万に上り池田、堺、枚方、奈良等から来阪した人々も多数あり〔当初予定の〕第三回のみでは到底収容し切れぬので本社では応急策として午後七時からの第三回開会を特に五時半と第四回八時との二回に改め第三回は午後七時半大盛況裡に終了した、而も第三回に入り切れず第四回の開会を待つ婦人の列は早くも南側入口と正門入口を起点に長蛇の陣を作り怒濤の勢いを以て入場する…階上階下とも一人の余地も残さず満員、又も入場謝絶の止む無きに至った、かくて定刻八時開会蒸すような暑さを堪えて数千の婦人はつつましく映写に向い殿下の英姿が幕の間に現る毎に拍手を送り、御笑いになれば歓び最後に萬歳を三唱して午後九時半無事終了を告げた、八日第一回からの入場者無慮二万五千と註せられた」（1921年9月9日付『大阪朝日新聞』「二万五千の婦人 四回に分れて充滿す」）。

同時代のマスコミが、皇太子の女性人気を、あらかさまに報じる向きは薄かったが、それとなく匂わせる記事は数多い。たとえば当時の『讀賣新聞』は、ある展覧会で昭和天皇の名刺が展示されれば、その名刺見たさに多数の女学生が会に駆けつけ（1921年10月12日付『讀賣新聞』「東宮の御名刺が女学生の興味を集めて印刷展賑わう」）、かれが富士登山を行なえば、それに倣って女性の富士登山者が急増したと伝えている（1923年7月26日付『讀賣新聞』「摂政官のお元気」）。

昭和天皇に「異性」を見いだす傾向は、同時代の地方女性のあいだにも、一定の広がりを見せていたようだ。1931年、熊本を訪れた天皇の姿を、多数の民衆とともに「拝観」した男性は、そのときの模様をこう回想する。「〔このとき〕警官は一時間隔にたって警護していた。上目づかいで天皇を見ようとしていたら、後ろで、『あら、天皇陛下のよか男（ハ

ンサム) ママよ』と女学生の声が出た。あとで聞いたことだが、警官がその女学生を探し出し、その女生徒の学校長は警察当局からしこたましぼられ、平身低頭のわびをいれたという(朝日新聞 1989:67)。1920年代、商業主義の席卷していたマスコミが、昭和天皇をめぐる記事・写真を膨大な量で流布させていった背景には、かかる女性人気も大きく関与したということだ。

秩父宮も、女性層からの支持はあつかった。かれの場合、その女性人気は、松平節子との結婚をとおして高まったものであった点でも興味ぶかい。「かつて秩父宮が勢津子姫と当時の皇室としては珍しい恋愛結婚をしたので、全国の若い娘たちの間に大変な人気が出たことがある」(大宅[1952]1981: 174)。じっさい、結婚の決定直後の女性誌では、秩父宮の記事・写真が、多数掲載されている。1928年の婦人・少女雑誌の見出しからいくつか引くと、「秩父宮雍仁親王殿下の御近況」(『婦人世界』3月号)、「スキーヤーとしての秩父宮殿下」(『婦人公論』8月号)、「アルプス峯上の宮」(『少女の友』10月号)、「秩父宮殿下の御日常」(『婦女界』11月号)。

付言しておく、若年女性の高貴趣味は、英国王室の男性にも向けられた。夢野久作の東京見聞録によるならば、1922年の英国皇太子(エドワード8世)の来日時には、『『英国の皇チャーン』とか何とか連呼してハンケチや旗をふりまわしたはまだしも、本郷付近で算を乱して自動車のあとを追っかけた女学生の群があった』という(夢野[1925]1979:245)。引用した諸事例にも見たように、天皇家の男性を映画男優のごとく捉えてゆく彼女らの視線は公認されるべきものでなく、むしろ監視と取締の対象となっていた。自国の皇太子や親王には中々にとりづらい態度を、縛りの緩い英国皇太子へと、代用的に向けたのだろう。このことは、「《英国の》皇チャーン」という呼称にも、よく見てとられる部分である。

本筋に戻りたい。天皇家の男性にたいし若年女性層の懐いたこの擬似的恋愛感情もまた、上昇婚願望をその基底にもつものとして理解される。換言するとそれは、前節に見た、皇后・宮妃にたいする女性層の心性の裏面を、《最も極端な形態において》あらわしたものである。天皇家の男性との結婚をとおし、特権的な地位を獲得し得たという部分。この部分にたいする憧れが、皇后・宮妃にたいする一般女性の憧憬の基礎をなしていたことの重要な証左として、彼女らの動向は捉えられるということだ。

無論、上記の擬似的恋愛感情とは、どこまでも擬似的なもので、彼女らが「心から」皇族との婚姻の達成を図っていて、機会あらばとつねにねらっていたなどということは、お

よそあり得ない。そうであれば皇后たちに向けられるのは憧憬でなく、嫉妬となるはずだろう。あるいは、秩父宮の女性人気、その婚姻決定後に昂揚するという事態も、およそ理解し得ないものとなる。どれほどに努力しようとも、天皇家の男性との婚姻が一般女性にとって不可能事であることは、彼女らにおいて周知の事柄である。1942 年、大分の一女性、子どもにこう語っている。「お前達は飛行機乗りになろうと、大臣になろうと一生懸命勉強して天皇陛下に尽してください、お母さんは幾何<sup>マ</sup>勉強して偉くなっても皇后陛下になれないのだから」（内務省[1938-44]1973:昭和 17 年 1 月分:15）。彼女によれば、一般の女性が天皇家の男性と結婚することは、男性が「大臣」になる以上の困難をとまなっている。

だから女性層の擬似恋愛の結末は、「おもかげが陛下に似ている」相手を見つけるていどで、ほぼ満たされるべきものだった。むしろ、社会的最上層にある男性との結婚が、自身には不可能であるという明瞭な認識があるからこそ、(その頂点に君臨する)天皇家の男性を、擬似恋愛の対象におき、「窮極の幸せな結婚」を夢想する。天皇家の男性にたいする若年女性層の擬似的恋愛感情が、上昇願望をその根底にもっているというのは、かかる意味あいにおいてである。

そうかといって、その夢想を妨げてゆくような事象を、彼女らは好まない。天皇家の男性との断絶の感覚は、十二分にもっていながらも、かれらが別世界の住人で、かれらとの異性関係など成立し得ないという客観的事実を、他者から《強く》おしつけられることも、彼女らは他方で拒んでゆく。かかる微妙なバランスの内に、皇太子らへの若年女性の疑似恋愛感情は、構成されたものだった。それは、皇后・宮妃への女性層の憧憬が、断絶の感覚と近しさの感覚との往復運動の中で構築されていたのと、まったく照応する。

具体例を挙げて示してみよう。たとえば幸田文は、1924 年の摂政裕仁と良子女王の結婚時、自身を含め若い女性たちは「重苦しく憂鬱な雰囲気を感じさせられ」と回想する（幸田[1959]1995: 169）。繰り返すと、1920 年代初頭には 2 人の婚姻の是非につき、長州閥と久邇宮家・右翼のあいだで激しい政治闘争が展開されていた。この宮中某重大事件をめぐることは、事件の存在をすっぱ抜いた『讀賣新聞』を中心に<sup>10</sup>、21－22 年にかけて大きく報じられつづけ、具体的な内容はともかくも、結婚する 2 人の意思とは無関係に、この婚姻が政争の道具となっていることは、広く民衆に知れわたっていた（中島 1967:269; 芹澤[1963]1974:260; 宮本 1979:356）。事実、幸田を含む当時の若年女性が、2 人の結婚を素直に祝えなかったのも、婚姻の裏側での暗闘が、彼女らに洩れ伝わっていたことに起因した

という。ロイヤルウェディングの現実、彼女たちの懐く《ロマンチックな》夢想などとはかけ離れた、きわめて生臭い、ドロドロとした政治的事項であるということ。そして、皇族自身の意向をもはるかに超えた、国家的な事項であるということ。宮中某重大事件は、この客観的事実を、あからさまな形で若年女性におしつけることで、男性の皇族との擬似恋愛という、彼女らのひそかな楽しみに、無粋にも水をかけたのだった。

反対に、昭和天皇夫妻の「御成婚」の4年後、1928年に行なわれた秩父宮雍仁の結婚は、みごとに女性層のニーズと適合した。換言すれば、彼女らの望むフィクションの社会的提供が、この結婚時にはきわめて成功裏にはこばれた。そして、天皇家の女性／男性に向けた女性層の世俗的な憧憬・興味が、断絶の感覚と近しさの感覚の循環運動として構成されていたことは、何よりこの結婚時の女性層の反応が示してくれている。

まず、このときの「節子姫ブーム」のありようを、かるくおさえてみたい<sup>11</sup>。

同年1月7日、秩父宮の婚約者をめぐり各紙が激しい取材・報道合戦を行なう中、『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』が、駐米大使の息女・松平節子の秩父宮妃決定をスクープする<sup>12</sup>。この特報を端緒に、同年9月の結婚式に至るまで、新聞各紙は、節子をめぐる「女性向け」の情報を、映画女優のごとく大量に流してゆく。「節子姫」のじつにいろいろなスナップ写真が毎日のように紙面に掲載され、その見出しには、頻繁にその容姿を讃えた文字が入れられた。写真の説明文にも、彼女のその日の服装にかんする記述がまま挿入されている。くわえてそのモダンな趣味性格、家族・「御学友」・本人へのインタビュー、日々の動向など、節子をめぐること細かな情報も、連日のごとく各紙紙面を賑わせていた。

新聞と同じく「女性」を重要な読者とする婦人誌界も、総力を挙げてこの結婚を報じ、節子の特集号が何冊も刊行されている。普段は殆ど皇室関係の記事を掲載せず、出版警察の処分回数も図抜けて多かった「理論的の〔婦人〕雑誌」<sup>13</sup>『婦人公論』までもが、彼女の特集を組んだほどだった。1928年の「節子姫」をめぐる過熱報道は明らかに、「女性」をターゲットに展開されていたということだ。同年の婦人雑誌の見出しから、いくつか抜粋してみよう。

「松平節子嬢生い立ちの記」(『婦女界』3月号)。

「快活なる女学生としての節子嬢」(『婦人世界』3月号)。

「親しき学友として歓喜に堪えず 男爵土屋光豊氏令妹 土屋登茂子」(『婦人世界』3月号)。

「快活なる女学生としての節子嬢 女子学習院学生監 依田豊氏談」(『婦人世界』3月号)  
「秩父宮殿下と松平節子姫」(『主婦之友』3月号口絵)。  
「御婚約を祝して松平節子姫へ」(『婦人倶楽部』4月号)。  
「御婚約時代の松平節子姫の御生活」(『婦人世界』8月号)。  
「和服にくつろがれた節子姫」(『主婦之友』8月号口絵)。  
「婦人公論を読まれる節子姫」(『婦人公論』8月号口絵)。  
「学友の見た節子姫」(『婦人公論』8月号)。  
「われらの松平節子姫」(『婦人公論』8月号)  
「松平大使夫人からお伺いした節子姫の家庭教育」(『主婦之友』9月号)。

そうしてじっさいにも、「節子姫ブーム」をささえたのは、当時の一般女性に他ならなかった。たとえば大宅壮一は、婚約決定直後から節子の人気は女学生のあいだで沸騰し、彼女は「節ちゃん」の愛称で呼ばれる、憧れの的になっていたと回想する(大宅 [1952]1982: 336)。結婚式の翌日の新聞も、結婚パレードに集まった数十万の観客の内、7・8割は若い女性であったと報じていた(1928年9月29日付『国民新聞』「御沿道に雲集する市民」)。1928年の新聞・女性誌界における「節子姫フィーバー」は明らかに、当時の女性層に広く生まれた、節子への強い憧れに根ざしたものだ。

ここで注目されるのは、女性層のかかる「節子姫」人気の要因が、彼女の「平民」という属性に、何より由来したという点だ。皇室典範によって、皇族の結婚相手は華族以上の身分の者とさだめられていた当時であって、「一平民の娘」が、皇位継承第一位の地位にある秩父宮の妃に選ばれたことは、まさに異例中の異例の人事ではあった。同年のマスコミも、当然のごとく節子の出自に目をつけ、「わが皇室の伝統の上に新例を開かれた御結婚」(1928年9月28日付『大阪朝日新聞』)「畏し皇統譜制定以来始めて登る平民の名」(1928年9月29日付『東京日日新聞』)などの見出しで大々的にこれを報じている。すなわち節子は、当時の多くの若年女性にとり、みずからの夢想した、天皇家の男性との婚姻をつうじた劇的な階層上昇を、達成してみせた存在としてあったのだ。だから野上彌生子の同年の日記には、次のように書かれてある。

「[6月22日] 秩父宮の妃と決まった松平節子嬢が今日の春陽丸で帰朝。新聞もなにもそれで大騒ぎしている。可愛い、惻好らしい娘である。秩父さんが立派な出来のよい青年とのこと故幸福である。而してそれは私たちには賛美と同情をしか呼ばないが、若い未婚の

娘やまたそんな娘をもった母たちには大きな刺戟なしでは考えられないだろうとおもう。夏目の栄子さんのことなぞこの頃よく話題にのぼる。この間も一高の英語の教師をしている人を森田〔草平〕さんがすすめたところ、高等学校の教師ではというようなことでサタやみとなりし由」(野上 1986-91: 第二巻:252)。

「[9月28日]今日は秩父宮の結婚である。若い娘たちで大分羨やましい人があるだろうとおもう」(野上 1986-91: 第二巻: 309)。

じっさいのところ、節子はハイクラスの家庭に生れ育った女性であって、「一平民の娘」などでは決してなかった。しかも婚約決定直後に、皇室典範に反しないよう、親戚の華族のもとに籍を移している。にもかかわらず、マスコミは彼女が「平民」である(あった)ことを、節子が華族となっても強調しつづけた。節子と秩父宮の婚姻が、「ふつうの女性による劇的な階層上昇」の物語であることを欲する、多くの女性読者のニーズをみたすには、節子はあくまでも「平民」として伝えられなければならなかったのである。

強調しておく、ここで言いたいのは、天皇家の男性との婚姻が不可能な事柄であるという従前の一般女性層の認識が、節子の「偉業」をもってラディカルに転換したということではまったくない。天皇家の男性との断絶の感覚は、節子の秩父宮妃決定後も、かわらず懷かれ続けたことだろう。しかるに、野上彌生子のいうごとく、「平民節子」による秩父宮との結婚が、1928年の若年女性の上昇婚願望を大きく刺激していたこと、そのゆえに節子が彼女らから多大な人気を得ていたことも、おそらく確かなのである(但し夏目家の場合には母親のほうが強く刺激されたという)。「平民節子」物語の女性人気とは、その意味で、皇太子や直宮らにたいし彼女らの懷いた擬似的恋愛感情が、断絶と(わずかばかりの)接近可能性の両感覚のもとに構成されていたことの、重要な証左と見なすことができるだろう。

続けて、「恋愛結婚」という要素に話を進めたい。この点が、節子姫ブームのもう一つの背景に存在したことも、以上の議論をよく裏づける。

秩父宮雍仁と松平節子の結婚は、「恋愛の結果」として知られていた。そうしてこの点が、当時の民衆とくに若年女性層において、節子と秩父宮の人気を沸騰させた重要な要因にはたらいた。戦後の大宅壮一が、そのように回想していることは先に見た。しかるに節子本人の言によるならば、それは虚偽の噂であった。二人の結婚は貞明皇后の意志にもとづくもので、自分と秩父宮とは、婚約前に数回会っただけの関係にすぎなかった。にもかかわらず、「恋愛結婚」とマスコミや世間が騒ぎ立て、困惑したと、彼女は後に回想する(雍仁



親王妃 1991:97-403)。

この噂はおそらく、『東京朝日新聞』市内版が、1月7日付の婚約スクープ報道中に、「宮と嬢とはお知合いの間柄」という見出しのもと、それが恋愛結婚であることを、ほのめかしたところから始まった神話であった。もっとも、真偽のほどはそう重要でない。問題は、かかる噂が好意的な文脈のもと、当時の女性層の内にながれていたという部分にある。

「恋愛結婚」というこの神話が女性層から人気を得たのは、「なにゆえ平民である節子が秩父宮と結婚できたのか」という問題についての、恰好の説明を提供してくれた点に多く由来しよう。もともと「節子が平民である」という他方の神話は、ロイヤルウェディングの対象者を華族以上の身分に限定する皇室典範のある限り、根拠が希薄で、神話としての生命力に欠けていた。くわえて女性層の内には、天皇・皇后の婚約時の生臭い記憶も、鮮明に残っていただろう。皇室典範が厳格な規律として存在し、かつ皇族の結婚がすぐれて政治的な事象である限り、「平民からの妃選び」などあり得ない。1928年当時の民衆の多くが懐いたはずのかかる皇室結婚イメージは、「平民節子」という神話が普及してゆく上での、大きな障碍ではあった。

しかし、「恋愛結婚」という要素がくわわることで、この障碍は、やすやすとうち破られてゆく。秩父宮は節子が好きで、節子は秩父宮のことが好きだった。だから、二人は結婚した。従前の皇室結婚にまつわるイメージを支配してきた、厳格な家憲やあくどい政治的策謀は、ここにおいて霧消する。少なくとも、ロマンティックラブ・イデオロギーの信奉者にすれば、これ以上に明快な説明はなかったことだろう。朝日系列による、1月7日の宮妃決定の特報中に、二人の恋愛関係が既にほのめかされていたように、「平民節子」と秩父宮の結婚物語を「説得的」に紡ぎだしてゆく上では、恋愛結婚という神話が、当初からどうしても並走者として必要であったのだ。換言すると、節子と秩父宮の恋愛物語は、「平民節子による劇的な階層上昇」という、もう一つの神話から派生し、しかもそれを補完する神話として流れていったものである。「平民からの妃選び」が、恋愛という要素と一揃いとなりたがるゆえんは、ここにある。「節子が平民であること」にたいする女性層のニーズの高さは、この「恋愛結婚」物語の誕生の内にも見いだされるということだ。

無論、第二章に見た、秩父宮の自由さ・軽さという、さらにもう一つの神話も、以上の機制には明白にかかわっている。秩父宮は平民的で自由人だから、皇室の旧弊や重臣の企みなど気にせず、自分の意思で結婚相手を選んでも（なおかつその相手が平民の女性であっても）おかしくない。もしくは、明治天皇のさだめた皇室典範を破ってまで、平民の娘

と恋愛結婚をするのだから、秩父宮はよほどリベラルあるいは急進的な思想の所有者である。(昭和天皇との比較にもとづく)かかる秩父宮観の循環運動が、節子姫ブームの裏面で展開され、「平民節子」神話ならびに「恋愛結婚」神話をささえていたことは、安岡(1984)の先の証言中にも見てとられる。だから、1928年の秩父宮雍仁がその婚姻決定後に、女性層からの支持をあつめたという事象は、平民的だとかスポーツマンだとかのアピールのみにはもとづかない。先にも書いた、天皇家の男性にたいし一般女性が求める、断絶と接近可能性がナイマゼとなった微妙な関係性——昭和天皇が図らずも多分に破壊してしまったそれ——を、その「自由闊達さ」をもって再構築してくれた「貢献者」としての部分。この部分でも、このときのかれはおそらく一般女性からの喝采をあびていったのだった。

## 5. 本章のまとめ

20世紀前半に生じた皇室観・皇室報道の世俗化という事態が、女性層・女性向け媒体においてより顕著な事象であったことは、以上の議論に一定ていど明らかにされたと思われる。戦前期大衆天皇制と戦後大衆天皇制とが、そのイデオロギー構造上において有した連続性とは、女性層がその中心的な担い手となるという部分でも、確かに見いだされるべきものだった。

あるいは、戦前期大衆天皇制をささえた、皇室にたいする女性層の世俗的な憧憬の背景に、家父長制という近代的機制が彼女らの内に育んだ、上昇婚願望が大きく機能していた点。この点をめぐっても、20世紀前半の天皇制とは明らかに、戦後天皇制との連続線上に捉えられる。すなわち井上(1978)によるならば、戦後女性層に現れた、皇室にたいする関心の拡大とは、大衆社会特有の、「同質性スケールの枠の中で、他人よりも少しでも上に行こうとする上昇志向」にもとづく事象であった。この上昇志向にもとづき彼女らは、ハイクラスに位置する同性の皇族に、「自己の行動及び家庭経営の準拠」を積極的に見いだしてゆくのだと、井上はいう。無論、「女性のなかに上流志向がいくら強いといっても、その射程を皇室にまで及ぼすことは不可能である。たとえ美智子妃が、皇族、旧華族外から皇太子妃に選ばれたとしても、すべての女性にその道が開かれているのではないことはいうまでもない」。それゆえに、宮妃らにたいする女性層のこの反応は、彼女らの「上昇志向のエモーショナルな部分を表している」というのが、井上の見解ではあった(井上 1978:169-71)。

20世紀前半の女性層の場合にも、井上の上記指摘とは、多分にあてはまるものだ。彼女

らの皇室にたいする憧憬・関心が、その上昇志向の《感情的な》発露としてあったという部分でも。皇后・妃たちを、「自己の行動及び家庭経営の準拠」におくという部分でも。本論がここまでに捉えてきた近代の女性像と井上による戦後女性像は、ひじょうな相似形をなしている。

戦前期女性と戦後女性の皇室観の相同性を捉える上では、大衆天皇制の歴史的頂点たる、美智子妃ブームにさいし、正田美智子の「平民」という属性が、やはりブームの最大の要因としてはたらいたという、周知の事実も見のがせない（松下 1959）。彼女もまた、ブルジョア出身でありながら、皇族との婚姻をとおしたその劇的な階層上昇振りがうたわれた人だった。「恋愛結婚」というもう一つの神話が、この「平民美智子」という神話を補完すべく並走して流れた点も、節子姫ブームの忠実な再現をなしている。この類似点において捉えたとき、「節子姫」を憧憬する 20 年代女性と、美智子妃を憧憬し、彼女のファッションや髪型を真似ていった 50・60 年代女性とは、同じ地平に存在したといってよい。

#### 第四章 皇室という「家庭」への眼差し

本章では、「大衆天皇制論」の後半部の議論をもとに、近代天皇制と戦後天皇制の相同性・連続性をさぐってゆく。すなわち、大衆天皇制のもう一つの重要な契機として松下圭一の挙げた、天皇家の「家庭人」化・脱政治化という事象の起原を、近代の日本社会の内に見いだしてゆくというのが、本章の課題である。

はじめに、松下によるじっさいの議論の一部を引いてみよう。戦後天皇制が、「スター」としての皇室にたいする民衆の憧憬にもとづき再生産されている点を明らかにした後のくだりである。

「〔戦後の〕天皇は、政治的軍事的性格を喪失して、文化的かつ家庭的性格をもつようになる。科学者と、皇室の家庭的団らんが天皇のイメージとなる。かつて天皇は古式装束以外は、ほとんど軍服を着ており、また天皇の科学研究は軍人から嫌悪されていた。しかしいまや天皇は、科学者であり家庭人である。…二〇世紀の大衆的君主は、フリードリヒ大王や明治天皇のように、国家理性の体现者であつたり軍事的英雄であることは要求されない。…〔大衆天皇制下の〕『君臨』するのみの君主は、大衆ことに小市民層の日常的要求の理想とならなければならない。それはなによりも、『幸福な家庭』である。…戦後にいたって、明治、大正にはみられなかった皇室の『幸福な家庭』が実現されている。白馬上の軍服を大衆は畏敬したが、家庭の人にたいしては敬愛し憧憬する。…この『家庭』こそが大衆天皇制のシンボル価値である。大衆天皇制においては、皇室の『家庭』こそが、政治的に必要とされる。この家庭は、かつての家族国家思想にみられる『家族』ではないことはもちろんである。スターのモダンな『家庭』こそが、脱政治化した皇室の政治的存在理由となる」(松下 1959:43-45)。

松下のこの議論の要点は、次の三つにある。第一に、大衆天皇制下の皇室は、政治とは無縁な存在として民衆に観念され、マスメディアに表象されてゆくという点である。かつて絶対君主・大元帥として振舞った天皇は、その政治権限をまったく失った存在として日本社会に現前する。それは、近代天皇制と戦後天皇制をわかつ、決定的な断絶面の一つであると松下は言う。ここで注意したいのは、実質的に天皇ならびに天皇家が政治権限を喪失したかどうかは問題ではないという点だ。民衆の抱く皇室観、マスコミによる皇室報道の位相で、天皇家が脱政治的な存在として現出してゆく。これこそが、大衆天皇制の重要

な指標となる。

第二点は、この天皇家の脱政治化現象が、かれらの「家庭への埋没」の結果として、推進されてゆくという部分にある。大衆天皇制下の皇室は、「家庭」に最大の価値をおく大衆社会の出現に対応した結果、「家族人」として、もっぱら観念・表象されることとなる。天皇家の私的領域での些事が、民衆の重大な関心事として成立する。マスメディアの報じる天皇が、家族との団欒や趣味生活にひたすら没頭する存在となる。かれらの公的領域での活動でなく、その私的領域での暮らし振りが、民衆・マスコミに注目されてゆくのである。確かにこの事態こそ、天皇家の脱政治化の、何よりの現れとなるだろう。

第三に松下が強調するのは、かくのごとく、民衆・マスメディアによって「家庭人」として皇室が観念・表象されることが、大衆天皇制の再生産に重要な役割をはたしてゆくという点である。すなわちそれは、かれらの政治的イメージの希薄化を推進し、民衆が天皇の政治責任を問うてゆくごとき場面を霧消させる。「かつて天皇の名において強圧的政治が行なわれたとき、天皇は憎悪されるべき対象に転化しやすかったが、天皇が脱政治化して象徴天皇に転化したとき、むしろ天皇への非難は回避されるであろう。…スター化された象徴天皇は、もはや『神聖』ではないゆえに明治憲法よりもさらに『犯スヘカラス』となりうるであろう」(松下 1959:44・5)。逆説的ながら、大衆天皇制下にあっては、天皇家がモダンな家庭人として振る舞い、政治とは無縁の存在となることこそ、重要な「政治的」機能をはたしてゆく。天皇家を脱政治的存在として捉える社会的眼差しの普及は、天皇制の危機的状況を意味するものでなく、民衆側の天皇制支持の論理の、質的変容をこそ意味している。

引用文にもあるごとく、松下(1959)は、この天皇家の脱政治化・家庭人化現象も、やはり戦後特有の事態として据えていた。それは、天皇家の脱政治性をタテマエとしてうたう新憲法の下支えがあって、はじめて実現したものであると。しかしじっさいのところをいうと、憲法の条文あるいは政府による天皇をめぐるタテマエ論とは関連なく、事態は戦前から進展していた。すなわち天皇家を脱政治的・家庭内存在と捉える視線とは、旧憲法下の民衆・マスメディアの内にも、ふかく浸潤していたものだった。

端的に言うと、本章の目的とは、松下の上記議論がかくのごとく、近代天皇制にたいしても多分にあてはまることを、戦前期民衆の経験的世界の位相から明示してゆくことにある。すなわち本章では、天皇家の人々を、「家庭人」・脱政治的存在と捉える眼差しが、天

皇主権説という官製イデオロギーに反する形で、近代のマスメディア・民衆のあいだに普及してゆくプロセスが、日本社会の近代化過程との連関において概観される。言い換えると、戦前期民衆の内に、政府の強制するのとは違う、独自の天皇制支持の論理が、マスメディアと結びつきながら展開してゆく様相を、家庭中心主義の擡頭とのかかわりにおいて再考するというのが、本章のねらいとなる<sup>1)</sup>。

## 1. 天皇の脱政治化現象

本題の前に、近代の民衆のあいだに、脱政治的存在として天皇家を捉える眼差しが、支配層の企図に抗する形で普及していた事実、そしてこの事象が近代の日本社会においてもっていた特有の意義を、その最も直截的な発現形態において捉えてみる。

近代日本の支配層が、少数の学歴エリートにたいし天皇機関説（密教）を教授する一方、大衆に向けては天皇主権説（顕教）を徹底教化してゆくという、二元的な教育政策を採っていたことは、久野・鶴見（1956）によって既に周知である。天皇が国家の絶対的政治主体であるというタテマエを、直轄装置をつうじ民衆に教えこむことは、その神格化政策とあいまって、能率的な国民統合・動員を達成する上での必須の施策と、（とくに明治末以降の）政府に位置づけられていた。教育史の領野でも、既に論証されてきた部分である<sup>2)</sup>。実質的な主権の所在というのはまったく別の問題として、対民衆のイデオロギー政策に限定して判断した場合、戦前期政府がこの天皇主権説というタテマエを放棄することは、あの開放政策期を含め、なかったものといってい

い。わけでも 1930 年代中盤以降には、超国家主義の擡頭下、この天皇主権説は、絶大な力をもつタテマエ論と化してゆく。明治以来、天皇を国家の最高機関と捉えることを特権的に許されていたエリート・官僚たちもまた、主権説の前に屈服・転向せざるをえなくなってゆく。天皇のもつ政治・軍事的権限の絶対性に少しでもうたがいを挟めば、たちまちに失脚してしまうごとき状況が、軍部と在野右翼の運動にもとづいて、日本の統治機構のすみずみに浸透するのである。1935 年、機関説の主唱者である美濃部達吉の貴族院議員辞職とその著作の焚書処分こそは、かかる事態の象徴的出来事として存在した。

政府内部のこの変化は、対民衆のイデオロギー政策という形でも並行的に発現した。久野・鶴見の議論を詳しく跡づけた森川輝紀によるならば、「経済恐慌による体制の危機に呼

応した〔1930年代以降の政府内部の〕軍部ファシズム勢力は、思想的には天皇の絶対性＝国体観念（顕教）<sup>マ</sup>を前面に押し出しつつ国防国家体制確立を推進」する。その中で同勢力は、「密教部分を顕教で覆いつくすことによって、政治基盤の確立と対外侵略への国民的合意を形成」することを、文部行政をつうじ図ってゆく。それはまず、高等教育からの天皇機関説の排除（1935年一）として現れ、第二には「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇天祖ノ神勅ヲ奉ジテ永遠ニコレヲ統治シ給ウ」というタテマエを、ヨリ徹底した形で生徒に教化してゆくという、文部省の方策決定・実施（1936年一）となって結実する（森川 1987:255-65）。

しかし、こうした官製のタテマエ論と、その活発な教化運動にもかかわらず、20世紀前半の民衆の生活世界の内では、天皇をカイライと捉える視線が、着実なる拡大を見せてゆく。皇室の（タテマエ上の）政治的権限の多くを剥奪した新憲法の成立するはるか以前から、天皇の脱政治化は、既に広く始まっていた。その最も優れた事例たる、大正期の「二人の王」についてのエピソードから、この事実の一端にまず触れてみたい。

戦前の東京、府立精神病院内で、長い生涯の大半をすごした「芦原帝」の存在は、広く知られ、かつ研究も多くある。1870年代後半から、紙上にその奇行が報じられ、一部で既に高名だった「誇大妄想狂」芦原金次郎は、日清戦争（1894年）前後を契機として、みずからを天皇に擬し始める。芦原帝と名乗り、「芦原国」という想像の共同体を精神病院内に建て、皇紀ならぬ「芦原暦」をつくり、奇想天外な勅語を濫発してゆくのである。やがて新聞記者たちは、記事の種が不足するとかれを訪ねるのを習慣とし始め、いくばくかの金を払って勅語を賜り、あるいはその時々政治問題を語ってもらうようになる。20世紀初頭のことである。芦原帝の語る政談は、記者らの期待に背くことなく、無茶苦茶でありながら、いってのちのちを射たものだった。以来、芦原帝の記事・写真は各紙に定期的に掲載されてゆき、かれは民衆から多大な興味と人気をよせられるところとなる。たとえば明治末頃のかれは既に、「三大将軍」の一人として、東郷平八郎らと並び称されるほどの有名人となっていた。マスコミ記者の「芦原帝詣で」は、かれのなくなる1937年2月直前までつづけられ、なくなったその後も、すぐに伝記映画の話が進められるほど、広くながく近代日本の民衆・マスメディアに愛された人だった<sup>3</sup>。

芦原将軍論が一樣に書くごとく、明らかにこの芦原金次郎という人物は、1890年代以降の政府が展開した、「現御神」「絶対君主」としての天皇像を戯画化するために、マスコミが創出したスターであった。出版警察の目をはばかり、芦原将軍」という呼称のほうが

好んで用いられてはいたものの、マスコミの報じたかれが、天皇のパロディ、「芦原帝」であったことは明白である<sup>4</sup>。この芦原帝をめぐる当時の報道が、絶対主義的な教化政策への民衆の反発心をくみとる性格のものであったのもまた、うたがいない。しかし、マスメディアの中の芦原將軍の姿は他方で、民衆が懐いた天皇観の、忠実なる写し絵でもあった。

知られるように、芦原帝人気が広がってゆく大正期は、本家たる天皇の行状をめぐるさまざまの噂が流布した時代でもある。それらの噂はいろいろのバリエーションをもちながらも、大正天皇の政治的能力の不在（カイライ性）を主題とし、それを暴露する性格をもつ点で、共通項を有していた。当時の民衆の噂の中に現出した、大正天皇のこのイメージは、もう一人の王・芦原帝のそれときわめて近い。主権者であることを自称しながら、その政治的能力・実権をまったく欠き、空疎な政治的遊戯に日常をすごしているという点においてである。

両者のこの相同性のもつ社会学的意義に、いち早く着目したのが大澤（1998）だった。大正期における、二人の「無能な王」の出現は何より、そのような天皇を、当時の民衆が求め始めていたことの証左であると大澤は言う。大正天皇の、カイライとしてのイメージは、かれ個人の資質・実態に帰されるべき性格のものではない。あくまでもそれは、近代化というマクロな社会変動のもと、民衆の側が能動的に構築していった像である。もう一人の「無能な天皇」、芦原帝の大衆人気がこれを立証する、と。

講演録という性格上、経験的資料をもって逐一立証してゆくスタイルをとってはいないものの、大澤のこの議論は正鵠を射たものといってい。天皇を政治的な飾り物として捉える眼差しは、大正天皇の個人的資質に由来するのではなくて、近代の日本社会の中に、ふかく制度化されたものだった。以下でこの事実を詳しくおさえ、大澤の議論を補完してみたい。

まず、大正天皇について。かれに、主権者としてのイメージが希薄であったという点にかんしては、その治世をじっさいに生きた人々も、しばしば回想するところである<sup>5</sup>。かれの資質・政治能力にたいするうたがいが、民衆の中に芽生えたのは、皇位継承の段からだった。手塚富雄の 1912 年の回想を思い出していただきたい。「新しくとどいた雑誌の口絵に新大元帥〔大正天皇〕の肖像がのっていた。私が家の門口で、ちょうどそこをあけてながめていると、近所の同年の友だちがやってきて、『これはダメなんだ、今度のはとってもダメなんだぞ』と言って、拳でトントンその写真をたたいた」（手塚[1951]1981:12）。天皇



となったまさに直後から、小学生にも指摘されるほど、かれの政治的実権の希薄さは（根拠のないままに）都市民衆にイメージとして広がっていた。事実、一部の資料・論考は、1900年代から既に、かれの政治能力をうたがわせるゴシップが、巷間に流れていたことを示唆している（松島 1956:219;V・O・J1959:146）。とくに有名な「遠眼鏡事件」の噂が、東京市民のあいだに流布し始めたのは、種々の証言にもとづけば、1910年代中盤のことである（出 1963:121;中島 1967:48;ねず 1974:34）。帝国議会開院式という、最も「政治的な場」での天皇の逸脱振りを伝えるこの噂の拡大は、当時の都市世界において、大正天皇のカイライ性が、いかに伝播していたかを物語ってあまりがある。

だが、主権者であることの虚構性を、同時代の「臣民」から指摘されたのは、大正天皇一人に限られない。その証左の一つは、「天ちゃん」の普及にかんする史的事実に求められる。鶴見俊輔によると「天ちゃん」は、戦前の民衆による天皇への愛情表現であると同時に、天皇のカイライとしてのイメージを、その内に含んだ呼称であった（鶴見[1963]1991:412-3）。1922年生の鶴見はそう指摘した上で、自身の実体験をふまえつつ、この呼称の一般化した時代を、大正期に定めてゆく。事実、この時期に、大正天皇のさまざまな噂の流布とリンクする形で、「天ちゃん」という呼称が民間に普及したことは、芹澤光治良の自伝などにも看取される（芹澤[1963]1974:110）。

しかし東京府内に限った場合、「天ちゃん」は、ヨリ早い段階から、一定の市民権を獲得してもいた。獅子文六の回想によるとこの呼称は、明治のおわり頃の東京で、既に広く用いられていた（獅子[1968]1969:475）。また鶴見自身、同様の証言を、生方敏郎から聞いたと書いている（鶴見[1963]1991:413-4）。天皇の政治君主としての側面を棚上げにするこの愛称は、大正天皇の治世以前から、好んで用いられていたものだった。すなわち明治期において既に、天皇をカイライと捉える眼差しは、人々のあいだに拡大し始めていたのである。新聞記者による「芦原帝詣で」の開始が、明治期後半に求められるという先の事実も、この点を傍証するだろう。20世紀はじめの日本社会にあって、天皇の主権者としてのイメージが希薄となってゆくという事態が、1912年の代替わりという事態や天皇個々人の資質に還元し得ない、ヨリ巨視的な背景を有していたことは、この「天ちゃん」の系譜学的事実にまず立証される。

天皇主権説が勢いを得、機関説を駆逐していった、昭和戦中期に至っても、「天ちゃん」は民衆に好んで用いられつづけてゆく。その政治権力の無限性が謳われた当時の昭和天皇

にたいしてすら、カイライと捉える視線はしばしば向けられたのだった。じっさい、1920—40年代の男性「不敬犯」たちは、「飾り物」、「穀潰し」、「居候」、「青二才」、「お坊ちゃん」など、(左翼主義的語彙にもとづかない) みずからの言葉で、かれのカイライであることを好んで「暴露」した(司法省 [1928]1980・[1929]1979;内務省 [1938-44]1973)。その多くが、非左翼主義者によって披瀝されていたことも、前章に述べたとおりである。さらにかれの眼鏡姿と趣味の生物学研究は、当時の民衆にとって、そのカイライ性、「大元帥」としての不適格性のあかしとしても映ってゆく<sup>6</sup>。1928年、長野県の代用教員による授業中の発言から引こう。「〔重臣らは〕今の天皇には、帝王学や、生物学許り教えて世間の事情を知らせないようにしている」(司法省[1929]1979:65)。

ここで強調すべきは、大正天皇にしる昭和天皇にしる、その政治的実権の不在の証左とされたスティグマや逸話が、民衆によってなかば恣意的に選択・創出されたものである点だ。おそらくは、いかなる人物が天皇になろうとも、「粗」は探られ、その粗を根拠にかれのカイライであることが、真偽ないまぜとなりながら、民衆によって噂されていっただろう。繰り返すと、近代民衆のあいだに拡大した、天皇を支配層のカイライとして捉える視線は、天皇個々人の資質に由来する以上に、近代化にともない現出した、諸社会条件との連関において捉えられるべき事象である。「天皇には政治的実権が不在である」というイメージが、1900—10年代において拡大していった事実には、民衆をして天皇をカイライと捉えさせる社会的諸条件が、この時代に出揃ってゆくということをこそ、意味している。そしてその社会条件を、大澤(1998)とは別角度から問うことこそ、本論の主題となるべきものののだが、前置きをもうしばらくつづけたい<sup>7</sup>。

かくて20世紀初頭の民衆のあいだには、天皇をカイライと捉える眼差しが、社会的に定着を遂げてゆく。それは、天皇主権説という政府のタテマエ論への、きわめて対抗的な実践・眼差しが、民衆のあいだに拡大してゆく過程と、まったく等価なものだった。じじつ、同時代の支配層は、天皇家が政治的カイライとして表象されることに、一貫して異常な嫌悪感をもってたいしていた。繰り返すと、天皇家のカイライ性を語る言葉というのは、1920—40年代の思想警察の作成した、不敬事件記録の常套句であった。見方を換えるとこの事実は、政治的飾り物として皇室を捉える視点が、一般の民衆へと普及することを、(開放政策期を含め)いかに当時の政府が嫌っていたかを、顕著に示す証左にほかならぬ。大正天皇のさまざまな行状を噂すること、天皇を「天ちゃん」と呼ぶことも無論、当時であって

は警察取締の対象となっていた<sup>8</sup>。

かくのごとき、警察当局の厳格な監視体制に無縁だった例外的存在が、先の芦原帝である。かれのみは、天皇のカイライ性を、マスコミをつうじて公然と暴き続けることが許された。それは、かれが「精神病患者だった」からである。知られるように、「不敬犯」を精神病患者に仕立てあげ、異端者（「忠良の臣民」の例外）扱いをするのは、1910年代以降の警察の常套手段としてあった（井上 1995;内務省[1927]2000）。「常人」が芦原帝のごとき振る舞いを行えば、まちがいなく不敬罪に問われるとともに、かなりの確率で精神病院に送られたはずだ。しかしかれはもともと「常軌を逸した者（非臣民）」として、精神病院の中に既にいた。芦原帝とマスコミは、警察側のやり口を逆手にとって、天皇主権説を唱導する一派が政府内で勢いづいてからも、逮捕・発禁処分をうけることもなく、天皇のパロディ記事を公に向けて創出しつづけていったのだ。「精神病患者であること」は、近代の日本社会にあって天皇のカイライ性を堂々と主張する、唯一無二の手段であった（それゆえに芦原金次郎＝正気説が、当時の知識人のあいだで実しやかに語られたのだった）。マスコミが、戦前期最大のパロディストを精神病院の中に見いだしたのは、必然だった。

そして、近代の日本社会に生じた、皇室の脱政治化を指し示す諸現象の内でも、最も重視されるのが、松下がそのシンボルの事象と位置づけた、皇室の私的領域にたいする社会的眼差しの拡大であった。それはまさに、二人の「無能な王」が日本社会に登場した、1900－10年代を契機に形成・展開されてゆく。天皇が、政治君主としてではなく、一個の「家庭人」としてマスコミ・民衆にクローズアップされる。皇室一家の瑣末な日常の出来事が詳しく報じられ、民衆が進んでこれを消費する。こうした事態の起原は、昭和の戦後ではなくて、明治後期にまで遡られるものだった。しかもこの皇室の「家庭人」化現象は、「天ちゃん」や芦原帝、大正天皇をめぐる先の諸現象を、はるかに上回る規模で近代の日本社会に展開する。すなわち近代日本に生じた、天皇家の脱政治化現象の所在も戦後同様、皇室の私的領域にたいする社会的眼差しの拡大（皇室の「家庭人」化）という局面の中に、最も顕著に見いだされる。換言すると、芦原帝・大正天皇という二人の「無能な王」の登場や、「天ちゃん」という呼称の普及は、同時代に開始したこの皇室の「家庭人」化現象から派生した二次的な事象、その「亜種」として位置づけられる。

無論、大正天皇の噂のラディカルさなどと比較すると、一見それは、当時の支配層の企図にもさほど反しない、「穏当」な現象ではあった。「飾り物」や「青二才」など、皇室の

カライ性が、直截的に表現されるわけでもない。だが、皇室の私的領域にたいする眼差しの社会的拡大が、天皇家の脱政治化を不可避免的に促進させてゆくという、松下の明快なテーゼをふまえるならば、それは同時代政府によるイデオロギー政策への、ひじょうな対抗性を有した事象としてあった。すなわち、皇室の私的領域にたいする社会的眼差しの拡大プロセスとは、近代日本の民衆・マスメディアが、脱政治的存在として天皇家を観念・表象し、顕教たる天皇主権説への対抗性をふかめていった過程にほかならない。次節以下では、その具体的な様相につき、社会的背景を含めて詳しく論じてゆくことにする。

## 2. 戦前期皇室報道における「家庭」への眼差しの登場

まず、近代のマスメディアが、「家庭」という要素を皇室報道の中心的なトピック・キー概念にすえてゆくプロセスを、項目ごとに素描してみたい。

### 2.1. 「幸福な家庭の実現」

繰り返すと、1890年代以前のマスメディアの伝える皇室に、「家庭」はないに等しかった。『世界之日本』事件（1896年）に見たごとく、皇室の日常・私的領域の様子というのは、むしろ当時の新聞雑誌社の、ひじょうに敬遠したトピックとしてあった。しかし、このような状況は20世紀に至り、劇的な形で変貌する。第一章に論及したごとく、各新聞雑誌社は、天皇家の家庭生活・日常の様子を、好んで報じるようになるのである。しかも唯に皇室の家庭内の様子を伝えるにとどまらない。その報道の内容は、大衆天皇制下のそれと、時を追うごとに近くなってゆく。すなわちそこでは、円満で、情愛に満ちた皇室の家庭内部の様子が、中心的なトピックと化してゆく。大衆天皇制の要件の一つたる、かれらの「幸福な家庭」振りは、20世紀はじめのマスコミによって、早々から演出されていたのである。具体例を、新年恒例の皇室記事から一つ引いてみる。

「〔迪宮裕仁・淳宮雍仁は〕御徒歩にて凜々しく御制服に背囊を負わせ給い御仲睦まじく御手を繋がせられて御登校あるが常なりと申す…時には学習院より御帰殿ありて直に背囊を負わせられたる倅親宮両殿下〔大正天皇・貞明皇后〕の御傍近く成らせられ『オモ一様只今』『オタタ様只今』と御挨拶遊ばしたる後…何呉れとなく院の模様杯御物語りあるよし

…親宮兩殿下にも時折三笠の御殿に成らせられ御兄弟の宮が活発に御運動遊ばすを御覧ありて打笑せ給い時には御父子御揃いにて鬼ごっこ杯の御遊戯もありと申す」(1910年1月1日付『時事新報』「新年の三皇孫」)。

1900-10年代以降のマスコミが、皇室の「幸福な家庭」振りを好んであらわしたことは、次の点にも如実である。これを指し示す、文字どおりの言葉（「団欒」「まどい」等）が、当時の皇室報道の中で頻繁に使われている事実である。1910年代の皇室報道の見出しからいくつか例示すると、「皇室の御団欒」（1913年10月6日付『東京朝日新聞』）、「葉山御用邸の御団欒」（1915年2月7日付『讀賣新聞』）、「雲上のおまどい」（1917年1月1日付『東京日日新聞』付録）。とくに20年代以降になると、「家庭」への傾倒を端的にあらわす一連の語彙は、皇室の日常生活をめぐる報道の、必須の用語と化すに至る。

20世紀前半のマスコミの公開した皇室写真にも、同様の傾向は強く見いだせる。天皇家の親子・きょうだい・夫婦の姿をともに捉えた「家族写真」の公開は、その一つの象徴であるだろう。天皇家のこの家族写真にかんしては、1900年代の雑誌の口絵写真中に、既に散見され始める。皇族のスナップ撮影が解禁された20年代以降には、夫妻の睦まじい姿、家族での余暇の様子、私邸内での団欒の風景など、かれらの円満な家族関係を端的に捉えたスナップ写真も、新聞紙面や雑誌の口絵に多数登場していった。開放政策期前後の『讀賣新聞』を事例にすると、1922年度には14枚、1923年度には8枚、1924年度には15枚と、皇室親子・きょうだい・夫婦の姿を収めたスナップ・記念写真が、コンスタントな形で紙面に掲載されている。

天皇家の「モダンな余暇生活」も、1900-10年代以降のマスコミが、好んで報じたトピックだった。とくにこの傾向は、20年代以降に顕著なものである。くわえて興味ぶかいのが、当時の天皇家の家庭生活を伝える記事中で、（調度品や衣食、子どもの遊具・育児方法から住居に至るまで）西欧的・近代的なアイテムが頻出している点だろう。当時の皇室報道では、家族関係のみならず、余暇やライフスタイルのありようまでも含めた形で、その幸福でモダンな家庭振りが演出されていたのである。

「〔明治天皇の内親王・常宮昌子と周宮房子の〕戸外の御遊戯としては『ロンテニス』『クリケット』等も遊ばします。その他いろいろの御なぐさみを御学問の御余暇に遊ばします。兩宮様は実に御器用で、御学問は申すまでもなく、御遊戯に至るまで御上手で、何事にも御趣味深く入らせられます。写真も御上手で、御成先等へは、必ず、写真機をば御携帯に

なりまして、處處風景の優れた所を御とりになります。音楽も御好み遊ばしますから、琴、ピアノ、ヴァイオリン、蓄音器等も、御座所に備付けてございます…」(「高輪御殿のお正月」『婦人世界』、第4巻第1号、1909年、57頁)。

「赤坂御所内苑内に新設された東宮、同妃両殿下御専用のテニスコート開きは既報の通り四日午後一時半から挙行された、…秩父宮、賀陽宮、同妃、久邇宮朝融王、梨本宮規子女王の各殿下がおいでになってそれぞれユニフォームにお召し換えになる、間もなく東宮、同妃両殿下には…純白のユニフォームにお召しかえあそばされラケットを御手にいと軽やかに下り立たせられた、新緑に包まれた新しいコートは両殿下により最初の第一球を印せられるのである、お相手は御弟君秩父宮と梨本宮規子女王両殿下…、ミックス・ダブルの試合はかくして開始された。若く凛々しき両宮、美しき妃の宮と姫宮が力かぎり腕かぎり負けじと相あらそわれるお見事さ、コートの上の活躍はさながら胡蝶の飛び交う如く、虚々実々の御手練相伯仲し拝見する近侍たちはあたかも酔えるが如くであったが一セットのゲームは遂に八対六の大接戦で東宮、同妃両殿下組の勝利に帰した…」(1924年5月5日付『東京日日新聞』「東宮と美しき妃の宮 ミックス・ダブルのお試合に秩父宮規子女王組を破らる」)

「〔摂政宮との婚姻にともない〕赤坂離宮へ〔良子〕女王殿下のお移り遊ばさるる日もいよいよ切迫したのでそのお居間の手入れ工事に就ては宮内省匠寮技師高橋貞太郎氏が主任となり装飾係り牧野囑託等数名が昼夜兼行で督励大に努めたので予定通り廿日夜を以て完成した その模様を承るに女王のお居間は二十畳ほどの広さで、窓近くルイ十六世時代の仏蘭西ルネサンス式のテーブルとマホガニーの椅子五脚が配置され、それに次いでお化粧室、御更衣の間、御食堂、お茶の間、御寝室、御浴室などが続き、別に御嗜好のピアノが置かれる舞踏室があつて何れも採光その他萬遺憾なく、殊に絨毯や窓掛など取替えたので絢爛眼もあやに、お見事ではある…」(1924年1月21日付『時事新報』「お居間から舞踏室までも 赤坂離宮の準備成る」)。

## 2.2. 皇后・宮妃への視線の集中

20世紀前半のマスコミが、天皇家関連の報道に、「家庭」という要素を好んで結びつけていった事実を最も顕著に物語るのは、皇后・宮妃へのその視線の集中である。前章で詳し

く見たごとく、ジェンダーを軸に戦前期皇室報道を捉えたとき、その中心におかれていたのは、天皇や男性の皇族ではなくて、皇后・宮妃らのほうだった。私的領域を中心的な活動の場とした彼女らこそが、マスメディアによってクローズアップされてゆく。これこそ、近代のマスコミの位相で、天皇家の家庭人化／脱政治化が進展したことを指し示す、何よりの現れではなかったか。

事実、1900年代から30年代にかけてのマスコミが頻繁に報じた、皇后・妃の「日常」や「趣味」の中心に布置されたのは、ほかならぬ「家庭」であった。未婚の女王の場合には、「未来の良妻賢母」たるべき十全な準備・修養の様子が、既婚者の場合には、家事育児を完璧にこなすその優れた「御主婦」振りが、彼女らの「日常」の中心をなすものとして、そこでは好んで報じられていた。三代の皇后の事例をそれぞれ引くと、

「聖上の御和服は四季とりどりに数多きを〔美子〕皇后陛下には一々御裁縫有て聖上に参らすと申す…聖上の御衣御裁縫の時は絶て女官方の御手伝をも得させ給わぬとは承わるだに畏しとも畏し」（1910年1月1日付『国民新聞』「国母陛下御聖徳」）

「御坤徳海の如き〔節子〕皇后陛下の御近状を承わるに深くも御才能を包ませ給う御性にましまして唯御内儀深くたれこめ給い専ら皇太子殿下並びに二皇子殿下の御教育に御心を傾けられ御養育掛より言上する日々の御起居に留意させ給う外は和洋の文に御目をさらし給い聖上陛下入御の後はいとど御睦まじく御対談あり…」（1913年1月1日付『東京朝日新聞』「大内山の春」）。

「〔良子皇后は〕御奥にあらせられては、天皇陛下に対し奉りての御心づかいは申すも畏く、両内親王殿下の御養育など、陛下の並々ならぬ御努力は、御想像申上げるだに畏き極みでございます。…天皇陛下におかせられては、内外の御政務、愈々御多端に渡らせられ…皇后陛下には、その御心労を御安め申上げさせらるるために、いろいろと御心遣いを遊ばすのでございます。この御寸暇もあらせられざる玉体を憩わせ給うことこそ、皇后陛下には最も御心を配らせ給うことで、御起床の時間も、天皇陛下より三十分お早く、午前六時には御目覚め遊ばされて、陛下の御起床を御待ち遊ばされます。御就寝も三十分遅れさせられて午後十時半。その間天皇陛下の御身のまわりのこと、御食事のこと、御居間の御装飾の微に至るまで、常に御配慮を遊ばされるとのことでございます。…皇后陛下には、昨年九月三十日孝宮和子内親王様が御誕生あらせられてからは、御可愛ざかりの照宮成子内親王様と御二人の御養育におつくし遊ばされるので、母宮としての御務も非常なものでござ

います。殊に尊いことは御授乳に御乳人〔一般から採用した授乳係〕は上っていても、御事情の許す限りは母宮として御自ら御授乳遊ばされ、御乳人のまいらすのは深夜のみでございます。よく御自ら孝宮様を御守り遊ばされ、お抱っこして日当りよき御縁座敷などを御逍遙遊ばすと洩れ承ります。御平生の御躰なども、決して女官に任せきりということはなく、いろいろと御指図御注意を賜ります。育児日誌は一日としてかかせ給わず、玩具一つの御選びも苟くも遊ばされずとのことでございます…」（「女性の鑑と仰ぎ奉る皇后陛下の御日常」『主婦之友』第14巻第4号、1930年、41・2頁）。

皇后や皇太子妃の妊娠・出産に、マスコミが多大な関心を払い始めている点も、上記の事象を端的に物語るべきものだ。御手洗辰雄によるならば、1901年の迪宮裕仁の誕生のときから既に、彼女らの出産をめぐる各社のスクープ競争は始まっていたのだが（御手洗1952）、本格的な契機は1915年、貞明皇后による澄宮崇仁の妊娠・出産報道に求めるのが妥当だろう。予定日が近づくにつれ、皇后の動向をめぐることこまかな報道が、連日のように流されているという点で、それは後の出産報道の原型をなしているからだ。『東京日日新聞』から見出しのみ例示すると、「光榮ある御乳人 皇后陛下御安産も間近きに」（1915年11月19日付）。「皇后いよいよ御安泰 秋晴の御苑の御そぞろ歩き」（1915年12月1日付）。「皇男子御誕生 御母子頗る御健全」「御安産 些の御苦痛なく」「御産室には僅に二時間」「〔皇后の実家の〕九條家の万歳」（以上、1915年12月3日付）。「皇后宮の御食事も進ませられ 親しく新宮に御添乳させ給う」（1915年12月5日付）。

以上のごとき、妻・母親役割にたいする着目という点においても、20世紀前半の皇后・妃をめぐる報道は、前時代のそれとの、明確な切れ目を見せている。1890年代以前のマスコミは、彼女らの家内領域での役割を主題的にとりあげることは殆どなかった。婦人雑誌ですらそうだった。当時の彼女らをめぐる報道の主流をなしたのは、男性の皇族と同様、公的領域での活動を伝えるものであったといっている。

これにたいし、1900-30年代の女性の皇族関連の報道では、「家庭」という要素は、およそあらゆるトピックに付与された。たとえばこの頃のマスコミが好んで報じた彼女らの「趣味」の中心的カテゴリーの一つは、割烹やピアノ、裁縫など、「家庭的」なもので占められた。じっさい当時の記者による女性の皇族への取材は、かかる「家庭的・女性的」な趣味性格を中心に実施されてもいた<sup>9</sup>。戦前期皇室報道に現出した、彼女らと「家庭」とのふかい結びつきはあくまでも、マスメディアの手によって、意図的に構築されたものだった。



た。この点は、強調されるべき事実だろう。

### 2.3. 天皇家の「子ども」の誕生

天皇家の「子ども」をめぐる報道の頻出も、1900-10年代以降のマスメディアの位相で皇室の「家庭人」化の進展した、シンボリックな現れの一つである。無論、幼少の皇子をめぐる報道じたいは、明治前期から見られるものではある。ただし、当時のマスコミのあらわした幼い皇子らの姿は、大衆天皇制下のそれとはまったく違っていった。成人の皇族との表現上の差異は薄く、「無垢・無知」で未発達な様子が報道されることもきわめて少なかった。管見では、両親宮によるその愛育の様子などが報じられた事例も、1900年代に至るまでは希少である。その意味で、1890年代以前の皇室報道の中に、「子ども」は存在しなかったといっている。たいてい20世紀前半のマスコミは、幼い皇子・皇女らを、近代的な子ども観にもとづき着目・表象していった。かれらをめぐる報道では、その公的領域での活動が次第に霧消し、その政治的側面は希薄化する。かわって、その可愛らしさや無垢な様子、両親宮への依存振りなど、かれらの政治的・人間的な「未熟さ」が、中心的に報じられてゆくのである。たとえば1902年、誕生して8カ月ほどした迪宮裕仁（昭和天皇）の様子を、当時の『東京日日新聞』はこう伝える。

「御容貌は御丸顔にて御頬のあたりふくふくと肥えさせられ、御眼は父宮に能う肖させ給いて御口元は母君を其俣なり、御愛くるおしき御ありさま何と申し上げ奉つらん詞も知らず、昨今は…ああ、ああ、など語らせ給いて御付の方々を見させ給いては折々に笑ませ給う…」(1902年1月1日付『東京日日新聞』「皇長孫殿下の御事」)。

続いて1908年、皇孫御殿内で弟たちと曲芸団の公演を観覧したときの記事から引いてみる。団員の玉乗りに夢中で見いつている最中、別居する両親宮がかれらのもとを訪れる。「御目敏とく光宮〔高松宮〕様がチラリと〔大正天皇・貞明皇后の〕其御姿を御覧じさせられると『ヤア御父様と御母様が』と有仰る、御兄様御二方も御椅子を飛んで雀踊遊ばされ…、妃殿下は…御満足の程畏く迪宮様の御頬を両の御手で撫でられ乍ら御隣席にニコニコして居しゃる淳宮様の御手を抱えて御言葉がある其間にモー妃殿下は光宮様を御膝に載せられて熟とその健かな御顔に頬ずりを遊され御親子の御温き御睦みを漏れ拝するだに有り難く楽屋の太夫連までもが勿体なくて堪まらないと畏んだ位だ、…〔演目が進むにつれ〕

迪宮様には何やら御眠気を催された御様子でグルリと父君殿下の方に向わせられ殿下の御膝に御手々を置いてチト御ムヅカリ遊ばず、父君殿下もこれには御当惑と見えて御手づからハンカチーフに御ムヅカリの御目を撫でさせられたが御機嫌が直らぬ〔皇太子は〕妃殿下を顧みられて『大分機嫌が変りましたぞ』と御困じの体だ、…御母君殿下は打ち笑まされながら『温順〔おとな〕になされるのですよ』と〔迪宮に〕仰せらるる 鶴の御一声に〔迪宮は〕スッカリ又元の快潤の殿下にならせられ…」(1908年6月26日付『大阪毎日新聞』「皇孫殿下曲芸御上覧」)。

1920-30年代になると、その「愛らしさ」「無邪気さ」を強調する言葉は、幼い皇子らをめぐる記事・写真見出しのキーワードと化すに至る。当時の新聞の写真・記事見出しからいくつか引くと、「いたいけな御姿よ 最近の澄宮殿下」(1921年10月4日付『国民新聞』)「お可愛らしく御健やかな照宮殿下」(1928年12月6日付『大阪朝日新聞』)「皇太子さま ヨチヨチ御歩きのお可愛らしさ！」(1935年7月8日付『讀賣新聞』)。念のため付言すれば、これもマスコミ側が積極的に構築していったイメージにほかならぬ。たとえば20年代前半の澄宮(三笠宮)崇仁が、後述のごとく民衆・マスコミの人気者と一躍あいたったのは、その仕掛け人である『東京日日新聞』記者の、かかる動機が発端だった。「〔取材で〕日光御用邸に通ううちに、ふと澄宮殿下の御姿を拝した。まだ学習院初等科に御入学前の頃で、まことに《御可愛い殿下》、若し御写真にいただくことが出来たら、《どんなにか国民にいい感じを与えることであろう》と、思いついた」(小野[1929]1993:310)。

このように、かれらの「未成熟性」が強調されてゆくのと並行する形で、「遊び」という要素もまた、幼少の皇子関連の報道の重要な構成部分となってゆく。童謡や昆虫採集、砂遊びなどの「子どもらしい」趣味、使用している玩具、きょうだい・学友との遊戯の様子などが、マスコミによって頻繁に報道されてゆくのである。この点も、1900-10年代を契機とした、幼少の皇子の脱政治化の進展を、如実に物語る事実だろう。

政治的存在としての側面を失したかれらはかくして、私的領域に最もふさわしい存在、すなわち天皇家という「家庭」を象徴する存在となる。じっさい、1920-30年代の頃になるとマスコミは、かれら幼少の皇子・皇女らを、天皇家という「幸福な家庭」のシンボルとして、明確に位置づけるに至る。このことは、当時の昭和天皇一家の団欒の風景を報じた記事中で、親王・内親王を一家の中心に布置するレトリックが、頻出している事実に端的だ。当時の新聞見出しから例を引くと、「照宮〔成子〕様を御中心にうち寛がせ給う」(1928

年 11 月 28 日付『大阪毎日新聞』「皇太子様中心に和やかな御団欒」(1936 年 1 月 1 日付『国民新聞』「皇太子殿下きょう御誕辰 御団欒の御中心」(1936 年 12 月 23 日付『東京朝日新聞』)。

近代の天皇家の「子ども」関連の報道について、もう一点触れておくべきは、両親宮によるその愛育の様子が、さかんに強調された点である。この点も、マスコミの位相での、幼少の皇子・皇女の脱政治化の端的な現れとして挙げられる。繰り返すと当時のマスコミは、皇后・妃による愛情に満ちた育児振りを、彼女らの日常の重要な一部にすえてゆく。それとともに、父宮と子どもの睦まじい交流の風景も、しばしば報じられる話題の一つとなる。たとえば 1900-10 年代のマスコミが、大正天皇の子煩悩ぶりを好んでつたえている事実にかんしては、原(2000)も既に指摘する。もっともそれは、かれの個人的資質の反映(原 2000:104-151)という以上に、当時のマスメディアの総体的な傾向としてあった。事実、子煩悩として報じられたことにかんしては、同時代の他の父宮たちにもものきなみあてはまる指摘であった。しかも 1920-30 年代になると、親王・内親王の日常を伝える報道では、「両陛下の御慈愛のもとに」「両陛下御愛撫のもとに」というレトリックの使用が慣例化するほど、昭和天皇夫妻によるその溺愛ぶりが強調されるに至っている。

そうしてこの類の報道の登場とは、「幸福な家庭」のシンボルたる幼少の皇子・皇女との関係性をつうじ、天皇・男性の皇族を含めた皇室の人々ぜんたいが、家庭内に埋没した存在として表象されてゆくという点でも、重要な契機として記される。それは、20 世紀はじめの明治天皇も例外でなく、幼い皇孫との関係が語られるとき、もしくは幼少時の大正天皇との関係が回想されるとき、その政治的イメージは、一時にしろ後景に退いてゆくのである。

「沼津御用邸に御避寒の三皇孫殿下に対し…両陛下より御年玉は舶来の軍艦に同く三輪車の御玩具にしてその他御年玉金として形式ばかりを御包みとなして進じさせられたるに対し第一皇孫迪宮殿下には御礼状を左の如く御認めになりて、両陛下に進じさせられたりオヂヂサマオントシタマアリガタクイタダキマシタ、オババサマオントシタマ、イタダキマシタと…天皇陛下にはオヂサマ<sup>〔ママ〕</sup>皇后陛下にはオバサマ<sup>〔ママ〕</sup>と御認め袋の裏に迪と一字を書かせて進じられたり」(1909 年 1 月 1 日付『国民新聞』「皇孫へ御年玉」)。

「〔大正天皇が〕御五つ六つばかりにならせ給う頃の御事…至尊〔明治天皇〕には関西の野に催さるる陸軍大演習に行幸の御事ありて新橋御発輦の砌殿下〔大正天皇〕にも奉送遊ば

されたるが御告別の御挨拶を言上遊ばさるる御折りに御風を召させられぬ様にとの御言葉ありけるに至尊には此御一言に最とも御満足の御様子にて天顔に御笑を湛え給い殿下の御頭を御撫で遊ばされて御懇の御言葉を賜わりたる…」(1909年1月3日付『東京日日新聞』「東宮御孝徳」)。

以上概観したように、皇后・女性の皇族、幼少の皇子らを皇室報道の中心に布置し、なおかつその私的領域での活動を焦点化することで、1900-10年代以降のマスメディアの報じる天皇家は、総体としてその政治性を漸次希薄化してゆく。並行して、政府が明確に公的存在として規定した天皇・男性の皇族もまた、家庭内での活動が、マスコミからの注目をあびてゆく。のみならずそこでは、皇室による「家庭」への傾倒振り、かれらが私的領域をひじょうに重視している点が、主題的に報じられてゆく。マスメディアの位相での皇室の「家庭人」化という、大衆天皇制の指標の一つが、他の諸メルクマールと同様、1900-10年代を契機に満たされてゆくことは、ここにうたがないだろう。そしてそれはまぎれなく、近代日本のマスメディアが皇室を脱政治的な存在として好んで表象し、顕教である天皇主権説との対立をふかめてゆく、重大な局面として存在した。

### 3. 「家庭中心主義」との連関

つづいて、背景に考察を進めてゆきたい。何ゆえ近代のマスメディアは、「家庭人」つまりは脱政治的な存在として、天皇家を好んで表象していったのか。

松下(1959)に従えば、大衆天皇制下のマスメディアの位相に生じる、皇室の家庭人化・脱政治化現象の最大のファクターは、大衆社会状況の出現にともなって、「家庭」という場が社会的に価値づけられてゆく点に求められる。それはおおまかにいえば、次のような意味合いにおいてである。

大衆天皇制下の天皇家の、「スター」としての側面は、大衆の「日常的要求の理想」をかれらが体现することによって補完される。すなわち、そのような存在として皇室がマスメディアに日々報道されることではじめて、民衆による天皇家への憧憬・親近感、スムーズに再生産されてゆく。換言すると、マスコミ側にとって、民衆の「日常的要求の理想」として皇室を表象することは、彼らの「スター性」を補完し、その人気・集客力を継続的

に販売戦略に活用してゆく上での、重要な位置を占めることとなる。

では、大衆天皇制下の民衆の日常的な要求の中核をなす価値とは、いったい何か。それは、「幸福な家庭」にほかならぬ。私的領域の充実をこそ追求すべきとする価値観が浸透する大衆社会状況のもとでは、皇室が「幸福な家庭」として現前することではじめて、その「スター性」は担保される。言い換えれば、「幸福な家庭」の実現こそ、近代社会の民衆が、「スターとしての天皇家」に求める最大の要素である。大衆天皇制下のマスメディアが、皇室の幸せな家庭生活を中心に報じてゆくのは、この読者のニーズに応えた結果として存在する。「大衆天皇制論」によれば、戦後日本のマスコミによる、皇室の私的領域への多大な関心は、およそそのような機制のもと、形成されたものであるという(松下 1959:44-45)。

では前節で概観した、近代日本のケースはどうか。

私的領域の充実を謳うイズムの「大衆化」の端緒は知られるように、20世紀はじめの都市民衆に見いだせる(南他 1965; 小山 1999)。戦後になってかかる傾向が加速・拡大したのは確かだが、それは戦前から一定の広がりを見せた価値観でもあった。とくに20-30年代の都市民衆のあいだでは、「家庭中心主義」が席卷し、夫婦・親子での娯楽・余暇生活を重視する傾向が広範に生じたことで知られている(南他 1987:62)。このような民衆の動向に呼応して、かれらのモダンな家庭生活をサポートする商品・施設が、同時代の企業の手によって多数登場することも、既に周知の事実だろう。例示すれば、百貨店による「主婦」や「子ども」を対象とした販売戦略の展開、鉄道会社を中心とした諸レジャー施設・郊外住宅地の開発、マスコミ界での家庭・子ども雑誌の隆盛など(南他 1965・1987; 吉見 1992; 初田 1993)。「幸福な家庭であること」が、皇室のスター性を補完してゆく上での前提となる、近代的な価値規範・諸装置は、20世紀の初頭から、既にあるていど出揃い始めていた。皇室報道の中に出現した、モダンで幸せな家庭生活が、当時の民衆の目に、自身の「日常的な要求の理想」として映っていたことは、ここにおいて想像に難くない。

事実、前章で論じた近代「女性」の皇室観こそは、「幸福な家庭」という要素が、皇室の「スター性」を補完してゆくという事態の、典型例を示していたのではなかったか。

繰り返せば、同性の皇族にたいし彼女らが向けた強い憧憬は、皇后・宮妃による、「幸せな結婚の達成」(皇族との婚姻をつうじたハイクラスの獲得・再生産)という部分に大きく起因した。換言すると、(配偶者の「家庭」にはいることを前提とした)自身のライフコースの理想形として、皇后・宮妃が彼女らの目に映ったことに、その形成要因の一つをそれ

はもっていた。戦前期女性のこの心性において、皇后・妃の「スター性」はまさに、彼女らが「幸福な家庭（の妻・母）」であることによって、大きく補完されている。同時代のマスコミが、女性読者のニーズに応える形で大量生産した、皇后・妃たちの報道中で、その「幸福な家庭（主婦）生活」を中心トピックにおいたのも、それが皇后・宮妃の「スター性」を再生産する上での、最も有効な話題であったからにほかならなかった。

1900-10年代以来の、皇室報道の「家庭人」化の背景に、家庭中心主義の擡頭がはたらいっていたことは、ここに確かだといえる。私的領域を重視する思想の社会的浸透にともなう、「幸福な家庭生活の実現」が、民衆（とくに女性）の欲望の重要な部分をなしてゆく。それは同時代のマスメディアにとって、皇室の「幸福な家庭」振りを報じることが、かれら（とくに皇后・宮妃）のスター性・集客力を補完する上での、最も重要なファクターとして確立してゆくことを意味していた。松下（1959）の指摘した、戦後大衆天皇制のそれと同様の機制が、近代日本のケースにも、はたらいっていたといっている。

もっとも、20世紀前半の日本社会に大量流布していった、天皇家の幸せな家庭生活を伝える報道とは、読者のニーズに応えるというのみならず、マスコミ・企業の側が、読者の心性にたいし、積極的にはたらきかけてゆく契機を含むものだった。以下では、松下の議論から少し離れて、かかる報道と家庭中心主義の関係性の別側面を議論してみたい。

繰り返すと、日露戦後の民間企業は、モダンな家庭生活を強く求め始めた都市民衆の擡頭に応じ、これに関連した商品・施設を多数登場させてゆく。それは、民衆の望むライフスタイルを補完する諸装置が、日本社会に整備されていった過程であると同時に、企業の側が、家庭中心主義の擡頭を、自己の拡大に活用してゆくプロセスとしても存在した。企業側の視点から捉えたとき、民衆へのこのイズムの浸透は、家族が「生産の場」から「消費の場」へと変貌し、重要なマーケットとして確立したことを、何より意味するものだった。

注目すべきはこのプロセスの中で各関連企業が、皇室という「家庭」を販売戦略中に好んで活用し始めている事実である。繰り返し確認しておくならば、20世紀前半の家庭用品メーカー・雑誌出版社は、自社製品の広告に、「〇〇妃殿下御嘉納」「各宮家御買上」など、皇室をめぐる諸記号・図像を頻繁に用いてゆく（山本 1990）。しかもこの類の広告掲載において各企業は、「主婦」向け商品なら皇后・妃を、「子ども」用品ならば幼少の皇子をと、該商品の消費者層にしたがいながら、登用する皇族を明確につかいていた。それらは

うたがいなく、「幸福な家庭」（自身の「日常的要求の理想」）として皇室を捉え憧憬する、民衆側の心性を、自社製品・施設の売上拡大に結んでゆこうと目論んだ、一つの広告戦略だったといっている<sup>10</sup>。

20年代前半のマスコミ・レコード業界が、「童謡」という新興の児童向け文化の普及を仕掛けてゆくさいに、澄宮崇仁という、当時の天皇家の代表的な「子ども」を広告塔に登用したのは、その最たる例だった。20年代はじめ、いまだ学齢にも達していなかったこの澄宮は、幼少ながら詩作を得意とし、多くの童謡を私的につくっていた。1921年8月に、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』がこの事実をスクープすると（小野[1929]1993: 310-327）、以来マスコミはかれを「童謡の宮様」と呼びならわし、こぞってその童謡を入手・紹介していった<sup>11</sup>。「童謡の宮」をめぐるこれら一連の報道は、民衆の間に大きな反響を呼び、この児童文化が民間に普及してゆく上での、一大契機としてはたらく（金沢他編 1968:353; 金田一 1983:236）。

ここで注目すべきは、澄宮というシンボルをつうじたこの童謡の啓蒙過程が、商品経済とふかく結びついていた点だ。すなわち澄宮の手になる童謡は、20年代の新聞社・大手レコード会社によって——著名な作曲家や人気の歌手が動員されながら——作品集やレコードという形で数多く販売・消費されている。当時の「大正っ子」が、澄宮の童謡の内容を、戦後になっても印象ぶかく記憶しているのは（伊馬 1976:87; 八木 1989:24）、かかる媒体との連動に何より由来した。事実、1922年、毎日系列の発売した澄宮の童謡集などは5万部近く売れたと、「童謡の宮」ブームの仕掛け人は回想する（小野[1929]1993: 319）。当時の新聞広告から引いておくと、

「澄宮殿下御下賜童謡レコード 第四皇子澄宮崇仁親王殿下は竹の園生に芽生えた詩才であらせられます。この宮さまより御下賜の童謡を御前演奏の光栄を担うた本居みどり子嬢と貴美子嬢とに唄って頂き本居長世氏のピアノ、如月社同人の合唱によって吹込みましたのが此レコードです。此光栄は独り吾社の有する所です。（近日発表） 株式会社 日本蓄音機商会」（1922年1月6日付『東京日日新聞』広告）。

「賜天聴 関鑑子謹唱 大和田愛羅謹奏 東京日日新聞記者小野賢一郎謹話 澄宮殿下御作唱歌レコード 富士山印東京レコード 東京蓄音器株式会社謹製 全国代理店にて頒つ」（1922年1月18日付『東京日日新聞』広告）。

「本日より発売 定価金八十銭 澄宮御作童謡集 第四皇子澄宮崇仁親王殿下は竹の園

生に芽生えた詩才であらせられます。この宮さまの御作十篇を謹纂して近く発行するの栄光を荷った本社は一々の御歌詞に曲譜【作曲本居長世、永井幸次両氏】を附し、尚御作意などについては本社員小野賢一郎氏が日光田母澤澄宮御殿に参じて親しく伺い得たところを簡明に記してあります。大阪毎日新聞社 東京日日新聞社（1922年1月20日付『東京日日新聞』）。

くわえて20年代には、作品集やレコードのみならず、浴衣やノート、せんべいなど、澄宮の童謡をモチーフとしたさまざまな児童向けグッズも、広く売り出されていた。この点にかんしては、三笠宮崇仁本人も、後に証言したところである（金沢他編 1968:353;1926年3月18日付『東京日日新聞』「童謡の宮」）。

ここにおいて、1900-10年代以降のマスコミが、私的領域に埋没する存在として皇室を好んで表象していった、もう一つの背景が示されることとなる。すなわちそこには、「家庭」を重要な市場として捉え始めた、同時代の企業（広告主・マスコミ自身）の思惑も、ふかく反映されていた。皇室を、「幸福な家庭」としてあらわす当時の報道の数々は、皇室を「日常的要求の理想」として憧憬する読者の心性を刺激し、彼女らに「家庭への投資」を促してゆくという、広告的な側面を内包したものだ。じっさい、当時のマスコミがあらわした、モダンな商品と娯楽に満ちた皇族の「幸福な家庭」振りは、きわめて広告的である。構成員間のふかい愛情にもとづいて、モダンな家庭生活の達成に資本をそそいでゆくかれらのその姿は、当時の民間企業にとっての「理想の家庭」でもあった。その意味で、近代の日本社会に生じた、皇室の家庭人化・脱政治化という現象は、民衆・マスメディア・民間企業という三者の相互作用のあいだで、強化されていった側面をもっていた。

#### 4. 皇室の猥談

とはいえ、家庭中心主義の擡頭が、近代の民衆の内に育んだ、皇室の私的領域への関心のありようは、松下（1959）のいうごとき、自身の欲望を理念的に達成した、「幸福な家庭」としてかれらを憧憬する、という形に限定されるものではない。また、そのように限定しないとき、ジェンダーや都市／農村、階層を越えた広がりをも、それは近代の日本社会で見せている。その代表的な事例として、皇室をめぐる「猥談」の流行を以下でとりあげたい。



既に論及してきたように、この類のゴシップの流布というのも、20 世紀のはじめ、明治の終わり頃から、民衆のあいだに拡大してゆく事象であった。不敬事件記録等によるならば、それは、地域・階層・ジェンダーにさほど関係なく、広範な流行を見せた現象としてあった<sup>12</sup>。金子光晴は、明治後期の東京市民の内でも、「皇族の生理生活に不敬な想像力をはたらかせて、あられもない面に吸着して、〔皇室の〕魅力源をつくりあげているもの」は、「中産階級の女子供」に多かったと証言するが（金子 1966:20）、思想警察の作成した記録ではむしろ、成人男性のあいだにおいて、それは目立って見えている。

この皇室をめぐる猥談の流行現象こそは、皇室の私的領域にたいする社会的関心の拡大を、最も端的に示す事象としても捉えられるべきものである。第一にそれが、皇室の私的領域の「実像」を、その内奥にまで踏み込んで語ってゆく性格を、本来的に有した点。第二に、皇室の家庭生活の亀裂や「乱倫」が、そこではしばしば主題とされていたという点においてである。両者を満たす具体例を、1915 年 11 月の徳富蘆花の日記から引いてみたい。「〔友人の噂によると〕嘉仁君〔大正天皇〕も中々スキで、皇后さんの出産と同じ月にお妾の産が迫って居る。それは多分華族の女で、灯火をすすめる女官なのだ。…美人だそうだ。此は公然の秘密」（徳富 1985-86: 第二巻: 167-168）。

かくのごとく、天皇家の側室にまつわる猥談は、それが公然の制度であった明治期のみには所属しない。大正期以後も、ヨリ逞しくなる民衆側の卑俗な想像力のもと、それは噂され続けてゆく。並行して、地方での「お手つき」「娼妓・女給遊び」等の噂も、その有力なバリエーションにくわわってゆくだろう。「御落胤」をめぐるゴシップや詐欺商法が、寄席芸人や新興宗教などをとおして横行していった地盤は、ここにある。

人々はまた、皇室報道の中に、その「幸福な家庭」の綻びを、積極的に読み込んでゆく。当時の皇室をめぐる猥談は、そのような形でもしばしば展開された。蘆花と岸田劉生の日記から引用する。「〔1917 年 12 月 30 日〕初花の内侍が宮中を出た、と新聞にある。〔大正天皇の〕お妾さんの一人なんめり。…お節さん〔貞明皇后〕のいびり出しだ」（徳富 1985-86: 第六巻:170）。「〔1921 年 2 月 10 日〕新聞の〔宮中〕某重大事件というのは未婚の皇太〔子〕妃の妊娠の噂だという話が出る。そうだったら当局の人はさぞ困るだろう」（岸田 1979:46）。

1920-40 年代前半の不敬事件記録も同様に、天皇家の家庭内の「波乱」を主題とするこの類の猥談が、戦前期民衆のあいだで継続して広く流布していったことを明確に物語る（司法省[1929]1979・[1928]1980;内務省[1938-44]1973）。1920 年代以降になると、皇室の家

庭生活の「乱倫振り」はクチコミだけでなく、左翼ビラや男性向けの猥本など、アングラ出版物をつうじても広範に言説化され、出版警察がその取締に追われてゆく（内務省[1928-44]1981-82）。

この天皇家をめぐる猥談の流行は、同時代のマスコミの位相で生じた傾向とは、一見対立する現象に思われる。繰り返すとそこでは、マスコミの報じる皇室の家庭生活の円満振りとは対照的に、その破綻や亀裂の場面が好んで語られた。とはいえ両者は、「皇室の私的領域への関心」という視点から捉えた場合、まったく同質のものである。その意味で、天皇家の乱倫振りを面白おかしくつたえる噂と、皇室の団欒振りをつたえる報道とがほぼ同時期に流布し始めたのは、決して偶然ではなかった。

そうして、この猥談に象徴される、皇室の私的領域への卑俗な興味も、家庭中心主義の浸透が、戦前期民衆の中に育んでいったものにほかならない。そもそも、天皇家がどのような家庭生活を送っているか、育児をしているか、余暇をすごしているか等への関心の登場は、公的領域と家内領域の区分が理念として日本社会に誕生し、なおかつ後者がいくばくかも社会的に価値づけられることを前提とする。ぎゃくにいうと、日本の近代化の進展にともなって、「家庭」という場が社会的に価値あるものとされてゆくプロセスは、「スター」たる皇室の私的領域「全般」への、民衆の関心・興味が拡大してゆく過程でもあった。繰り返すと、その関心・興味のありようとは、かれらを「幸福な家庭」として憧憬するという形に限定されるものではない。それは猥談をも含んだ広範なものである。家庭中心主義の浸透が、皇室の私的領域への社会的関心を拡大し、天皇家が脱政治的存在として観念・表象される上での最大の要因としてはたらいだ、と述べるとき、その中心におかれるべきは、何よりこの点であった。

事実、当時のマスコミも、「幸福な家庭」としてのみ皇室を表象していたわけでは決してない。先の宮中某重大事件を筆頭として、女官をめぐるゴシップ、皇族の婚約破棄、皇男子の誕生しないことなど、その家庭内部の「波乱」や「不協和音」もまた、近代のマスコミの好んで報じたところであった。それらが読者の「不敬」な想像力を刺激していったことも、徳富蘆花や岸田劉生の例に見た。コマーシャルイズムの席卷にともなって、皇室報道の世俗化がラディカルに進展した 20 年代の大衆紙などは、新聞紙法違反の危険を冒してまで、その家庭内のゴシップを報じたのであった。

「被告人島尾好平は東京市京橋区弓町二十一番地に於て発行する日刊新聞萬朝報の発行

人兼編集人兼印刷人なるところ、昭和三年六月十六日発行の同新聞第一二、六一九号朝刊市内版紙上に、被告人朝比奈〔知泉〕の執筆に係る『思出の俤』と題して『扱コレカラ雑ト発展家ノ宮様ヲ申上ゲヨウ』と記し、某々皇族は仏国留学中一婦人と御関係遊ばされ、或は某皇族は妃殿下御懷娠中腰元を懷娠せしめられ、或は某皇族は嘗て酒楼に遊ばれ臣下の切諫を受けさせられ、或は某皇族御兄弟の御仲御不和に亘らせらるる等皇族方に御非行ありたるが如き皇室の尊厳を冒瀆すべき記事を掲載し、約二万部を印刷して市内其他に発売頒布し、被告人朝比奈知泉は右掲載記事に署名したるものなり」(司法省[1931]1979:777)。

したがって、家庭中心主義の擡頭が近代民衆の内に育んだ、皇室の私的領域への関心の最も一般的な形態とは、「幸福な家庭」振りへの素直な憧れと、その裏側にある「実態」を求める卑俗な興味とが、複雑に交錯したものであったことだろう。1930年、千葉に「御成」中の秩父宮が、宿泊先で出会った仲居の女性は、その典型例を示している。

「そのときの宮様は…新聞でよくお見受けしたすずしげな御眼ざしで、お給仕に上りました私〔女性〕に終止お気軽に話しかけられ、いつの間にかこちらの緊張をほぐさせられてしまいました。…

私　宮様は、まだお子様はお出来になりませんか

宮様　うん、まだ出来そうもないんだよ

私　どうぞこの次、妃殿下と御一緒に〔当地に〕海水浴にお出掛け下さいませ

宮様　（笑い乍ら）うん、来たいんだけどねえ」（秩父宮 1972:430）。

前節に概観した、マスメディアの位相での、皇室の家庭人化・脱政治化の進展は、ジェンダー・階層・地域を越えて拡大した、このような民衆の心性に応えた結果としてこそ、捉えられる必要がある。言い換えれば、皇室の私的領域での瑣事が、全国紙によって日々報道されてゆくというあの事態は、「スター」たる皇室の私的領域への、読者のかかる「全般的」な興味の誕生に、何より支えられたものだった。

まとめれば、日本の近代化の進展にともなう、家庭中心主義の擡頭は、「スター」である皇室の私的領域への憧憬あるいは卑俗な関心を、戦前期民衆のあいだに広く増大させてゆく。こうした読者側の心性に応える形でマスメディアも、「家庭」という要素を皇室報道の中心的なトピックに据えるところとなる。そして皇室の家庭生活を頻繁につたえるマスコミの報道活動は、皇室という「家庭」への読者の興味と憧憬とを、さらに増幅させる効果を生む。これにくわえ、「家庭」関連の市場を開拓する上での重要な広告塔に、皇室の人々

を起用し始めた企業側の戦略も、かかる傾向に拍車をかけてゆく。このような三者の相互作用の中、皇室は、公的領域でなく私的領域をその中心的な居場所とする存在として、民衆・マスメディアに観念・表象され、その政治的イメージを次第に希薄化させていった。本章冒頭で見た、天皇のカイライ性を直截的に暴露した諸言説の流行も、家庭中心主義の擡頭をマクロな背景とした、かかる機制のもとに生じた副次的事象と推測される。ここまでの議論をおおまかに要約すると、以上になるだろう。

補足説明として、皇室の猥談につき、もう少しだけ論じておく。皇室をめぐる猥談の流行が今一つ興味ぶかいのは、「スター」である皇室の、私的領域にたいする民衆の関心の拡大が、皇室をカイライと捉える眼差しの普及と不可分につながっていた事実を、ヨリ経験的な形で実証してくれる点である。すなわち戦前期民衆による天皇家の猥談は、かれらが政務・軍務を満足に行なわず、私的領域での性的快楽におぼれている、という文脈において頻繁に語られた。その内に散見される、皇室の男性が「脳梅毒」にかかった旨のデマは、さらに示唆に富んでいるだろう<sup>13</sup>。近代の民衆が、皇室の私的領域への強い関心にもとづき、その最も内奥へと想像をめぐらしてゆく、その実践の最中において、かれらの皇室観の脱政治化・カイライ化がまさに生じていたことを、それは明瞭に物語る。当時の民衆の心性にそくしてみても、皇室の家庭生活にたいする社会的関心の拡大・増幅はうたがいがなく、天皇・皇族の為政者としての側面を、希薄化させる結果を生じさせていたのである<sup>14</sup>。

繰り返すとこの類の猥談とは、男性側にも広く流布したものである。女性ほどではないにしろ、男性側も皇室の私的領域にたいする世俗的な関心を強く有したことは、ここに明瞭だといえる。これにたいし前章では、戦前期男性の皇室観の特徴として、その抽象的・左翼的な把握の仕方を指摘した。すなわちかれらは、「カイライ」、「制度」、「大ブルジョア」として皇室を捉える傾向にあったと論じ、皇室にたいする同時代女性の世俗的な憧憬・関心と対置してみせた。だが一瞥してわかるように、この男性の左翼的な皇室観は多分において、天皇家が脱政治的存在であることを、直截的な形で表現したものである。そして1900-10年代以降の、皇室の脱政治化現象が、天皇家の私的領域への関心の誕生と表裏一体のものであるというここまでの議論をふまえるならば、それは女性側の皇室観と、対照的な関係にあるのみではないだろう。少なくとも、前章で対置した、女性による皇室への世俗的な関心・憧憬と、男性側の懐いた左翼的皇室観とが、その基底において同質のものだったことはうたがいない。

## 5. 皇室の家庭人化と近代天皇制のイデオロギー的再生産

天皇家を「家庭人」として捉える民衆・マスコミの眼差しが、天皇主権説への対抗性をふかくはらんでいる点については、戦前期政府も明確に認識し、かつ懸念を抱いていた。とくにこの警戒は、天皇主権説が統治機構内部で席卷した、昭和初期に最も顕著に現れる。それは、天皇家の猥談の取締に躍起となっていた、当時の内務官僚や末端の行政警察においてだけではない。天皇の生物学研究にたいする世間の風あたり、かれが皇后とともに麻雀に日々興じている旨（いわゆる「宮中麻雀」）の噂の拡散など、天皇が私的領域に埋没しているというイメージの普及は、当時の重臣層でも明らかに問題視され始めていた（原田 1950-51:第二巻:88、112-3;第六巻 175-6、237-238;高橋他編 1993-94:第五巻:198）。ここでは占領軍による、木戸幸一の尋問調書（1946 年 1 月 29 日分）から引いてみる。裁判資料として提出した日記の一節にかんし、詳しく説明するよう米国軍人から求められたさいの回答部分である。

「〔木戸〕 このとき〔1932 年当時〕は天皇陛下の暮らし向きのことだけが話題となり、陛下の暮らしぶりについて誤った噂がたくさん流れて陛下を批判したり攻撃したりする材料となり、それが天皇陛下に反対する革命に利用される恐れがあったのです。…

問 天皇がたとえば国民に比べて贅沢な暮らしをしていると日本国民が知れば、天皇の立場を妬んで国民が反乱を起こすかもしれないというのですか。

答 当時、天皇陛下は大部分の時間を生物学の研究に費やして国事を怠っておられるとの噂が流れており、それはまちがった情報でした。

問 その情報を急進派が取り上げて誇大宣伝することを恐れたのですか。

答 はい」（栗屋他編 1987:134）。

戦前期皇室報道の内包した、広告的側面についても同様である。それは一部支配層の目に、天皇家を有閑階級として攻撃する、宣伝ビラに等しいものとすら映ってゆく。内務省高官・松本学の日記から。

「〔1934 年〕十二月二十六日 今日の東日社会面に皇族懇話会で小唄勝太郎其他数人の芸者をよび霞ヶ閣離宮で御前演奏をやらせると云う記事、而もヴィクター専属歌手ばかりなので、いかにもヴィクターの広告百%と云うような記事が出ていた。吉村岳城が憤慨して

阻止の方法をとろうと云う。自分も賛成しておいた。関屋〔貞三郎〕前宮内次官を訪問して談じ込んだそうだが、終におとり止めとなったそうで、晩方吉村が大喜で電話して来た。皇族の不謹慎、不行蹟のことが相当広範囲に知れ亘って居るので、心ある者はいつも眉をひそめており、国民精神上悪影響あることを心痛しておる矢先、こんな不真面目なことが新聞に出ることは由々敷ことである」(伊藤・広瀬編 1995:74)。

皇室の団欒の模様のリークをつよくきらった、20 年代後半以降の宮内官僚にも、上記の指摘はあてはまる(高橋他編 1993-94: 第三巻:63,88)。事実、当時の宮内省は、天皇一家の私的な親子写真のマスコミ貸与を、内規で禁止してもいた(内務省[1936]1982:5)。20 年代後半以降の新聞雑誌社が、天皇と皇太子・内親王をともに収めた写真の掲載にあたって、各々の肖像写真をもとに、その「親子写真」をしばしば捏造せざるを得なかったのは、この禁止措置に何より由来する。「家庭」への天皇の傾倒振りが、写真という形でシンボリックにあらわされることで、その脱政治的なイメージが拡大してしまう。かかる懸念が、上記禁止措置の背景に存在したことはうたがいない。

だが、天皇家の人々を家庭人・脱政治的存在と捉える社会的眼差しの普及を、天皇制維持の障碍と捉えた部分において、支配層のこの見とおしは不正確さをもっていた。1900-10 年代以来の天皇家の脱政治化・カイヤイ化の進展は、天皇制の危機的状況ではなく、被统治者側の懐く天皇制支持の論理が、より強固な形へと質的に変容してゆくプロセスとしてあったからだ。

大衆天皇制下の皇室は、家庭内にひたすら埋没する、脱政治的な存在として観念・表象されることで、あらゆる政治的結果から免責される。この点で、皇室の脱政治化現象は、天皇制維持のための、重要なイデオロギー的役割を担ってゆく。松下(1959)のこの議論に従えば、1900-10 年代から既に、天皇制のイデオロギー的再生産は、概観した皇室の「家庭人」化によって、あるていど担保されていたことになるだろう。すなわちそれは、天皇の名の下に行なわれた、明治以来の強権的諸政治にたいする民衆の反感が、天皇その人でなく「天皇を操る周囲」へと向かい、「家庭人」たる天皇ならびに天皇家は、民衆から免責されるという結果をもたらした。松下に倣えば、このような考察が成立する。

繰り返すと、「家庭」という要素を軸に皇室を観念・表象してゆく、戦前期民衆とマスコミの眼差しは、きわめて左翼的な性格を他面でもっていた。それは、「天皇家はカイヤイである」という認識と、ほぼ等価な皇室観・皇室報道ですらあった。しかし、この眼差しの

社会的普及が、「だから天皇家は無用である」という、同時代の「主義者」らにとっては当然の論理展開<sup>15</sup>を見せることは、多くの場合なかった（「だから無用である」という非左翼主義者の「不敬言辞」が、きわめて表層的な性格のものであったことも前章に具体的に見た）。天皇家を脱政治的存在と捉えるかれらの視点はあくまでも、家庭中心主義の社会的浸透にともない、皇室という「幸福な家庭」への憧憬あるいは卑俗な興味が拡大してゆくプロセスの内から派生したものだった。すなわちその出発点からして一般民衆のこの眼差しは、左翼主義者のそれとはぎゃくに、天皇制への好意的・肯定的態度をこそ多く含んでいた。その意味で、1900—10年代以降の民衆のあいだに拡大した、皇室観の「家庭人」化・脱政治化現象は、主権説にたいしてはひじょうな対抗性を有しながらも、天皇制じたいの廃止を支持する方向には、はたらきにくいものだった。

補足すれば、天皇がカイライとして捉えられることで、あらゆる政治的責任・結果から免罪されてゆくという、かかる社会的雰囲気の一部は、戦前の中心的左翼集団の中にさえ生じていた。中野重治は、自伝小説の中でそう論じる。大正天皇の噂が巷に席卷していた、1920年代前半の話である。東大新人会のメンバーである主人公の「安吉」は、知己で非新人会系のマルクス主義者「斎藤」から、王権廃止のための「真面目な」テロリズム計画を聞いたあと、次のように己を省みる。「どうにかすると、安吉たち〔新人会とその周辺〕は、天皇のことをテンチャンといって呼ぶことがある。天皇を馬鹿にしての、軽くあしらってのことにちがいない。しかし斎藤は、テンチャンなどいう言葉をつかう人間があるということさえ知ってはいないらしかった。…安吉は、テンチャンという呼び方に内在するかも知れぬからかい以外のものを感じた。〔天皇を〕正面で扱うことからの無意識の逃げを感じた」（中野[1954]1976:158-9）。

じっさい、皇室をめぐる猥談にしろ、大正天皇のゴシップにしろ、これを語る当時の民衆の多くに、天皇家への批判意識は希薄である。むしろそれらは、好意的な文脈においてこそ、人々に語られていった話題であった<sup>16</sup>。「天ちゃん」が何より、天皇への愛情表現として用いられていたことも、繰り返し強調しておくべきだろう。冒頭の大澤（1998）の議論に立ち返れば、脱政治的な「無能な君主」<sup>17</sup>像を、近代の民衆はみずから望んで構築していったのである。近代日本の民衆・マスメディアに生じた天皇家の「家庭人」化・脱政治化現象が戦後と同様、天皇制のイデオロギー的再生産を補完する方向へと向ったこと——天皇制への反発作用でなく、その「変質」の現れであったこと——は、ここにおいて一定

ていど立証される。



## 第五章 戦時期の「大衆天皇制」（1930年代後半－40年代前半）

本章では、日中・太平洋戦争期<sup>1</sup>を取り扱う。

1937（昭和12）年7月、日中戦争の勃発周辺を契機として、日本社会は本格的な統制の時代にはいってゆく。よく知られている部分である。同年前後から、太平洋戦争終結までの約8年間、経済・生活・思想、およそあらゆる局面に政府が強権的に介入し、人的・物的資源の戦争への集中が図られてゆく。その法的基礎となった国家総動員法の公布は、1938年。戦時の各種統制の立案を担当した企画院の設置はその前年である。無論、その統制の実態が、軍部や企画院の目論見に完璧にそうことはなく、綻びは種々各所に噴出するものの、かつてとはまったく別様の社会的状況が、爾来確かに出現する（南他1987）。

戦時下に実施された諸統制中、直截的に民衆生活にかかわったのは、徴兵・徴用、それからインフレと物不足である。戦況の深刻化にともない徴兵対象の枠は漸次拡大され、太平洋戦争の終りには、720万人もの男子が兵隊に動員されていた。徴用令の対象も漸進的に拡張し、非徴兵対象者と多数の外国人が、不足する軍需関連産業の新たな労働力として強制的に充当されてゆく。政府関連工場への人員の強制的徴用・配置を可能とした国民徴用令は1939年。学徒動員令は、44年のことだった。

かくのごとき身体的な拘束にくわえ、激しい物不足も民衆をみまってゆく。統制経済下に拡大する物資の不足は、ヤミ市場の拡大と物価高騰を呼び、1940年以降の、生活必需品の配給制確立の呼び水となってゆく。しかるに輸出入制限と国内生産力の低下にともなう物不足の慢性化のもと、ヤミ市場は膨張を続け、ヤミなしでは民衆生活の達成はまったく困難なものとなるほどに、物資供給状態は混乱を見せてゆく。

民衆の思想生活も、重要な統制対象となってゆく。国民精神総動員運動は1937年、新体制運動は1940年。戦争遂行にたいする民衆の積極的協力を引き出そうとしたこの一連の官製運動は、民衆の私的領域に間断なく公権力が介入し、従前のモダンなライフスタイル・消費生活のありようを抑圧してゆくプロセスと、多くの場合等価なものだったといつてよい。そこでめざされたのは、合理化・能率化という名のもとに、家計や服装・髪型に至るまで、人々の日常の具体的局面に官僚がわけいり監督し、民衆生活を強引に戦時体制へと適合させることだった。1940年、内務省が全国的に編成させた「隣組」が、かかる目論見を達成する上での重要な末端組織として機能したことも、既に周知に属している。

かくして「個人や家庭という私的な分野を確立し、その中で生活の向上を求め、とくに

衣食以上の生活向上を、文化やモダンとして享受」するという、かつての都市民衆のありようはタテマエ上、後景に大きく退いてゆく。無論、実態というのはまた別様であって、太平洋戦争の直前まで、都市には「数年前のモダン相が依然として残されていた」。しかるに物資総体が激しい枯渇にみまわれてゆく太平洋戦争期には、かかる生活のありようは、大半の人々にとって、実質不可能なものとなる（南他 1987）。

かくのごとく、日中・太平洋戦争期の日本社会の雰囲気とは、政府による全般的な介入・監視のもと、大衆天皇制の維持・成長を困難とする性格を、その基調に強く持っていた。なおかつより直截的な形でも、この戦時体制とは、大衆天皇制の成長にとって不都合な状況をもたらしてゆく。マスメディアという基幹装置が、原理主義化を強める政府によって抑えられたという点である。

日中戦争の勃発以来、政府がマスコミをつうじた「情報宣伝」活動に乗り出してゆく過程は、内川（1973）などに詳しく論じられ、かつ広く知られるところである。国民動員への要請がラディカルに高まってゆく中、支配層内部で、「世論を指導・操作するための、マス・メディアに対する積極的な『プロパガンダ』政策が浮上」してゆくのである。その象徴的施策が、内閣情報部（1937 年）、そして情報局（1940 年）の設置に求められることも既に周知だろう。直接には、各新聞雑誌社への印刷用紙の配分をめぐる決定権を政府が掌握することで、「積極的にマス・メディアを指導・操作」する体制が確立されてゆく。これにともない、同時期マスメディアの自律性は多分に失われ、「ファシズム体制への〔民衆の〕同調造出装置」として、戦中期のマスコミ報道は機能するに至る（内川 1973）。

無論、日中・太平洋戦争期のかかるマスメディアの「御用機関」化の背景には他面、マスメディア自身がその商業主義的な目論見のもと、積極的に「時局」を販売戦略に活用していったという面を強くもっている（佐藤 2002）。しかるに「皇室」というトピックに限定していえば、内川芳美の指摘は正鵠を射たものといってよい。すなわち戦時の皇室報道の内容をめぐっては、きわめて厳格・強烈な政治介入が実施され、（読者や広告主でなく）政府の意向こそが優先的に反映されてゆくという事態が生じていた。かくて新聞雑誌社が、自律性の多くを喪失したとき、皇室報道をいかなる変化がみまったか。後述に見たい。

当時の支配層の教化政策もまた、大衆天皇制とは相容れない性格を、従前以上にあらさまとしていった。知られるようにこの時代、極端な民衆動員体制の出現に呼応して、天皇家をシンボルとした民衆統合・動員政策のありようもまた、極端化の道を辿ってゆく。政府のイデオロギー政策の極端かつ原理主義的な色彩を強めた時期は、1935 年の国体明徴

運動をその契機とする。前章にも触れた点である。爾来、政府は天皇家の神聖性と政治的絶対性というタテマエへの信仰を、きわめて厳格な形で民衆に求め、強制していった。たとえば軍部・右翼学者の影響下に実施された当時の臣民教育の、いかに原理主義的であったかは、主に教育史の成果をつうじて周知である<sup>2</sup>。既に触れた中等・高等教育への顕教の浸入（密教征伐）のみならず、義務教育課程もいっそう原理主義化がすすんでゆく。国定教科書（第四期・第五期）の内容は、国史・国語を筆頭に神がかり的な性格をいっそう強め、皇室・神社関連の学校行事も、かつてないほど頻繁に展開された時代として存在した（唐澤 1956; 山本・今野 1976）。当時の文部行政において、皇国史観に反するとの事由のもと、自然科学わけても進化論への批判がさかんに展開されていることは、その最も極端な事例として挙げられる（廣重 1973; 右田 2004）。

そしてこの原理主義の擡頭とは、政府に許容される皇室観の幅が、きわめてせまくなってゆく事態を他面で意味していた。天皇機関説という、エリート向けの皇室観を駆逐した、国体明徴運動の内にも、それは明瞭に示されるべきものだ。左翼主義者・思想集団の取締、あるいは国家神道体制からはみ出した個人・宗教団体をみまった当時の弾圧の、いかに恣意的かつ激しかったかも、よく知られる部分であるだろう。この時代の一般民衆の皇室観を知る手がかりが、不敬事件記録という形で豊富に残されたのは、官許版から外れた皇室観の痕跡を、日常会話から公衆トイレの落書きに至るまでくまなく探し回った、末端の行政警察・憲兵隊の精力的な動向にも、大きく由来するものだ。

かくして戦時下の政府は、「現人神」「絶対君主」たる天皇への帰依を、民衆にきわめて厳密に求め強制することで、極限にまで高まった民衆統制・動員への要請を、満たしてゆこうとめざしてゆく。それでは現実にも、かかる抽象的かつアナクロな観念にもとづいて、戦時期民衆の天皇制への賛意というのは、はたして動員されていたか。

## 1. 各種調査から見た戦時期民衆の皇室観

1930年代中葉から40年代にかけての時期というのは、この点にかんしての、大規模な調査がいくつか残っている。同時代の官製のアンケート調査、それから終戦直後の新聞社・調査会社の実施した天皇制にかんする世論調査がそれである。まずは、この一連のアンケート資料をもとに、戦時期民衆の皇室観の実態を測ってみる。

はじめに、1930-40年代前半の文部省の実施した、壮丁教育調査から見てゆこう。兵隊

にとられた 20 歳男性を対象とした、全数的学力調査である。このきわめて大規模な学力調査（たとえば 1938 年度の被調査者は 61 万人）には、壮丁の道德意識・社会常識を測る科目がもうけられていて、その意味で壮丁教育調査とは、意識調査としての側面をも含んでいた。「修身・公民科」と名づけられた科目がそれである。

30 年代中葉から、この修身・公民科のテストでは、皇室や国体にかんする基礎知識を問う項目が、毎年 4、5 問で登場するようになっている。たとえば次のごとき選択式／穴埋め問題である。「紀元節は（二月十一日・四月二十九日・五月二十七日・十一月二十三日）である」。「左記教育勅語の一節のあいている所に正しい文字を填めなさい」。

当時の文部省は、この学力調査の結果を、「壮丁教育調査概況」という冊子に毎回まとめていた。そこには、各設問にたいする学歴別の正答率が、抽出操作を施した上で記されている。無論、上記のごとき、国体・皇室にかんする諸問題の結果もそうである。官製の国体観念が、どれほど同時代の民衆の中にはたらいていたかを今日知る上で、きわめて貴重な資料ではあった。

では、この資料から知られる、戦中期の青年男子における国体観念の浸透度とは、どれほどのものか。1937—1943 年度のそれをもとに、ごく大まかに示したい。

尋常小学校卒業以上の学歴をもつ者にかんしていうと、かかる質問への正答率は、相対的に高かった。1937—43 年度の修身・公民科学力調査において、皇室や国体にかんする知識を問うた項目は、合計で 29 問。その内、かれらの 6 割以上が正答し得た問題の数は、12 問にも上っている<sup>3</sup>。

上記 29 問にたいする低学歴層（不就学・尋常小学校中退）の突出した正答率の低さ——その正答率が 4 割を超えた項目は、不就学層では 1 問もなく、尋小中途退学者では 5 問にすぎなかった——は、ここでは措く。教育勅語を暗記できていた人間が、通例言われるほどに多くない点も、注目されるべき事実ではあるものの<sup>4</sup>、総体的に見た場合、同時期の男子成年が、国体論的知識につき、一定でいど習熟していたことは確かである。国体論的語彙を組み換え、「独自」の国体論を披瀝し、臣民としての資格を他者に示すという技法も、かれらにとってはあるていど可能であったことだろう。かといって、かかる国体論的知識・語彙にもとづいてのみ、戦中期民衆の天皇制支持の論理が醸成されていたかという点、これはひじょうに疑わしい。

戦中期の民衆において、国体観念についての習熟度は、学歴の高さと見事に比例した。壮丁調査において、国体・皇室にかんする各問題の正答率が最も高かったのは、ほぼつね

に中等学校在学・中退以上の学歴をもつ若者だった。しかるに、国体観念に最も習熟しているかれらインテリ・亜インテリ層においても、そうした観念が天皇制支持の論理を構成することは少なかった。換言すると、壮丁調査に現れた、高学歴層における国体観念の浸透度の高さととは多くの場合、かれらの記憶力の優越のみを意味していた。

この事実にかんしては、同時代の教育学者・檜崎浅太郎が、豊富な経験的資料のもとに論証している。1938 年、「我が尊厳なる国体の真に有り難きことを体得せしむるには如何なる方法によるを最も適當とするかの一調査と私案（一）」という題目で、『教育心理研究』に発表した論考がそれである。同論考によると檜崎は、発表の 4 年前（1934 年）、所属した東京文理科大学の「中等教育改善」プログラムのもと、「小青年の国体意識に関する基本資料」を収集すべく、大規模なアンケート調査を実施する。対象としたのは、長野県下の公立中学校生徒（4・5 年生）・高等女学校生徒（4 年生）。回答者は、総勢で 3473 名に上っている。世代的にいうならば、上記壮丁調査の対象者と、殆どかさなる層である。無論、壮丁調査のほうに女性は含まれていないが、男子生徒の多くは、上記の壮丁学力調査を受けていたものと推定される。

さてこの調査では、いくつかの準備的な設問をつうじ、被調査者にあらかじめ「国体に関する思想、感情を誘致」した上で、次の本題を投げかけるという構成がとられてある。すなわち「今諸氏は前の問題で〔国体の〕有難い訳を記したが、次に諸氏の心から有難いと思った実際の経験があったら、その経験を記せ」と。ここで「国体」は、「日本の国は万世一系の天皇が之を御統治遊ばされて」いることと調査者によって定義され、その「有難い」ことは、設問の大前提をなしている。

檜崎（1938）の整理・分類によるならば、このアンケート調査の結果とは、ひじょうに興味ぶかいものだった。同論考にしたがうと、意外にも、このときの被調査者の大多数は、「我が尊厳なる国体」を「有難いと思った実際の経験」というのを、滔々と答えることができなかった。すなわち、実に 7 割前後の被調査者が、白紙回答あるいは「経験なし」という回答ですましている（中学 5 年では 68.1%、4 年は 72.5%、女学校生徒は 73.1%）。当時の学校教育の総本山に所属した檜崎が、次のごとく嘆いたゆえんである。「〔中等教育卒業生〕の大多数の者は、日本の国体の真にありがたきことについての、生きた体験を殆ど持つことなくして社会に活動して居るのである。この事実は日本の中堅たるべき国民の養成上甚だ憂うべき一大欠陥の一つと云わなくてはならない」（檜崎 1938:5）。

天皇が、「国家ノ機軸」（丸山 1961）として存在することの有難さと、その有難い事由を、

「テストの答」として記述することはできても、かかる実感を経験的に有しているわけではない。したがって、そのような感情を懷いた「実際の経験」を具体的に挙げよとひとたび問われると、まったく答につまってしまう。檜崎のいうように、このときの被調査者の大多数にとって「国体」とは、そのていどのものだった。壮丁調査での、あの正答率の高さをもって、戦時期民衆が政府の思惑通りの形で天皇制を支持していたと、直截的に捉えることの困難さを、上記調査は如実に示している。

そしてこの調査がいっそう興味ぶかいのは、学校での皇室崇拜儀礼や修身・国史等の授業もまた、そのような経験をする場として、被調査者に把握されていなかったという点だ。

「国体意識の涵養に就き、今日の学校が常に採りつつある常套手段は、学校に於ける各教科教授の際に於ける涵養である。…然るに実際に於て、学校の教科の学習の際に、かかる有り難い体験を得たと記述せる者の数は…予想外に少ない」（檜崎 1938:101）。ぜんたいの回答者中のその比率を示すと、中学5年では4.4%、4年は3.8%。女学生は比較的高いが、それでも15.2%である（教育勅語の奉読式を挙げた生徒もここに含まれる）。学校の「御真影」や新聞雑誌の皇室写真の「拝観」をとおして、国体の有難さを実感したことがあると答えた者も、1%未満にすぎないという、じつに注視すべき結果をそれは示している。

30-40年代の臣民教育の「実効性」というのは、文部省によるその徹底振りに比べると、相当に薄かった。檜崎の貴重な論考によるならば、そのように捉えられる。少なくとも、民衆側が経験的世界で懷く皇室観と、官製の国体イデオロギーとが、通例言われる以上に縁遠いものだったことは疑いない。

無論、だからといって、戦時の民衆の多数が天皇家に反感をもち、あるいは天皇制の廃止を望んでいたというわけでも決してない。もしそうなら、終戦直後、すなわち1945・46年の新聞社・民間調査会社の実施したいくつかの世論調査において、天皇制存続の支持率が90%を超えているという事実は、まず理解し得ないものとなる<sup>5</sup>。民衆の大多数が、戦中期も主体的に天皇制を支持していたこと、あるいは、少なくともその廃止を望むほどの否定的な心情を、天皇家そして天皇制にたいし懷いていなかったことは、大前提として措定しておく必要がある。

すなわち、上記諸調査の結果の内に見いだすべきは、30年代後半以降の政府の強制する国体観念が、多くの場合、血肉となって民衆の内にはたらいていなかったにもかかわらず、民衆の多数は天皇制を（積極的／消極的の違いはあれ）支持し続けていった、という蓋然性であるだろう。換言すれば、政府の目論んだそれとは違った、独自の天皇制支持の論理

を、日中・太平洋戦争期の民衆の内にも見いだすべきということだ。結論的に言うならば、その別の論理の一つとは、戦後民衆のそれとの連続性において捉えられる。マスメディアをつうじて涵養された、皇室をスター・脱政治的存在と捉える独自の皇室観にもとづき天皇制を支持する（あるいはこれに反対しない）という、1900-30年代に拡大したイデオロギー的再生産のありようは、戦中期の民衆生活の中にもしぶとく生き続けた。1946年元日の「人間宣言」に始まる、戦後皇室のなし崩しの「再転向」が、総体的に見てアッサリと当時の民衆に許容されていたのは、占領軍や戦後政府の宣伝活動以上に、この戦時期民衆の心性にこそあったのではなかったか。

この点を傍証する、終戦直後の世論調査結果をあらかじめ紹介しておこう。1945年12月——天皇の「人間宣言」あるいは政府による新憲法草案（象徴天皇制路線）が発表される前——に、輿論調査研究所の実施した、今後の天皇制の針路にかんする希望調査である（有効回答数・2400）。同世論調査結果によるならば、全回答者の91%が、天皇制を支持しながらも、「現状のまま」天皇制を支持するという者、すなわち旧憲法の実天皇条項の存続に賛意を示した者は、ぜんたいの16%と、少数派を構成した。最も多かったのは、「政治の圏外に去り」民族の総家長、道義的中心として「天皇を」支持してゆきたい、という回答で、全回答数の45%強をそれは占めていた<sup>6</sup>。同結果をもって、「日本国憲法が制定される前、つまり象徴天皇制が発足する前にすでにこの象徴天皇制の基盤となるべき感情が国民の間に支配的」となっていたと論じる斉藤道一の見解に、本論も与したい（斉藤1966:163）。戦後大衆天皇制の基盤とは、占領軍・戦後政府による天皇のイメージ操作云々という以前に、まず戦時期の民衆・マスメディアの内にこそ求められるべきものだった。次節以降では、日中戦争以降の、皇室観・皇室報道をめぐる諸状況の確認をつうじ、この点を詳しく明らかとしてみたい。

## 2. 戦時期「大衆天皇制」の様相

### 2.1. 新聞雑誌の皇室報道

本章冒頭にも触れたごとく、日中・太平洋戦争期のマスコミによる皇室関連の記事・写真とは、政府からひじょうなる介入・操作を蒙ったトピックの一つとしてあった。戦時期の皇室報道は、天皇家の神格化推進と、これにもとづく能率的な民衆動員を達成する上で

の必須の媒体として、政府に把握されるに至っていたからだ。無論、1900-10 年代以来、政府は皇室報道にたいし、執拗な干渉・統制を展開し続けてきたのだが、それをはるかに上回る形で、皇室報道の内容への介入が、このとき実施されてゆく。

以上の事実は、1943 年、情報局の指示のもと、内務省警保局が警視庁・各庁府県警察に通達した、「皇室関係記事、写真ノ取締ニ関スル件」によく示される。その緒言の一部を引くと、「皇室関係記事並ニ写真ノ取締ニ関シテハ《予テ特段ノ御留意》相成居候所…将来一層留意方重ネテ各新聞社ヲ御指導相成ルト共ニ取締上遺漏ナキヲ期セラルル様致度」（内務省[1943]2000:212-3）。

このような、皇室記事・写真の政治的重要性をめぐる十二分な認識と、政府によるマスコミ支配の実質的確立のもと、政府による皇室報道の恣意的な操作が、遂に実現されるところとなる。その具体的な統制の様子は、上記通達に参考として付された別紙「皇室関係記事写真取締方針」に詳らかである。それは、日中・太平洋戦争期における、皇室報道統制の基本方針として、内務省から全国の警察に適宜通達されたものだった。30 年代前半の皇室報道取締マニュアルを基本的に踏襲したこの「取締方針」では、天皇家の神格化推進に皇室報道を徹底的に活用しようとする企図が、いうまでもなくその基調をなしている。中でも注目されるのが、皇室報道の統制にあたっては、「事前指導ヲ第一義」にすると、同「方針」が明言している点だろう（内務省[1943]2000:212-3）。日中戦争以降、皇室記事・写真の掲載にあたっては、中央・地方を問わず、警察による事前の監督・指示を仰ぐのが慣例となるのである。具体例を 1940 年、天皇の関西行幸報道から示すと、内務省がまず行幸直前に、関係地方庁に上記「取締方針」を通達し、各管轄下での行幸報道の徹底指導を厳命する。これにもとづき各庁・地方警察が「夫々新聞社を指導し取締の遺憾なきを期」すという、「事前相当措置」が同行幸時には講じられていた（内務省[1928-44]1981-82:第 128 号:187-97）。それは、日中戦争勃発以前には確認し得ない、ラディカルな介入のありようだったといっている。戦時体制下、天皇家というシンボルをつうじた国民統合・動員の必要性が最高潮に達し、皇室報道への強権的介入を政府が実施する中で、マスコミが皇室報道の内容について自律性を保てる余地は、多分に消失するに至るのだ。

かかる統制の徹底化は、当然のごとく、世俗的な皇室報道の激減という事態を日本社会にもたらした。たとえば、盧溝橋事件から「玉音放送」実施までの期間（1937 年 7 月 7 日-45 年 8 月 15 日）に『東京朝日新聞』が掲載した、昭和天皇関係の記事・写真を調べると、そのすべてが軍服姿のものである。かれの余暇の様子や親しみやすい姿を伝える記事



も殆ど見られなくなり、天皇が軍務・政務に日夜精励していることを強調する記事と、彼の神聖さ・偉大さを謳った記事ばかりが目立つ。その生物学者としての研鑽の様子も、報道されることは既に稀となっていた（右田 2004）。

他の皇族関連の報道においても、同様の向きはひじょうに強い。とくに男性の皇族の背広姿や余暇の模様を伝えた報道は、全体的に希少なものとなっている。かれらの笑顔のスナップも、この時代の調査対象紙には、僅かしか見られない。皇族のインタビュー記事や、刺激的なゴシップなど、皇室にたいする民衆の卑俗な関心を、最も満たしてくれる類の記事というのも、全国紙においては殆ど確認し得なくなっていた。

とはいえ世俗的な皇室報道が、この時期に至ってはまったく消え去ってしまった、というわけでもない。天皇家の日常や余暇生活、趣味を伝える写真・記事というのは、新聞・婦人雑誌を中心に、戦時期も一定ていど掲載され続けていた。この点にかんしては、上記の事実（皇室報道総体における世俗的性格の希薄化）と同じほどに、強調される必要がある。

「皇太子殿下には…御微行で上野動物園に行啓、約二時間にわたり古賀園長の御案内で園内を御巡覧遊ばされた、園長が抱いて御見せした生れて三十一日目のライオンの子雌雄二頭 を御覧の時は猫ぐらいの可愛い頭、足、手などにお触りになって御興深げに拝され、また山羊の群に餌を与えられる際は小さい山羊や弱そうな山羊を特にお呼びになって御手づからにんじんや甘藷、包み紙のセロファンまでお与えになりおやさしい御心のほどに扈従の頼母木東京市長以下ひとしく感激に打たれた…」（1939 年 11 月 1 日付『大阪毎日新聞』「皇太子さま動物園行啓」）

「第二皇子にまします義宮様には御機嫌彌々御麗しく御六歳を算えさせられた、…御發育優れさせられて、絵本を御覧あらせられ童謡を歌わせられるにつけても御資性の程が拝され側近は御恐悦申上げて居る、…宮城に初の新年を迎えさせられ御二歳を算えさせられた清宮様には天皇皇后両陛下の御愛撫の御もとにすくすくと御發育あらせられ、御九ヶ月余の十二月初めには御乳離れ遊ばして御両親陛下の御優しい御言葉を早くも御理解、御喜びあらせられ、御日常は宮中大奥の御団欒の御中心であらせられると承わる」（1940 年 1 月 1 日付『国民新聞』「竹の園生の御栄」）。

昭和天皇のそれが霧消するのと入れ替わる形で、皇太子明仁の博物学趣味が報じられ始めている事実も興味ぶかい。

「〔皇太子〕殿下には葉山御滞在の約二旬、…皇后陛下と御ともに、あるいは傳育官らを御

相手に御用邸西南寄りの『汐見の茶屋』付近の海岸を御散歩遊ばされ、殊にここの海中に長く突き出した岩の間には殿下の御目を慰め参らすいろいろの小魚、貝類、海藻類多く、この御採集は殿下が特に御好み遊ばされ御気に召したものは御本邸内の水槽に生かせて永く御楽しみ遊ばされたとの御趣きである…」(1939年7月23日付『大阪朝日新聞』「御陽焦けも雄々しく御肥り」)。

結婚・出産が、皇室報道の重要なトピックにおかれる傾向も、根強く残っている。戦時期の皇室結婚や皇子・皇女の誕生としては、1939年の清宮貴子の誕生、1941年の三笠宮崇仁・高木百合子の婚姻、1943年の照宮成子と東久邇宮盛厚の結婚などがその代表で、いずれも大きく報じられている。かつてほどの卑俗さ・派手さはなく、戦時色も濃いいとはいえ、1900-30年代のそれと、基本的には連続しているといつてよい。

「戦時下の一億民草が心から御待ち申した皇后陛下の御慶事は桃の節句を控えた二日夕刻めでたくも『内親王様〔清宮〕御誕生』として街々を、村々を、浜を山を、ラジオの音波となり、サイレンの唸りとなって響き伝わり大和島根は言わずもがな、遙かの満蒙から海南島の大陸かけて慶びの一角に塗り上げた！ 慶びのサイレンが鳴った、ちょうど丸の内オフィス街のひけどき、ここの女事務員たちはドッと二重橋前へ、奉祝の万歳、喜びの万歳だ 『内親王様ですって、うれしいわ！』… ◇銀座！ デパートのウィンドウの白い幕がバラリ…『奉祝・内親王殿下御誕生』と大きく書いた額が現われる、ショウ・ウィンドウも松と瑞雲の装飾である…一時間もすると銀座はすっかり日の丸の海だ 蓄音機店のレコードがしばし事変の歌をとめて奉祝の君が代と愛国行進曲、…内親王様お生れの歓びを雛祭りの前後に迎える目出度さに帝都の祝賀気分は灯の明々と輝きはじめた銀座から、浅草、新宿と次第に昂り、各家々でも桃の咲く雛壇の前で一日早く来たお雛様を祝うのだった」(1939年3月3日付『讀賣新聞』「二重橋前の雑沓」)。

「菊花薫る廿二日は民草ひとしく御待ち申上げた三笠宮殿下と高木百合子姫との御成婚の佳き日である、…慶賀一色、夜を通じて明々と照りはえた東京青山高樹町の高木子爵邸に慶びの廿二日は明けた…どの室からも漏れて来る明るい笑声慶びが渦巻く、…やがて百合子姫には玄関に立ち出でられた、内裏様のような気高さである、お友達の間から思わず洩れる讃嘆の声、姫は床しくお会釈、静々と〔宮内省の用意した〕車に歩まれる、燦たる陽光を浴びて車は静かにすべり初めた、…伸び上がってお別れを惜しむお友達——…

“嬉しさに泣けて” 妃宮お育て申した老婆の感激

歓喜のこの日、高木家にあつてひとしおの感激に涙とどめあえぬ老婆がいた、…西田つる

さん（七六）で…百合子姫の御誕生から成人まで〔女中として〕お育て申した人である、この日も人々にいたわれ高木家にあつて晴れの姫の門出を伏し拝まんばかりにして見送ったが、つるさんは…年寄は涙もろくてあのお立派な姫様を見ましたとき、嬉しさのあまりつい泣いてしまいました、おやさしい方で昨夜も身体を大切になさいよとおっしゃっていただきました、長生きしたお陰ですと…語った」（1941年10月23日付『大阪毎日新聞』「佳き日奉祝の街々」）。

「妃の宮とならせ給うた成子内親王殿下には、畏くも今上陛下の第一子皇女子にましまし、大正十四年十二月六日御誕生、本年御十九歳にわたらせられ、御幼少の御頃から照宮様と申上げ、全国民が敬慕し奉った御親しみ深き姫宮様であらせられます。…〔女子学習院在籍時の〕殿下には何れの学科にも秀でさせられましたが、とりわけ歴史、理科、数学には並々ならぬ御才能を発揮あそばされた御由に承わります。生物学など特に御趣味深く、沢山の貝類や昆虫類を御採集になり、御自ら一々分類整理、御研究あそばされた御由にごさいます。芸能科にも常に御見事な成果を挙げさせられました。御手跡も御立派であり、音楽、絵画、裁縫、割烹などにも御熱心で、殊に音楽の御趣味深く、ピアノ、ヴァイオリン等に御堪能で、御卒業後も絶えず御修練を積ませられ、最近では美学、美術史をも御研究あそばされる御由に承わります。割烹も鮮やかなお手際で、時には御手づからお作り遊ばされた御料理を御両親陛下に御差上げ遊ばすこともあらせられたと洩れ承わります。また茶の湯にも御堪能でいられます。…殿下には今や御めでたく御結婚あそばされ御武勲輝く盛厚王殿下の御若き妃の宮様として、陸軍大学に軍事御研鑽の背の宮様のよき御伴侶とならせられ、軍国多事の秋、いよいよ高き御婦徳を磨かせられますことは、われら国民、心より御よろこび申し上げます…」（「照宮様の御婚儀を寿ぎ奉る」『婦人倶楽部』、第24巻第12号、1943年、16-9頁）。

皇室をめぐるスクープへの欲望も、かわらずマスコミには残っていた。そうして政府がかかるマスメディア側の動向を警戒するさまもまた、前時代と連続する。『東京日日新聞』宮廷記者・藤樫準二による回想をふたたび参照しよう。1941年3月に藤樫は、子爵家令嬢で女子学習院生徒である高木百合子と、昭和天皇の末弟・三笠宮の結婚が内定した、という情報をつかむ。しかるに「内約を確認しながら、残念にも報道の自由がなく、毎日いららしていたところ、現皇后様〔香淳皇后〕…が、七年ぶりの昭和十六年春の女子学習院卒業式にお出かけになった。このチャンスとばかりに、百合子嬢が優等生として賜品の拝受をすることを主題に、写真を大きくあつかって『光栄の百合子姫』という見出しをつけ、

それとなく“三笠宮妃”であることを、におわせる記事を書いたものである。正式の宮内省発表はその記事の翌々日にあった」（藤樫 1958:27）。1941 年 3 月 28 日付『東京日日新聞』掲載の、「光栄の高木百合子姫」がその該当記事である。記事中、彼女の宮妃決定にかんしては、一言もふれていないものの、掲載当日の内務省警保局はそくぎに、「三笠宮殿下ノ御婚儀ニ関シテハ宮内省ヨリ発表アル迄一切記事取扱ヲ為サザル様、念為」という旨の電話指導を同盟通信・全国新聞各社に実施している（内務省[1941]1997:202-6）。かつてのごとき、大々的で世俗的な宮妃決定報道へと、各紙がなだれこむのを懸念したのでらう。

成子内親王の結婚にさいしても、「御婚姻御内約」の時点から、内務省経由で事細かな指示が「各庁府県主要日刊社」に出されている。いわく、学習院の教授や「御学友」の訪問記事は掲載するな、結婚する二人の写真をならべるな、号外・特報の類を一切打つな、等々（内務省 1997:3-16）。その数日後、二人の結婚が正式決定したさいにも、あらためて次の指示を出しているように、ひじょうな警戒を宮内省・内務省は見せていた。「本件記事取扱ニ当リテハ左記事項ヲ掲載セザル様 一、御質素ヲ旨トセラルルニ付之ニ反スルガ如キ事項 二、御調度品御注文ニ関スル事項 三、旧奉仕者、御学友等ノ談話ノ内、直接御生活内容ニ触ルルガ如キ事項 四、今後ニ於ケル御結婚ニ関スル一切ノ事項」（内務省[1943]1997:45）。

かかる執拗な指示とは他面、当時の皇室報道統制が、かならずしも政府の思いどおりに進んでいなかったことを教えてくれている。事実、先の『婦人倶楽部』記事が、「御質素ヲ旨トセラルルニ付之ニ反スルガ如キ事項」——成子のモダンな日常の様子を、詳しく報じていたように。政府でなく消費者側のニーズにしたがう向きは、太平洋戦争期に至っても、あるていどまで皇室報道の内に残っていたということだ<sup>7</sup>。

女性向けの商業媒体が、皇室をその中心的なトピックに据える傾向も、かわらず見えている。たとえば戦時期婦人雑誌が、皇室関連の写真・記事を大量に掲載し続けていたことは、既に知られる部分である（若桑 1995; 私たち 1987）。もっとも先行研究はこの事態を、戦時政府による宣伝活動の一部としてのみおいてきた。無論、当時の皇室報道統制の厳格さを考慮したとき、そうした見解は、多くの妥当性をもっていよう。しかるに婦人雑誌による、皇室関連のトピック重視の傾向とは、日中戦争にはいつてから、とつじょ現れたものでは決してない。この傾向が、明治後期以来の婦人雑誌の「伝統」としてあったこと、そしてこの伝統が何より女性読者のニーズにもとづき形成・継承されてきたことは、第三章に詳しく見たとおりである。くわえて戦時期婦人雑誌による皇室報道にも、以前のそれ

と同様、神格化政策と相容れない世俗的な部分は、一定ていど保守され続けていた。その意味で、戦時期婦人雑誌による皇室報道の大量流布は、1900－30年代前半の状況との延長線上において捉える必要を、他面で多く含んである。

天皇家の私的領域での模様を好んで報じる傾向も、大きく退潮したとはいえ、あるていどまでは残存した。天皇・男性の皇族関連の報道の場合、軍務を中心とした公的領域での活動が突出して報じられていたものの、子どもと皇后・妃を中心に、皇室のモダンで幸福な家庭の様子は、この8年間も、一定ていどマスコミによってあらわされつづけてゆく。皇太子を筆頭に、皇室の子どもの愛らしい様子を強調する写真・記事がしばしば新聞紙面に登場したし、宮妃による子どもとの団欒の風景を写し撮ったスナップなども、婦人雑誌では確認される。「家庭」という視点から捉えたときもまた、日中・太平洋戦争期の皇室報道は、1890年代以前のそれよりも、1900－30年代前半の皇室報道のほうと、高い相同性をたもっていたといつてよい。ここまでの引用記事にも明白ではあるが、別の例をいくつか引いておく。

「御めでたく三笠宮殿下とのご婚約を整えられた高木百合子姫はその後ひきつづき…自邸で婦道の修得につつましやかな日常を送りひたすら御成婚の吉日を待たれている…朝のうちはお庭の散策にいまを盛りと咲き競う水仙花、桜などを眺めて暮し、…一家団欒の夕餉が済んだのち応接間で生花を楽しみみごとな出来栄えに両親を喜ばせた、…紫色地に竹模様の紋綸子縮緬、海老茶色桐花模様袋帯に艶やかな姿の姫は鮮かな手並にあっさりと生け進み、見る間に床しきお手製の床飾りができ上がった、しとしとと柔い春雨降る一夜、御婚儀を前に楽しむ静かな生花の道であった」（1941年4月14日付『讀賣新聞』「婦道を磨かれる百合子姫」）。

「東宮仮御所に在します皇太子さまの、御日常をもれ承りますに、殿下には、朝六時半頃には御目覚めあそばされ、まづ、御日拝所にお出ましになり、お可愛らしき尊いお姿で。御拝遊ばされ、それを終えさせられますと、傳育官達と御共に、御元気よくラヂオ体操を遊ばされ、八時に御朝食と承ります。お天気の日には、御所のお庭にお出ましになり、拝すも恐れ多いことですが、まことに御活発に御運動を遊ばされます。…自転車にもお上手にお乗り遊ばされまして、美しい御苑のをちこちをおめぐり遊ばすお姿は、ただただ光かがやくばかりともれ承ります。…毎日曜日には、宮城に御参内遊ばされます。此の日は、御姉宮様方。御弟義宮様もお集いになり、両陛下の御膝許で、御睦じくお過しになられますが、皇太子さまには、両陛下の御前での御団欒を、たいへんおよろこびあそば

され、日曜日のくるのを、それはそれはお待ちかねの御由に承ります。両陛下の御慈しみ、御姉宮様方や御弟宮様のお仲の御睦じい御有様は、側近奉仕のものが、ただただ御感激申上げるところと拝されます。…皇太子さまには…音楽にもまたきわめて御趣味ふかく、…御自身でお好きなレコードは、よく御記憶になられまして、御自身でそれをおかけ遊ばしまして、お側のものが、御驚嘆申上げることが、しばしばございました由…。両陛下には、畏れ多くも、皇太子さまの御教育には、格別の御心をそそがせ給い、つねに側近のものにも御注意あらせらるる由にもれ承ります…」(『御学齡をお迎え遊ばされた皇太子殿下の御日常』『婦人倶楽部』、第21巻第1号、1940年、50-1頁)。

「清宮貴子内親王殿下には、四日御めでたく女子学習院幼稚園に御入園遊ばされた、先月二十四日両陛下のお膝もとを離れさせられて宮城内呉竹寮に御移居あらせられた清宮さまには、御姉宮さま孝宮、順宮両内親王さまとの御仲もむつまじく御学習につとめさせられ、幼稚園御通園の日をお待ちかねでいらせられたが、この朝白のお帽子にばら色のお洋服のお可愛いお姿にて午前九時二十五分呉竹寮後出門、…青山の女子学習院幼稚園に御成り遊ばされた『紅葉の組』に入らせられた清宮さまには、…ラジオ体操、御遊戯などに楽しい御入園第一日を過ごさせられ、同十一時幼稚園御発、御機嫌麗しくお帰り遊ばされた」(1944年4月5日付『朝日新聞』「清宮さま幼稚園に御入園」)。

以上概観したごとく、戦時期の皇室報道の中にも、戦後大衆天皇制につらなる部分は、一定ていど残存し続けていた。無論、当時の皇室記事・写真を総体的に見た場合、その世俗性が剥奪されてゆくことも確かだが、世俗的な皇室報道が、太平洋戦争期に至っても流れ続けていたという事実は、近代天皇制と戦後天皇制の連続性を捉える上で、強調されていいだろう。

## 2.2. 民衆の皇室観

いっそう注目されるのは、民衆側の動向にある。第四・五章でも適宜論及したように、かれらの内には、世俗的な皇室観が、マスコミ以上に根ぶかく残存した。このことは、日中・太平洋戦争期の民衆が、「天ちゃん」を頻繁に用いつづけていた事実にも、端的に示されるべきものだ。天皇への崇拜・帰依を最も強制されたはずの、出征中の兵隊のあいだでさえ、「お天ちゃん」「テンコウ」などの亜種も含め、それは好んで使用された呼称であった。皇太子にたいしての、「天ムス」という愛称も、当時の東京市内では広がりを見せてい

たという<sup>8</sup>。

前章で論じてみたごとく、天皇家をめぐる猥談も、中央／地方を問わず、この時期もクチコミでさかんに流れつづけてゆく（中藺 1959:150;内務省[1938-44]1973）。その聖性が、政府によって強烈にアピールされた時代の中、民衆側はあえて、卑俗なコンテキストにかれらをおいてゆき、その「人間性」を確認していたのである。

戦時中の不敬犯の中に、無名の芸人がまざっていることにも注意したい<sup>9</sup>。かれらは皆、各地の寄席や営業先で、天皇家を話芸の種にしたかどで逮捕されている。たとえば1940年、北海道で捕まった、千葉在住の浪曲師の例。

「〔被疑者は〕浪曲『出世の松本武四郎』と題する演芸口演中 竹田宮恒久殿下が少年の頃御忍にて自転車を稽古中松本が付添の者と〔竹田宮のことを〕誤り、『殿下は御利口か又は馬鹿で居られるか』『そうか馬鹿にも程度はあるが天保銭の方か』云々と不敬に渉る口演ありたり」（内務省[1938-44]1973:昭和15年12月分:20）。

続いて1941年、長崎の漫才コンビによる寄席での会話から引くと、

「P 君の生まれは何時か Q 明治二十七年九月四日之が僕の天長節だ P 何君は朕〇〇として御出産に成ったんか…」（内務省[1938-44]1973:昭和16年7月分:32）。

付言すると、天皇家や国体観念を、「殊更笑話の材料に用いて笑いを購う手段とした」芸人の手法は、30年代の大手企業が生産した、漫才レコードの中にも多く確認できるもので、同様に警察側の関心と処分を買っている。無名芸人のネタ元も、ここらにあったと推定される。1936年の出版警察記録から。

「テイチクレコード大衆盤二六七AB ナンセンス萬歳 朗らかな水兵（甲板の巻）今村寿三郎、有馬豊三郎吹込 天長節始め我国祭日に対し殊更に誤認して笑わせ様として居ることは不謹慎なるのみならず、用語其の他発表に不穩の節ありて処分す。

下士と兵士の会話

（前略）マ『四大節とは何と何か、云って見い』『天長節と海軍記念日であります』『違う』『それでは天長節と』『天長節と』『えーとクリスマスであります』『違う』『ハハ、じゃ天長節とお盆であります』『違う』『負けとけ』云々」（内務省[1928-44]1981-82:第88号:162-3）。

そうして再び不敬事件記録によるならば、かかる芸人の実践に類似する行為は、一般の人々によっても展開された。1941年、横須賀に務める二人の徴用工の事例。

「上記兩名は四月十三日公休日を利用し郷里に赴き其の帰途列車中に於て

R オイ皇太子殿下に会って来たか（子供の意） ママ

S 皇太子には会わんが皇后陛下に会って来たよ（女の意） ママ

…と不敬会話を為し居たるを同乗の移動警察官に於て検挙す」（内務省[1938-44]1973:昭和16年4月分:23-4）。

同じく1941年、茨城の僧侶が見せた宴会芸はこうである。

「〔被疑者は〕四月二十三日猿島郡境町料理店…二階客室に於て…T他七名と宴会中座興として浪花節を演ずると称し。…坊さん御経が上手でも御酒を飲むので丸裸、畏れ多くも皇后様も箱入り娘の令嬢様でもお湯に入る時は丸裸、と口演し不敬の言辞をなす」（内務省[1938-44]1973:昭和16年5月分:31-2）。

天皇家をからかいの対象とすることで、かれらへの親近感を互いに表明しあうとともに、政府が強権的におしつけるイデオロギーの虚構性を笑い飛ばしてゆく。かかる空気は、日中・太平洋戦争期の民衆にも多分に残っていた。つけくわえるならば、当時のドサ回り専門の芸人が、天皇家をしばしば話の種としたのは、その「有名性」に何より起因した。日本中のどこに営業に出向いても、天皇家にまつわる諸記号ならば、客の誰もが知っていたからだ、とあるベテラン漫才師は回想する（桂1980:342）。その意味で、戦時中の無名芸人が、天皇家を種としてかわらず活用しつづけていたというこの事実は、皇室が「ただの有名名人」として機能する局面が、依然として当時の日本各地に根ぶかく存在したことを、同時に示唆するものである。

それゆえに、皇室報道の読解形態も殆ど変わらない。たとえば新聞雑誌に掲載された天皇の写真を、学校の「御真影」のように、天皇その人と同一視するような人間は、この時期においても、ごく一部の皇室崇拝者にかぎられた。鶴見良行は、「御真影」を扱った先駆的論文の中で、「昭和に入ると御真影の実体化はさらに進んで、新聞雑誌に掲載される天皇の写真にまでおよび、天皇の写真がのった新聞は包装その他の日常の用途に用いえないような精神的風土ができ上っていった」（鶴見 1958:220）と書いているが、この鶴見の主張には与し難い。確かに当時、新聞雑誌に掲載された皇室写真を切り取り、神社や宮内省に奉納するといった運動が存在していたことは事実である。たとえば『東京日日新聞』の宮内省詰記者だった藤樫準二によると、1932、3年の頃から、各地方団体が宮内省に向け、切り抜いた皇室写真を大量に送ってくるようになったという（藤樫 1958:104）。だがこうした運動はむしろ、新聞雑誌の皇室写真が、当時においてあまりにも「不敬」な扱いを受けていたことから始まったものとして、捉えられなければならないのである。「近來新聞雑誌等



の出版物が増加すると共に畏き御尊影の掲載されることも多く…不知不識のうちにその取扱いが粗略になり、掲載された新聞紙等が商品の包装に使用されて居たりする。これを遺憾として大日本赤子会では小学校児童をして家庭で購読している新聞雑誌等の畏き御尊影を其の都度切り抜いて学校へ持参せしめ、校内に整頓奉納する方法を提唱して居るが、〔東京〕市連合青年団でも大賛成で…」(1934年3月2日付『国民新聞』「新聞雑誌の御尊影 粗略にならぬ様学校で整理」)。

また、この記事からもわかるように、新聞雑誌の「御尊影」を天皇・皇族その人と同一視し、その切りとり運動——じつのところそれは官製運動としての性格を多分にもっていた(唐澤 1956:437)——を展開していたのは、あくまでも右翼や青年団の極端な天皇崇拜者たちであって、鶴見の言うような心性は、けっして当時の日本人一般のものではなかった。その例として、1938年の『出版警察報』に掲載された、「出版取締其の他に対する意向調査に関する件」という記事を見たい。この記事では、高知県の警察当局が行なった、「出版物の取締並に出版界の動向等に対する出版業者及一般社会人士の意見、希望」についてのアンケート結果が、サンプルとして掲載されている。この中の、「日刊新聞に対する意見又は希望」、そして「主要雑誌に対する意見又は希望」という項目を見ると、さまざまな意見・要望の内に、「天皇陛下の御尊影皇族の御写真を奉載するは恐懼に不堪別紙に奉載して不敬に亘らざる様取り扱われ度」という要望が確かに挙げられてはいるものの、そうした要望は、ぜんたいの意見数の1割にも満たない、少数意見でしかなかったのである(内務省[1928-44]1981-82:第113号:121-30)。

その意味では、前章に引いた田辺家の女性による皇室写真集の読解例、あるいは不敬事件記録に残された、地方の人々による「不逞」な皇室報道の読解形態のほうが、よほど当時の実情に迫っているだろう。

「〔1943年〕六月二十七日徳島市内東宝両国館に於て〔同市在住の男性被疑者は〕映画(日本ニュース)ママ観覧中 皇后陛下別嬪デナイデナイカ云々 と不敬言辞を弄す」(内務省[1938-44]1973:昭和18年7月分:31)。

「〔1943年、小樽市在住の男性被疑者は〕主任B他七、八名に対し讀賣新聞十月二日付録第一面に『照宮成子内親王殿下 東久邇宮盛厚王殿下きょう御納采の御儀』と題する記事並に御写真掲出されあるを見て〔照宮も〕結婚するようになったなあ、親にしてみれば嬉しいだろうなあ、本人も満足だろう…云々と…言辞を弄す」(内務省[1938-44]1973:昭和18年11月分:34)。

「[1943 年、山形在住の女性華道教師の] 被疑者 C は…自宅階下に於て…[生徒の女性たちと新聞の皇室写真を見ながら] 洋装の事に関し談話中 洋装する人は頸が短い、…三笠宮妃殿下は頸が短い、もっと長いとよかった 皇后陛下も外国風の洋装でなく日本風の服装にされたらよろしいと思うんだけど…云々と…不敬の言辞を弄す」(内務省 [1938-44]1973: 昭和 18 年 12 月分: 40)。

かくのごとく、戦時期の皇室報道もまた、読者の世俗的な皇室観をこそ再生産する媒体として、機能し続けていた。何より読者の側が、そのような媒体として、積極的に皇室報道を受容し続けていた。天皇家の神格化推進の媒体として、皇室報道を徹底的に活用するという、同時代政府の目論見が、民衆による現実の読解過程において、達成されていたとは言い難い。

以上論じてみたように、大衆天皇制的な機制とは、政府による強烈な統制・介入が社会総体をみまった日中・太平洋戦争期にも、一定ていど残存した。わけても民衆の内には、戦後大衆天皇制下のそれへとつらなる心性・態度が、ひじょうに強く残っていたと捉えてよい。当時の壮丁調査に現れた、国体観念のあの普及度の高さととは、無論、相当ていどに考慮されるべきものである。戦時期民衆の天皇制支持の論理において、重要な部分をそれらが担っていたことも、否定し得ない部分ではあるだろう。とはいえ、政府の提示するアナクロかつ抽象的な国体観念のみにもとづいて、戦時の民衆の天皇制への同意が調達されていたと捉えるのも、一義的にすぎる見方である。かれらの現実の天皇制支持の論理のうちには、天皇家をスターとして捉え憧憬する、あるいは天皇家をカイライとして軽んじるという、モダンで対抗的なそれも、そのままはたらく続けていた。

しかも、長期的なスパンから捉えた場合、この日中・太平洋戦争期という8年間は、あくまでも特殊な時期として存在する。民衆の経験的世界の位相から捉えたとき、20世紀前半の天皇制は、大筋において、大衆天皇制への道を、政府の目論見とは殆ど無関係に、むしろこれと対立しながら着実に辿っていった。近代化という巨視的趨勢が、1945年で区切られないように、近代天皇制と戦後天皇制の、イデオロギー構造上の差異も、「断絶」という表現が適用し得るほどに大きなものでは決してない。近代天皇制・戦後天皇制という区分に、意義があることは疑いないが、両者を連続するものとして捉えることで、見えてくる部分も多くある。本論では、その一端を示してみた。

## 終章

以上本論では、戦前期大衆天皇制の形成過程の概観をとおり、近代天皇制と戦後大衆天皇制の有した、イデオロギー構造上の連続性を、民衆の経験世界にそくしながら考察した。松下（1959）が「美智子妃ブーム」の内に見いだした、天皇制のモダンで複層的なイデオロギー構造とは、戦後になって突如形成されたのではなく、社会総体の急速な近代化・大衆化と歩を合わせ、戦前から漸次展開していったものだった。簡潔にいうと本論の主張とは、この一文につけるのだが、今少し詳しく、本論の議論をまとめておく。

本論をつうじ明らかとされたのは第一に、近代民衆の皇室観／マスメディアの皇室報道が、近代的諸要素と密接に連動しながら、モダンな変容を漸次遂げて行く、あるいは支配層の絶対主義的な教化政策への自律性・対抗性を次第に鮮明としてゆくプロセスであった。

1889年の帝国憲法発布、1890年の教育勅語渙発、1891年以降の初等学校での皇室崇拝儀礼の一律的開始等、1890年代前後を契機に政府は、天皇家の神聖性・絶対性の徹底教化をとおり、天皇家にたいする崇拝の念を民衆の内に涵養する、というプログラムを本格的な形で展開し始める。すなわち現人神・絶対的政治主体として天皇を規定するタテマエ論にもとづいて、天皇制にたいする民衆側の支持をとりつけるというのが、支配層側の目論んだ、天皇制のイデオロギー的再生産のありようとしてあった。爾来それは、いくばくかの修正を含みながらも、政府のイデオロギー政策の基調を、昭和の終戦に至るまで、一貫してなしてゆくこととなる。

しかるに1900-10年代を契機とした急激な近代化・大衆社会状況の進展は、政府の謳う天皇家の神聖性・絶対性への懐疑的な眼差しの拡大、皇室観の世俗化という現象を、日本社会にもたらしてゆく。わけでも近代化の波を最も強く被った当時の都市民衆のあいだでは、政府のおしつける皇室像に反発する姿勢と、天皇家を「スター」として憧憬し、慣れ親しむ心性が、早々に広がり始めていた。

そしてこの新しい皇室観は、マスメディアという近代的装置とふかく連動した点で、前時代の雑多な皇室観との明確な切れ目を持ち、しかもこの特徴ゆえに、全国的な拡大を見せてゆく。すなわち急速な商業主義化・大衆化を遂げた同時代のマスコミ界は、読者に現れたこの新しい天皇観・皇室観に呼応して、皇室関連の記事・写真を大量に配布し始めると

ともに、その内容上の世俗化・消費財化を開始する。そして新聞雑誌界が大量に創出したこの世俗的な皇室報道こそは、「スターとしての天皇家」にたいする民衆の憧憬・関心を涵養する、最大の媒体となってゆく。1900—10年代の民衆・マスメディアが、政府によるイデオロギー政策への対抗性を強く示し始めたのは、近代化の進展を巨視的背景とした、この自律的な相互作用をつうじてだった。

天皇の神格化・絶対化という教化政策を本格的に展開し始めた同時代政府の目にそれは、当然いとうべき傾向として映る。皇室写真の配布の正式認可など、皇室報道の有用性をあていど認めつつあったとはいえ、当時の政府はこの媒体に、強い警戒心を懷いたままだった。民間の新聞雑誌社が、大量の皇室表象を独自に生産配布してゆくことじたい、支配層は好ましく思っていなかった。とくに皇室報道の世俗化・消費財化傾向には、神格化政策との齟齬を理由に、つよい嫌悪をもっていて、種々の施策をつうじその抑制を試みてゆく。無論、その背景には、民衆の皇室観の世俗化を、この媒体が加速させている事態への懸念が存在した。

しかし、巨視的な社会変動と強く連関したこの民衆・マスコミの運動は、かかる政府の諸政策によって歯止めのきくものではなかった。事実、日本社会がさらなる近代化を遂げた1920—30年代において、皇室観の世俗化という流れは、都市部では既に決定的なものとなる。市民たちのあいだでは、政府のイデオロギー政策がその実効性を多分に失する一方、皇室の「スター」としての人気のほうは、これに反比例した高まりを見せてゆく。しかも、当時の皇室の世俗的な人気というのは、都市部にもはやとどまらない。同性の皇族にたいする女性の憧憬、皇室写真の「不敬」な読解、天皇家の猥談やゴシップの流布といった一連の現象は、農村部をも含んだ形で幅広く現出するに至っていた。

巨大企業に成長し、全国規模でその影響力を発揮し始めた新聞雑誌界の大々的な皇室報道の展開も、かかる都鄙格差の縮小を、大きく加速させてゆく。その内容上の世俗化・消費財化も、同時期マスコミはラディカルに進展させ、政府のイデオロギー政策への対抗性をいっそう鮮明にしていた。マスメディアの側が、天皇家の特定個人の情報を大々的・長期的に報じつづけることで、かれを「時の人」に仕立て上げ、「スターとしての天皇家」への読者の憧憬・関心をさらにあおる販売戦略も、さかんに試みられてゆく。戦後大衆天皇制下のマスコミの原型が、ここにおいて現出する。

下って日中・太平洋戦争期。強権的な政治統制が、社会総体に向け展開され、大衆天皇制をささえるべき近代的諸要素が萎縮してゆく、この戦時期においてすら、かかる傾向は

根深く残存し続けた。無論、政府による徹底した介入・操作を蒙ったことで、戦時の皇室報道が、以前の卑俗さを多分に喪失してゆくことも、確かである。それは確かであるとしても、1940年代にはいってすら、大衆天皇制的な皇室報道が、あるていど流れ続けていた事実、そして民衆のあいだでも、「スターとしての皇室」を望む心性が強く保たれ続けていたという事実は、特筆されるべきだろう。戦時期の民衆・マスコミが堅持したこの傾向こそ、戦後大衆天皇制の基盤を用意したものであると同時に、戦前期大衆天皇制と戦後大衆天皇制の連続性を、明白に立証するものでもある。すなわち、明治期から昭和の戦後に至る過程を包括的に捉えたとき、民衆の皇室観・マスコミの皇室報道は、(近代化の進展にとともに)巨視的な趨勢として、大衆天皇制下の理念型へと接近してゆく道程——天皇の神格を謳う官製の国体観念をアナクロと見なし、否定してゆく道程を、着実に歩んできた。そのようにまとめることが可能となる。

別の視点から捉えると、戦前期大衆天皇制のこの進展過程は、民衆・マスメディアが天皇家を脱政治的な存在として観念・表象することで、天皇主権説への対抗性をふかめてゆくプロセスでもあった。

天皇を、重臣らのカイライとして捉えるシニカルな眼差しの起原も、明治初期に濫立した皇室観の中に既に見いだせる<sup>1</sup>。それは、政権交代をリアルタイムで体験した佐幕派の人々(町人等も含める)が、覇権を握った薩長の田舎藩士への反発のもと、構築していった天皇観であったようだ。これにたいし 1900-10年代の日本社会に生じた、天皇家の脱政治化・カイライ化現象は、大きく性格を異にする。第一にそれが、家庭中心主義の擡頭にともない広がった、「スターとしての皇室」の私的領域にたいする憧憬や卑俗な関心から派生した事象であった点。第二にそれが、マスメディアと結びつくことで、大規模な形での展開を、日本社会の中で見せていった点においてである。

1900-10年代を契機とした、私的領域を価値づけるイズムの大衆化は、皇室観・皇室報道の世俗化の道すじに、大きな影響を与えてゆく。すなわちそれは、「スターとしての皇室」の私的領域への全般的な関心を、民衆・マスメディアの中に広く育てていった。皇室の家庭生活に、民衆が多大な憧憬と興味をよせ、その「幸福な家庭」振りや私的領域内での些事が、皇室報道の中心的トピックに布置される。かかる事態を、1900-10年代以降の家庭中心主義の浸透は生じさせてゆくのである。皇室の私的領域をこそ焦点化する、この社会的眼差しの拡大は、天皇家を脱政治的な存在とおく対抗的な皇室観・皇室報道が、日本社会に流布してゆく事態と殆ど等価なものだった。

かくて、天皇家を脱政治的存在・家庭内存在と捉える社会的眼差しは、天皇主権説という政府のタテマエ論の存在にもかかわらず、戦時期をも含めて漸進的に拡大し、戦後大衆天皇制下のそれへとつらなっていく。天皇を脱政治的存在と見る眼差しが、近代天皇制と戦後天皇制の区分を超えて社会的に拡大し続けていたというこの事実とは、戦後大衆天皇制の成長・再生産において、日本国憲法の天皇条項がはたした役割——松下圭一が昭和天皇の脱政治化の重要な要因においた部分——を、多く割り引かせるものだ。戦後大衆天皇制下に生じたのは、新憲法の示した天皇のありよう（たとえば第一章第四条①「天皇は、この憲法の定める国事に関する行為のみを行い、国政に関する権能を有しない」）が、その国家的な「お墨付き」をもって、民衆のあいだに浸潤していった、という事態では決してない。ぎゃくに新憲法の実施とは、1900-10年代以来、民衆の経験世界の中で漸進的に拡大してきた天皇観を、戦後政府が「追認」した事態として、見なされるべきなのだ。新憲法を起草した占領軍や戦後政府の目論見がどこにあったとしても、実質的に見た場合、日本国憲法の実施と、戦後民衆の皇室観との連関性とは、そのような性格のものだった。憲法の条文や政府のタテマエ論が、民衆による天皇家の捉えかた、マスメディアによる天皇家の報じかたを、一義的に決定していくという見解は、近代天皇制にかんしても、戦後天皇制にかんしても、その妥当性を多分に欠いている。明治から今日に至るまで、両者はあくまでも独自の論理にしたがいながら、独自のしかたで天皇家を観念・表象し続けてきた。もしくは、政府の意向などよりもはるかに巨大な力——近代化という社会変動の影響のもとに、天皇家を捉え続けてきたということだ。

第二に本論では、戦前期大衆天皇制の形成過程の解明をつうじ、近代日本のマスメディア・民衆による、上記のごとき対抗的な動向が、天皇制のイデオロギー的再生産の質的変容をもたらした点が示された。戦前期大衆天皇制の進展過程はあくまでも、近代化という巨視的な社会変動にともなう、天皇制のイデオロギー構造の「変容過程」であって、その「崩壊」のプロセスを決して意味しない。すなわちそれは、天皇制のイデオロギー的再生産が、アナクロな教化政策に固執する政府の統制下から離れ、マスメディアのコマーシャリズムと、民衆自身の能動的な同意のもとに、達成されていった過程であった。換言すれば、戦前期大衆天皇制の進展とは、民衆とマスメディアとが共同して、天皇制を政府の手から奪い取ってゆく過程としてあった。

1900-10年代以降の民衆は、絶対主義的なイデオロギー政策には反発を強めながらも、皇室の人々そのものにたいしては、憧憬と親しみの念を、時を追うごとに強く向けてゆく。さらに、皇室を「スター」として捉えるこの視線の拡大は同時に、カイライとして天皇・皇族を捉え、あらゆる政治的諸結果からかれらを免罪する眼差し（擬似的な天皇機関説）が、民衆の中に自律的な形で広がってゆくプロセスとしても存在した。政府による強制ではなく、民衆独自の論理にもとづいた、天皇を中心とする政治体制への能動的な支持が、ここにおいて用意される。

政府がこの民衆の心性を看過して、絶対主義的なイデオロギー政策を一貫して堅持し、あるいはかかる皇室観の拡大抑制を試みつづけたのとは対照的に、商業主義化した民間のマスコミは、民衆側のニーズに敏感に応え、世俗的な皇室報道を大量に流してゆく。それらは、「スターとしての皇室」にたいする読者の憧憬・親近感をさらに増幅させるとともに、皇室の脱政治化を推進する、第一の媒体としてもはたらいた。政府の媒介を抜きにした、民衆・マスコミのこの自律的な相互作用のもと、1900-10年代以降の日本社会では、スター（脱政治的存在）である天皇家への、民衆の憧憬・親近感にもとづいたイデオロギー的再生産の達成という、大衆天皇制的なありようが、急速な進展を遂げることとなる。天皇の絶対化・神格化に固執しつづける政府はかくして、天皇制のイデオロギー的再生産の場面から、その地歩を次第に失っていった。

それは民衆側に視点を置いて捉えたとき、まったく無自覚ながらも、自身の能動的な皇室観にそう方向へと、天皇制のイデオロギー構造の性質を、マスとして「変革」していったプロセスにほかならぬ。繰り返せば、皇室報道の大量化・世俗化をもたらす最大の要因としてはたらいたのは、読者であるかれら民衆のニーズであった。すなわち戦前期大衆天皇制の進展の歴史とは、新聞雑誌の一消費者たる市井の人々が、日常世界の内からマスメディアを介して天皇制に能動的にはたらきかけ、企図せざる結果ながらもその重大な質的変更をもたらしていった過程である。とくにこのプロセスが、（従前の天皇制論にあっては被抑圧者としてのみ位置づけられる向きの強かった）一般女性を中心に推進されていった点は、さいど強調しておくべきだろう。自身のライフコースの理想形として特殊的存在たる皇室の女性を捉え憧憬し、マスメディアの流す彼女らの世俗的な情報を、積極的に消費する。家父長制的原理の浸透という巨視的社会条件のもと、近代の女性層が行なった、かかる日々の実践が、天皇制のイデオロギー構造の世俗的再編の、大きな推進力としてはたらいていたことを、本論では確認した。もっとも、家父長制と近代天皇制の親和性を説く

先行研究の知見をふまえたとき、彼女らにとってそれは、自身を抑圧する体制を積極的に支持してゆくという、大きな皮肉を含んだ実践でもあったのだが。

マスコミに視点をおきかえると、戦前期大衆天皇制のこの進展プロセスは、民間マスメディアが、資本主義化という社会総体の巨視的趨勢の中、天皇制の最大のイデオロギー装置に確立してゆく過程を意味していた。すなわち 20 世紀前半のマスコミは、コマーシャルイズムの論理のもと、政府の直轄機関のそれをはるかに凌駕する量の皇室表象を、民衆のもとへと配布していった。民衆の日常生活の中にふかく浸透してゆくこれらの世俗的な皇室報道は爾来、天皇制の新たな支持基盤たる、皇室への民衆の憧憬・親近感を涵養する、第一の媒体として機能し続けてゆく。松下（1959）の輦に倣えば、戦前期大衆天皇制の形成過程もまた、学校の「御真影」と「教育勅語」に、マスコミの皇室写真と皇室記事が、とってかわってゆくプロセスとしてあった。

そしてこの事態が最も顕著に現れたのが、婦人雑誌という媒体だった。大量の世俗的な皇室報道を流し続けることで、皇室にたいする憧憬・関心を、女性層の内に拡大再生産し続けていったこの婦人雑誌こそは、1900—10 年代以降の大衆天皇制の成長を促した、中心的な商業媒体として機能した。皇室を脱政治的な存在として表象する傾向も、女性読者のニーズにきわめて忠実で、それゆえ皇后・宮妃を皇室報道のメインにおいたこの婦人雑誌界において、最も明瞭に現れていた。その意味で、近代の婦人雑誌は、同時代のインテリ向け総合雑誌や左翼雑誌などよりも、はるかに多大でラディカルな思想的影響を日本社会に及ぼした媒体だったと見なされよう。

《天皇制のイデオロギー的再生産は、政府による諸施策をとおして、もっぱら達成されていた》。ていどの差はあれこの見解は、近代天皇制のイデオロギー的側面を論じた先行研究の多くが、明示的／暗示的に共有してきたものといってい。この主題を扱った諸論考の分析対象が、政府やその外郭団体の実施した、天皇家をシンボルとした教化政策・警察取締（もしくはその立案をめぐる政治史的動向）に大きな偏りを示していることは、その証左の一つとなる。戦前の皇室報道の内に、読者の心性やマスコミのコマーシャルイズムではなくて、支配層側の政治企図をこそ優先的に見いだしてゆくという、一部先行研究のスタンスも<sup>2</sup>、その端的な現れとしておかれよう。

しかるに本論をとおして概観したのは、その支配層のイデオロギー政策が、近代化・大衆化という巨視的背景のもと、漸次アナクロ化し、その実効性を失ってゆく過程であった。あるいは、被治者とマスメディアが、天皇制のイデオロギー的再生産の場面に能動的に参



画し、そのありようを、自身らの望む方向へと変容させていった過程であった。そして両者のこの自律的な動向の背景には、世俗化、資本主義化という要素を筆頭に、家父長制の確立、「家庭」の登場等、各種の近代的諸要素がおおきく機能した。1900—10 年代以降の天皇制のイデオロギー的再生産とはかくのごとく、被治者とマスメディア、そしてそれらを取りまく（近代的）社会環境の相互連関のもと、はじめて達成されていた。日本社会総体の近代化過程の進展にともないそれは、統治者の政治企図にすべてを還元しうるほどの、単一的な機制のものではなくなっていった、ということだ。本論での議論とは、そのように結論することができるだろう。

以上結論づけたごとく、20 世紀前半の天皇制のイデオロギー的再生産のありようは、近代化という社会変動のはらむ、普遍的な諸要素からの多大な影響のもと、漸次その性格を変容させてゆく。この点に限って捉えるならば、天皇制は、近代の王権としての一般的（論理必然的）な道程を、概ね忠実に歩いてきたといつてよい。

本論の示した天皇制のこの近代普遍性とはそして、従前の近代天皇制のイデオロギー論が見いだしてきたそれ——支配層側による、天皇をシンボルとしたイデオロギー政策の含んだ近代性——とは質的に区別される。すなわち本論に確認したのは、その「モダンである」はずの支配層のイデオロギー政策が、急速な近代化の進展に適応できず、アナクロ化し、実効性を失ってゆく事態のほうだった。

無論、明治維新以来の、天皇を基軸とした種々の教化政策が、まったき近代の産物であったことは、疑いのない事実である。天皇制のイデオロギー構造の含んだ近代的性格・普遍的側面を捉えるさい、それらが看過し得ない重要な部分を構成することも、また確かだろう。本論の主張とは、20 世紀前半の被治者側の位相において捉えたとき、支配層側のその近代的なプログラムすらはるかに凌ぐモダンさのもと、天皇制は発現していた、ということにほかならぬ。1890 年代に完成した、明治政府による「近代的」な天皇の表象が、わずか十数年後には、芦原帝のごとき、こっけいでアナクロなものと民衆の目に映り始めてゆく。開放政策期さなかの支配層がふかく懸念するほどに、世俗的な報道や噂が、1920 年代の天皇家を数多みまわってゆく。かく 20 世紀にはいつてからの皇室観・皇室報道は、官許版の皇室観・皇室表象の一步先のモダンをつねにあゆんでいた。それは、20 世紀前半の日本《社会》の近代化過程そのものもまた、当初の設計者たちの手から離れ、自律的かつ劇的な速度で進展していたことを物語る、一つのエピソードになるだろう。本論の結論から

導出される、日本の近代化過程にかんする知見とは、この点において求められる。

---

注

## 序章

<sup>1</sup> 本論のかかる立場に近い先行研究の内、最も代表的な論考たる神島（1961）の議論との対比において、本論のめざすところを説明しておきたい。

近代天皇制のイデオロギー側面の研究に先鞭をつけたのは、丸山真男とその門下である。周知のごとく神島二郎もその一人であるのだが、神島（1961）は、被治者側の主体的な天皇制支持の契機、および被治者側が天皇制のイデオロギー構造に能動的にはたらきかけ、その質的変容（ファシズム化）をもたらしていった契機を照射したという点で、丸山学派内部でも、独特の位置を占めている。その内容をかんとんに示してゆくと、同論考では、明治来の民衆に通底して見えた「精神構造」に照射しながら、近代天皇制それから「日本ファシズム」の形成にたいし、民衆側が能動的に支持・参画していった過程が、民俗学／政治学的な視座から提示されてゆく。天皇制のイデオロギー構造にトピックを限定したとき、この神島（1961）の議論の核心は、「〔近代〕天皇制の正統性的根拠は基本的には〔民衆に共有された〕自然村的秩序〔感覚〕におかれ」ていた、という主張に収斂する（神島 1961:22）。自然村的秩序（感覚）とは、前近代の各ムラの共同体原理として機能した 5 つの思想、すなわち神道主義、長老主義、家族主義、身分主義、自給自足主義からなる規範（意識）であるという。同論考によるならば、資本主義化・都市化の進展にともなう、この自然村的秩序（感覚）のネーションワイドな拡散・拡大こそが、天皇制（ファシズム）の形成を「下から」推進する原動力としてはたらいた。近代日本に現前した経済・社会構造と民衆側のこの秩序感覚との矛盾の契機に着目しつつ、神島はそうに論じてゆく。

この神島の議論と本論の差異を示す上でまずおさえておくべきは、「天皇制」という概念内容を幅広く定義した関係上、同論考の示しだす「精神構造」もまた、広範なものとなっている点だろう。それが意味するのは、皇室観や天皇観といった限定的なものでなく、近代日本「国家」さらには「社会」にたいする民衆の主体的な同意の基盤となった心的傾向の総体であるといってい（たとえばここには、上記 5 つの思想のみならず、そこから派生した無数の諸思想、「桃太郎主義」やノスタルジー、「都鄙の感覚」なども含まれてゆく）。それゆえに神島（1961）において、天皇家という存在にたいする民衆側の思考パターンや態度とは、かかる「精神構造」中に包摂されるべき一部分としておかれている。換言すると神島は、近代民衆に見られた天皇制への能動的な同意の論理の類型を、その経験的なありようから把握してゆくのではなく、上記「精神構造」から演繹してゆくという分析手法をとっている。これにたいし本論では、近代の民衆の懐いた皇室観とのその通時的変容を中心的な分析対象におくことで、天皇制にたいする人々の能動的同意のありようを、

---

経験的につかんでゆくことがめざされる。

第二に、既述のごとく神島（1961）は、近代天皇制のイデオロギー的再生産をささえ、あるいはそのファシズム化をもたらした民衆側の心性の内、前近代的・「ムラ」的な側面に力点をおくものだ。神島の議論において、近代化過程というファクターは、民衆側の心性・皇室観に直截的に影響するものではなく、彼らの前近代的な精神構造と、社会構造（わけても経済体制）の矛盾が拡大してゆく契機としておかれている。これにたいし本論では、マスメディア、「家父長制」、「家庭」等、近代的要素とこそふかく関連した——「都市的」な——民衆の心性が、天皇制のイデオロギー構造のモダンな再編をもたらしてゆくプロセスに着目する。

<sup>2</sup> 鶴見（[1961]2000:254）掲出の「過去十年ブーム一覧表」参照。

<sup>3</sup> 近代天皇制下の絶対主義的なイデオロギー政策への対抗的な運動としては、日本共産党や大本教等、諸思想・宗教団体によるそれが、多くの研究書をつうじて既に知られる。これにたいし本論では、特定の思想体系や教義にもとづかず、なおかつ（マスメディアと結びつくことで）大規模かつ日常的に展開された、民衆の対抗的な皇室観と実践が着目される。次に、戦前期皇室報道をめぐる先行研究について。戦前期皇室報道のイデオロギー的役割に論及した研究は、近年数多く発表され始めている。列挙すれば、中島（1990）、吉見（1996）、原（2000）、北原（2001）、川村（2002）、加納（2002）、右田（2004）、伊藤（2005）など。しかるに一連の諸研究では多くの場合、近代日本の皇室報道の内に、政府の政治的目論見を優先的に見出してゆくスタンスがとられてきた。それゆえに、戦前期皇室報道の内包した、政府のイデオロギー政策への対抗的側面が注目されることは、従前の研究では稀であったといってよい。なお、本論の調査対象とする新聞は、『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』『讀賣新聞』『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』『国民新聞』『時事新報』『萬朝報』の8紙である。

<sup>4</sup> 本論ぜんたいの議論に直接関連する研究状況を、ごくかんたんにおさえておく。

戦後大衆天皇制の起原と成長のプロセスを、1945年以前に遡って論じてゆく試みというのは、その応用可能性を説いた諸論考（井上 1959; 鶴見 1961; 吉見 1996）を含め、主題的な形で展開されてきたとはいいい難い。それは、大衆天皇制概念を近代天皇制に適用し、通時的に論じてゆく試みがなかったというのみならず、皇室観・皇室報道それぞれの研究史を捉えた場合にも、そのようにまとめられる。

戦前期民衆の懷いた皇室観という論点にかんしては、明治初期のそれを筆頭に、一定の蓄積を、従前の天皇制論はもっている。しかるに管見では、1900—10年代以降の民衆に生じた、モダンで世俗的な皇室観の拡大という現象にたいし、主題的なアプローチを試みた論考は、近代天皇制論においても稀少である。分析面・史料面ともに、この類の皇室観は、蓄積のきわめて薄い研究対象であり続けてきたといってよい。

一方、近代日本のマスメディアが、世俗的で親しみやすい皇室の姿を報道していた事実にかんしては、いくつかの研究によって既に言及されるところである。たとえば南他（1965）、中島（1990）、原（2000）、川村（2002）、伊藤（2005）

---

など。しかるにこの一連の研究でも多くの場合、かかる類の皇室報道の創出されてゆく背景から、マスメディアの商業主義や読者のニーズ等のはたらきというのは、殆ど捨象されている。この点で、上記の先行諸研究は、「大衆天皇制論」や本論とはスタンスを明確に異にする。

## 第一章

<sup>1</sup> 田中彰（1979）、宮地（1981）、村上（1986）。文部省による皇国史観教育の実施も、きわめてはやい。1872（明治5）年、文部省がはじめて編纂・刊行した小学生用歴史教科書『史畧』で、神代より明治維新に至る天皇家の歴史を、冒頭の教材から説き起こしてゆく形式が、既に採られているのはその証左である。その内の、「天照大神」という教材から引くと、「天照大御神 日の神にして高天原を治す御神徳広大にして万物万事この神徳に依頼ざるものなし此大御神の御子孫皇国を治めすなり」（海後編 1963:9）。

<sup>2</sup> 宮田（1970）、田中彰（1979）、朴（1988）、大日方（1982・1989）、安丸（1992）、色川（1995）など。

<sup>3</sup> 以上の記述は1876年6月8日付『讀賣新聞』「新聞」、1876年7月22日付『讀賣新聞』「寄書」、1876年7月31日付『讀賣新聞』「新聞」、森田（1948）、中野他（1949）、山川（1956）、水谷（1977）などを参照。

<sup>4</sup> もっとも同論告では、民間業者による「御写真」売買・配布の解禁が、明言されているわけではない（明言されるのは1915年）。そこでは、皇室画・皇室写真を一括して「御肖像」と表現し、その売買にかんする包括的な取締／認可の基準を示すことで、暗黙裡に皇室写真の売買を許可するという、婉曲的な形がとられていた。

<sup>5</sup> 某「新聞の絵付録に皇族の御尊影を添付することに就て」『日本及日本人』、政教社、第722号、1918年、99頁。

<sup>6</sup> 但し坪内祐三は、当時の『太陽』が皇室や重臣の写真を多数掲載した点について、自誌を権威づけるための戦略であったとしている（坪内 2001:161）。

<sup>7</sup> 1900年代に至ると、公式の肖像写真ばかりでなく、梨本宮守正夫妻の結婚式の記念写真（第7巻第2号、1901年）、迪宮が日章旗を持って写った写真（第9巻第1号、1903年）、迪宮と淳宮（秩父宮）雍仁と一緒に乳母車に乗っている写真（第9巻第13号、1903年）など、さまざまなルートから入手した皇族のプライベートな写真も、『太陽』は他誌に先駆けて頻繁に掲載してゆく。

<sup>8</sup> 小木新造の研究によるならば、1876年度の東京での錦絵の生産量は、年間総計で255万枚余。それでも一日当たりの平均でいうならば、1万枚にも満たなかった（小木 1979:442）。

<sup>9</sup> 中村長作「位置変更の要求急場の間に合わず」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第12年第4号、1931年、19-20頁。

<sup>10</sup> 原胤昭「あなたの二十年と婦人画報の二十年」『婦人画報』、東京社、第247号、1926年。

- 
- <sup>11</sup> 唐澤（1968）、大江（1974）、山本・今野（1976）、渡辺（1979）、坂本（1994）、佐藤（2004）など。
- <sup>12</sup> 司法省（[1929]1979・[1928]1980）、内務省（[1939-44]1977）。
- <sup>13</sup> 1906年7月10日付『萬朝報』「女髪時世粧其廿三」。
- <sup>14</sup> 「明治大帝」『キング』、大日本雄弁会講談社、第3巻第11号付録、1927年。鶴見（1967）。
- <sup>15</sup> 鐵如意禪「新聞記者去勢術」『新公論』、新公論社、第26巻第4号、1911年。ピー・キュー生「十年前の宮廷記者」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第5年第14号、1924年参照。
- <sup>16</sup> これは「謀叛論」中の蘆花の言葉である（徳富 1966:371）。

## 第二章

- <sup>1</sup> 実際には、1921年、開放政策の直後から、皇族にたいする非公式のインタビュー記事は既に散見され始めている。
- <sup>2</sup> 松本米次郎「我国最初の皇族インタビュー」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第8年第15号、1927年、14-6頁。
- <sup>3</sup> 久邇宮朝融による酒井菊子との婚約破棄事件をめぐるマスコミの動向については、永井（1995）が既に言及する。
- <sup>4</sup> 安奈狐輪志「誤報頻々」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第6年第9号、1925年、16-7頁。
- <sup>5</sup> 鈴木（1986）、横山（1992）、波多野（1998）、坂本（1998）、原（2000）、伊藤（2005）など。
- <sup>6</sup> 山浦貫一「東宮に扈從して」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第3年第7号、1922年。山浦貫一「東宮台湾行啓扈從雜録」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第4年第6号、1923年参照。
- <sup>7</sup> 『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第2年10号、1921年。
- <sup>8</sup> 先行研究において、開放政策のシンボルとして位置づけられてきた、1921年の皇太子巡遊映画の成功について、少しく注記しておきたい。この事象もまた、支配層の施策転換のみに還元しえないことの確認である。

1921年、宮内省・内務省が、活動フィルムによる皇族の撮影・公開を、民間業者にたいし解禁する。開放政策期になされた重要な規制緩和の一つとして、比較的良好に知られている事実である（内務省[1929]1982;波多野 1998;坂本 1998）。爾来、政府が、天皇家のニュース映画を民衆教化のための媒体として活用してゆく事実、佐藤忠男が詳しく論じている（佐藤 1977・1995）。

この解禁初年において、最も数多くの民衆の目に触れた天皇家のニュース映画が、同年の東宮裕仁による欧州巡遊の模様が撮影したフィルムであった。そもそもこのときのフィルムこそ、活動写真による皇族の撮影が民間会社に許可された、先駆となったものである。当然のごとく同フィルムは民衆のあいだにきわめて高い興味を惹き、その観客数は、21年だけで700万人に及んだといわれている（田中純 1979: 44）。本論中でも重視する、20年代前半の皇太子人気の爆

---

発的沸騰に、これらの活動写真が与していったことも疑いない。とはいえこの社会現象を、政府が活動写真という新しいメディアを有効に活用・動員し、皇太子という新しいカリスマにもとづく民心掌握に成功した事例としてのみ捉える従前の分析図式では（鈴木 1986;原 2000;伊藤 2005 など）、とりこぼしてしまう場面も多くなる。

まず強調すべきは、皇太子のこのフィルムが、ひじょうに集客力の高い商品であるがゆえに、日本各地の映画業者によって、その入手・公開が競って行われていたという点だ（1921 年 11 月 20 日付『国民新聞』「東宮双六が五十種も出来て素晴らしい御人気」;田中純 1979:62）。欧州巡遊映画の製作を独占的に請け負った新聞社・映画会社の目論見じたい、同映画の頻繁な一般公開をつうじた東宮巡遊の一大メディアイベント化、つまりはこの格好の機会を活用した自社の収益拡大にこそあった（波多野 1998:56;坂本 1998:15）。事実、その内の一社である『大阪毎日新聞』（『東京日日新聞』大幹部などは、この巡遊映画成功のための投資には「二十万三十万を厭わないという意気込みであった」という（小野 [1929]1993:295-6）。21 年に、東宮裕仁の活動写真が大量の観客によって受容され、皇太子人気の高揚に与したという事実は、政府による活動写真の動員云々という前に、かかる巨額投資を含んだ、民間企業による純然な商業活動の結果として、第一に捉えられるべきものだった。

じっさい、巡遊映画をめぐる民間業者と政府のこの思惑上のズレはまもなく、フィルムの内容上のズレとなって表面化することとなる。増田義一による同年発表の文章から引こう。市井の興行主による、儲け第一主義の適当さが、皇太子のこっけいな姿の露出へとつながった事例を、増田は自誌で証言する。「[巡遊先での皇太子の]御活動の光景を撮した活動写真が…公園や公会堂や、諸種の倶楽部や学校其他に於て公開されつつあるが、…右の映画を複製して浅草辺で興行して居るものは技手が悪い為か総てが早足に見えたりして、尊厳に関するかと思うような場面もある」（増田 1921:2）。

次に、大岡昇平の自伝から、巡遊映画の思い出を引用すると、「皇太子は大正十年の外遊の時のニュース映画で私たちにいい印象を与えていた。《付添役の梨本宮〔守正〕につつかれて、急いで姿勢を正す映像》を、《ほほえましいもの》として覚えている」（大岡[1975]1983:538）。

王権のモダンな再編がめざされた開放政策期にあつては、年長の皇族に猫背を正される、未熟なかれの姿をこそ政府は積極的に露出させ、観客に愛らしく捉えさせていったのだ、という解釈も、無論成り立たなくはない。しかし当時の内務省が、活動写真での皇族の撮影には、普通写真のそれよりもはるかに厳格な規制事項をもうけている事実等を考慮する限り、それも蓋然性の低い解釈にとどまる。むしろ大岡の回想は、東宮巡遊映画の内容・受容形態における、当時の民間業者・観客側の自律性の所在を示すものであろう。新聞雑誌の皇室報道と殆ど同様の機制のもとに、東宮映画の人氣は醸成されたのであって（その公開じたいがそもそも、新聞社の多大な関与のもとに実施されている）、政府の開放政策にのみこれを還元するのは、むしろ困難である。

追記しておく、1921 年の活動写真と天皇制の関係性を捉える上では、政府によるこのメディアの活用の仕方が、相

---

当に場当たり的で混乱したものだった点も、考慮すべき要素となってくる。このことは、巡遊映画の公開にさいし、検閲・管理が十全に行きとどかず、上記のごとき「不逞」な場面が多々露出していった点にも如実であるが、同年の活動写真をめぐる政府の動向から、一つの事例を挙げておく。

明治天皇の動く姿を収めた活動写真がかつて存在した。「陸軍戸山学校に行幸せられし当時の謹写映画」で、「乃木將軍の扈從し奉る」場面も収められていたという。活動フィルムによる天皇家の撮影が、一切禁じられていた 1900 年代から 10 年代初頭のあいだに製作されたものである。現存するかは不明だが、大正後期まで日活の倉庫に眠っていた。1912 年に日活に吸収された制作会社の一つが撮影したものと推定される。知られるように、明治天皇はきょくどの写真ざらいであって、宮内省も 1870 年代前半にいく枚か肖像写真をつくった後は、その「御写真」の製作をはばかりつづけていた。ましてや活動写真にその姿を収めることなど、もつてのほかであつたはずだ。管見では『明治天皇紀』の中にも、天皇の姿を撮影した活動写真の存在を示す記述はない（宮内庁 1968-77）。明治天皇がこのフィルムに収められた経緯は明らかに、一儲けをたくらんだ業者の違法行為（隠し撮り）にもとづくものだった。

ここで興味ぶかいのは、皇族のフィルム公開の解禁された 3 カ月後、この稀有なフィルムの上映が、文部省主催の「活動写真展覧会」において計画されていた点である（1921 年 11 月 3 日付『大阪毎日新聞』「先帝戸山学校行幸の映画」；1921 年 11 月 3 日付『東京日日新聞』「先帝の英姿や旅順開城光景など呼物に、来る二十日から活動写真展覧会開く」）。1921 年の文部官僚は、明治天皇を撮影した違法フィルムをつうじて、民衆の「思想醇化」を推進するという、きわめて倒錯的なメディア活用を図るのだ。もっとも確認し得た範囲では、同展覧会においてこのフィルムが現実に公開に至った形跡はない。違法フィルムであつたことがやはりネックとなって、公開直前にとり止められたものと推察される。このエピソードはよく言えば、開放政策当時の支配層のプラグマティズムを伝えるが、それ以上に、支配層の側が、インチキ性を本来的に含む大衆文化をイデオロギー統治に活用しようとするとき、不可避免的に多くの綻びが現出することを教えるものである。

<sup>9</sup> 管見では、明治天皇・大正天皇にかんしては、官製の肖像写真や新聞雑誌の公開したその写真の内に、眼鏡姿のものはない。老年になっても決して老眼鏡をかけなかったという明治天皇はともかくも（甘露寺 1965:18）、大正天皇の場合には、昭和天皇と同じ眼鏡専門店で眼鏡を発注していたというのだが（「愛用された熟練技の一生もの」『サライ』、1989 年 9 月 21 日号、24 頁）、それでもかれの眼鏡姿の一般向け写真とは、確認できないものである。昭和天皇が眼鏡をかけるかどうかにさいしても、側近のあいだに一悶着あつたことで知られている（甘露寺 1957:35; 藤樫 1946）。天皇や皇太子の眼鏡姿を一般民衆にさらせばその「尊厳にかかわる」という認識は、かれらの内にも共有されていた。近視が進んでからもまだ、どうにか眼鏡を用いずにすむように、さまざまな視力回復術を側近・軍部は試み続けていたという（藤樫 1946:38-40; 永積 1992）。その昭和天皇の眼鏡姿が、マスコミの皇室写真において常態化する時期は——1919 年 11 月 12 日付『東京日日新聞』が、「珍らしくも眼鏡かけ給える東宮殿下」というキャプションで、かれの眼鏡姿のスナッ



---

プをスクープしているように——20年代にはいつてからのことである。

<sup>10</sup> 1928年4月25日付『讀賣新聞』広告参照。

<sup>11</sup> 山浦貫一「東宮台湾行啓扈從雜録」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第4年第6号、1923年。金子義男「宮廷記事の特種に断然リード振鮮な東京日日新聞社藤樫準二君」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第10年第3号、1929年、28-9頁参照。

<sup>12</sup> たとえば稲浦新聞舗主人「風変りな販売店の速報」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第8年第10号、1927年。岩田豊秋「首を賭して書いた御成婚日」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第8年第10号、1927年。藤樫（1958:24-25）など。

<sup>13</sup> 「壮快なりし朝日社の原稿輸送飛行」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第5年第4号、1924年、15頁。

<sup>14</sup> 鈴木文四郎「秩父宮妃ニュースを得るまで」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第9年第2号、1928年。内務省（[1929]1996:72-84）参照。

<sup>15</sup> 「東京二誌の通信線」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第8年第14号、1927年、長汀（1931）、朝日新聞社（1990-95:大正・昭和戦前編:322）。

<sup>16</sup> S.N「東京二紙の通信戦」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第8年第14号、1927年、38頁。

<sup>17</sup> 「大礼中の新聞活動」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第9年第14号、1928年、8-10頁。

<sup>18</sup> 「放送局誤報事件解決す」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第10年第10号、1929年、142頁。

<sup>19</sup> 服部嘉香「奉祝童謡の愚劣に恐懼する」『日本及日本人』、政教社、1934年1月15日号、72-7頁。

<sup>20</sup> たとえば内務省（[1938-44]1973:昭和18年4月分:30;昭和18年10月分:99;昭和19年2月分:14;）など。

<sup>21</sup> 『家の光』もまた、皇室報道をその重要なトピックの一つにすえていた。たとえば同誌1936年度発行分でいうと、約3号に1号の割合で、皇室写真が口絵に採用されている。

<sup>22</sup> 藤樫（1958:34）、高橋他編（1993-94）など。

<sup>23</sup> 「ニュース」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第8年第8号、1927年。

<sup>24</sup> 大礼時の政府がマスコミにたいし実施した、積極的協力の実態にかんしては、他方での厳格な統制の局面を含めて荻野（1993）が既に論及する。

<sup>25</sup> 「大礼中の新聞活動」『新聞及新聞記者』、第9年第14号、1928年、9頁。

<sup>26</sup> たとえば高橋他編（1993-94:第一巻:173）。「各社会御慶事報道協調」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第8年第12号、1927年など。

<sup>27</sup> 「皇孫御誕生と新聞」『新聞及新聞記者』、第22号、1925年、40頁。

<sup>28</sup> なおこの1931年には、同趣旨の通達が、内務省から各地方警察へ、という別回路をとおしても発せられている（内

---

務省[1931]2000:42)。

### 第三章

<sup>1</sup> たとえば宮本 (1979)、内務省 ([1938-44]1973)、司法省 ([1929]1979・[1928]1980)、野上 (1986-91)、Smith and Wiswell (1982=1987: 70-1)、山田 (1991:54)。

<sup>2</sup> 但し「雑報」など 1 頁未満の小記事はカウントしていない。なお本章における雑誌調査はすべて同様の方法で行なった。

<sup>3</sup> たとえば婦人誌『女鑑』(1891 年創刊)の 1890 年代刊行分で、皇室記事が掲載されているのは全 195 号中 36 号(皇室写真が掲載された号はない)。その内容も、天皇・皇族の政治的動向や、その「御盛徳」を記したものが主流である。だが同誌 1900 年代分では、皇室写真・記事が全 161 号中 64 号に掲載され、内容においても、天皇家の日常や趣味性格などを伝える世俗的な皇室報道が多く現れ始める。

<sup>4</sup> 国体論ではなく、皇室の世俗的な情報をこそもとめる心性は、学校での臣民教育に日々さらされる、若年女性層においても明瞭に現れていた。たとえば 1933 年、高等小学校女生徒 225 人に実施されたアンケート調査によると、「修身の時間にはどんなお話が聞きたいですか」という問いに、4 人の女子生徒が「両陛下の日常生活」を挙げている(小椿 1933)。臣民教育が華々しく展開していた 30 年代、しかもその中核たる修身の授業において、天皇・皇后の日常の様子が教授されることを、この 4 人の少女は期待した(なお、同時に行なわれた男子生徒へのアンケート結果では、かかる類の答はない)。無論、これも極端な例ではあるが、興味ぶかい一つの事象として、ここに紹介しておきたい。

<sup>5</sup> 洞狐道人「女学生の見た新聞紙」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第 3 年第 10 号、1922 年。

<sup>6</sup> 獅子 ([1968]1969:475)、鶴見 ([1963]1991:413-4)、中藺 (1959:150)、深田 (1989: 379)、益田 (1989:42) など。

<sup>7</sup> この論文では「家父長制」を、「近代社会に存立する女性抑圧システム」として用いた。それは、「世帯の内部で女性を抑圧」とすると同時に「女性を労働市場や国家から排除するように作用する」、あるいは「女性を総体として従属的な社会的地位に押し込むように作用する」システムである(熊原 1996:139-145)。

<sup>8</sup> たとえば片野 (1996) と若桑 (2001) では、戦前期政府が、家父長制イデオロギーの民衆教化の一環として、「国母」たる皇后に、家父長制下の「理想的な女性」(良妻賢母)としてあることを、現実／表象の位相において求めてゆく過程にかんし分析が試みられた。また牟田 (2002) では、明治政府による家族国家観の啓蒙活動が、性別役割分業体制を始めとした、女性を男性の劣位におくジェンダー秩序を正当化する論理を内包し、かつその普及に与した点につき展開されている。

<sup>9</sup> 同様の指摘は、和田敦彦による大正後期の『婦人画報』研究(和田 1994)によってもなされている。

---

<sup>10</sup> 下長根澄「讀賣の潜航艇」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第5年第1号、1924年参照。

<sup>11</sup> 1928年の松平節子をめぐるマスコミの動向にかんしては、渡辺（1995）、伊藤（2005）が政治史的な視座から論及している。

<sup>12</sup> 鈴木文四郎「秩父宮妃ニュースを得るまで」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第9年第2号、1928年。朝日新聞社（1990-95:大正・昭和戦前編:284-5）参照。

<sup>13</sup> 1929年の内務省警保局図書課による『婦人公論』評（内務省[1928-44]1981-82:第10号:26）。

#### 第四章

<sup>1</sup> 本章の議論と直接関連する研究につき、簡潔に整理しておきたい。戦前のマスコミが、皇室の私的領域の様子をしばしば報じていた事実にかんしては、近年の多くの研究が既に指摘する。最も詳しいのは北原（2001）・加納（2002）・伊藤（2005）だが、原（2000）・川村（2002）・牧原（2004）なども、二次的な形でこれに言及する。本論とはぎゃくに、この一連の研究の多くは、かかるマスコミの動向の背景に、同時代支配層の懐いた政治的企図（近代西欧的な家族観／「家族国家観」の啓蒙等の目論見）をこそ、優先的に見いだしてゆくスタンスをとるものだ（但し原はこの事象を、同時代の天皇家の実態の反映と捉えるスタンスをとる。また牧原（2004）は、1900年代のマスコミに現れた、近代的な子ども観にもとづき皇孫たちを報じる傾向と、同時代の日本社会に勃興した、新しい子ども観との連関につき触れている）。ともかくも、戦前期皇室報道の上記傾向が内包した、支配層のイデオロギー政策への対抗的な側面（天皇家の脱政治化現象との連関性）は、いまだ論及されていない部分となっている。近代の民衆が、皇室の家庭生活に多大な興味を自律的によせてゆく場面もまた、先行研究では触れられないままに描かれてきた。これにたいし本論では、民衆・マスメディアそれぞれの能動的な動向・論理を重視しながら、近代の日本社会における、皇室という「家庭」への社会的眼差しの誕生・拡大プロセスを、天皇家の脱政治化という視座から捉え直してゆく。

<sup>2</sup> 丸山（1961）、大江（1974）、森川（1987）、小山（1989）参照。

<sup>3</sup> 1878年12月13日付『讀賣新聞』「新聞」、1879年5月6日付『讀賣新聞』「新聞」、1937年2月19日付『東京朝日新聞』「何れが主客」、種村（1979）、須藤（1979）、川村（1990）、横田（1995）参照。

<sup>4</sup> じっさい、当時の新聞各紙は、第一章での引用例のごとく、かれを「芦原帝」ともしばしば表現し、その「勅語」の内容や「芦原暦」などにかんしても、好んで紹介していった。

<sup>5</sup> 出（1963:121）、和田（1984:39-41）、徳富（1985-86:第三巻:478）など。

<sup>6</sup> 原田（1951:175-6,237-238）、司法省（[1928]1980:209,308）。

<sup>7</sup> 大澤（1998）は、大正期民衆において天皇の政治君主としてのイメージが希薄となった直截的な社会条件としては、

---

天皇の主権をアイマイ化する民本主義の興隆を挙げ、マクロな社会条件には、かかる思想の流行を可能とし、あるいは必要とした、擬似的な市民社会（「都市」）の確立を挙げている。巨視的な射程をもつ大澤（1998）の大正天皇論のねらいは、かくのごとき見解の内に収斂しないと思われるが、本論に直接関連する、天皇の脱政治化現象という歴史社会学的論点に限定した場合、そのようにまとめられる。

<sup>8</sup> 司法省（[1928]1980・[1929]1979）、内務省（[1938-44]1973）、鶴見（[1963]1991）参照。

<sup>9</sup> 東山生「良子女王讃岐行啓略従記」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第4年第6号、1921年。小野（[1929]1993:339-42）。小田部（1991:178）参照。

<sup>10</sup> 但し山本（1990）によれば、1930年代以降、厳格な警察取締のもとに、かかる皇室記号の広告使用は、困難なものとなってゆく。

<sup>11</sup> たとえば山田司海「私の手柄話」『新聞及新聞記者』、新聞及新聞記者社、第6年第17号、1925年、33頁。

<sup>12</sup> 藤田（1961）、内務省（[1938-44]1973）、古庄（1977）、三田村（1977:348）、司法省（[1929]1979・[1928]1980）など。

<sup>13</sup> たとえばV・O・J（1959）、内務省（[1938-44]1973:昭和16年12月分:29;昭和19年10月分:14）。

<sup>14</sup> 誤解のないよう強調しておく、皇室の私的領域への社会的関心の拡大過程そのものが既に、天皇家の脱政治化・カイライ化の契機をその内に含んだものである。ここで言いたいのは、戦前の民衆が皇室の私的領域への関心を最も顕著に露出させた、猥談という場面の最中に、その関心の強さに比例するごとく、皇室のカイライであることがしばしば「明瞭」に表現されていたという点にある。

<sup>15</sup> 司法省（[1929]1979・[1928]1980・[1931]1979）、内務省（[1938-44]1973）、内務省（[1928-44]1981-82）。

<sup>16</sup> 金子（1966）、内務省（[1938-44]1973）、司法省（[1929]1979・[1928]1980）、岩崎（1980:102-3）参照。

<sup>17</sup> 付記しておく、本章は、20世紀前半における大正天皇の「政治的無能力」をモチーフとした噂の普及を、松下（1959）・大澤（1998）の議論に示唆をうけつつ、マクロな社会的文脈の中に布置して考察し直した試みとしても位置づけられる。すなわち本論ではそれが、「家庭」を価値づける規範の確立にともない制度化した、天皇家を政治的カイライと捉える社会的眼差しの、有力な表現形態（パリエーション）の一つであったこと——言い換えれば、そのみで単独に流布していたのではなく、（皇室という「家庭」への眼差しの拡大から派生した）天皇家のカイライ性をモチーフとする他の数多の諸神話との相互補完的な関係のもとに、そのリアリティがささえられていたこと——を明らかとした。大正天皇の「政治的無能力」をめぐる噂の流行が、「家庭」という概念・領域を価値づける規範の普及をその基底的要因にもっているというのは、以上の意味においてである。飛躍を懼れず換言すると、1900—10年代以降に生じた、大正天皇をめぐる種々の噂の流布の最大要因は、「家庭」という概念・領域を価値づける規範が日本社会に浸透しつつあったその只中に、たまたまかれが治世をえたという、この偶然にこそ求められるべきものだった。本章の議論をふまえながら

---

上記の事象を捉えたとき、かかる知見が提示可能となるであろう。

## 第五章

<sup>1</sup> 太平洋戦争の実質的な終了時期はきわめて不明確であり、かつ日中戦争は1972年9月29日まで継続するが、本論では便宜上、盧溝橋事件（1937年7月7日）周辺から1945年8月15日までの期間を「日中・太平洋戦争期」と表記する。

<sup>2</sup> たとえば 唐澤（1956）、山本・今野（1973）、森川（1987）、久保（1994）、佐藤（2004）など。

<sup>3</sup> 文部省（[1938-44]1973）にもとづく。

<sup>4</sup> たとえば1938年度・1943年度の同調査にもうけられた、「一旦緩急アレハ」の次の一節を埋めよ、という設問の正答率は、両年度ともに5割を下回っている（42.5%、35.9%）。文部省（[1938-44]1973）を参照。

<sup>5</sup> 1945年12月9日付『讀賣』「天皇制支持は国民の一般感情」、1948年8月15日付『讀賣』「天皇制について」参照。

<sup>6</sup> 1946年2月4日付『毎日新聞』「憲法改正と輿論」参照。

<sup>7</sup> 皇室写真の掲載にさいしても、この頃のマスコミ側には一定の裁量権が残されていた。すなわち皇室写真の使用にさいしては、煩雑な手続きと幾重もの検閲を経なければならなかったが、どの写真を使うかという部分では、一応マスコミ側にも権利は残存したようだ。大手各紙の重役によって結成された新聞連盟編集委員会（1941年一）が、情報局側に提出した要望書から引こう。「宮廷写真〔の掲載〕については現在宮家、宮内省並に情報局の三ヶ所で連絡を付けねばならぬことになっているが、〔新聞社側が掲載を希望する写真につき〕右の内一ヶ所は許可し、一ヶ所は不許可の場合があつて処置に迷う場合が屢々ある。これを一元化されたい」（新聞連盟2000:155）。

<sup>8</sup> たとえば中藺（1959:150）、深田（1989:379）、益田（1989:42）など。

<sup>9</sup> 内務省（[1938-44]1973:昭和15年12月分:20:昭和16年7月分:32:昭和16年11月分:15）。

## 終章

<sup>1</sup> 山川（1956）、武田他（1979:260）、猪瀬（1986:469）、南（1989）、大日方（1989）。付言すると山川（1956）、大日方（1989）は、明治初期に、「禁さん」（無論、禁裏に由来する）という天皇への呼称が、佐幕派の民衆のあいだで広まっていた事実をともに指摘する。「天ちゃん」の起原を考察する上で、興味ぶかい。

<sup>2</sup> 中島（1990）、吉見（1996）、北原（2001）、加納（2002）、右田（2004）、伊藤（2005）など。

---

## 引用文献

- 安倍能成『我が生ひ立ち』、東京、岩波書店、1966年、613頁
- 赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』、東京、日本経済評論社、1993年、354頁
- 朝日新聞社百年史編修委員会編『朝日新聞社史』、東京、朝日新聞社、1990-95年
- 朝日新聞大阪本社社史編集室『村山龍平傳』、大阪、朝日新聞社、1953年、1122頁
- 朝日新聞テーマ談話室編『天皇そして昭和』、東京、朝日新聞社、1989年、462頁
- 浅井勇助『近世錦絵世相史 第一―八巻』、東京、平凡社、1936年
- 栗屋憲太郎他編『東京裁判資料・木戸幸一尋問調書』、東京、大月書店、1987年、562頁
- Billig, Michael, *Talking of the Royal Family*, Routledge, 1992 (=『イギリス王室の社会学』、野毛一起他訳、東京、評論社、1994年、291頁)
- Bloch, Marc, *Les Rois Thaumaturges. Etude sur le caractère surnaturel attribué à la puissance royale particulièrement en France et en Angleterre*. Amand Colin, 1961 (=『王の奇跡』、井上泰男他訳、東京、刀水書房、1998年、617頁)
- Cannadine, David, *The Context, Performance, and Meaning of Ritual*, In Eric Hobsbawm and Terence Ranger, ed., *The Invention of Tradition*, Cambridge, Cambridge University Press, 1983 (=「儀礼のコンテクスト、パフォーマンス、そして意味」E. ホブズボウム他編『創られた伝統』、東京、紀伊国屋書店、1992年、163-258頁)
- Chartier, Roger, *The Cultural Origins of the French Revolution*, Duke University Press, Durham, 1991 (=『フランス革命の文化的起源』、松浦義弘訳、東京、岩波書店、1994年、383頁)
- Colley, Linda, *Britons*, New Haven, 1992 (=『イギリス国民の誕生』、川北稔監訳、名古屋、名古屋大学出版会、2000年、397頁)
- 秩父宮記念会編『雍仁親王実記』、東京、吉川弘文館、1972年、836頁
- 千本暁子「日本における性別役割分業の形成」永原和子編『家業と役割』、東京、吉川弘文館、[1990]2003年、316-56頁
- 長汀三郎助「御慶事報道苦心物語」『サラリーマン』、サラリーマン社、第4巻第3号、1931年、48-50頁

- 
- Darnton, Robert, *The Literary Underground of the Old Regime*, Harvard University Press, 1982, Cambridge (=『革命前夜の地下出版』、関根素子他訳、東京、岩波書店、2000年、341頁)
- 蛭原紅郎「新聞紙の宮廷記事」『日本及日本人』、政教社、第574号、1912年、84-6頁
- 藤田省三「国家原理の現在と未来」『思想の科学』、思想の科学社、第28号、1961年、2-9頁
- 『天皇制国家の支配原理』、東京、みすず書房、[1966]1998年、339頁
- 藤野裕子「都市民衆騒擾期の出発」『歴史学研究』、歴史学研究会、第792号、2004年、1-16頁
- 深田祐介「稲作国家」『文芸春秋』、文芸春秋社、第67巻第4号、1989年、376-85頁
- 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』、名古屋、黎明書房、1998年、313頁
- 古庄ゆき子「村の大人と子どもたち」『思想の科学』、思想の科学社、第73号、1977年、93-101頁
- 福富太郎「福富太郎のアート・キャバレー」『芸術新潮』、新潮社、第43巻第11号、1992年、114-7頁
- 原奎一郎編『原敬日記 第五巻』、東京、福村出版、1965年、464頁
- 原敬文書研究会編『原敬関係文書 別巻』、東京、日本放送出版協会、1989年、603頁
- 原武史『大正天皇』、東京、朝日新聞社、2000年、295頁
- 『可視化された帝国』、東京、みすず書房、2001年、437頁
- 原田熊雄『西園寺公と政局 第六巻』、東京、岩波書店、1951年、381頁
- 波多野勝『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』、東京、草思社、1998年、270頁
- 初田亨『百貨店の誕生』、東京、三省堂、1993年、239頁
- 春原昭彦『日本新聞通史』、東京、新泉社、1987年、369頁
- 橋川文三『昭和維新試論』、東京、朝日新聞社、1984年、269頁
- 服部之総他「人物評論『天皇家』」『改造』、改造社、第34巻第10号、1953年、16-26頁
- 早川紀代『近代天皇制国家とジェンダー』、東京、青木書店、1998年、256頁
- 林健太郎他「日本人にとって天皇とは何か」『諸君』、文芸春秋社、第21巻第7号、1989年、268-300頁
- 廣重徹『科学の社会史』、東京、中央公論社、1973年、345頁

- 
- 広島市社会課「夜間通学青少年労務者生活状態」『夜間通学青少年労務者生活状態』、広島、広島市役所、1926 年、1-80 頁
- 出隆『出隆自伝』、東京、勁草書房、1963 年、554 頁
- 伊馬春部「懐旧切々」『文芸春秋』、文芸春秋社、第 54 巻第 3 号、1976 年、86-8 頁
- 猪瀬直樹『ミカドの肖像』、東京、小学館、1986 年、606 頁
- 井上清「皇室と国民」『中央公論』、中央公論新社、第 74 年第 6 号、1959 年、34-44 頁
- 井上章一『狂気と王権』、東京、紀伊国屋書店、1995 年、262 頁
- 井上輝子「マイホーム主義のシンボルとしての皇室」『思想の科学』、思想の科学社、第 92 号、1978 年、162-71 頁
- 色川大吉『近代の思想』、東京、筑摩書房、1995 年、510 頁
- 石橋臥波「女生徒の夢について（上）」『心理研究』、心理学研究会、第 16 巻第 2 冊、1919 年、1-22 頁
- 石田雄『明治政治思想史研究』、東京、未来社、1954 年、377 頁
- 『戦後日本の政治体制』、東京、未来社、1961 年、253 頁
- 板垣邦子『昭和戦前・戦中期の農村生活』、東京、三嶺書房、1992 年、290 頁
- 伊藤正徳『新聞生活二十年』、東京、中央公論社、1933 年、570 頁
- 伊藤隆・広瀬順昭編『牧野伸顕日記』、東京、中央公論社、1990 年、775 頁
- 『松本学日記』、東京、山川出版社、1995 年、314 頁
- 伊藤之雄『政党政治と天皇』、東京、講談社、2002 年、398 頁
- 『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』、名古屋、名古屋大学出版会、2005 年、685 頁
- 岩井忠熊『近代天皇制のイデオロギー』、東京、新日本出版社、1998 年、284 頁
- 岩崎昶『映画が若かったとき』、東京、平凡社、1980 年、435 頁
- 伊豆利彦『漱石と天皇制』、東京、有精堂出版、1989 年、354 頁
- 情報局第二部「新聞紙等掲載制限事項調」赤澤史朗他編『資料日本現代史 13』、東京、大月書店、[1943]1985 年、164-5 頁
- 門田勲『新聞記者』、東京、筑摩書房、1963 年、233 頁
- 籠谷次郎「明治教育における学校儀式の成立」『日本史研究』、日本史研究会、第 132 号、1973 年、19-61 頁
- 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第十八巻 歴史（一）』、東京、講談社、1963 年、



---

731 頁

神島二郎『近代日本の精神構造』、東京、岩波書店、1961 年、367 頁

金沢誠他編『華族』、東京、講談社、1968 年、381 頁

上林暁「ばあやん」『上林暁全集 第十三巻』、東京、筑摩書房、[1973]1978 年、319-47 頁

金子光晴「天皇陛下」『思想の科学』、思想の科学社、第 46 号、1966 年、19-21 頁

——「絶望の精神史」『金子光晴全集 第十二巻』、東京、中央公論社、[1965]1975 年、11-104 頁

加納実紀代「母性天皇制とファシズム」網野善彦他編『ジェンダーと差別』、東京、岩波書店、2002 年、283-307 頁

甘露寺受長「明治天皇」『神道史研究』、神道史学会、第 13 巻第 5・6 号、1966 年、14-30 頁

——『背広の天皇』、東京、東西文明社、1957 年、261 頁

唐澤富太郎『教科書の歴史』、東京、創文社、1956 年、883 頁

柏木博「お札のイコノグラフィー」『IS』、ポラ文化研究所、第 38 号、1987 年、29-32 頁

片野真佐子「近代皇后像の形成」富阪キリスト教センター編『近代天皇制の形成とキリスト教』、東京、新教出版社、1996 年、79-132 頁

桂喜代楽「聞き書き」小島貞二編『大衆芸能資料集成 第七巻』、東京、三一書房、1980 年、341-2 頁

川端康成「大正十年・大正十一年日記」『川端康成全集 補巻一』、東京、新潮社、1984 年、519-52 頁

川村邦光『幻視する近代空間』、東京、青弓社、1990 年、214 頁

——「天皇家の婚姻と出産」網野善彦他編『王を巡る視線』、東京、岩波書店、2002 年、161-82 頁

河野信子「女の論理と天皇制」『思想の科学』、思想の科学社、第 79 号、1977 年、109-17 頁

川島武宜「イデオロギーとしての『家族制度』」『川島武宜著作集 第十巻』、東京、岩波書店、[1957]1983 年、200-56 頁

金田一春彦『十五夜お月さん』、東京、三省堂、1983 年、519 頁

- 
- 近代日本研究会編『宮中・皇室と政治』、東京、山川出版社、1998年、279頁
- 木下宗一「民衆の目に映じた明治天皇」『文芸春秋』、文芸春秋社、第43巻第1号、1965年、162-6頁
- 岸田劉生「日記二」『岸田劉生全集 第六巻』、東京、岩波書店、1979年、1-396頁
- 北原白秋「秩父の宮さま」『白秋全集 30』、東京、岩波書店、[1928]1987年、277-8頁
- 北原恵「正月新聞に見る＜天皇ご一家＞像の形成と表象」『現代思想』、青土社、第29巻第6号、2001年、230-54頁
- 京都市役所社会課編『職業婦人に関する調査』、京都、京都市役所社会課、1927年、73頁  
——「常傭労働者生活調査」中川清編『労働者生活調査資料集成 第一巻』、東京、青史社、[1925]1994年
- 小橋一太「行幸啓ノ節鹵簿撮影其ノ他ニ関スル件照会」『牧野伸顕関係文書』、国立国会図書館憲政資料会蔵、1921年
- 神戸市社会課「職業婦人に関する調査」中川清編『労働者生活調査資料集成 第四巻』、東京、青史社、[1937]1994年
- 小椿誠一「高学年児童は修身の時間に何を求めるか」『帝国教育』、帝国教育会、第625号、1933年、74-8頁
- 幸田文「よき御出発」『幸田文全集 第十一巻』、東京、岩波書店、[1959]1995年、168-70頁
- 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』、東京、勁草書房、1999年、272頁
- 小山常実『天皇機関説と国民教育』、京都、アカデミア出版、1989年、502頁
- 久保義三『昭和 교육史 上』、東京、三一書房、1994年、508頁
- 窪田空穂「皇族画報出版の顛末」『窪田空穂全集 第六巻』、東京、角川書店、[1934]1965年、161-9頁
- 熊原理恵「近代家族と家父長制」井上俊他編『＜家族＞の社会学』、東京、岩波書店、1996年、137-57頁
- 宮内庁『明治天皇紀 第一一一二』、東京、吉川弘文館、1968-77年
- 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』、東京、岩波書店、1956年、229頁
- 毎日新聞130年史刊行委員会『「毎日」の3世紀 別巻』、東京、毎日新聞社、2002年、759頁

- 
- 牧原憲夫『客分と国民のあいだ』、東京、吉川弘文館、1998年、243頁
- 「明治後期の民衆と天皇（その2）」『東京経済大学人文自然科学論集』、東京経済大学人文自然科学研究会、第117号、2004年、135-56頁
- 丸山真男「超国家主義の論理と心理」『丸山真男集 第三巻』、東京、岩波書店、[1946]1995年、17-36頁
- 『日本の思想』、東京、岩波書店、1961年、192頁
- 益田勝実「天皇、昭和、そして私」『思想の科学』、思想の科学社、第114号、1989年、40-51頁
- 増田知子『天皇制と国家』、東京、青木書店、1999年、309頁
- 増田義一「東宮殿下の御外遊より受けたる教訓」『実業之日本』、実業之日本社、第24巻第14号、1921年、2-6頁
- 増田義彦『実業之日本社七十年史』、東京、実業之日本社、1967年、284頁
- 増野恵子「明治天皇のイメージの変遷について」『美術史研究』、早稲田大学美術史学会、第38冊、2000年、43-60頁
- 松濤泰蔵「女学生の嗜好調査（下）」『帝国教育』、帝国教育会、第397号、1915年、102-7頁
- 松尾尊兌『大正デモクラシー』、東京、岩波書店、1974年、352頁
- 松島榮一「天皇家をめぐるデマ」田川博一編『天皇白書』、東京、文芸春秋新社、1956年、216-21頁
- 松下圭一「大衆天皇制論」『中央公論』、中央公論新社、第74年第4号、1959年、30-47頁
- 松浦義弘「フランス革命と王権」網野善彦他編『統治と権力』、東京、岩波書店、2002年、181-216頁
- 右田裕規「明治期知識人層における生物進化論の流行再考」『科学史研究』、日本科学史学会、第225号、2003年、1-10頁
- 「天皇制と進化論」『歴史学研究』、歴史学研究会、第792号、2004年、17-32頁
- 南博「民衆の流言が描く天皇症候群」『朝日ジャーナル』、朝日新聞社、第31巻第4号、1989年、56-9頁
- 南博他『大正文化』、東京、勁草書房、1965年、460頁

- 
- 『昭和文庫』、東京、勁草書房、1987年、570頁
- 三田村鳶魚「日記（上）」『三田村鳶魚全集 第廿五卷』、東京、中央公論社、1977年、5-435頁
- 御手洗辰雄『新聞太平記』、東京、鱒書房、1952年、230頁
- 宮地正人『天皇制の政治史的研究』、東京、校倉書房、1981年、270頁
- 宮本百合子「日記一」『宮本百合子全集 第二十三卷』、東京、新日本出版社、1979年、1-844頁
- 宮田登『生き神信仰』、東京、塙書房、1970年、186頁
- 水谷不倒「不倒翁八十年の思出話」『水谷不倒著作集 第八卷』、東京、中央公論社、1977年、125-231頁
- 文部省「新聞雑誌等ニ奉掲ノ御影取扱方注意」佐藤秀夫編『続・現代史資料 9』、東京、みすず書房、[1931]1996年、157頁
- 文部省社会教育局「壮丁教育調査概況」大久保年謙・海後宗臣監修『壮丁教育調査概況 1-4』（復刻版）、東京、宣文堂書店出版部、[1938-44]1973年
- 森川輝紀『近代天皇制と教育』、松戸、梓出版社、1987年、265頁
- Morin, Edgar, *Sociologie*, Fayard, 1984(=『出来事と危機の社会学』、東京、法政大学出版局、1990年、611頁)
- 森田草平「共産党に入るの弁」『前衛』、日本共産党中央委員会、第30号、1948年、30-7頁
- 村上重良『天皇制国家と宗教』、東京、日本評論社、1986年、254頁
- 村山知義『演劇的自叙伝 第一部』、東京、東邦出版社、1970年、427頁
- 牟田和恵『戦略としての家族』、東京、新曜社、1996年、216頁
- 「家族国家観とジェンダー秩序」網野善彦他編『ジェンダーと差別』、東京、岩波書店、2002年、227-54頁
- 永井和「久邇宮朝融王婚約破棄事件と元老西園寺」『立命館文学』、立命館大学人文学会、第542号、1995年、777-812頁
- 『青年君主昭和天皇と元老西園寺』、京都、京都大学学術出版会、2003年、536頁
- 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』、東京、日本エディタースクール出版部、1997年、281頁
- 永積寅彦『昭和天皇と私』、東京、神道文化会、1992年、282頁

---

内務省「地方長官警察部長会議書類（昭和六年）」池田順編『昭和戦前期内務行政史料 第 8 巻』、東京、ゆまに書房、[1931]2000 年、1-184 頁

内務省警保局「一般警告及禁止内集」栗屋憲太郎・中園裕編『内務省新聞記事差止資料集成 第 1 巻』、東京、日本図書センター、[1916]1996 年、1-317 頁

——「新聞紙及出版物取締法規沿革集」奥平康弘監修『言論統制文献資料集成 第 1 巻』、東京、日本図書センター、[1925]1991 年、1-98 頁

——『新聞雑誌社特秘調査』、東京、大正出版、[1927]1979 年、780 頁

——「自明治四十五年至昭和二年 直訴其ノ他不敬事件調」池田順編『昭和戦前期内務行政史料 第 2 巻』、東京、ゆまに書房、[1927]2000 年、359-413 頁

——「出版警察例規集」『出版警察関係資料集成 第 8 巻』、東京、不二出版、[1929]1986 年、111-467 頁

——「新聞紙掲載差止通牒原案」栗屋憲太郎・中園裕編『内務省新聞記事差止資料集成 第 2 巻』、東京、日本図書センター、[1929]1996 年、1-139 頁

——「昭和五年中に於ける出版警察概観」『出版警察概観 1』、東京、不二出版、[1931]1988 年、1-334 頁

——「行政警察例規集」荻野富士夫編『特高警察関係資料集成 第 24 巻』、東京、不二出版、[1936]1993 年、143-424 頁

——「皇室関係記事写真取締方針」有山輝雄・西山武典編『情報局関係資料 第 2 巻』、東京、柏書房、[1943]2000 年、212-5 頁

内務省警保局保安課『特高月報』（復刻版）、昭和 13 年 1 月分—昭和 19 年 11 月分、東京、政経出版社、[1938-44]1973 年

内務省警保局図書課『出版警察報』（復刻版）、第 1-149 号、東京、龍溪書舎・不二出版 [1928-44]1981-82 年

内務省警保局検閲課「昭和十六年記事編集上注意事項原案書類」栗屋憲太郎・中園裕編『戦時新聞検閲資料 第 5 巻』、東京、現代史料出版、[1941]1997 年、1-370 頁

——「昭和十八年自五月至六月（其の三）勤務日誌」栗屋憲太郎・中園裕編『戦時新聞検閲資料 第 13 巻』、東京、現代史料出版、[1943]1997 年、1-218 頁

——「新聞記事取締資料原案書類」『戦時新聞検閲資料 第 11 巻』、東京、現代史料出版、1997 年、1-387 頁

- 
- 中島健蔵『自画像 第三巻』、東京、筑摩書房、1967年、305頁
- 中島三千男『天皇の代替りと国民』、東京、青木書店、1990年、366頁
- 中村哲「天皇制の欠点」『流動』、流動出版、第3巻第10号、1971年、256頁
- 中野重治「その身につきまとう」『定本中野重治全集 第三巻』、東京、筑摩書房、[1953]1996年、196-206頁
- 「むらぎも」『中野重治全集 第五巻』、東京、筑摩書房、[1954]1976年、123-404頁
- 「勉強のしどころ」『中野重治全集 第二十八巻』、東京、筑摩書房、[1978]1980年、130-3頁
- 中野重治他「愛国心について」『展望』、筑摩書房、第46号、1949年、42-57頁
- 中藺英助「昨日の幻影は生きている」『中央公論』、中央公論新社、第74年第6号、1959年、148-55頁
- 檜崎浅太郎「我が尊厳なる国体の真に有り難きことを体得せしむるには如何なる方法によるを最も適當とするかの一調査と私案（一）」『教育心理研究』、培風館、第13巻第2号、1938年、1-21頁
- 夏目漱石「日記 明治四十五年」『漱石全集 第十三巻』、東京、岩波書店、1966年、693-702頁
- ねず・まさし『大日本帝国の崩壊』、東京、至誠堂、1961年、334頁
- 『天皇と昭和史』、東京、三一書房、1974年、415頁
- 新田和幸「1892年文部省による尋常小学校への『御影』普及方針確定の経緯」『日本の教育史学』、教育史学会機関誌編集委員会、第40集、1997年、93-111頁
- 野上彌生子『野上彌生子全集 第Ⅱ期 第1-29巻』、東京、岩波書店、1986-91年
- 小田切秀雄・福岡井吉編『昭和書籍雑誌新聞発禁年表 上中下巻』、東京、明治文献、1965-67年
- 小木新造『東京庶民生活史研究』、東京、日本放送出版協会、1979年、622頁
- 荻野富士夫『昭和天皇と治安体制』、東京、新日本出版社、1993年、219頁
- 大日方純夫「天皇巡幸をめぐる民衆の動向」『地方史研究』、地方史研究協議会、第32巻第1号、1982年、1-16頁
- 「民衆は天皇をどう見ていたか」『日本史研究』、日本史研究会、第323号、1989

---

年、67-71 頁

大林宗嗣「女給生活の調査研究」『大原社会問題研究所雑誌』、大原社会問題研究所、第 8 卷第 1 号、1931 年 a、1-16 頁

——「女給生活の調査研究（二完）」『大原社会問題研究所雑誌』、大原社会問題研究所、第 8 卷第 2 号、1931 年 b、63-170 頁

大江志乃夫『国民教育と軍隊』、東京、新日本出版社、1974 年、396 頁

大門正克他編『近代社会を生きる』、東京、吉川弘文館、2003 年、328 頁

大岡昇平「少年」『大岡昇平集 11』、東京、岩波書店、[1975]1983 年、183-586 頁

大阪市社会部調査課編「余暇生活の研究」氏原正治郎解説『余暇生活の研究』、東京、光生館、[1923]1970 年、89-271 頁

大阪商業大学商業史研究所編『新聞の付録展』、大阪、大阪商業大学商業史研究所、1991 年、79 頁

大澤真幸『戦後の思想空間』、東京、筑摩書房、1998 年、251 頁

大宅壮一「皇太子」『大宅壮一全集 第五卷』、東京、蒼洋社、[1952]1981 年、174-5 頁

——「秩父・高松・三笠宮論」『大宅壮一全集 第二十三卷』、東京、蒼洋社、[1952]1982 年、333-48 頁

奥井亜紗子「戦間期農村における『近代家族』観の受容」『ソシオロジ』、社会学研究会、第 151 号、2004 年、59-75 頁

小股憲明『明治期における不敬事件の研究Ⅱ』（平成 7・8 年度文部省科学研究費補助金基盤研究〔C〕）、大阪女子大学人間関係学科、1998 年、215 頁

小野秀雄『新聞研究五十年』、東京、毎日新聞社、1971 年、318 頁

小野賢一郎『明治・大正・昭和』、東京、大空社、[1929]1993 年、603 頁

小田部雄次『梨本宮伊都子妃の日記』、東京、小学館、1991 年、399 頁

朴晋雨「天皇巡幸からみた天皇崇拜と民衆」『日本史研究』、日本史研究会、第 309 号、1988 年、1-26 頁

斉藤道一「世論調査にみる天皇観」『現代の眼』、現代評論社、第 7 卷第 2 号、1966 年、160-71 頁

齋藤昌三「現代筆禍文献大年表」『齋藤昌三著作集 第二卷』、立川、八潮書店、[1932]1980 年、1-432 頁

---

坂本一登「新しい皇室像を求めて」近代日本研究会編『宮中・皇室と政治』、東京、山川出版社、1998年、7-35頁

坂本是丸『国家神道形成過程の研究』、東京、岩波書店、1994年、458頁

佐々木克「天皇像の形成」飛鳥井雅道編『国民文化の形成』、東京、筑摩書房、1984年、183-238頁

———「明治天皇のイメージ形成と民衆」西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』、東京、新曜社、1995年、117-42頁

里見弴「十年」『里見弴全集 第八巻』、東京、筑摩書房、[1947]1978年、449-750頁

佐藤秀夫『学校の構造』、京都、阿吽社、2004年、355頁

佐藤忠男『日本記録映像史』、東京、評論社、1977年、359頁

———『日本映画史 1-4巻』、東京、岩波書店、1995年

佐藤卓己『「キング」の時代』、東京、岩波書店、2002年、462頁

芹澤光治良「人間の運命」『芹澤光治良作品集 第11巻』、東京、新潮社、[1963]1974年、1-350頁

司法省刑事局思想部「思想研究資料 第八輯」社会問題資料研究会編『自大正10年至昭和2年不敬事件』、京都、東洋文化社、[1928]1980年、1-367頁

———「思想研究資料 第十一輯」社会問題資料研究会編『昭和三年不敬事件』、京都、東洋文化社、[1929]1979年、1-368頁

———「思想研究資料 第十四輯」社会問題資料研究会編『昭和2年昭和3年思想犯罪輯覧（下）』、京都、東洋文化社、[1931]1979年、1-852頁

島田謹介『「謹写」よ、さようなら』荒垣秀雄編『朝日新聞の自画像』、東京、鱒書房、1955年、160-9頁

新聞連盟編集委員会「言論報道統制に関する意見」有山輝雄・西山武典編『情報局関係資料 第3巻』、東京、柏書房、2000年、147-57頁

獅子文六「父の乳」『獅子文六全集 第十巻』、東京、朝日新聞社、[1968]1969年、293-667頁

静岡県編『静岡県史 資料編16』、静岡、静岡県、1989年、1324頁

Smith, Robert John and Wiswell, Ella Lury. *The Women of Suze Mura*, Chicago, University of Chicago Press, 1982 (=『須恵村の女たち』、河村望他訳、東京、御茶の水



---

書房、1987 年、557 頁)

須藤甚一郎「芦原将軍を知っていますか」『歴史と人物』、中央公論社、第 9 年第 6 号、1979 年、134-45 頁

鈴木正幸『近代天皇制の支配秩序』、東京、校倉書房、1986 年、265 頁

鈴木茂三郎「自伝」『鈴木茂三郎選集 第 2 巻』、東京、労働大学、[1958]1970 年、11-212 頁

主婦の友社編『主婦の友社の五十年』、東京、主婦の友社、1967 年、775 頁

高木健夫『新聞記者一代』、東京、講談社、1962 年、287 頁

高橋和子編『高橋貞書簡』、東京、インパクト出版会、1997 年、257 頁

高橋紘他編『昭和初期の天皇と宮中 第一―六巻』、東京、岩波書店、1993-94 年

武田泰淳他「混沌から創造へ」『武田泰淳全集 別巻二』、東京、筑摩書房、[1975]1979 年、259-373 頁

竹山昭子『玉音放送』、東京、晩聲社、1989 年、158 頁

多木浩二『天皇の肖像』、東京、岩波書店、1988 年、244 頁

田辺聖子「浪花から見た天皇さん」『文芸春秋』、文芸春秋社、第 67 巻第 3 号、1989 年、128-34 頁

田中彰『近代天皇制への道程』、東京、吉川弘文館、1979 年、282 頁

田中治男『ものがたり・東京堂史』、東京、東販商事、1975 年、318 頁

田中純一郎『日本教育映画発達史』、東京、蝸牛社、1979 年、364 頁

種村季弘『アナクロニズム』、東京、青土社、1979 年、268 頁

谷川徹三「天皇陛下に奉る書」『世界』、岩波書店、第 133 号、1957 年、287-97 頁

手塚富雄「一青年の思想の歩み」『手塚富雄著作集 第八巻』、東京、中央公論社、[1951]1981 年、3-132 頁

藤樫準二『千代田城』、東京、光文社、1958 年、262 頁

——『陛下の“人間”宣言』、東京、同和書房、1946 年、139 頁

徳富蘆花「謀叛論」『徳富蘆花集』、東京、筑摩書房、1966 年、369-74 頁

——『蘆花日記 第一―七巻』、東京、筑摩書房、1985-86 年

東京市社会局「自由労働者に関する調査」近現代資料刊行会編『東京市社会局調査報告書 6』、東京、SBB 出版会、[1923]1995 年、7-207 頁

- 
- 東京市役所「婦人職業戦線の展望」『東京市・府社会調査報告書 45』、東京、近現代資料刊行会発行、地歴社発売、[1931]1995 年、7-244 頁
- 坪内祐三「編集者大橋乙羽」鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』、京都、思文閣出版、2001 年、153-67 頁
- 津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』、東京、同文館出版、1996 年、368 頁
- 土屋正三『出版警察法大要』、東京府、大学書房、1928 年、80 頁
- 鶴見俊輔「新しい開国」『鶴見俊輔集・続 1』、東京、筑摩書房、[1961]2000 年、822 頁  
——「大正期の文化」『鶴見俊輔集 5』、東京、筑摩書房、[1963]1991 年、411-44 頁  
——「第一章 明治天皇伝説」思想の科学研究会編『共同研究 明治維新』、東京、徳間書店、1967 年、631-62 頁
- 鶴見良行「御真影から人間天皇へ」『中央公論』、中央公論社、第 73 年第 7 号、1958 年、214-25 頁
- 内田百閒「秩父宮殿下に上るの書」『内田百閒全集 第六巻』、東京、講談社、[1950]1972 年、158-65 頁
- 内川芳美「解題」『マス・メディア統制 1』、東京、みすず書房、1973 年、9-31 頁  
——『マス・メディア法政策史研究』、東京、有斐閣、1989 年、544 頁
- 内川芳美編『日本広告発達史 上』、東京、電通、1976 年、490 頁
- 鵜飼新一『朝野新聞の研究』、東京、みすず書房、1985 年、350 頁
- V・O・J「悲劇の帝王・大正天皇」『文芸春秋』、文芸春秋社、第 37 巻第 2 号、1959 年、146-60 頁
- 八木義徳「私の中の天皇」『新潮』、新潮社、第 86 巻第 3 号、1989 年、23-5 頁
- 山田寿子『長い旅路』、群馬県、「長い旅路」編集委員会、1991 年、191 頁
- 山川菊栄「深刻で重大な〇〇」田川博一編『天皇白書』、東京、文芸春秋新社、1956 年、143-4 頁
- 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』、東京、岩波書店、1961 年、488 頁
- 山本武利『近代日本の新聞読者層』、東京、法政大学出版局、1981 年、436 頁  
——「広告と皇室記号」近代日本研究会編『近代日本と情報』、東京、山川出版社、1990 年、51-67 頁
- 山本信良・今野敏彦『大正・昭和教育の天皇制イデオロギー I』、東京、新泉社、1976 年、

---

531 頁

安田浩『天皇の政治史』、東京、青木書店、1998 年、286 頁

雍仁親王妃勢津子『銀のボンボンニエール』、東京、主婦の友社、1991 年、403 頁

安丸良夫『近代天皇像の形成』、東京、岩波書店、1992 年、309 頁

安岡章太郎『僕の昭和史 I』、東京、講談社、1984 年、253 頁

横田順彌『明治不可思議堂』、東京、筑摩書房、1995 年、388 頁

横山孝博「皇太子裕仁の訪欧と大正デモクラシー期の天皇・皇室像」『北大史学』、北大史学会、第 33 号、1993 年、39-51 頁

吉見俊哉『博覧会の政治学』、東京、中央公論社、1992 年、300 頁

———「メディア天皇制とカルチュラル・スタディーズの射程」花田達朗他編『カルチュラル・スタディーズとの対話』、東京、新曜社、1996 年、456-81 頁

吉見俊哉編『一九三〇年代のメディアと身体』、東京、青弓社、2002 年、255 頁

吉見俊哉他編『拡大するモダニティ』、東京、岩波書店、2002 年、307 頁

吉屋信子「梨本伊都子の日記」『吉屋信子全集 12』、東京、朝日新聞社、[1964]1976 年、321-30 頁

夢野久作「持てる一高と帝大生」『夢野久作著作集 2』、東京、葦書房、[1925]1979 年、245 頁

和田洋一『わたしの始末書』、東京、日本基督教出版局、1984 年、229 頁

和田敦彦「読書行為と雑誌表現」『文学』、岩波書店、第 5 巻第 3 号、1994 年、74-84 頁

若桑みどり『皇后の肖像』、東京、筑摩書房、2001 年、462 頁

———『戦争がつくる女性像』、東京、筑摩書房、1995 年、266 頁

渡辺みどり『波瀾のプリンセス』、東京、朝日新聞社、1995 年、207 頁

渡辺治「天皇制国家秩序の歴史的序説」『社会科学研究』、東京大学社会科学研究所、第 30 巻第 5 号、1979 年、88-286 頁

私たちの歴史を綴る会『婦人雑誌から見た一九三〇年代』、東京、同時代社、1987 年、284 頁